中林下遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（真城南地区）関連遺跡発掘調査

平安時代の掘立柱建物群（西上・上ガ花）

平安時代の掘立柱建物群（１）

SBE1・PPE737 全景（南から）

SBC6・PPC771 全景（南から）

平安時代の掘立柱建物群（2）

居館跡１の掘立柱建物全景（画上・上が北）

居館跡２の掘立柱建物全景（西上・上が北）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業（真城南地区）に関連して、令和２年度・３年度の延べ２年間に発掘調査を実施した中林下遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、掘立柱建物を主体とする平安時代の施設群や、戦国時代の在地有力が住まいした居館跡の存在が明らかとなりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局農政部、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和６年３月

公益財団法人岩手県文化振興事業団

理事長　石田　知子

例　　言

1　本書は、岩手県奥州市水沢真城字中林下95番地ほかに所在する中林下遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　この発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（真城南地区）に伴う緊急発掘調査である。岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県県南広域振興局農政部の委託を受けた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡登録台帳における遺跡コード、当該調査で用いた遺跡略号は次のとおりである。
遺跡コード：ＮＥ36－0247
遺 跡 略 号：ＮＫ－20（令和２年度）・ＮＫ－21（令和３年度）

4　発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。
【令和２年度】　調査期間：令和２年４月７日～11月30日　面積：10,300㎡
担当者　：村上 拓・阿部勝則・杉沢昭太郎・西澤正晴・川又 晋・野中裕貴
【令和３年度】　調査期間：令和３年４月７日～９月30日　面積：8,220㎡
担当者　：北田 勲・杉沢昭太郎・川又 晋・袖林 清

5　室内整理期間・担当者は次のとおりである。
【令和２年度】　整理期間：令和２年11月１日～令和３年３月31日
担当者　：村上 拓・川又 晋・野中裕貴
【令和３・４年度】　整理期間：令和３年10月１日～令和４年３月31日
令和４年　４月１日～令和４年８月31日
担当者　：北田 勲

6　本書の執筆分担は次のとおりである。
Ⅰ：岩手県県南広域振興局農政部農村整備室　Ⅱ・Ⅲ：川又　Ⅳ：村上・野中・北田　Ⅴ：北田

7　各種委託業務は、下記の機関等に依頼した。
【令和２年度】　基準点測量：㈱東開技術、樹種同定：㈱古環境研究所
火山灰分析：パリノ・サーヴェイ㈱、放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ㈱
【令和２・３年度】　空中写真撮影：水沢ラジコン
【令和３・４年度】　放射性炭素年代測定：㈱加速器分析研究所、樹種同定：㈱古環境研究所、樹種同定：古代の森研究舎・㈱吉田生物研究所、漆製品の塗膜構造：㈱吉田生物研究所、金属製品・木製品保存処理：㈱吉田生物研究所

8　野外調査および室内整理にあたり、以下の機関等からご協力をいただいた（順不同・敬称略）
岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課　奥州市教育委員会事務局歴史遺産課　（一財）奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センター　奥州市胆沢郷土資料館　圃場整備事業施工委員会　山口了紀（岩手県文化財保護指導員）　和合健・生内智（地方独立行政法人岩手県工業技術センター素形材プロセス技術部）　高橋千晶（奥州市教育委員会事務局歴史遺産課）

9　出土遺物および諸記録類の一切は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

10　本書刊行以前に公表した調査概報および各種報告会等の内容との相違については、整理・再検討を反映した本書の記載を正とする。

凡　　例

1　遺構図の用例は次のとおりである。

(1) 遺構実測図の縮尺は下記のとおりである。

柱穴、土器埋設遺構　　1/30

掘立柱建物、竪穴建物、土坑、池状遺構、溝・堀断面、性格不明遺構　　1/60

溝・堀平面　1/300

各図版にはスケール及び縮尺を付した。

(2) 遺構実測図及び本文で示した座標は、平面直角座標X系に基づいて表示している。

(3) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した（凡例図参照）.

(4) 遺構内の土器をP、石器・礫をS、柱材・礎板・枕木等木質遺物をWで示した。

(5) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。

(6) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

2　遺物実測図の用例は次のとおりである。

(1) 遺物実測図の縮尺は、土師器・須恵器1/3・1/4、陶磁器1/2・1/4、縄文土器1/3、土製品1/2、石器2/3・1/3・1/4、石製品1/2、金属製品1/2、銭貨原寸、木質遺物1/2・1/3・1/4、柱材・杭材・礎板・枕木1/3・1/8、動物遺存体1/2で表した。

(2) 須恵器は、破断面にK60%塗りで表現した。

3　写真図版の用例は次のとおりである。

(1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。

(2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

	ブロック	K20%		柱抜き取り痕	K20%
	柱痕・あたり	K20%		柱材・礎板・枕木	K20%

遺物使用トーン凡例

土器

	内外面黒色処理	K100不透明度20%
	須恵器破断面	K60%
	油煙	K80%
	墨書・墨痕	K100%
	黒色漆	K90%
	茶色漆(濃)	K70%
	茶色漆(薄)	K50%
	ススコゲ	点0

石器

	アスファルト	K100%
	煤	K80%
	朱	K50%
	被熱	K10%

木質遺物

	黒色漆	K90%
	赤色漆	K50%
	炭化範囲	点0

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 1

1　遺跡の位置と地形的環境 …… 1

2　基本層序 …… 5

3　周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　野外調査と室内整理 …… 9

1　野外調査 …… 9

（1）グリッド設定・基準点設置 …… 9

（2）試掘・表土除去 …… 9

（3）遺構検出・精査 …… 9

（4）遺構名 …… 10

（5）写真撮影 …… 10

（6）実測 …… 10

（7）土層断面の分層と注記 …… 10

2　室内整理 …… 10

（1）遺構 …… 10

（2）遺物 …… 11

Ⅳ　調査成果

1　全体の概要 …… 13

2　検出遺構 …… 13

（1）概要 …… 13

（2）平安時代の遺構 …… 18

（a）掘立柱建物 …… 18

（b）竪穴建物 …… 88

（c）土坑 …… 100

（d）性格不明遺構 …… 106

（e）池状遺構 …… 112

（f）遺物集中 …… 114

（g）柱穴 …… 119

（h）整地層 …… 119

（3）居館跡1の遺構 …… 120

（a）掘立柱建物 …… 120

（b）門 …… 144

（c）堀 …… 145

（d）溝 …… 152

（e）土坑 …… 157

（f）性格不明遺構 …… 159

（g）池状遺構 …… 161

（4）居館跡2の遺構 …… 165

（a）掘立柱建物 …… 166

（b）堀 …… 178

（c）溝 …… 180

（d）土坑 …… 182

（e）池状遺構 …… 185

（5）その他の遺構 …… 186

（a）土器埋設遺構 …… 186

3　出土遺物 …… 187

（1）概要 …… 187

Ⅴ　総括 …… 267

1　平安時代 …… 267

2　戦国時代末 …… 268

（1）居館跡1 …… 268

（2）居館跡2 …… 269

報告書抄録 …… 429

図版目次

第1図　遺跡の位置 …… 2
第2図　遺跡位置図 …… 3
第3図　周辺の地形 …… 4
第4図　基本層序柱状模式図 …… 5
第5図　周辺の遺跡（古代・中世） …… 8
第6図　調査区割・グリッド配置図 …… 12
第7図　調査全体図 …… 14
第8図　部分図1（A・B・C区） …… 15
第9図　部分図2（B・C・D・E区） …… 16
第10図　部分図3（C・D・E区） …… 17
第11図　SBA1・3掘立柱建物 …… 19
第12図　SBA2掘立柱建物 …… 20
第13図　SBA4掘立柱建物（1） …… 21
第14図　SBA4掘立柱建物（2） …… 22
第15図　SBA5掘立柱建物 …… 23
第16図　SBB1掘立柱建物 …… 24
第17図　SBB2掘立柱建物 …… 25・26
第18図　SBB3掘立柱建物 …… 27
第19図　SBB4掘立柱建物 …… 28
第20図　SBC1掘立柱建物 …… 29
第21図　SBC2掘立柱建物（1） …… 30
第22図　SBC2掘立柱建物（2） …… 31
第23図　SBC3掘立柱建物（1） …… 32
第24図　SBC3掘立柱建物（2） …… 33
第25図　SBC4・5・8掘立柱建物（検出図） …… 35・36
第26図　SBC4掘立柱建物（1） …… 37
第27図　SBC4掘立柱建物（2） …… 38
第28図　SBC4掘立柱建物（3） …… 39
第29図　SBC5掘立柱建物（1） …… 40
第30図　SBC5掘立柱建物（2） …… 41
第31図　SBC6掘立柱建物（1） …… 42
第32図　SBC6掘立柱建物（2） …… 43
第33図　SBC6掘立柱建物（3） …… 44
第34図　SBC7掘立柱建物（1） …… 45
第35図　SBC7掘立柱建物（2） …… 46
第36図　SBC7掘立柱建物（3） …… 47
第37図　SBC8掘立柱建物（1） …… 48
第38図　SBC8掘立柱建物（2） …… 49
第39図　SBD1掘立柱建物 …… 50
第40図　SBD2掘立柱建物 …… 51
第41図　SBD3掘立柱建物 …… 52
第42図　SBE1掘立柱建物（1） …… 55・56
第43図　SBE1掘立柱建物（2） …… 57
第44図　SBE1掘立柱建物（3） …… 58
第45図　SBE1掘立柱建物（4） …… 59
第46図　SBE2・3掘立柱建物（1） …… 61
第47図　SBE2・3掘立柱建物（2） …… 62
第48図　SBE2・3掘立柱建物（3） …… 63
第49図　SBE2・3掘立柱建物（4） …… 64
第50図　SBE4掘立柱建物（1） …… 65
第51図　SBE4掘立柱建物（2） …… 66
第52図　SBE4掘立柱建物（3） …… 67
第53図　SBE5掘立柱建物（1） …… 68
第54図　SBE5掘立柱建物（2） …… 69
第55図　SBE6掘立柱建物（1） …… 71
第56図　SBE6掘立柱建物（2） …… 72
第57図　SBE6掘立柱建物（3） …… 73
第58図　SBE7・8掘立柱建物（1） …… 75
第59図　SBE7・8掘立柱建物（2） …… 76
第60図　SBE7・8掘立柱建物（3） …… 77
第61図　SBE7・8掘立柱建物（4） …… 78
第62図　SBE9掘立柱建物（1） …… 80
第63図　SBE9掘立柱建物（2） …… 81
第64図　SBE9掘立柱建物（3） …… 82
第65図　SBE10・11掘立柱建物（検出図） …… 83・84
第66図　SBE10掘立柱建物（1） …… 85
第67図　SBE10掘立柱建物（2） …… 86
第68図　SBE10掘立柱建物（3） …… 87
第69図　SBE11掘立柱建物（1） …… 89・90
第70図　SBE11掘立柱建物（2） …… 91
第71図　SBE11掘立柱建物（3） …… 92
第72図　SBE11掘立柱建物（4） …… 93
第73図　SIA1・2竪穴建物 …… 94
第74図　SIA3竪穴建物、SXA2・3性格不明遺構 …… 95
第75図　SIB1竪穴建物 …… 96
第76図　SIB2竪穴建物 …… 98
第77図　SID1竪穴建物 …… 99
第78図　平安時代の土坑（1） …… 101
第79図　平安時代の土坑（2）、柱穴 …… 102
第80図　SXA1・SXD1性格不明遺構 …… 105
第81図　SXB1性格不明遺構 …… 108
第82図　SXB7・8性格不明遺構 …… 110
第83図　SXC1・2池状遺構 …… 111
第84図　SXE4・5池状遺構 …… 113

第85図　E区遺物集中 …… 115
第86図　平安時代の整地層 …… 116
第87図　居館跡1全体図 …… 117・118
第88図　居館跡1（1）SBB5掘立柱建物 …… 121・122
第89図　居館跡1（2）SBC10掘立柱建物 …… 123
第90図　居館跡1（3）SBC11掘立柱建物 …… 124
第91図　居館跡1（4）SBC12掘立柱建物 …… 125
第92図　居館跡1（5）SBC13掘立柱建物 …… 127
第93図　居館跡1（6）SBC14掘立柱建物 …… 128
第94図　居館跡1（7）SBC15掘立柱建物 …… 129
第95図　居館跡1（8）SBC16掘立柱建物 …… 130
第96図　居館跡1（9）SBC17掘立柱建物 …… 131
第97図　居館跡1（10）SBC18掘立柱建物 …… 132
第98図　居館跡1（11）SBC19掘立柱建物 …… 133
第99図　居館跡1（12）SBC20掘立柱建物 …… 134
第100図　居館跡1（13）SBC21掘立柱建物 …… 135
第101図　居館跡1（14）SBC22掘立柱建物、SKC1土坑、SDC5溝 …… 137
第102図　居館跡1（15）SBC23掘立柱建物 …… 138
第103図　居館跡1（16）SBC24・25掘立柱建物 …… 140
第104図　居館跡1（17）SBC26・28掘立柱建物 …… 141
第105図　居館跡1（18）SBC27掘立柱建物 …… 142
第106図　居館跡1（19）SBC29掘立柱建物 …… 143
第107図　居館跡1（20）SBC9門 …… 144
第108図　居館跡1（21）堀 …… 146
第109図　居館跡1（22）堀、堀付属遺構 …… 148
第110図　居館跡1（23）堀、溝 …… 150
第111図　居館跡1（24）溝 …… 151
第112図　居館跡1（25）SDB4溝 …… 154
第113図　居館跡1（26）土坑、SXB6性格不明遺構 …… 158
第114図　居館跡1（27）SXB2・3、4・5性格不明遺構 …… 160
第115図　居館跡1（28）SXD2池状遺構 …… 162
第116図　居館跡2全体図 …… 163・164
第117図　居館跡2（1）SBE12掘立柱建物 …… 166
第118図　居館跡2（2）SBE13掘立柱建物 …… 167
第119図　居館跡2（3）SBE14掘立柱建物 …… 168
第120図　居館跡2（4）SBE15掘立柱建物 …… 169
第121図　居館跡2（5）SBE16掘立柱建物 …… 170
第122図　居館跡2（6）SBE17掘立柱建物 …… 171
第123図　居館跡2（7）SBE18掘立柱建物 …… 172
第124図　居館跡2（8）SBE19掘立柱建物 …… 174
第125図　居館跡2（9）SBE20掘立柱建物 …… 175
第126図　居館跡2（10）SBE21掘立柱建物 …… 176
第127図　居館跡2（11）SBE22掘立柱建物 …… 177
第128図　居館跡2（12）SBE23掘立柱建物 …… 179
第129図　居館跡2（13）堀、溝 …… 181
第130図　居館跡2（14）土坑、土器埋設遺構 …… 183
第131図　居館跡2（15）SXE1池状遺構 …… 184
第132図　居館跡2（16）SXE2池状遺構 …… 186
第133図　土師器・須恵器（1）…… 190
第134図　土師器・須恵器（2）…… 191
第135図　土師器・須恵器（3）…… 192
第136図　土師器・須恵器（4）…… 193
第137図　土師器・須恵器（5）…… 194
第138図　土師器・須恵器（6）…… 195
第139図　土師器・須恵器（7）…… 196
第140図　土師器・須恵器（8）…… 197
第141図　土師器・須恵器（9）…… 198
第142図　土師器・須恵器（10）…… 199
第143図　土師器・須恵器（11）…… 200
第144図　土師器・須恵器（12）…… 201
第145図　土師器・須恵器（13）…… 202
第146図　土師器・須恵器（14）…… 203
第147図　土師器・須恵器（15）…… 204
第148図　土師器・須恵器（16）…… 205
第149図　土師器・須恵器（17）…… 206
第150図　土師器・須恵器（18）…… 207
第151図　土師器・須恵器（19）…… 208
第152図　土師器・須恵器（20）…… 209
第153図　土師器・須恵器（21）…… 210
第154図　土師器・須恵器（22）…… 211
第155図　土師器・須恵器（23）…… 212
第156図　土師器・須恵器（24）…… 213
第157図　土師器・須恵器（25）…… 214
第158図　土師器・須恵器（26）…… 215
第159図　土師器・須恵器（27）…… 216
第160図　土師器・須恵器（28）…… 217
第161図　土師器・須恵器（29）…… 218
第162図　土師器・須恵器（30）・陶磁器（1）…… 219
第163図　陶磁器（2）…… 220
第164図　陶磁器（3）…… 221
第165図　陶磁器（4）・縄文土器 …… 222
第166図　土製品・石器（1）…… 223
第167図　石器（2）…… 224
第168図　石器（3）・石製品 …… 225
第169図　金属製品・銭貨 …… 226

第170図　木質遺物（1）…… 227
第171図　木質遺物（2）…… 228
第172図　木質遺物（3）…… 229
第173図　木質遺物（4）…… 230
第174図　木質遺物（5）…… 231
第175図　木質遺物（6）…… 232
第176図　木質遺物（7）…… 233
第177図　木質遺物（8）…… 234
第178図　木質遺物（9）…… 235
第179図　木質遺物（10）…… 236
第180図　木質遺物（11）…… 237
第181図　木質遺物（12）…… 238
第182図　木質遺物（13）…… 239
第183図　木質遺物（14）…… 240
第184図　木質遺物（15）…… 241
第185図　木質遺物（16）…… 242
第186図　木質遺物（17）…… 243
第187図　木質遺物（18）…… 244
第188図　木質遺物（19）…… 245
第189図　木質遺物（20）…… 246
第190図　木質遺物（21）…… 247
第191図　木質遺物（22）…… 248
第192図　木質遺物（23）…… 249
第193図　木質遺物（24）…… 250
第194図　木質遺物（25）…… 251
第195図　木質遺物（26）…… 252
第196図　木質遺物（27）…… 253
第197図　木質遺物（28）…… 254
第198図　木質遺物（29）…… 255
第199図　木質遺物（30）…… 256
第200図　木質遺物（31）…… 257
第201図　木質遺物（32）…… 258
第202図　木質遺物（33）…… 259
第203図　木質遺物（34）…… 260
第204図　木質遺物（35）…… 261
第205図　木質遺物（36）…… 262
第206図　木質遺物（37）…… 263
第207図　木質遺物（38）…… 264
第208図　木質遺物（39）…… 265
第209図　木質遺物（40）・動物遺存体 …… 266

写真図版目次

巻頭カラー1　平安時代の掘立柱建物群（1）
巻頭カラー2　平安時代の掘立柱建物群（2）
巻頭カラー3　戦国時代末の居館跡1
巻頭カラー4　戦国時代末の居館跡2

写真図版1　米軍撮影航空写真 …… 273
写真図版2　SBA1 掘立柱建物 …… 274
写真図版3　SBA2 掘立柱建物 …… 275
写真図版4　SBA4・5 掘立柱建物（1）…… 276
写真図版5　SBA4・5 掘立柱建物（2）…… 277
写真図版6　SBA4・5 掘立柱建物（3）…… 278
写真図版7　SBB1 掘立柱建物 …… 279
写真図版8　SBB2・3 掘立柱建物（1）…… 280
写真図版9　SBB2・3 掘立柱建物（2）…… 281
写真図版10　SBB2・3 掘立柱建物（3）…… 282
写真図版11　SBB2・3 掘立柱建物（4）…… 283
写真図版12　SBB4 掘立柱建物 …… 284
写真図版13　SBC1 掘立柱建物 …… 285
写真図版14　SBC2 掘立柱建物 …… 286
写真図版15　SBC3 掘立柱建物（1）…… 287
写真図版16　SBC3 掘立柱建物（2）…… 288
写真図版17　SBC4 掘立柱建物（1）…… 289
写真図版18　SBC4 掘立柱建物（2）…… 290
写真図版19　SBC5・8 掘立柱建物（1）…… 291
写真図版20　SBC5・8 掘立柱建物（2）…… 292
写真図版21　SBC6 掘立柱建物（1）…… 293
写真図版22　SBC6 掘立柱建物（2）…… 294
写真図版23　SBC7 掘立柱建物（1）…… 295
写真図版24　SBC7 掘立柱建物（2）…… 296
写真図版25　SBD1・2 掘立柱建物（1）…… 297
写真図版26　SBD1・2 掘立柱建物（2）…… 298
写真図版27　SBD1・2 掘立柱建物（3）…… 299
写真図版28　SBD1・2 掘立柱建物（4）…… 300
写真図版29　SBD3 掘立柱建物 …… 301
写真図版30　SBE1 掘立柱建物（1）…… 302
写真図版31　SBE1 掘立柱建物（2）…… 303
写真図版32　SBE1 掘立柱建物（3）…… 304
写真図版33　SBE1 掘立柱建物（4）…… 305
写真図版34　SBE2・3 掘立柱建物（1）…… 306
写真図版35　SBE2・3 掘立柱建物（2）…… 307
写真図版36　SBE2・3 掘立柱建物（3）…… 308
写真図版37　SBE2・3 掘立柱建物（4）…… 309
写真図版38　SBE4 掘立柱建物（1）…… 310
写真図版39　SBE4 掘立柱建物（2）…… 311

写真図版40　SBE4 掘立柱建物（3）…… 312
写真図版41　SBE5 掘立柱建物 …… 313
写真図版42　SBE6 掘立柱建物（1）…… 314
写真図版43　SBE6 掘立柱建物（2）…… 315
写真図版44　SBE6 掘立柱建物（3）…… 316
写真図版45　SBE7・8 掘立柱建物（1）…… 317
写真図版46　SBE7・8 掘立柱建物（2）…… 318
写真図版47　SBE7・8 掘立柱建物（3）…… 319
写真図版48　SBE7・8 掘立柱建物（4）…… 320
写真図版49　SBE7・8 掘立柱建物（5）…… 321
写真図版50　SBE9 掘立柱建物（1）…… 322
写真図版51　SBE9 掘立柱建物（2）…… 323
写真図版52　SBE9 掘立柱建物（3）・SBE10・11 掘立柱建物（1）…… 324
写真図版53　SBE10・11 掘立柱建物（2）…… 325
写真図版54　SBE10・11 掘立柱建物（3）…… 326
写真図版55　SBE10・11 掘立柱建物（4）…… 327
写真図版56　SBE10・11 掘立柱建物（5）…… 328
写真図版57　SIA1 竪穴建物 …… 329
写真図版58　SIA2 竪穴建物 …… 330
写真図版59　SIA3 竪穴建物（1）・SIB1 竪穴建物（1）…… 331
写真図版60　SIA3 竪穴建物（2）・SIB1 竪穴建物（2）・SIB2 竪穴建物（1）…… 332
写真図版61　SIB2 竪穴建物（2）・SID1 竪穴建物（1）…… 333
写真図版62　SID1 竪穴建物（2）・平安時代の土坑（1）…… 334
写真図版63　平安時代の土坑（2）…… 335
写真図版64　平安時代の土坑（3）…… 336
写真図版65　平安時代の土坑（4）…… 337
写真図版66　平安時代の土坑（5）・SXA1・2 性格不明遺構 …… 338
写真図版67　SXA3・SXB1・SXD1 性格不明遺構 …… 339
写真図版68　B 区遺物集中 1 ・ 2 …… 340
写真図版69　SXB7 性格不明遺構 …… 341
写真図版70　SXB8 性格不明遺構 …… 342
写真図版71　E 区遺物集中 1・2 …… 343
写真図版72　SXC1 池状遺構 …… 344
写真図版73　SXC2 池状遺構 …… 345
写真図版74　SXE4 池状遺構 …… 346
写真図版75　SXE5 池状遺構 …… 347
写真図版76　平安時代の不明柱穴 …… 348
写真図版77　整地層 …… 349
写真図版78　居館跡 1（1）SBB4・SBB5 掘立柱建物 …… 350
写真図版79　居館跡 1（2）SBC10・11 掘立柱建物 …… 351
写真図版80　居館跡 1（3）SBC12・13 掘立柱建物 …… 352
写真図版81　居館跡 1（4）SBC14・15 掘立柱建物 …… 353
写真図版82　居館跡 1（5）SBC16・19 掘立柱建物 …… 354
写真図版83　居館跡 1（6）SBC20・22 掘立柱建物 …… 355
写真図版84　居館跡 1（7）SBC9 門跡・柱穴・土坑 …… 356
写真図版85　居館跡 1（8）土坑 …… 357
写真図版86　居館跡 1（9）堀① …… 358
写真図版87　居館跡 1（10）堀② …… 359
写真図版88　居館跡 1（11）堀③ …… 360
写真図版89　居館跡 1（12）堀④・溝① …… 361
写真図版90　居館跡 1（13）溝② …… 362
写真図版91　居館跡 1（14）溝③ …… 363
写真図版92　居館跡 1（15）溝④ …… 364
写真図版93　居館跡 1（16）溝⑤・性格不明遺構① …… 365
写真図版94　居館跡 1（17）性格不明遺構② …… 366
写真図版95　居館跡 1（18）SXD2 池状遺構 …… 367
写真図版96　居館跡 2（1）SBE12 掘立柱建物・土坑① …… 368
写真図版97　居館跡 2（2）土坑② …… 369
写真図版98　居館跡 2（3）SXE1 池状遺構 …… 370
写真図版99　居館跡 2（4）SXE2 池状遺構、SXE3 土器埋設遺構 …… 371
写真図版100　居館跡 2（5）堀① …… 372
写真図版101　居館跡 2（6）堀②・溝 …… 373
写真図版102　土師器・須恵器（1）…… 374
写真図版103　土師器・須恵器（2）…… 375
写真図版104　土師器・須恵器（3）…… 376
写真図版105　土師器・須恵器（4）…… 377
写真図版106　土師器・須恵器（5）…… 378
写真図版107　土師器・須恵器（6）…… 379
写真図版108　土師器・須恵器（7）…… 380
写真図版109　土師器・須恵器（8）…… 381
写真図版110　土師器・須恵器（9）…… 382
写真図版111　土師器・須恵器（10）…… 383
写真図版112　土師器・須恵器（11）…… 384

写真図版113　土師器・須恵器（12）…… 385
写真図版114　土師器・須恵器（13）…… 386
写真図版115　土師器・須恵器（14）…… 387
写真図版116　土師器・須恵器（15）…… 388
写真図版117　土師器・須恵器（16）…… 389
写真図版118　土師器・須恵器（17）…… 390
写真図版119　土師器・須恵器（18）…… 391
写真図版120　土師器・須恵器（19）…… 392
写真図版121　土師器・須恵器（20）…… 393
写真図版122　土師器・須恵器（21）…… 394
写真図版123　土師器・須恵器（22）…… 395
写真図版124　土師器・須恵器（23）…… 396
写真図版125　土師器・須恵器（24）…… 397
写真図版126　土師器・須恵器（25）…… 398
写真図版127　土師器・須恵器（26）…… 399
写真図版128　土師器・須恵器（27）…… 400
写真図版129　陶磁器（1）…… 401
写真図版130　陶磁器（2）…… 402
写真図版131　陶磁器（3）・縄文土器・土製品 …… 403
写真図版132　石器（1）…… 404
写真図版133　石器（2）・石製品（1）…… 405
写真図版134　石製品（2）・金属製品・銭貨 …… 406
写真図版135　木質遺物（1）…… 407
写真図版136　木質遺物（2）…… 408
写真図版137　木質遺物（3）…… 409
写真図版138　木質遺物（4）…… 410
写真図版139　木質遺物（5）…… 411
写真図版140　木質遺物（6）…… 412
写真図版141　木質遺物（7）…… 413
写真図版142　木質遺物（8）…… 414
写真図版143　木質遺物（9）…… 415
写真図版144　木質遺物（10）…… 416
写真図版145　木質遺物（11）…… 417
写真図版146　木質遺物（12）…… 418
写真図版147　木質遺物（13）…… 419
写真図版148　木質遺物（14）…… 420
写真図版149　木質遺物（15）…… 421
写真図版150　木質遺物（16）…… 422
写真図版151　木質遺物（17）…… 423
写真図版152　木質遺物（18）…… 424
写真図版153　木質遺物（19）…… 425
写真図版154　木質遺物（20）…… 426
写真図版155　木質遺物（21）…… 427
写真図版156　木質遺物（22）・動物遺存体 …… 428

DVD－R収録内容

Ⅳ－3　出土遺物 …… 1
（2）土師器・須恵器 …… 1
（3）陶磁器 …… 28
（4）縄文土器 …… 32
（5）土製品 …… 32
（6）石器 …… 33
（7）石製品 …… 34
（8）金属製品 …… 34
（9）銭貨 …… 34
（10）木質遺物 …… 35
（11）動物遺存体 …… 58
参考文献 …… 59

附編　自然科学分析 …… 1
1　放射性炭素年代測定（1）…… 1
（1）はじめに …… 1
（2）試料 …… 1
（3）分析方法 …… 1
（4）結果 …… 2
2　放射性炭素年代測定（2）…… 5
（1）測定対象試料 …… 5
（2）測定の意義 …… 5
（3）化学処理工程 …… 5
（4）測定方法 …… 5
（5）算出方法 …… 5
（6）測定結果 …… 6
3　火山灰の分析 …… 13
（1）はじめに …… 13
（2）試料 …… 13
（3）分析方法 …… 13
（4）結果 …… 13
（5）考察 …… 14

4　樹種同定分析（1）…… 17
（1）は　じ　め　に …… 17
（2）試　　料 …… 17
（3）方　　法 …… 17
（4）結　　果 …… 17
（5）考　　察 …… 18
5　樹種同定分析（2）…… 22
（1）は　じ　め　に …… 22
（2）試　　料 …… 22
（3）方　　法 …… 22
（4）結　　果 …… 22
（5）考　　察 …… 25
6　樹種同定分析（3）…… 33
（1）は　じ　め　に …… 33
（2）同　定　結　果 …… 33
（3）同定結果からみた木材利用状況 …… 36
7　樹種同定分析（4）…… 38
（1）試　　料 …… 38
（2）観　察　方　法 …… 38
（3）結　　果 …… 38
8　漆製品の塗膜構造調査（1）…… 48
（1）は　じ　め　に …… 48
（2）調　査　資　料 …… 48
（3）調　査　方　法 …… 48
（4）断　面　観　察 …… 48
（5）摘　　要 …… 49
9　漆製品の塗膜構造調査（2）…… 51
（1）は　じ　め　に …… 51
（2）調　査　資　料 …… 51
（3）調　査　方　法 …… 51
（4）断　面　観　察 …… 51
（5）摘　　要 …… 51

表目次（DVD － R 収録）

第１表　周辺の遺跡一覧表（古代・中世）…… 1
第２表　遺構名変更表 …… 4
第３表　柱穴一覧表 …… 6
第４表　土器観察表 …… 42
第５表　陶磁器観察表 …… 66
第６表　縄文土器観察表 …… 69
第７表　土製品観察表 …… 69
第８表　石器観察表 …… 70
第９表　石製品観察表 …… 71
第10表　金属製品観察表 …… 71
第11表　銭貨観察表 …… 72
第12表　木質遺物観察表 …… 72
第13表　動物遺存体観察表 …… 99
第14表　平安時代の掘立柱建物変遷案 …… 100
第15表　居館跡１の掘立柱建物変遷案 …… 101
第16表　居館跡２の掘立柱建物変遷案 …… 102

図版目次（DVD － R 収録）

第210図　平安時代の掘立柱建物変遷案（第１期）- 1
第211図　平安時代の掘立柱建物変遷案（第２期）- 2
第212図　平安時代の掘立柱建物変遷案（第３期）- 3
第213図　平安時代の掘立柱建物変遷案（第４期）- 4
第214図　平安時代の掘立柱建物変遷案（第５期）- 5
第215図　平安時代の掘立柱建物変遷案（不明）…… 6
第216図　居館跡１の掘立柱建物変遷案（第１期）- 7
第217図　居館跡１の掘立柱建物変遷案（第２期）- 8
第218図　居館跡１の掘立柱建物変遷案（第３期）- 9
第219図　居館跡１の掘立柱建物変遷案（第４期）- 10
第220図　居館跡１の掘立柱建物変遷案（第５期）- 11
第221図　居館跡２の掘立柱建物変遷案（第１期）- 12
第222図　居館跡２の掘立柱建物変遷案（第２期）- 13
第223図　居館跡２の掘立柱建物変遷案（第３期）- 14
第224図　居館跡２の掘立柱建物変遷案（第４期）- 15
第225図　元禄十二年下伊沢郡大絵図（個人蔵・胆沢郷土資料館蔵の複製を撮影・加筆）…… 16
第226図　刻書土器集成図 …… 17
第227図　墨書土器集成図（1）…… 18
第228図　墨書土器集成図（2）…… 19
第229図　墨書土器集成図（3）…… 20
附図１　中林下遺跡調査全体図（1/300）
附図２　中林下遺跡調査全体図（白図）（1/300）

Ⅰ　調査に至る経緯

中林下遺跡は、県南広域振興局農政部農村整備室（以下「当室」という）が所管する「経営体育成基盤整備事業真城南地区」の事業区域内に所在する。本地区は奥州市水沢の中心部より南に９㎞の水沢真城及び前沢古城地内に位置し、現況水田は小区画・不整形で、かつ農道も幅員狭小のため作業効率が悪く、また水路は用水・排水兼用の土側溝であることから用水不足や排水不良となるなど、維持管理に支障を来している。このため農作業の効率化や生産コストの削減による生産性の向上等を図り、農地集積により安定した経営体の育成を目的として、平成 28 年度から大区画ほ場整備の事業を実施している。

当室は本事業区域内に含まれる埋蔵文化財包蔵地の取扱について県教育委員会と協議のうえ、平成 30 年９月 19 日付け県南広農整第 224- １号「埋蔵文化財の試掘調査について (依頼)」により試掘調査の依頼を行った。

県教育委員会は平成 30 年 10 月 24 日から 25 日にかけて試掘調査を実施し、遺構等が確認されたことから、平成 31 年３月 15 日付け教生第 1680 号「埋蔵文化財の試掘調査について (回答)」により、工事に着手するには当該遺跡の本発掘調査が必要になる旨の判断が示された。

この回答を踏まえ、当室は令和元年 12 月６日付け県南農整第 219- ３号「周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について（依頼）」により県教育委員会に対し発掘調査の依頼を行い、令和２年４月１日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と契約を締結し、発掘調査を実施することとなったものである。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）

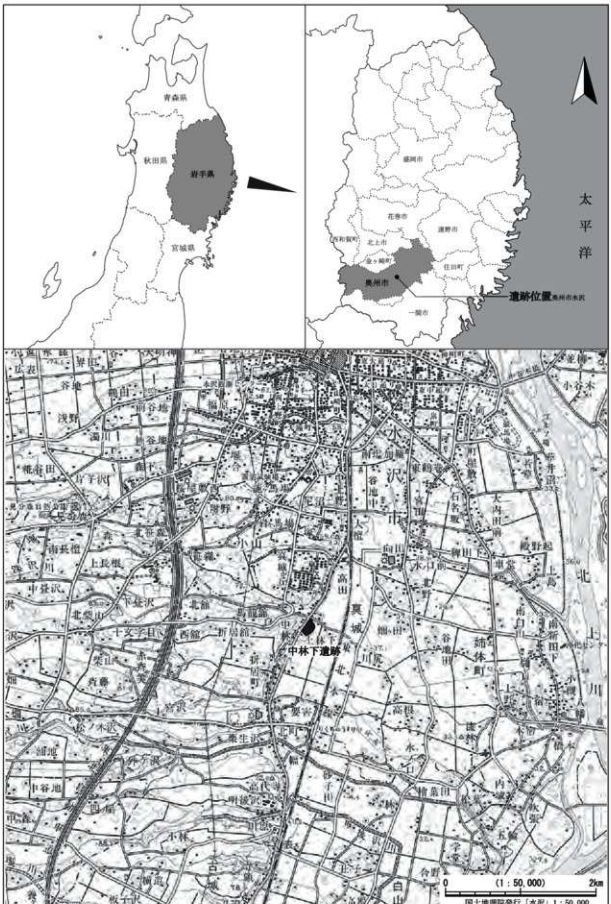
Ⅱ　位置と環境

１　遺跡の位置と地形的環境

中林下遺跡は、岩手県奥州市水沢真城地区に所在する（第１図）。北緯 39 度６分 11 秒、東経 141 度８分 35 秒付近に位置し、国土地理院発行５万分の１地形図「水沢」（NJ-54-14-14）および２万５千分の１「水沢」（NJ-54-14-14-1）の図幅に含まれる。ＪＲ東日本陸中折居駅からは北方約 1.4km の距離である。

奥州市は岩手県の内陸南部に位置し、東西約 57㎞・南北約 37km・総面積 993.35㎢に及ぶ。平成 18 年に水沢市・江刺市および胆沢郡胆沢町・前沢町・衣川村の５市町村の合併により成立した市であり、北は胆沢郡金ヶ崎町・北上市・花巻市、東は遠野市・気仙郡住田町、南は西磐井郡平泉町・一関市、西は秋田県雄勝郡東成瀬村と接している。南北方向に東北新幹線・東北本線・東北縦貫自動車道・国道４号、東西方向に国道 393 号・343 号が走っており、古くから交通の要衝としての役割を果たしてきた地域である。

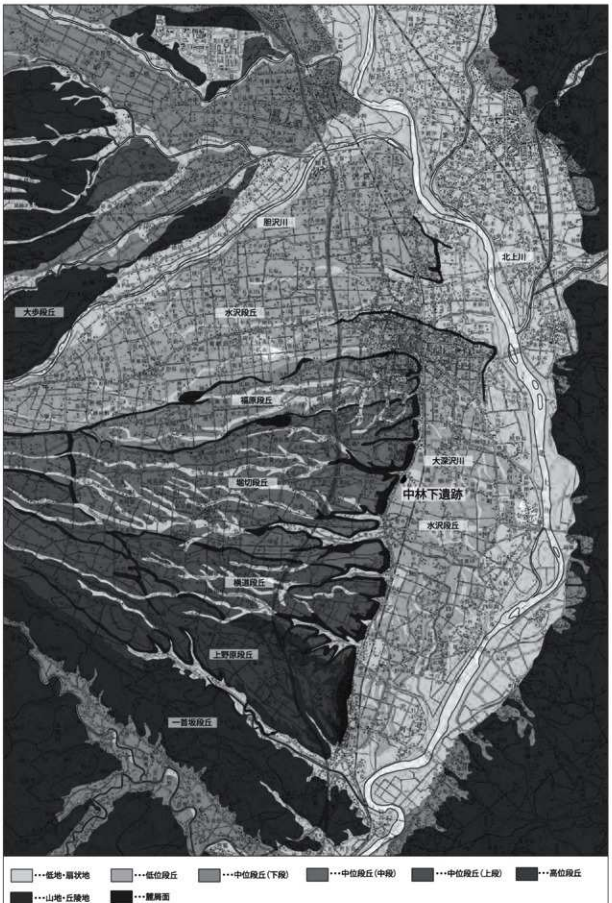
奥州市の地形は、南北に流れる北上川流路周辺の低地帯を中心とし、その東側にある北上山地、西側にある胆沢扇状地と大きく３大別される。胆沢扇状地は、奥羽山脈の隆起と胆沢川の浸食・堆積作用により形成されたもので、高位段丘（大歩段丘・一首坂段丘）、中位段丘（西根段丘・上野原段丘・横道段丘・堀切段丘・福原段丘）、低位段丘（水沢段丘上位面・水沢段丘下位面）に区分される（第


青森県
秋田県
岩手県
宮城県
盛岡市
花巻市
遠野市
北上市
住田町
大船渡市
一関市
奥州市
遺跡位置
太平洋
中林下遺跡
0
(1：50,000)
2km
国土地理院発行「水沢」1：50,000

第１図　遺跡の位置

Y=27000
Y=26500
Y=26000
X=-96100
X=-96600
0
1:5000
100m
JR東日本東北本線
大清水川
今回の調査範囲
既知の遺跡範囲
国道4号

第２図　遺跡位置図


胆沢川
北上川
大歩段丘
水沢段丘
福原段丘
大釜沢川
姫切段丘
中林下遺跡
水沢段丘
桃清段丘
上野原段丘
一首坂段丘
…低地・扇状地
…低位段丘
…中位段丘（下段）
…中位段丘（中段）
…中位段丘（上段）
…高位段丘
…山地・丘陵地
…麓扇面

第３図　周辺の地形

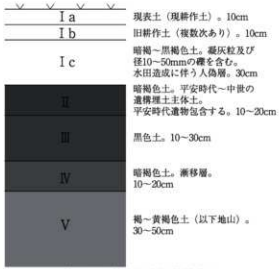
３図）。本遺跡は水沢段丘上位面範囲の中で、その西側にある中位段丘東縁に極めて近い位置にあり、西方から流れる大深沢川が形成した小規模な扇状地上に立地している。

本遺跡の西辺側は国道４号と接しており、遺跡範囲内は主に水田や宅地となっている。造成による人工的地形改変が進んでおり旧来の微地形が分かりにくい状況となっているが、標高については西側から東側に向かうにつれて概ね低下していく傾向にある（第２図）。　（川又・北田）

２　基本層序

調査区内に観察される堆積層の層序は以下のとおりである（第４図）。

Ⅰａ層　現表土（現耕作土）。
Ⅰｂ層　旧耕作土（複数次あり）。
Ⅰｃ層　暗褐～黒褐色土。
凝灰粒及び径 10～50㎜の礫を含む。
水田造成に伴う人為層。
Ⅱ 層　暗褐色土。平安時代～中世の遺構埋土主体土。平安時代遺物包含する。
Ⅲ 層　黒色土。
Ⅳ 層　暗褐色土。漸移層。
Ⅴ 層　褐～黄褐色土（以下地山）。



第４図　基本層序柱状模式図

Ⅴ層は河川作用により堆積した砂礫・シルト・粘土の各層とこれらの再堆積層からなり、調査区付近の基盤（地山）を成している。氾濫の累積により複雑に折り重なったⅤ層構成層は、上面においては礫・砂・粘土等の各層が筋状に表出する状態となっている。Ⅳ層（漸移層）及びⅢ層には、下位に接するⅤ層構成層の性状が強く反映されることから、層序的には同層として対比されるものであっても、多量の砂礫を含む場合や、水を含む緩い粘土である場合など、地点によりその相貌は大きく異なる。

Ⅲ層土が層として分布する範囲はごく限定的だが、面的に残存する範囲では上面が平安時代以降の遺構検出面となっている。Ⅱ層は平安時代・中世の遺構埋土主体土であり、該期遺物を包含する。

出土遺物の年代観を考慮すれば、Ⅲ層は縄文時代～古代、Ⅱ層は古代～中世に相当すると考えられる。なお、十和田ａ降下火山灰とみられる灰白火山灰の堆積が、平安時代の複数の遺構内で観察されているが、この降灰がⅢ層とⅡ層の層界に位置づけられるのか、Ⅱ層中に挟在するのかについては明らかでない。

調査区内は開田時とその後の耕作により全域にわたって削平を受けている。これによってⅡ・Ⅲ層が広い範囲で失われ、Ⅰａ層下面（現表土・耕作土）がⅤ層に接している。　（村上）

３　周辺の遺跡

岩手県遺跡・埋蔵文化財情報検索システム 1.05 によると、本遺跡の所在する奥州市には 1122 か所の遺跡が登録されており（令和２年３月 31 日現在）、このうち本遺跡の主要な時代である古代・中世

と見られる318遺跡を第5図、第1表（DVD-R収録）に示した。

8世紀後半から9世紀初頭にかけて、当地域は律令政府と蝦夷による争いの主要な舞台となった。その戦争終結とほぼ時を同じくする延暦21（802）年、坂上田村麻呂により、律令政府による東北支配の拠点として胆沢城が造営された。築地と内溝・外溝により外郭四辺が囲まれ、その一辺は670mに及ぶ。外郭が外側に張り出す部分には、門や櫓などが存在する。場内の中央やや南よりには一辺90mほどに区画された政庁があり、その周辺には官衙ブロックが配置される。以降約150年間にわたって、この地域の行政の中心として機能してきた。

胆沢城が造られた9世紀初頭以降、集落数が増加して居住域も広がり、同時に集落の形態が大きく変化する。奈良時代までの自然発生的な集落ではなく、計画村落（林前Ⅰ遺跡・林前Ⅱ遺跡・林前南舘・南矢中遺跡・落合遺跡・力石Ⅱ遺跡など）が見られるようになり、大規模な集落よりは中小規模の集落が中心となる。遺跡の分布も、古墳時代以降は低位段丘上位面中心だったものが、この時期になると中位段丘・高位段丘にまで広がるようになる。集落の変化と同時に、生産に関わる遺跡も増加する。農業生産の面では中野遺跡・宮地遺跡・林遺跡などで畠が、常盤広町遺跡・中半入遺跡からは水田が確認されている。律令体制に伴う高度な土木技術の導入などによる可耕地の拡大が背景にあると推測される。また、須恵器・瓦の生産も行われるようになり、官窯とされる瀬谷子窯跡や見分森窯跡・外浦洗田遺跡（窯窯）などが築かれ、製品が胆沢城などに供給された。また、明後沢遺跡からは胆沢城・瀬谷子窯跡と同笵関係にある瓦が大量に出土している。古くから城柵説・窯跡説・寺院説などの仮説が立てられ、東北古代史研究において重要視されており、これまでの調査で平安時代の集落と粘土採掘坑が確認されている。

10世紀後半頃になると、胆沢城の機能が失われ在庁官人である安倍氏が台頭してくるが、この時期には周辺遺跡の様相が不明確となる。金ケ崎町鳥海柵跡は、空堀・掘立柱建物などが調査されており、その成立年代は11世紀前半で安倍宗任の居館と考えられている。しかし、10世紀後半から11世紀前半までの遺構・遺物がほとんど認められないことから、胆沢城との関連があるのか否かという問題は依然として残されている。奥六郡を事実上支配していた安倍氏は、朝廷との対立の末、前九年合戦（1051～1062年）において滅亡する。

約20年後、清原氏の内紛に端を発した後三年合戦（1083～1087年）が勃発し、勝利した藤原清衡が平泉藤原氏の初代となる。江刺郡豊田館から磐井郡平泉館に本拠地を移し、中尊寺を中心とする「都市」の建設を推し進めた。白鳥舘遺跡は、安倍頼時の子である白鳥八郎の館として築かれ、室町時代まで存続したとされる。掘立柱建物群・工房群・倉庫と推定される竪穴建物・北上川と旧白鳥川の合流点に向かうとみられる道路などの遺構があり、中世前期の川湊であると考えられている。かわらけ焼成窯・鍛冶工房の存在に加え、銅塊や粘板岩片・水晶製の数珠玉が出土しており、土器・鉄製品のほかに銅製品・石製品の製作加工が行われていたと想定される。周辺からは中国産・国産陶磁器や銭なども多数出土している。明後沢遺跡では大規模な掘立柱建物が、八反町遺跡では掘立柱建物と道路が確認された。この道路は奥大道の枝道であり、明後沢（有力者の居所）・集落・川湊を結んでいたと推測される。平泉藤原氏による治世は初代清衡・2代基衡・3代秀衡と続いたが、4代泰衡のときである文治5（1189）年、源頼朝によって滅ぼされた。

その後、陸奥国は鎌倉幕府の統治下となり、岩手県南部から宮城県北部は葛西氏が拝領した。そのなかで胆沢郡を実質的に支配していたのは、当地方最大規模を誇る柏山館を居城とする柏山氏である。中畑城跡は、柏山氏の一族が居城としていた可能性が高いとされており、県内では類例の少ない「障子堀」が確認されている。江刺郡は岩谷堂城を居城とする江刺氏が支配していたが、柏山氏・江刺氏

の両氏は、それぞれ譜代の家臣を小領主として各地に配置して所領を治めた。やがて在地領主化した各氏は、主家（葛西氏）以上の勢力を持つようになり、領内で反乱・内乱が続発し、天正 17（1589）年の豊臣秀吉による小田原征伐に参陣することができなかった。翌年、奥州仕置が行われ、小田原不参陣の諸氏は追放された。当地方は木村吉清の領地となり、胆沢郡（水沢）は松田太郎左衛門、江刺郡（岩谷堂）は溝口外記が配された。しかし、重税を課すなど悪政が行われたため、「葛西・大崎一揆」が勃発する。これを平定したのが伊達政宗であり、伊達氏は名実ともに東北の覇者となった。

胆江地区の中世後半から近世初頭の特徴として、いわゆる「豪族集落・環濠屋敷」の濃密な分布がある。水沢地区半入屋敷・十日市屋敷などが知られており、十日市屋敷では礎石建物・土塁・堀・祠・キズマ（薪を積み上げて作った垣根）・エグネ（防風林）からなる屋敷構造が明らかになった。中世末には、胆沢扇状地の開拓・用水路開発が本格化したことにより、この地は仙台藩有数の穀倉地帯となった。

江戸時代、南部領との境であった胆沢郡・江刺郡には、要害５カ所が置かれた。水沢城（のちの水沢要害）は天正年間に白石氏によって修築されたが、その後寛永６（1629）年に留守宗利が封ぜられ、以降明治維新に至るまでの 240 年間、留守氏は１万６千石を領し北方警護の重任にあたった。北上川沿岸は舟運で栄え、要所には河港・御蔵場があった。町屋敷遺跡は、御蔵場とその管理・警護にあたる郷士の屋敷群などから成る。発掘調査で確認された掘立柱建物は、間仕切りのみられない柱穴配置から蔵である可能性が指摘されている。この御蔵場は、北上川の東遷によって跡呂井河港・御蔵場に移された。川岸場Ⅱ遺跡には、天正 16（1588）年前後に「大室屋敷」と呼ばれた鈴木家の環濠屋敷があった。寛永 19（1642）年、屋敷内に仙台藩の御蔵が置かれ、屋敷南側には、大曲から移された河港が設けられた。（川又）

引用参考文献

岩文埋　2002　『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩文埋文調報第 380 集

岩文埋　2004　『明後沢遺跡群第 16 次発掘調査報告書』岩文埋文調報第 442 集

岩文埋　2009　『道上遺跡第３次・合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』岩文埋文調報第 544 集

岩文埋　2010　『八反町遺跡・中畑城跡発掘調査報告書』岩文埋文調報第 610 集

岩文埋　2013　『田高Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文埋文調報第 613 集

岩文埋　2014　『八反町・古城林遺跡発掘調査報告書』岩文埋文調報第 627 集

岩文埋　2020　『杉の堂遺跡発掘調査報告書』岩文埋文調報第 716 集

第５図　周辺の遺跡（古代・中世）

Ⅲ　野外調査と室内整理

1　野 外 調 査

（1）グリッド設定・基準点設置

調査区は、東西約 200 m×南北約 205 mの範囲である。調査の進捗状況の管理や検出遺構の位置把握に都合のいいよう、調査区をＡ区～Ｅ区のような区域に大別し、さらに各区域をＡ１区～Ａ５区のような小区域に細分した。各区域の境界線としては、水田の畦畔のライン等をそのまま流用した。また、検出遺構・出土遺物の詳細な位置を記録すると同時に平面的位置関係を直感的に把握しやすくするため、調査区全体をカバーする碁盤目状のグリッドを設定した（第６図）。

まず、調査範囲よりも北西にある地点に原点（世界測地系，平面直角座標第Ｘ系，X=-99,100・Y=26,400）を設置し、ここから南方向及び東方向に延びる軸線をそれぞれ 100 m毎に分割した上で、南北軸の分割を北からⅠ・Ⅱ…（ローマ数字）、東西軸の分割を西からＡ・Ｂ…（英大文字）とし、２文字を複合して「ＩＡ」のように表記したものを大グリッド（100×100 m）の名称とした。さらに、大グリッド南北方向の一辺を５m毎に分割したものを北側から順に１～20（算用数字）、東西方向の分割を西側から順にａ～ｔ（英小文字）とし、大グリッドと同様に２文字を複合して「１ａ」のように表記したものを小グリッド（５×５m）の名称とした。特定の大グリッドに属する小グリッドを指し示すには、これらを組み合わせて「ＩＡ１ａ」のように表記したものを小グリッドの名称として使用することにした。

上記のように定義したグリッドを実際の調査記録の手段として使用するため、現地には基準杭（３級基準点および区画付杭）を打設した。基準点測量（打設）業務は株式会社東開技術に委託した。基準杭の第Ｘ系座標値と標高値は図の通りである。なお、各グリッドの北西隅にあたる地点に設置した杭をグリッド杭と呼称する。本調査における区画付杭はすべてグリッド杭とした。現地に打設した各グリッド杭には、そのグリッド杭から見てすぐ南東側に位置する小グリッドの名称を記し、遺物の取り上げなど位置情報の記録が必要な際に参照した。

（2）試掘・表土除去

調査開始直後は、人力による試掘（トレンチ掘削）作業を主に行った。トレンチの断面および内部を観察し、地表面から遺構検出面までの土層堆積状況や遺構分布の把握に努めた。

試掘による確認が済んだ地点の周辺から、バックホーを用いた面的な表土除去作業を開始した。排土運搬のためキャリアダンプを使用し、調査区に隣接する排土場へ排土を搬出した。

（3）遺構検出・精査

重機による表土除去の後、鋤簾（じょれん）・両刃鎌・移植ベラ等を用いて遺構検出を行った。確認できた遺構プランには、必要に応じて白色スプレー塗料でマーキングを施した。

遺構精査においては、遺構の規模や形状に応じて２分法・４分法を使い分け、埋土断面を観察しながら埋土を掘削除去した。検出時に遺構の重複が認められた場合は、なるべく平面観察で前後関係を推定した上で、原則として新期のものから順に埋土掘削を行うようにした。この場合、両者を縦断する埋土断面を観察できるような形でベルトを設定し、埋土の堆積状況からも併せて遺構の新旧関係を

検討できるように工夫した。遺構プランや埋土の判別が困難な場合にはサブトレンチを設定し掘削したため、完掘段階で遺構の壁・底面の一部がサブトレンチで壊された状態になったものもある。遺物は、出土した遺構・グリッド・層位などを記録して取り上げ、必要に応じて取り上げ前に出土状況写真撮影および平面図作成を行った。

（4）遺　構　名

第２表に遺構名変更表を示した（DVD-R 収録）。検出した遺構に対しては、その都度遺構名を決定した。遺構名は、SB（掘立柱建物）、SD（堀・溝）、SI（竪穴建物）、SK（土坑）、SX（性格不明遺構・池状遺構・土器埋設遺構）、PP（柱穴）のようにアルファベットによる遺構種別を示す略号、検出区域、検出順の番号を組み合わせ「SIA1」のように表記したものを遺構名とした。各遺構に付属する柱穴状ピット等については、「SI ○○ PP ○」のように帰属元となる遺構名の後にピット名を続けた。

（5）写　真　撮　影

遺構写真（完掘全景・遺物出土状況・土層断面など）の撮影は、デジタル一眼レフカメラ（Canon EOS 6D）を主として、6×9・6×4.5 中判フィルムカメラ（モノクロ）をアルバム保存用として使用した。撮影に際しては、撮影状況を記入したカードをその都度写し込み、後にこれを確認しながら撮影データおよびフィルムを整理した。

調査員による個別の遺構写真撮影とは別に、各年度の調査終盤段階においてはドローンによる調査区全景の空撮を実施した（岩手スカイイメージング（水沢ラジコン））。

（6）実　　測

遺構平面図は、株式会社ＣＵＢＩＣの遺構実測支援システム「遺構くん」を使用し、３次元デジタルデータとして作成した。また、微細平面図などは手実測で図面を作成している。

遺構断面図は、水平に設定した水糸を基準にしてマイラーに手描きする手法で作成した。縮尺は 1/20 を基本としたが、細部表現を要する等の理由で 1/10 で作成した場合もある。

（7）土層断面の分層と注記

遺構埋土やトレンチなどの土層断面は、堆積状況を的確に把握できるよう慎重に観察し、分層を行った上で土層断面図を作成した。作成した土層断面図中には、分層の根拠となった各土層の性状についての観察事項を記入した。土層についての観察事項は、色調・土質・粘性・締まり・混入物の種類やその程度等である。さらに、解釈可能な場合は自然堆積か人為的堆積かの違いなど、その層の持つ性格を推定し付記した。色調の表記については、新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局）に準ずることとした。なお、複数の調査員が並行して土層の記録を行ったため、その記述の形式等について十分に統一しきれなかった可能性があることをお断りしておく。

2　室 内 整 理

（1）遺　　構

遺構図面は、デジタルデータ・手描き図面ともに必要な整理を行った後、株式会社ＣＵＢＩＣ遺構

実測支援システム「遺構くん」および Adobe Illustrator CC2023 を用いて、トレースや編集等の作業を行い、最終的に遺構図版を作成した。

遺構写真は、デジタル一眼レフカメラで撮影した RAW データを JPEG データに変換した後、Adobe Photoshop CC2023 を用いてトリミングや調整を行った上で、Adobe InDesign CC2023 を使用してレイアウトし、遺構写真図版を作成した。

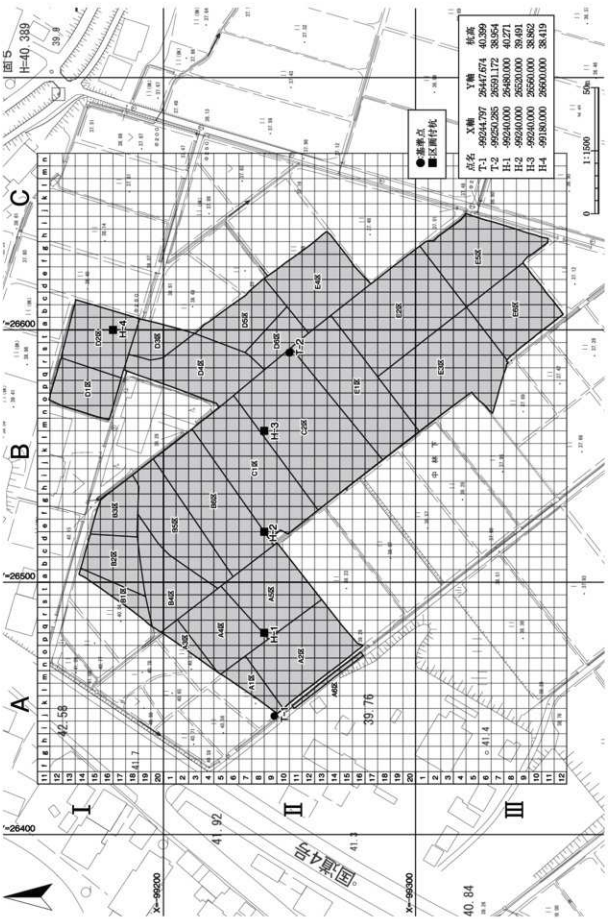
（2）遺　　物

出土遺物は、洗浄・乾燥後に出土地点別の仕分けを行い、土器については接合・復元を行った。その後、報告書掲載に適した個体を抽出し登録を行った。登録された資料については、写真撮影、実測図・拓影作成、トレース作業を順次行った。これと並行して、掲載番号・出土地点（層位）・計測値・その他観察事項等を記載した遺物観察表を作成したが、実測図等から読みとれる属性については、本文・表ともに記載を省略したものがある。

柱材・礎板など大型木製品を中心に、３Ｄスキャナーによる非接触の３次元形状スキャンを実施した。これは、自然乾燥すると形状が大きく変化してしまう木製品の情報をより多く得る目的で行い、生成したデータに加工の痕跡が明瞭に認められる場合、これを図版掲載している。３Ｄデジタイジング装置については、地方独立行政法人岩手県工業技術センターが保有するカールツァイス社製 T-SCAN CS+、編集には GOM 社製 Inspect を使用した。

遺物写真撮影には、デジタル一眼レフカメラ（Canon EOS 6D）を使用した。撮影した画像については Adobe Photoshop CC2023 を用いて切り抜き、リサイズ、調整を行った。遺物実測図については、Adobe Illustrator CC2023 を用いてデジタルトレースを行った。トレースされた遺物実測図データおよび加工調整した遺物写真データを Adobe InDesign CC2023 を使用してレイアウトし、遺物図版・遺物写真図版を作成した。

木製品と金属製品の保存処理については、㈱吉田生物研究所へ業務委託した。また、木製品のうち委託できなかった遺物については、本所にてトレハロースを用いた簡易的な保存処理を実施した。時間的な制約によって簡易的な処理もできなかった遺物は、自然乾燥させている。各木製品の保存処理状況については、第４～13 表遺物観察表（DVD-R 収録）に記載している。　　（川又・北田）



第6図　調査区割・グリッド配置図

Ⅳ 調 査 成 果

1 全 体 の 概 要

２カ年に亘る調査から、主に縄文時代、平安時代、戦国時代末～近世初頭の遺構・遺物を確認した。なかでも、平安時代の掘立柱建物群と戦国時代末～近世初頭に位置付けられる２つの居館跡が検出されている。調査の進行については、令和２年度調査のおいてＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区の調査を行い、令和３年度調査ではＢ・Ｃ区を継続、新たにＥ区の調査を進めた。

第７図に調査全体図、第８図に部分図１（Ａ・Ｂ・Ｃ区）、第９図に部分図２（Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区）、第10図に部分図３（Ｃ・Ｄ・Ｅ区）を示した。

平安時代の遺構は掘立柱建物32棟、竪穴建物６棟、土坑16基、性格不明遺構６基、池状遺構４基、遺物集中２箇所、整地層約900㎡、柱穴320個（掘立柱建物分）である。また、戦国時代末～近世初頭の遺構のうち、北側の居館跡１からは掘立柱建物21棟、掘立柱建物（門）１棟、堀４条（間仕切り遺構１・礫集中１含む）、土橋４基、土坑７基、溝20条、池状遺構１基、性格不明遺構５基、南側の居館跡２からは掘立柱建物12棟、堀２条（間仕切り遺構１含む）、土坑５基、溝３条、池状遺構２基、柱穴2,123個（掘立柱建物分含む）を確認した。遺物は、平安時代の概ね９世紀代を中心とする土師器・須恵器のほかに木鍬・支脚などの木製品が少量出土し、掘立柱建物に使用された柱材の柱根部分や礎板・枕木が多く残存していた。また、戦国時代の15～16世紀代の陶磁器や輸入銭、石製品、木製品、柱材など建築部材が出土している。

平安時代の遺構は中央付近とやや離れた北側に集中域があり、調査区内でも標高の高い箇所に広がる傾向が認められる。一方、戦国時代末には南北２箇所の居館が築かれている。北側の居館は二重の堀で囲まれた方形の平面形を有し、内部には複数の建物を構成する柱穴が密集して確認されており、内部東端には池が配置されている。また、南側の居館も一部が二重となる方形基調で南側は造成工事の影響で失われているが、内部に複数の建物と池が配置されている様子は北側の居館に似通っている。いずれの居館も出土した遺物の年代観から、戦国時代末（16世紀後半）までに廃絶したと考えられる。平安時代の遺構の一部はこれら戦国時代末の遺構に切られて検出されており、特に北側の居館と重複している遺構は堀や溝、柱穴に切られて遺存状態が良くない。また、北側から確認されている竪穴住居も近年の造成の影響を多分に受けており、遺構の立ち上がりや床面を欠く遺構も含んでいる。

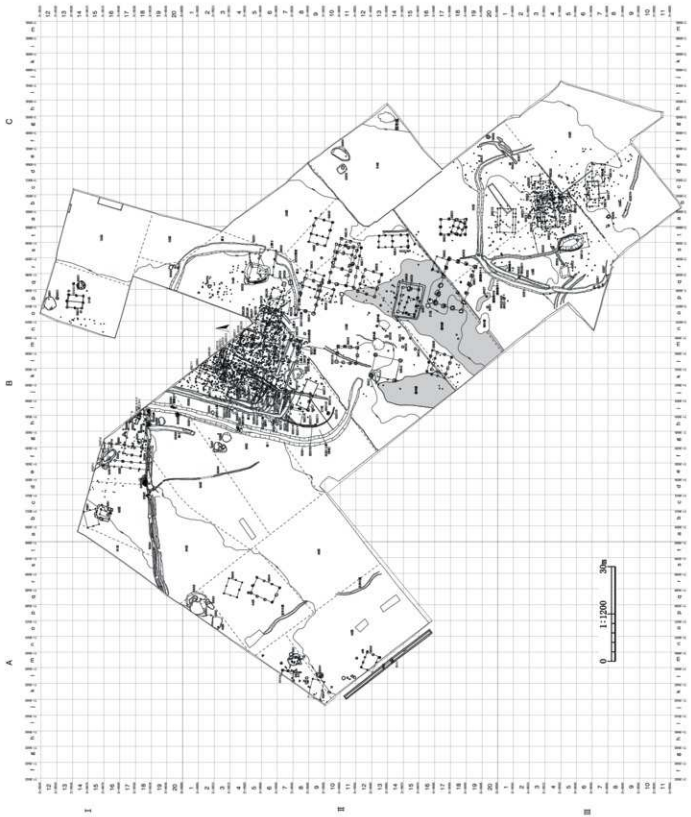
（北田）

2 検 出 遺 構

（１）概　　要

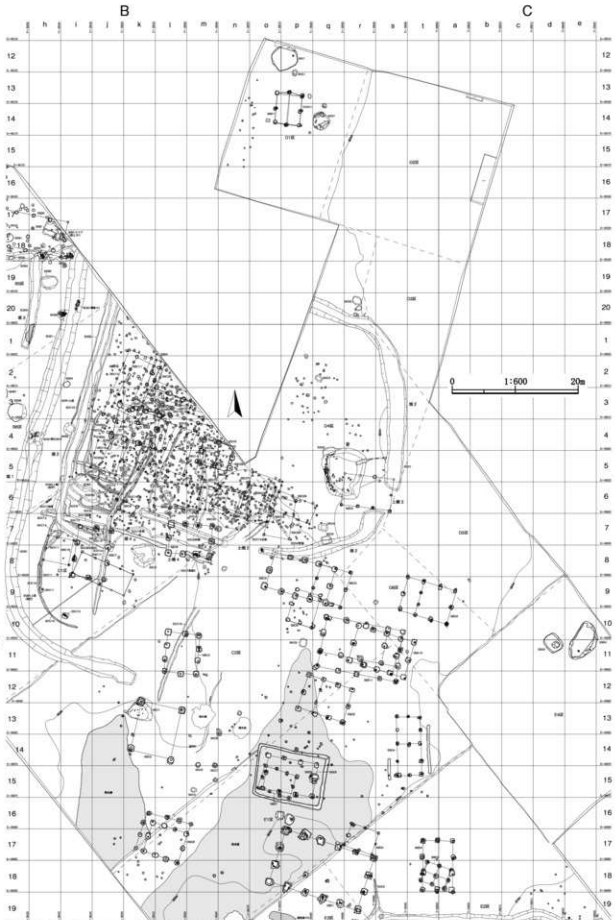
検出遺構のうち、まず（２）平安時代の遺構の事実記載、その後に戦国時代末～近世初頭の（３）居館跡１の遺構、（４）居館跡２の遺構の事実記載を続け、最後に（５）その他の遺構として縄文時代の記載を掲載する。各節内の項目は（ａ）から遺構種別ごとに記載するが、柱穴状ピットについては表掲載（DVD-R に収録）とし、特徴のある柱穴のみ記述を掲載する。

なお、平安時代の遺構に用いる尺度については１尺＝0.295m、戦国時代末の遺構に用いる尺度については１尺＝0.303m を採用していることをお断りする。（北田）

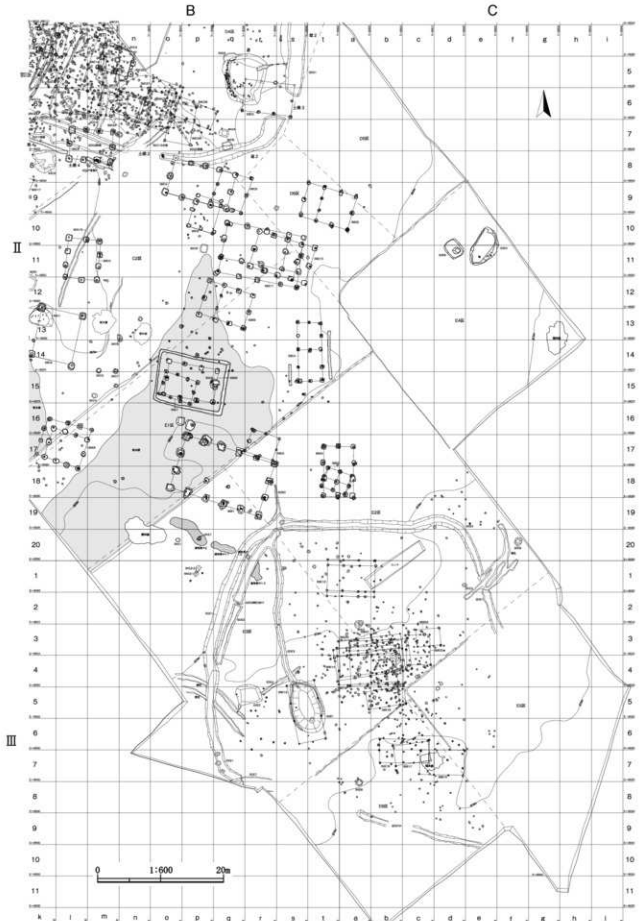


第７図　調査全体図

第８図　部分図１（A・B・C区）



第9図　部分図2（B・C・D・E区）



第10図　部分図3（C・D・E区）

（2）平安時代の遺構

（a）掘立柱建物

SBA1 掘立柱建物（第11図、写真図版2）

調査区西側A1区のX＝-99242、Y＝26451付近に位置する。令和2年度調査。北西側は調査区外へ延びる。規模は、桁行2間の長さ5.73 m、梁行2間の幅3.95 m、面積は22.64㎡、廂などの付かない東西棟の側柱建物である。柱間寸法は桁行が10.0尺（2.95 m）、梁行6.5尺（1.92 m）が用いられており、桁行の北面、南面がやや長く設定されている。主軸方向は、東西方向のN76.22° Wである。調査区内で確認した柱穴は計6個で、抜き取りで不整形になるものもあるが概ね方形基調である。

方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBA2 掘立柱建物（第12図、写真図版3）

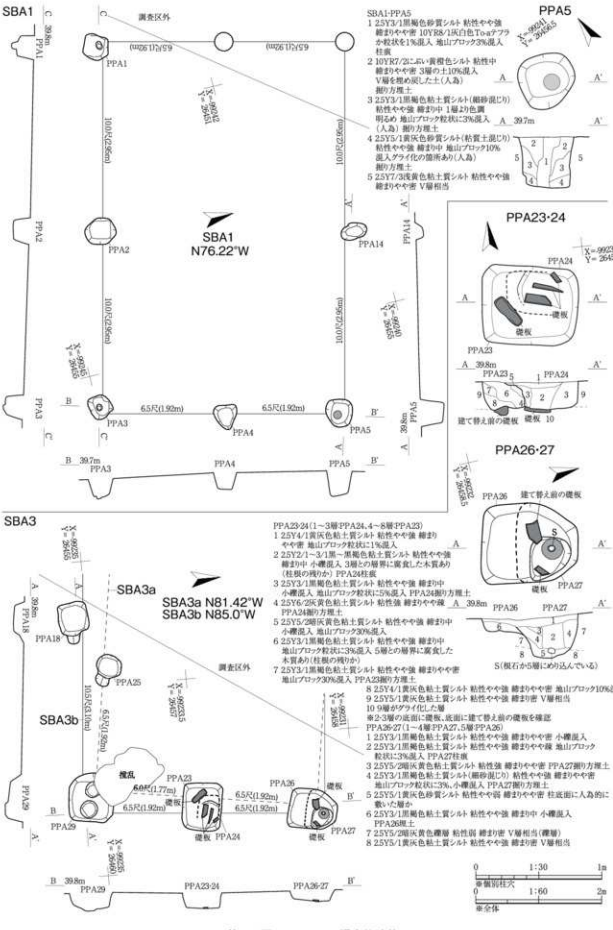
調査区西側A2区のX＝-99261、Y＝26463付近に位置する。令和2年度調査。北西側は調査区外へ延びる。規模は、桁行3間の長さ5.24 m、梁行2間の幅3.95 m、面積は20.7㎡、廂などの付かない東西棟の側柱建物である。柱間寸法は桁行が6.0尺（1.77 m）、梁行6.5尺（1.92 m）が用いられており、桁行の北面、南面がやや短く設定されている。主軸方向は、東西方向のN68.33° Wである。調査区内で確認した柱穴は計8個で、抜き取りで不整形になるものもあるが概ね方形基調である。梁行の東面の柱穴PPA43・44・PPA53は、PPA49や元の柱穴と重なるように掘削されていることから、部分的な修繕が行われた可能性がある。PPA40とPPA49底面からは礎板が出土している。PPA49から出土した794礎板について年代測定したところ、674-778calAD（87.3%・2σ）、791-822calAD（8.2%・2σ）の年代値を得た。また、この資料の樹種はクリ材であった。

方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

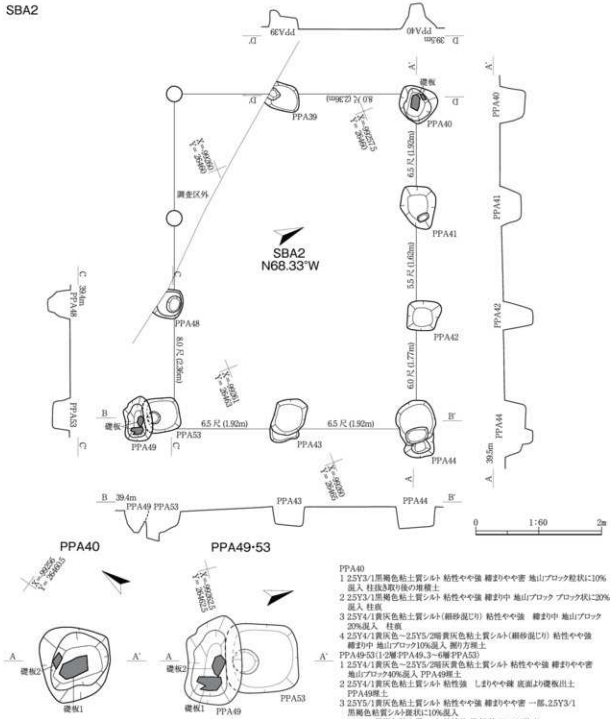
SBA3 掘立柱建物（第11図）

調査区西側A1区のX＝-99231、Y＝26458付近に位置する。令和2年度調査。西側は調査区外へ延びる。規模は、建て替え前のSBA3aが桁行2間かの長さ2.9 m以上、梁行2間の幅3.52 m、面積は10.2㎡以上、建て替え後のSBA3bが桁行2間の長さ3.38 m以上、梁行2間の幅3.79 m、面積は12.8㎡以上、いずれも廂などの付かない東西棟の側柱建物である。柱間寸法は、SBA3aの桁行6.5尺（1.92 m）、梁行6.0尺（1.77 m）・6.5尺（1.92 m）、SBA3bの桁行が10.5尺（3.10 m）、梁行6.5尺（1.92 m）が用いられており、SBA3b桁行側の北面、南面がやや長く設定されている。主軸方向は、いずれも東西方向で、SBA3aがN81.42° W、SBA3bがN85.0° Wである。調査区内で確認した柱穴はいずれも計4個で、概ね方形基調である。PPA23・24、26・27底面からは、礎板が出土しており（657a礎板）、柱あたり底面には根石に使用したと見られる扁平礫が確認された。このうち、PPA24から出土した657a礎板について年代測定を実施したところ、786-832calAD（51.0%・1σ）の年代値を得た。また、この資料の樹種はクリであった。

方形基調の柱穴、SBA1など同形の建物を複数確認していること、9世紀第1～2四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）



第11図　SBA1・3掘立柱建物



PPA40
1 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山ブロック粒状に10%混入 柱抜取り後の埋土
2 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 地山ブロック ブロック状に20%混入 柱痕
3 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性やや強　締まり中 地山ブロック20%混入　柱痕
4 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y5/2暗黄灰色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性やや強 締まり中 地山ブロック10%混入 脚の方埋土

PPA49·53(1・2層PPA49,3～6層PPA53)
1 2.5Y4/1黄灰色～2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山ブロック40%混入 PPA49埋土
2 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト 粘性強　しまりやや緩 底面より磯板出土 PPA49埋土
3 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 一部、2.5Y3/1黒褐色粘質シルト斑状に10%混入
4 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり緩 PPA53柱痕
5 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり緩 PPA53柱痕 地山ブロック粒状に2%混入
6 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり緩 PPA53脚の方埋土 地山ブロック5%混入
7 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト 粘性やや強 締まり弱 V層相当

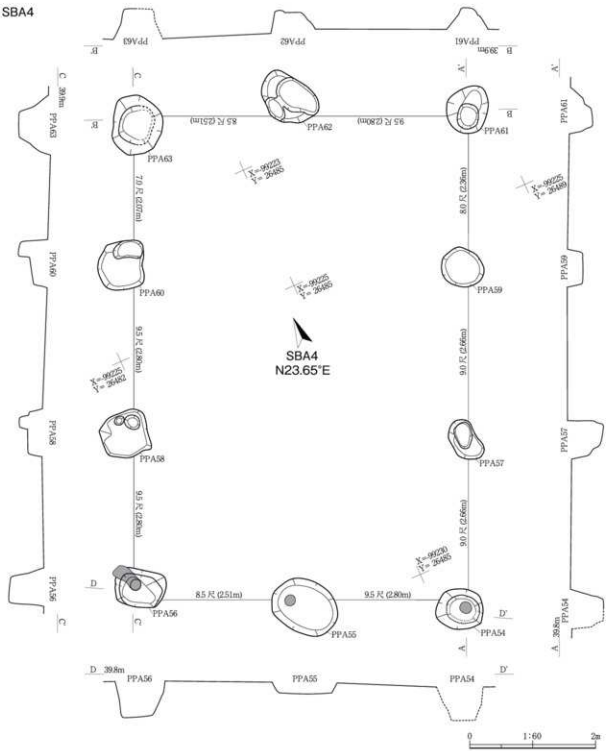
第12図　SBA2 掘立柱建物

SBA4 掘立柱建物（第13・14図、写真図版4～6）

調査区西側A4区のX＝-99225、Y＝26485付近に位置する。令和2年度調査。規模は、桁行3間の長さ7.68 m、梁行2間の幅5.33 m、面積は40.93㎡、廂などの付かない南北棟の側柱建物である。

柱間寸法は桁行が7.0尺（2.07 m）、8.0尺（2.36 m）、9.0尺（2.66 m）、9.5尺（2.80 m）、梁行は8.5尺（2.51 m）、9.5尺（2.80 m）と様々な寸法が用いられている。主軸方向は、南北方向のN23.65° Eである。調査区内で確認した柱穴は計10個で、方形に近いものもあるが概ね円形基調である。柱材はすべて抜き取られており、礎板などの設置も認められない。南西隅のPPA56は柱抜き取り痕が明瞭に残る。

中型の大きさの建物で同形の建物を複数確認しており、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）



第13図　SBA4掘立柱建物（1）

第 14 図　SBA4 掘立柱建物（2）

SBA5 掘立柱建物（第 15 図、写真図版 4 ～ 6）

調査区西側 A4 区の X = -99215、Y = 26485 付近に位置する。令和 2 年度調査。規模は、桁行 2 間の長さ 5.02 m、梁行 2 間の幅 4.36 m、面積は 21.89㎡、廂などの付かない東西棟の側柱建物である。柱間寸法は桁行が 8.5 尺（2.51 m）、梁行 7.5 尺（2.21 m）が用いられている。主軸方向は、東西方向の N72.45° W である。確認した柱穴は計 8 個で、方形に近いものもあるが概ね円形基調である。柱材はすべて抜き取られており、礎板などの設置も認められない。南面中央の PPA66 は柱抜き取り痕が明瞭に残る。

方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

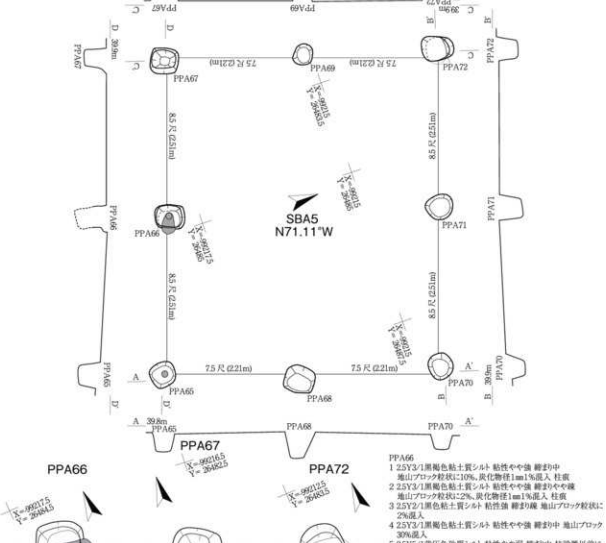
SBB1 掘立柱建物（第 16 図、写真図版 7）

調査区北西側 A4 区の X = -99170、Y = 26505 付近に位置する。令和 2 年度調査。規模は、桁行 1 間の長さ 5.13 m、梁行 2 間の幅 3.85 m、面積は 19.75㎡、廂などの付かない東西棟の側柱建物である。柱間寸法は桁行が 1 間 17.0 尺（5.02 m）と長く、中間の 8.5 尺（2.51 m）に床立ちの柱があった可能性がある。梁行は西面が 6.0 尺（1.77 m）、6.5 尺（1.92m）、7.0 尺（2.07 m）が用いられている。主軸方向は、東西方向の N75.55° E である。確認した柱穴は計 6 個で、方形に近いものもあるが概ね円形基調である。柱材はすべて抜き取られており、礎板などの設置も認められない。南西隅 PPB3、東面中央 PPB5 は柱痕跡が明瞭に残る。

方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

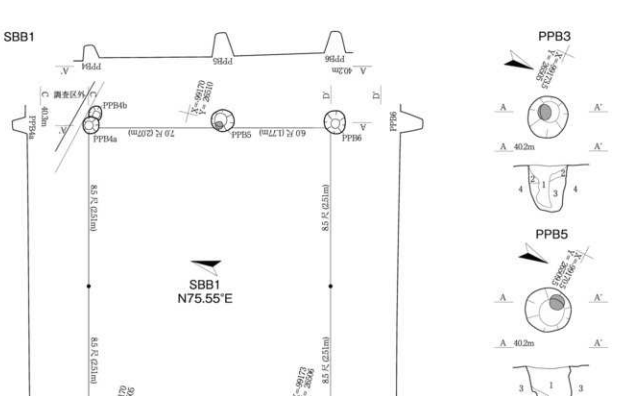
SBB2 掘立柱建物（第 17 図、写真図版 8 ～ 11）

調査区北西側 B3 区の X = -99180、Y = 26525 付近に位置する。令和 2 年度調査。当初は、三面廂建物と想定していたが、戦国時代末と見られる SBB5 掘立柱建物と重複していることが確認されたことから、分離して本遺構を二面廂建物と考えた。SDB4 溝と重複するが本遺構が古く、SXB1 性格不明遺構より新しい。北面と西面に廂の付く南北棟の二面廂建物で、廂を含めた規模は桁行 6 間の長さ



第15図　SBA5 掘立柱建物

14.74 m、梁行3間の幅 6.94 m、面積は 102.3㎡である。身舎の規模は、桁行5間の長さ 13.27 m、梁行2間の幅 5.02m で、廂の出は北面が 5.0 尺（1.47 m）、西面が 6.5 尺（1.92 m）である。柱間寸法は、桁行・梁行ともに 8.5 尺（2.51 m）を多用している。主軸方向は、南北方向の N6.09° E である。確認した柱穴は計 23 個で、概ね円形基調である。柱材はすべて抜き取られているが、PPB18・24 には礎板が設置されていた。身舎北西隅の PPB90 付近から、B 区遺物集中1とした 168 須恵器大甕が1個



第 16 図　SBB1 掘立柱建物

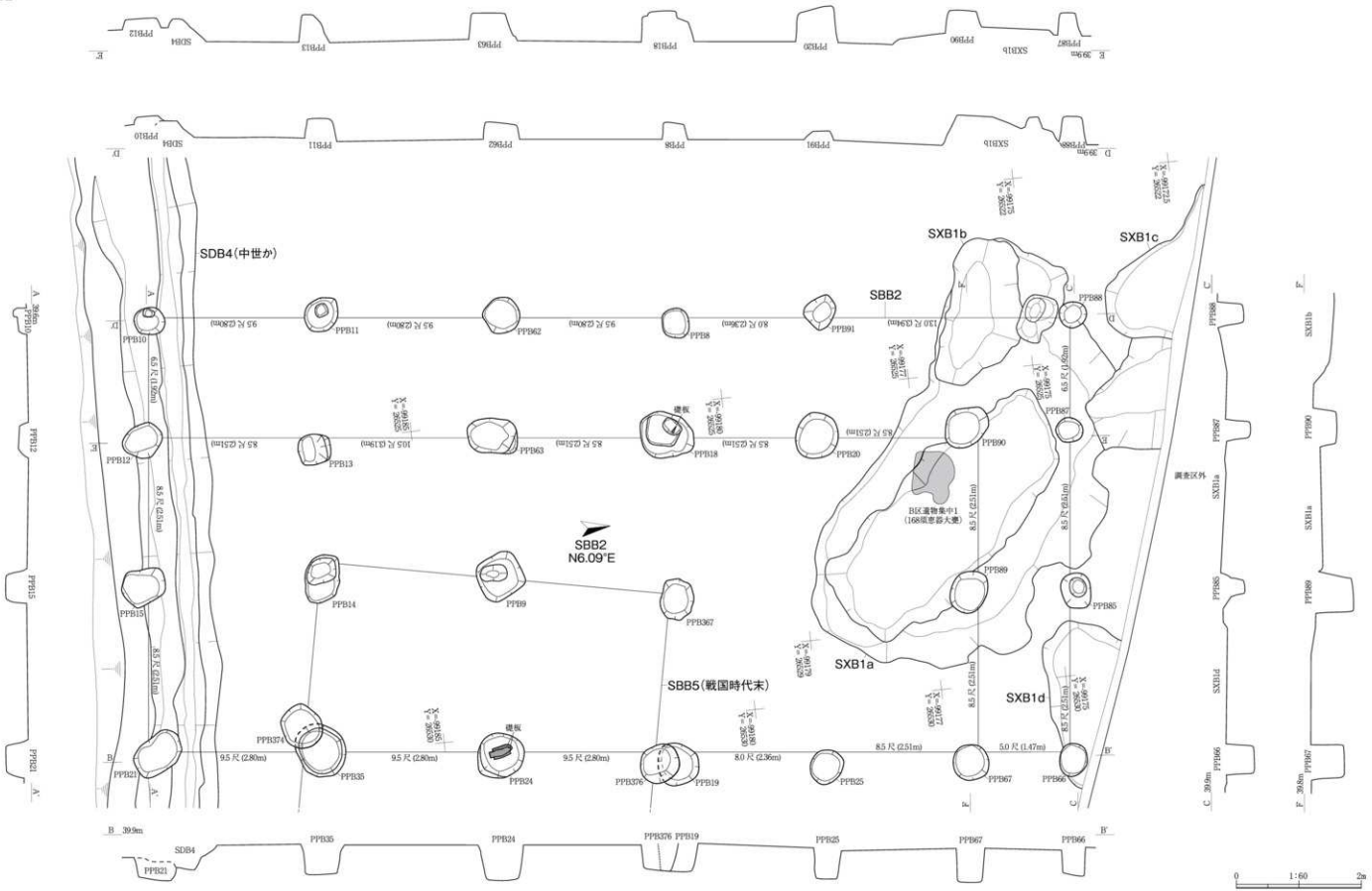
体分出土し、本遺構に関連する可能性がある。

二面に廂を持ち、100㎡を超える大型であることから、平安時代に所属する中心的な建物と考えられる。（北田）

SBB3 掘立柱建物（第 18 図、写真図版 8 ～ 11）

調査区中央西側 B6 ～ C1 区の X = -99215、Y = 26550 付近に位置する。令和 2 年度調査。桁行 3 間、梁行 2 間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 6.65 m、梁行の幅は 5.02 m、面積は 33.4 ㎡である。柱間寸法は、桁行は 6.5 尺（1.92 m）や 7.0 尺（2.07 m）、7.5 尺（2.21 m）、8.0 尺（2.36 m）、9.0 尺（2.66 m）と一定しないが、梁行は東西面とも 8.5 尺（2.51 m）に整えられている。主軸方向は、東西方向の N77.11° W である。調査区内で確認した柱穴は計 10 個で、戦国時代末の柱穴との切り合いが著しいが概ね円形基調の平面形である。西面中央の PPB185 や東面中央の PPC207、北東隅の PPB174 からはいずれも柱根が確認されており、いずれも丸太を半割した材が用いられていた（663・664・667）また、北面中央の PPB198 底面からは礎板も確認されている。柱の配置からは、柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推

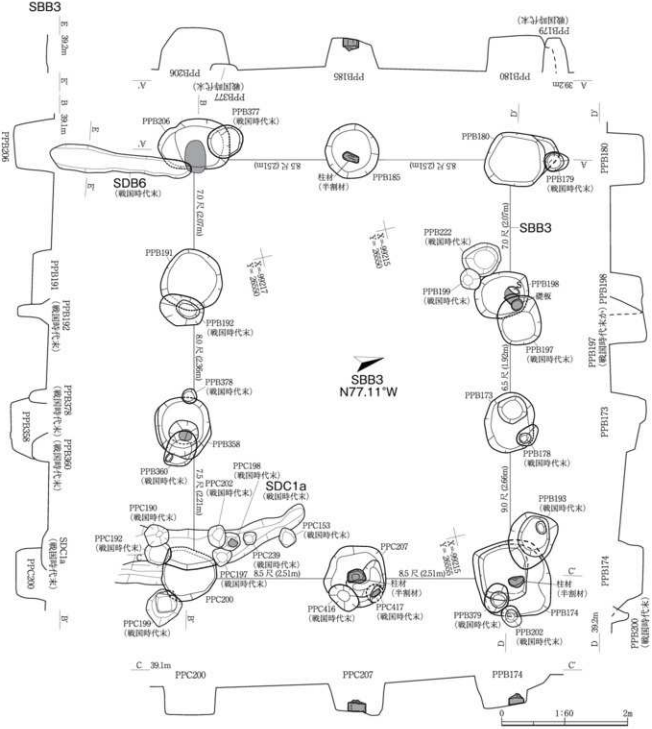
SBB2



第 17 図　SBB2 掘立柱建物

測される。なお、柱を分割して使用する技法は、今回調査した中世の建物には見受けられず、平安時代の建物のみに確認されている。

前述のPPB185から出土した664柱材とPPC207から出土した667柱材、PPB198から出土した666礎板について年代測定を実施したところ、664柱材は825calAD-882calAD（60.1％・1σ）、667柱材は872calAD-894calAD（23.3％・1σ）、666礎板は920calAD-956calAD（33.5％・1σ）の年代値を得た。この中で、666礎板の年代値が離れていることから、次に確率の高い877calAD-898calAD（21.9％・1σ）を支持したい。また、合わせて樹種同定を実施したところ、663・664・



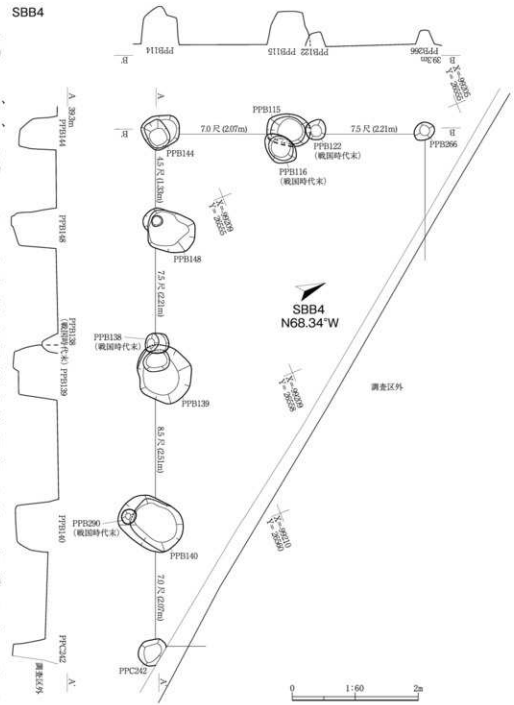
第18図　SBB3掘立柱建物

667 柱材、666 礎板いずれもクリを使用していた。

大型の円形基調の柱穴や半割材を用いる点、また同形の建物を複数確認していること、年代測定から9世紀第2～4四半期の年代値を得ていることから平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBB4 掘立柱建物（第19図、写真図版12）

調査区中央西側 B6～C1 区の X＝-99209、Y＝26558 付近に位置する。令和2年度調査。東側は調査区外へ延びており、半分程度を検出したと見られる。桁行4間もしくはそれ以上、梁行2間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは8.15 m以上、梁行の幅は4.25 m、面積は34.6㎡である。柱間寸法は、桁行は4.5尺（1.33 m）や7.0尺（2.07 m）、7.5尺（2.21 m）、8.5尺（2.51 m）、梁行は7.0尺（2.07 m）、7.5尺（2.21 m）と一定しない。主軸方向は、東西方向のN68.34°Wである。調査区内で確認した柱穴は計7個で、戦国時代末の柱穴との切り合いが著しいが概ね円形基調の平面形である。ただし、調査区境界にかかるPPC242や北西隅のPPB266は他の柱穴に比べて小さい印象を受け、東側次第では規模や向きに



第19図　SBB4 掘立柱建物

修正が必要になる可能性もある。柱材はすべて抜き取られており、礎板などの設置も認められない。

方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

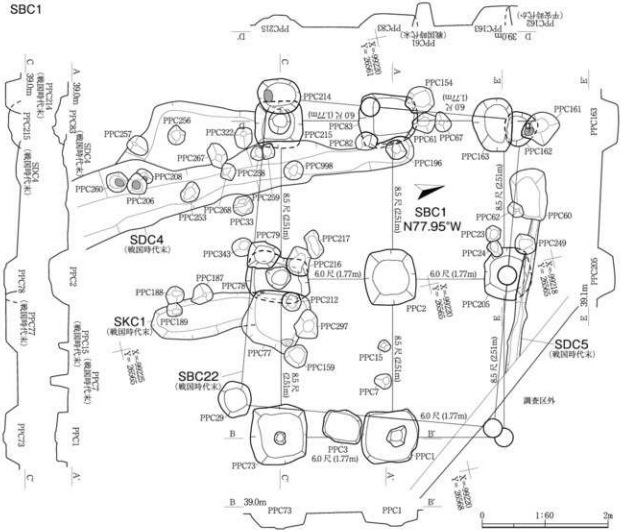
SBC1 掘立柱建物（第 20 図、写真図版 13）

調査区中央西側 C1 区の X＝-99220、Y＝26565 付近に位置する。令和２年度調査。桁行２間、梁行２間の規模を持つ東西棟の総柱建物で、桁行の長さは 5.02 m、梁行の幅は 3.54 m、面積は 17.77㎡で北西側は調査区外へ延びる。柱間寸法は、桁行は 8.5 尺（2.51 m）、梁行は 6.0 尺（1.77 m）を用いている。主軸方向は、東西方向の N77.95° W である。調査区内で確認した柱穴は計８個で、北西隅の柱穴１個は調査区外となる。いずれも戦国時代末の柱穴との切り合いが著しいが、概ね方形基調の平面形である。柱材はすべて抜き取られており、礎板などの設置も認められない。

方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、また総柱建物である点から平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

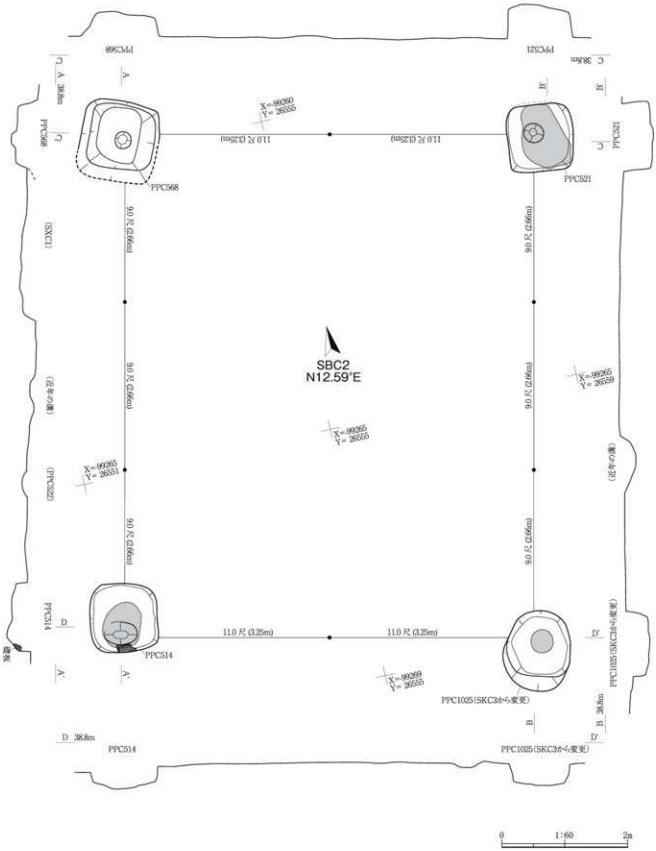
SBC2 掘立柱建物（第 21・22 図、写真図版 14）

調査区中央南側 C2 区の X＝-99265、Y＝26555 付近に位置する。令和３年度調査。桁行１間、梁

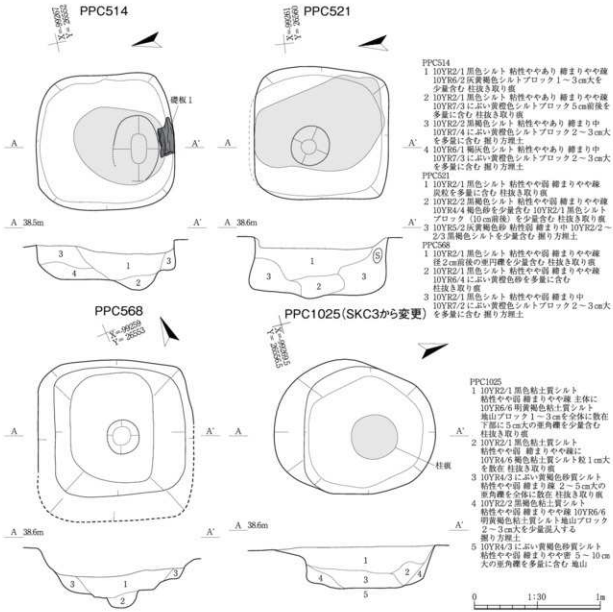


第 20 図　SBC1 掘立柱建物

SBC2



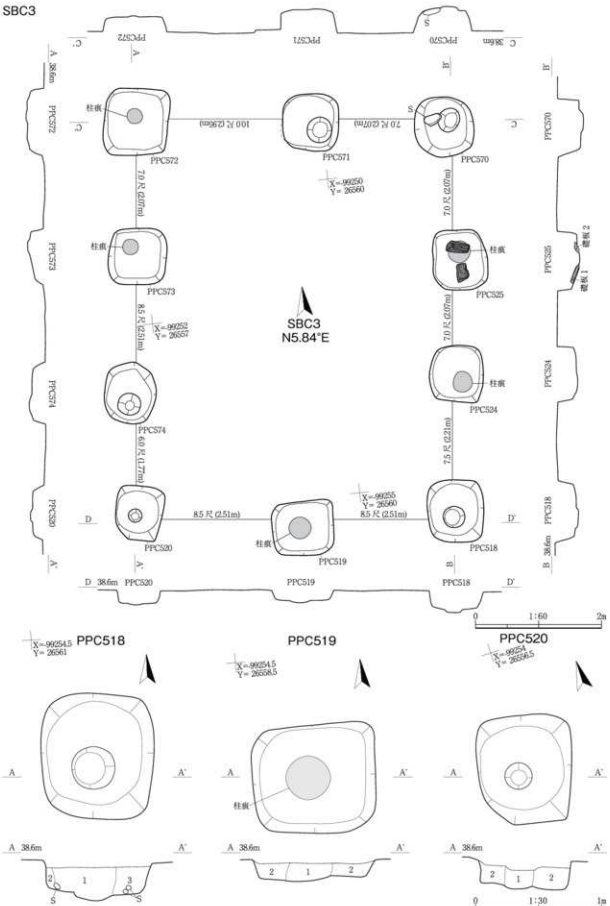
第 21 図　SBC2 掘立柱建物（1）



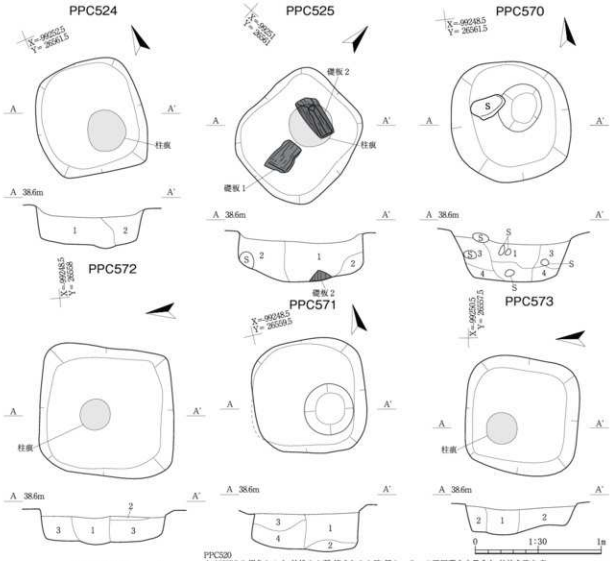
第22図　SBC2 掘立柱建物（2）

行1間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは7.98 m、梁行の幅は6.49 m、面積は51.79㎡である。隅柱のみが確認された建物で、間に入る柱は検出されなかったが桁行、梁行ともに柱間の距離が長いため、床立ちの柱が入れられていたと考えられる。桁行3間、梁行2間の場合、柱間寸法は桁行9.0尺（2.66 m）、梁行11.0尺（3.25 m）が想定される。主軸方向は、南北方向の N12.59° E である。確認した柱穴は計4個で、いずれも隅柱の柱穴と見られる。いずれも方形基調の平面形を持つ。柱材はすべて抜き取られているが、PPC514・521・1025には柱抜き取り痕が確認された。また、PPC514底面からは根固めに用いられたと見られる668礎板が出土している。668礎板について年代測定を実施したところ、828calAD-886calAD（58.1％・1 σ）の測定値を得た。

隅柱のみ確認された特殊な建物であるが、方形基調の柱穴、同形の建物を複数確認しており、年代測定値から9世紀第2～4四半期の年代値を得ていることから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）



第 23 図　SBC3 掘立柱建物（1）



PPC518
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 径2cm前後の亜円礫を微微量含む 柱抜き取り痕
2　10YR2/2黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 径5cm前後の亜円礫を微微量含む 掘り方埋土
3　10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR7/2にぶい黄橙色シルトブロック5cm前後を多量、径2～5cmの亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC519
1　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック3cm前後を少量、径3～5cmの亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック2～6cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC520
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 径1～3cmの亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2　10YR3/3暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 径3～5cmの亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC524
1　10YR5/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR8/2灰白色シルトブロック2～5cmを多量、10YR2/1 黒色シルトブロック2～3cmを少量含む 柱抜き取り痕
2　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック～10cmを多量、10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトブロック2～8cmを少量含む 掘り方埋土

PPC525
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり疎 10YR8/2灰白色シルトブロック3cm前後を少量、10YR6/1 褐灰色シルトブロック3～5cmを少量含む 柱抜き取り痕
2　10YR6/1 褐灰色シルト 粘性・締まりや 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック3～5cmを多量、10YR2/1 黒色シルトブロック3cm前後を少量含む 掘り方埋土

PPC570
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR8/2灰白色シルトブロック3～5cmを少量、径3～10cmの亜円礫を多量含む 柱抜き取り痕
2　10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック～4cmを少量、径3～8cmの亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
3　10YR4/1 褐灰色シルト 粘性やややあり 締まり中 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック5～15cmを多量、径3～15cmの亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
4　10Y3/1 オリーブ黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/2灰白色シルトブロック3～5cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC571
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 暗褐色シルトブロック3cmを微量含む 柱抜き取り痕
2　10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR7/1灰白色シルトブロック 10～12cmを多量に含む 柱抜き取り痕
3　10YR2/2黒褐色シルト 10YR8/2灰白色シルトブロック2～4cmを多量に含む 掘り方埋土
4　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック5～15cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC572
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/2灰黄褐色シルトブロック1cm前後を少量含む 柱抜き取り痕
2　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR8/2灰白色シルトブロック1～3cmを多量に含む 掘り方埋土
3　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック3～5cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC573
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR6/1 褐灰色シルトブロック1～2cm微量含む 柱抜き取り痕
2　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3にぶい黄橙色シルトブロック2～8cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC574
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック3～10cmを少量、径2～3cmの亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 柱抜き取り痕
3　10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 径2cm前後の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土

第24図　SBC3 掘立柱建物（2）

SBC3 掘立柱建物（第 23・24 図、写真図版 15・16）

調査区中央 C2 区の X = -99252、Y = 26557 付近に位置する。令和 3 年度調査。桁行 3 間、梁行 2 間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは 6.35 m、梁行の幅は 5.02 m、面積は 31.88㎡である。柱間寸法は、桁行は東面が 7.0 尺（2.07 m）と 7.5 尺（2.21 m）、西面が 6.0 尺（1.77 m）や 7.0 尺（2.07 m）、8.5 尺（2.51 m）と一定しない。梁行は北面が 7.0 尺（2.07 m）と 10.0 尺（2.95 m）、南面が 8.5 尺（2.51 m）に整えられている。主軸方向は、南北方向の N5.84° E である。確認した柱穴は計 10 個で、概ね方形基調の平面形である。いずれの柱穴も柱根は残存していないが、柱痕跡が明瞭である。また、PPC525 底面からは 669・670 礎板 2 点が出土しており、いずれも樹種はクリである。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。また、棟持ち柱と見られる PPC519 と PPC571 の柱痕跡は必ずしも桁行の柱筋と並行していないことから、柱は梁までとなって軸部を形成し、小屋組は棟束を上げて構築されていたと考えられる。

前述の PPC525 底面から出土した 670 礎板 2 について年代測定を実施したところ、702calAD-741calAD（42.3%・1 σ）と 790calAD-822calAD（25.9%・1 σ）の年代値を得た。他の建物の年代と比較して前者はやや離れていることから、後者を支持したい。

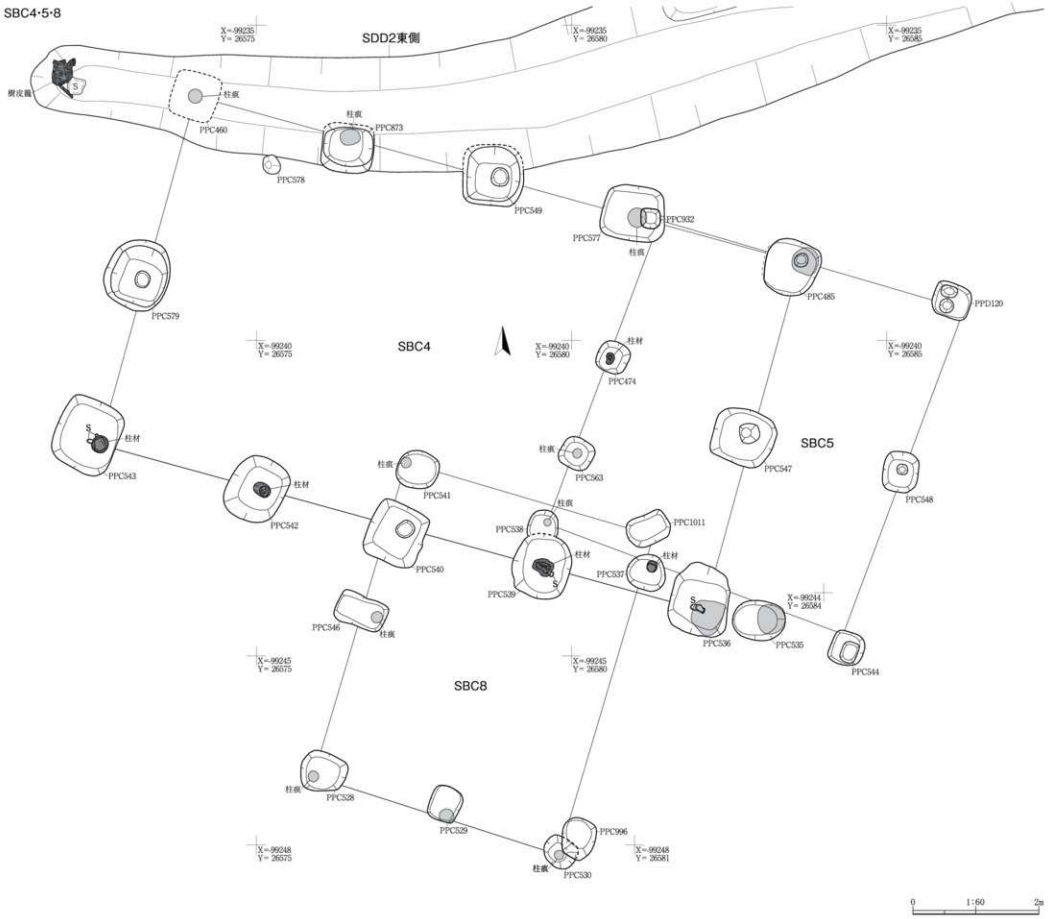
方形基調の柱穴掘り方、同形の建物を複数確認しており、また年代測定から 8 世紀第 4 四半期～ 9 世紀第 1 四半期の年代値を得ていることから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBC4 掘立柱建物（第 25 ～ 28 図、写真図版 17・18）

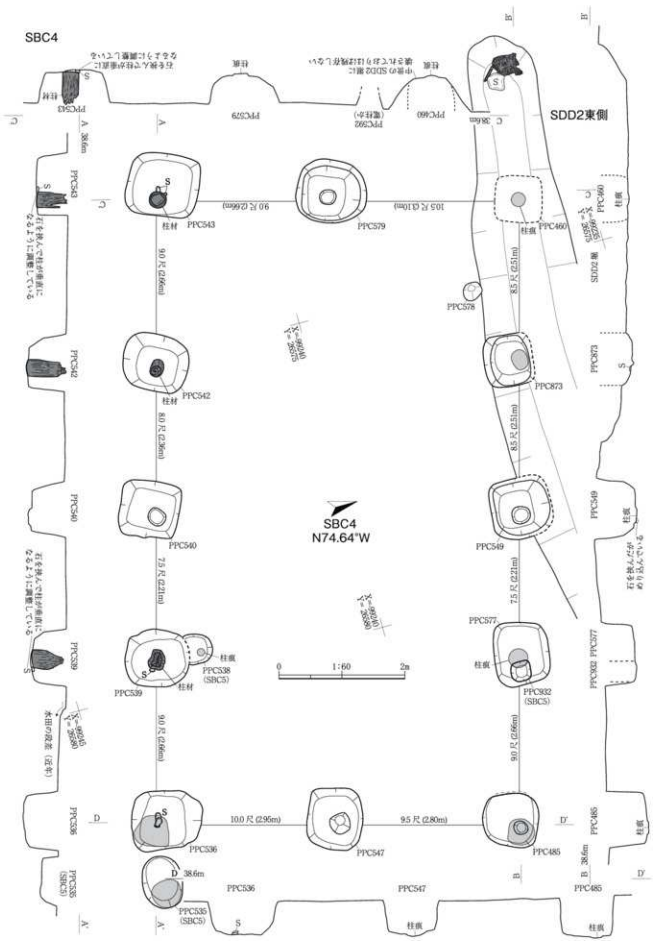
調査区中央 C2・D4 区の X = -99240、Y = 26575 付近に位置する。令和 3 年度調査。SBC5・8 と重複しており、SBC5 とは PPC538・539、PPC577・932 との切り合いから本遺構が新しい。桁行 4 間、梁行 2 間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 9.89 m、梁行の幅は 5.75 m、面積は 56.87 ㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が 7.5 尺（2.21 m）や 8.5 尺（2.51 m）、9.0 尺（2.66 m）、西面が 7.5 尺（2.21 m）や 8.0 尺（2.36 m）、9.0 尺（2.66 m）と一定しない。梁行は西面が 9.0 尺（2.66 m）と 10.5 尺（3.10 m）、南面が 9.5 尺（2.80 m）と 10.0 尺（2.95 m）となり、東西面でややずれている。主軸方向は、東西方向の N74.64° W である。確認した柱穴は計 12 個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はいずれも南面の PPC539・542・543 の計 3 個で、それぞれ 671・672・673 柱材の 3 点で樹種はすべてクリである。3 点の柱材はいずれも直径 50 ～ 60㎝の原木丸太を半割もしくは四つ割りにして、鉞や鉈で表面加工（面取り）を施している。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。また、棟持ち柱と見られる PPC547 と PPC579 の柱痕跡は必ずしも桁行の柱筋と並行していないことから、柱は梁までとなって軸部を形成し、小屋組は棟束を上げて構築されていたと考えられる。

前述の PPC543 柱穴から出土した 673 柱材について年代測定を実施したところ、785calAD-879calAD（52.8%・2 σ）の測定値を得た。なお、柱材は加工されていることから年代値についてはやや幅を持って捉える必要がある。

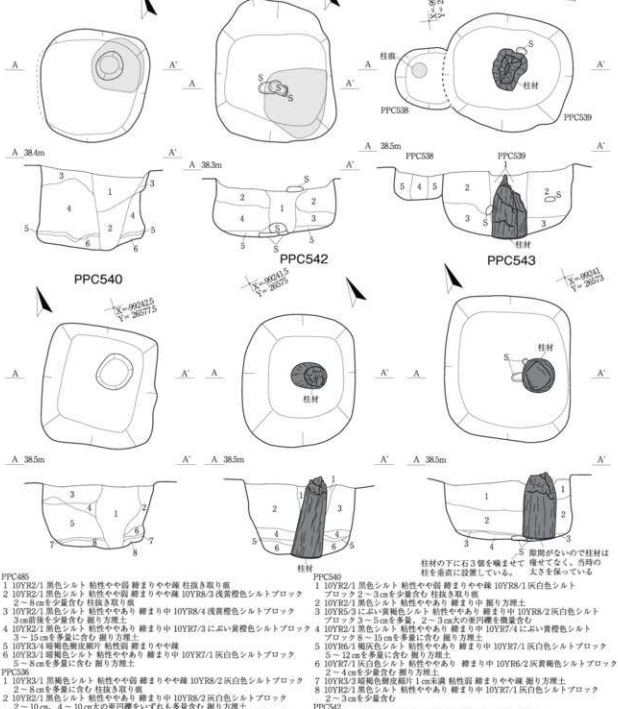
方形基調の柱穴掘り方、同形の建物を複数確認していること、年代測定値から 8 世紀第 4 四半期～ 9 世紀第 3 四半期の年代値を得ていることから、概ね平安時代に属する居住を目的とした建物と推定される。（北田）



第25図 SBC4・5・8掘立柱建物跡（検出図）



第 26 図　SBC4 掘立柱建物（1）



PPC485
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR8/3 浅黄橙色シルトブロック
2～8cmを少量含む 柱抜き取り痕
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりやや 10YR8/4 浅黄橙色シルトブロック
3cm前後を微量含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりやや 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック
3～15cmを多量に含む 掘り方埋土
5 10YR3/4 暗褐色腐植層片 粘性弱 締まりやや緩
6 10YR3/1 暗褐色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
5～8cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC536
1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR8/2 灰白色シルトブロック
2～8cmを多量に含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR8/2 灰白色シルトブロック
2～10cm、4～10cm大の亜円礫をいずれも多量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR8/2 灰白色シルトブロック
3cm前後を微量含む 掘り方埋土
4 10YR2/2 にぶい黄橙色粘土質シルト 粘性やや強 締まりや 3～10cm大の亜円礫を
多量に含む 掘り方埋土
5 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや緩 腐食した植物医を多量に含む
掘り方埋土

PPC538・539（1～3層：PPC539・4・5層：PPC538）
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱材残る
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR8/2 灰白色シルトブロック
2～5cmを多量、2～8cm大の亜円礫を微量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック
3～15cmを多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り後の堆積層
5 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや 10YR8/1 灰白色シルトブロック
1～2cmを少量、2～4cm大の亜円礫を微量含む 掘り方埋土

PPC540
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR8/1 灰白色シルト
ブロック2～3cmを少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりや 掘り方埋土
3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR8/2 灰白色シルト
ブロック3～5cmを多量、2～3cm大の亜円礫を微量含む
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
ブロック8～15cmを多量に含む 掘り方埋土
5 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性やや強 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
5～12cmを多量に含む 掘り方埋土
6 10YR7/1 灰白色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック
2～4cmを少量含む 掘り方埋土
7 10YR3/3 暗褐色腐植層片 1cm未満 粘性弱 締まりやや緩 掘り方埋土
8 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
2～3cmを少量含む

PPC542
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR8/1 灰白色シルトブロック
3～5cmを少量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR8/4 浅黄橙色シルトブロック
3～5cmを少量含む 掘り方埋土
4 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
8～12cmを多量に含む 掘り方埋土
5 10YR3/3 暗褐色腐植層片 1cm未満 粘性弱 締まりやや緩 掘り方埋土
6 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
5cm前後を少量含む 掘り方埋土

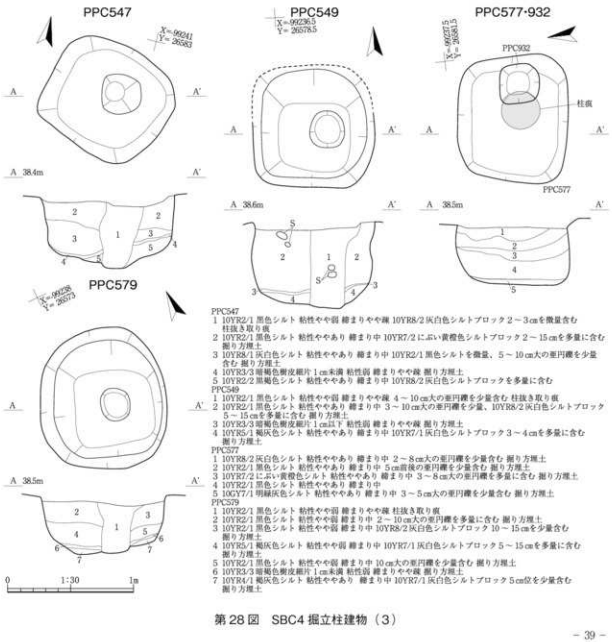
PPC543
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR8/1 灰白色シルトブロック
5～8cm、3～5cm大の亜円礫をいずれも少量含む 掘り方埋土
2 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
10～15cmを多量、3～10cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR3/3 暗褐色腐植層片 1cm以下 粘性弱 締まりやや緩 掘り方埋土
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR7/1 灰白色シルトブロック
3～5cmを多量に含む 掘り方埋土

0　1:30　1m

第27図　SBC4 掘立柱建物（2）

SBC5 掘立柱建物（第 29・30 図、写真図版 19・20）

調査区中央 C2 区の X ＝ -99240、Y ＝26575 付近に位置する。令和３年度調査。SBC4・８と重複しており、SBC4 とは PPC538・539、PPC577・932 との切り合いから本遺構が古い。桁行は西面４間・東面２間、梁行は南面３間・北面２間の変則的な規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは東面が 5.46 m、西面が 5.16 m と１尺分短い。梁行の幅は 5.02 m、面積は 27.41㎡である。柱間寸法は、桁行は東面が 9.0 尺（2.66 m）と 9.5 尺（2.80 m）、西面が 4.0 尺（1.18 m）や 5.5 尺（1.62 m）、8.0 尺（2.36 m）と一定しない。梁行は南面が 4.0 尺（1.18 m）や 6.0 尺（1.77 m）、7.0 尺（2.07 m）、北面が 8.0 尺（2.36 m）と 9.0 尺（2.66 m）となり、桁行の長さが東西で異なる分、北面が南面に平行しない形となる。主軸方向は、南北方向の N20.42° E である。確認した柱穴は計 10 個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴は西面 PPC474、南面 PPC537 の計２個で、それぞれ 674・675 柱材の２点で樹種は前者はクリ、後者はサクラ属である。このうち、674 柱材は直径 30 ～ 40㎝の原木丸太を四つ割りにした割材を使用している。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関しては間数に拘らずに柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。梁行きも南面３間、北面２間と、中央に棟持ち柱が設置されるわけでなく、軸部と小屋組は必ずしも合っていない造りとなる。



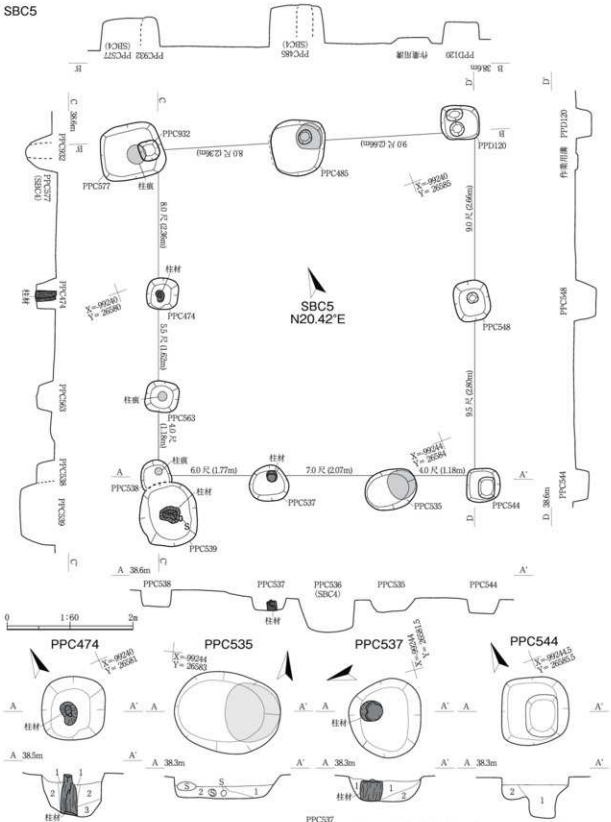
PPC547
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR8/2 灰白色シルトブロック２～３㎝を微量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック２～ 15㎝を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR8/1 灰白色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR2/1 黒色シルトを微量、５～ 10㎝大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
4 10YR3/3 暗褐色腐皮層片 1㎝未満 粘性弱 締まりやや疎 掘り方埋土
5 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR8/2 灰白色シルトブロックを多量に含む

PPC549
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 4 ～ 10㎝大の亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 3 ～ 10㎝大の亜円礫を少量、10YR8/2 灰白色シルトブロック５～ 15㎝を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR3/3 暗褐色腐皮層片 1㎝以下 粘性弱 締まりやや疎 掘り方埋土
4 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR7/1 灰白色シルトブロック３～４㎝を多量に含む 掘り方埋土

PPC577
1 10YR8/2 灰白色シルト 粘性ややあり 締まりや中 2 ～ 8㎝大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 5㎝前後の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト 粘性ややあり 締まりや中 3 ～ 8㎝大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中
5 10GY7/1 明緑灰色シルト 粘性ややあり 締まりや中 3 ～ 5㎝大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC579
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 2 ～ 10㎝大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR8/2 灰白色シルトブロック 10 ～ 15㎝を少量含む 掘り方埋土
4 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/1 灰白色シルトブロック５～ 15㎝を多量に含む 掘り方埋土
5 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10㎝大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
6 10YR3/3 暗褐色腐皮層片 1㎝未満 粘性弱 締まりやや疎 掘り方埋土
7 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR7/1 灰白色シルトブロック５㎝位を少量含む 掘り方埋土

第 28 図　SBC4 掘立柱建物（３）



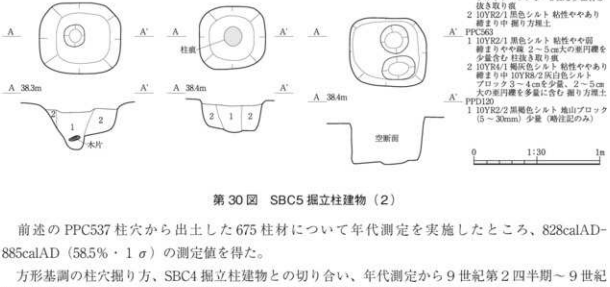
PPC474
1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR5/1 褐灰色砂質シルト 粘性弱 締まり中 2～8㎝大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 2～8㎝大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC535
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 抜き取り痕
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/3 によい黄橙色シルトブロック 1～2㎝を多量、3～10㎝大の亜円礫少量含む 掘り方埋土

PPC537
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/1 褐灰色シルトブロック 2～3㎝を少量含む 掘り方埋土
2 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7 によい黄橙色シルトブロック 1～2㎝を多量に含む 掘り方埋土

PPC544
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR3/1 黒褐色シルトブロック 3～5㎝を少量含む 掘り方埋土

第 29 図　SBC5 掘立柱建物（1）



第 30 図　SBC5 掘立柱建物（2）

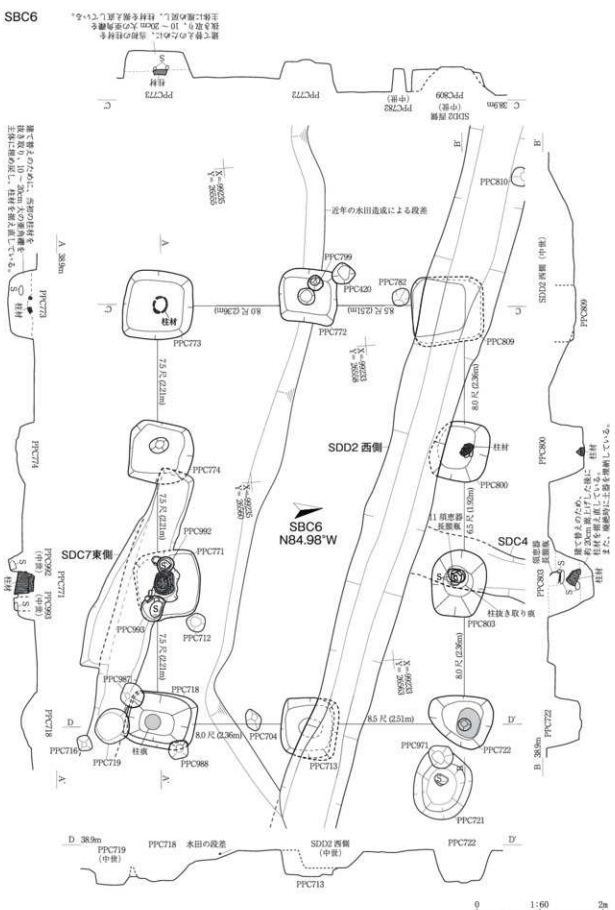
前述の PPC537 柱穴から出土した 675 柱材について年代測定を実施したところ、828calAD-885calAD（58.5％・１σ）の測定値を得た。

方形基調の柱穴掘り方、SBC4 掘立柱建物との切り合い、年代測定から９世紀第２四半期～９世紀第４四半期の年代値を得ていることを勘案すれば、概ね平安時代に属する倉庫的な性格の建物と推定される。（北田）

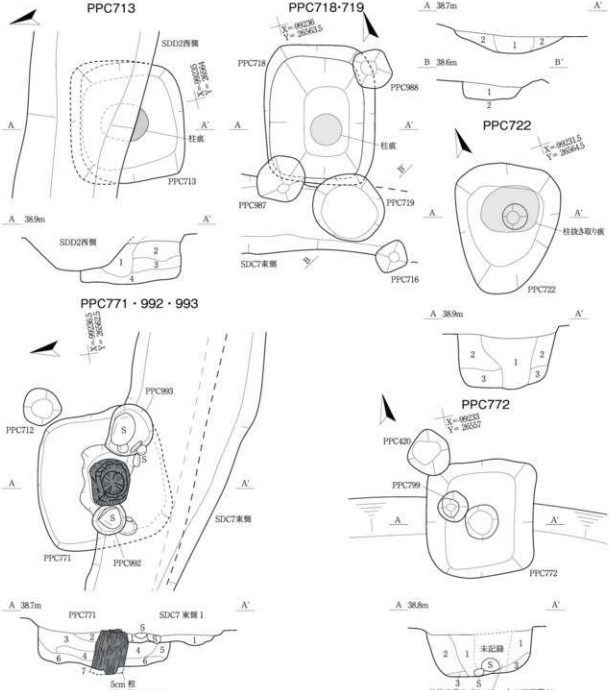
SBC6 掘立柱建物（第 31～33 図、写真図版 21・22）

調査区中央 C1・C2 区の X＝-99235、Y＝26560 付近に位置する。令和３年度調査。桁行３間、梁行２間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 6.64 m、梁行の幅は 4.81 m、面積は 31.94㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が 6.5 尺（1.92 m）と 8.0 尺（2.36 m）、西面がすべて 7.5 尺（2.21 m）で等間隔になる。梁行は 8.0 尺（2.36 m）と 8.5 尺（2.51 m）で、後者は端数になるが全体に 8.0 尺に揃えることを意識している。主軸方向は、東西方向の N84.98° W である。確認した柱穴は計 10 個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴は南面の PPC771・773、北面の PPC800・803 の計４個である。このうち、PPC773 から出土した 677 柱材は遺存状態が悪く観察表のみ掲載、PPC803 柱材は不掲載のため、PPC771 から出土した 676 柱材、PPC800 から出土した 678 柱材のみ掲載した。２点とも樹種はクリで、丸太材をそのまま利用している。特に 676 柱材は、原木丸太材を河川や陸を運搬した際に掛けた縄がずれて解けないように固定した筏穴（目途穴）が穿たれている。また、PPC773・803 で確認した柱材は底面から 20～30㎝高い位置で確認された。いずれも柱根の下には 10～20㎝大の礫を主体に埋め戻された様子が確認され、これと同じ状況が PPC772 にも認められたことから、同一柱穴を使った建て替えが行われたと考えられる。また、PPC803 では建て替えた建物が廃絶後、抜き取った柱痕跡を礫で埋めて蓋をし、11 須恵器長頸瓶を埋納した痕跡が認められた。この行為は SBE1 や SBE8 掘立柱建物でも確認されていることから、地鎮を目的とする儀式で土器を埋納した鎮め物の痕跡と考えられる。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。棟持ち柱の PPC713 と PPC772 は桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性の高い建物と考えられる。

前述の PPC771 から出土した 676 柱材について年代測定を実施したところ、786calAD-833calAD（49.6％・１σ）の測定値を得た。最外年輪部分の採取であることから、より伐採年代に近い値とみ



第 31 図　SBC6 掘立柱建物（1）



PPC713
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック 2～3cmを多量、3～5cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 3～5cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
4 10Y3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 7.5Y8/2 灰白色シルトブロック 10～15cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC718
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR4/1 褐灰色シルト 地山ブロック 4～8cm、4～8cm大の亜円礫を少量含む

PPC719
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 上部に5～10cm大の亜角礫散在。SDC7 埋土分か。
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 5～10cm大の亜角礫を多量に含む 地山

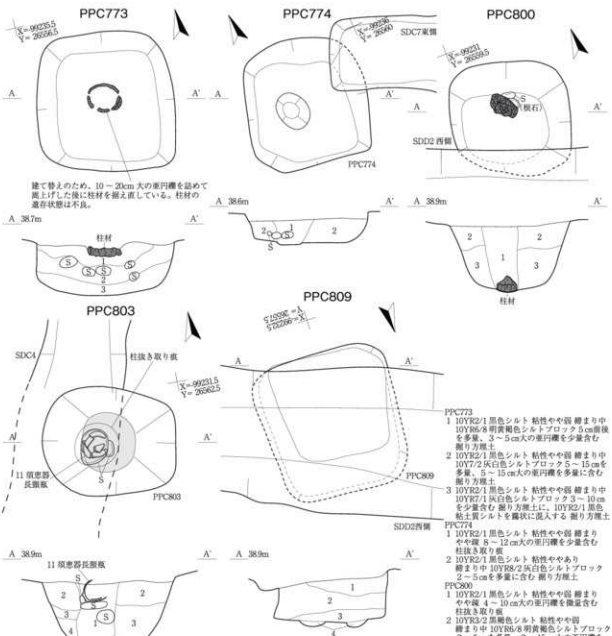
PPC722
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック 3～4cmを多量、5～8cm大の亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロック 1～10cmを多量に含む 掘り方埋土
3 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック 5～8cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC771・SDC7 東側 1（1 層・SDC7 東側 1・2～6 層：PPC771）
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 5～20cm大の亜角礫を多く含む。SDC7 埋土。埋め戻しか。
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 掘り方埋土 1 層とほぼ同じ
3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に、10YR2/1 黒色粘土質シルトを微状に混入する 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトを微状に混入する 掘り方埋土
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 掘り方埋土
6 10YR1/7 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～一部まりやや緩を主体に、10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトを混入する 掘り方埋土
7 10Y5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPC772
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/2 灰白色シルトブロック 2～10cmを少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 3～8cmを多量、3～5cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック 3～4cmを多量に含む

0　1:30　1m

第 32 図　SBC6 掘立柱建物（2）



PPC773
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック5cm前後を多量、3～5cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10Y7/2 灰白色シルトブロック5～15cmを多量、5～15cm大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10Y7/1 灰白色シルトブロック3～10cmを少量含む 掘り方埋土に、10YR2/1 黒色粘土質シルトを層状に混入する 掘り方埋土

PPC774
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 8～12cm大の亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/2 灰白色シルトブロック2～5cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC800
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 4～10cm大の亜円礫を微量含む 柱抜き取り痕
2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック3～5cmを多量、3～15cm大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR8/1 灰白色シルトブロック4～10cmを多量、3～10cm大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土

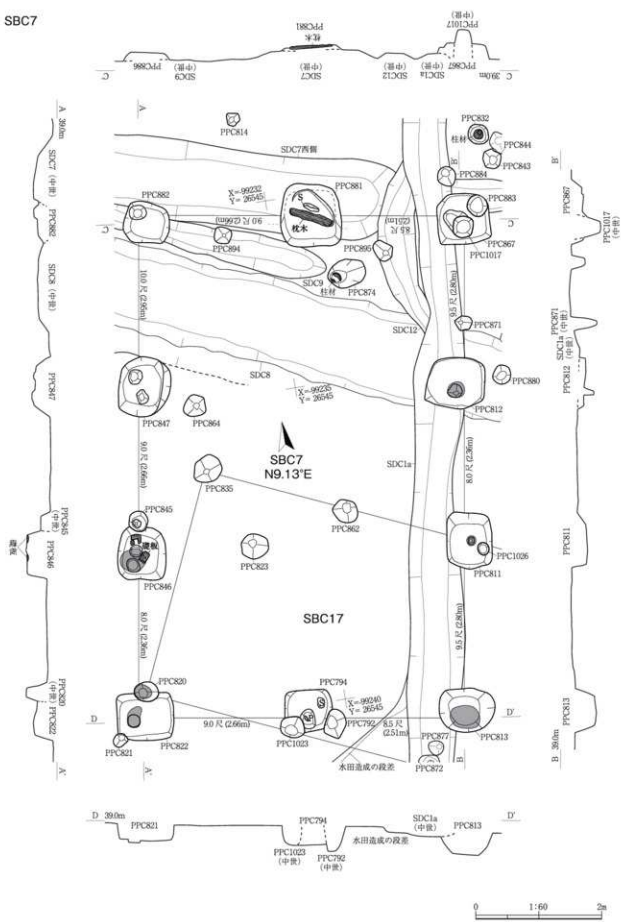
PPC803
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 15～20cm大の亜円礫を少量含む 扁平礫直上に須恵器長頸瓶片を意図的に置いた可能性あり。柱抜き取り後に何らかの儀式を行った痕。柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック3～5cmを多量、5cm前後の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック3cm前後を多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 3～5cm大の亜円礫を少量含む

PPC809
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック3cm前後を多量に含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/1 灰白色シルトブロック3～10cmを少量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/2 灰白色シルトブロック3～5cmを多量に含む 掘り方埋土
4 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR7/1 灰白色シルトブロック3～8cmを多量に含む 掘り方埋土

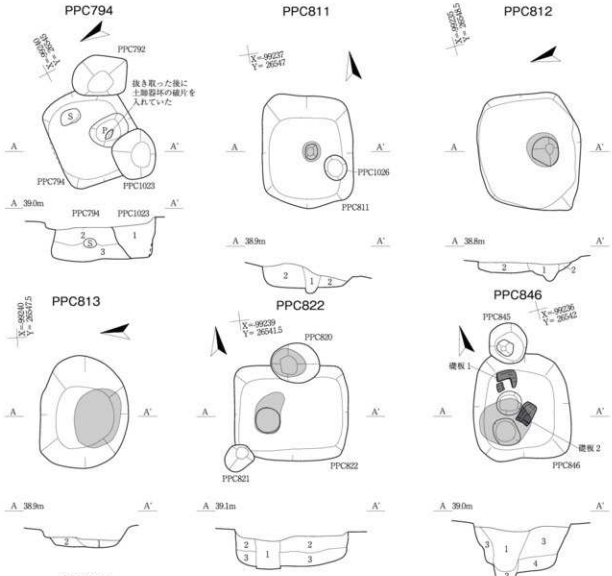
PPC721・971（1 層：PPC721・2 層：PPC971）
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 PPC721 埋土
2 10YR3/2 黒茶色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～3cm大の亜円礫を少量散在 PPC971 埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 5～10cm大の亜角礫を多く含む 地山

第 33 図　SBC6 掘立柱建物（3）

SBC7



第 34 図　SBC7 掘立柱建物（1）



PPC794
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/8 黄褐色シルトブロック4～10cm大を微量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR4/6 褐色シルトブロック2～5cmを多量に含む 掘り方埋土
3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR5/8 黄褐色シルトブロック3～6cmを多量、3～12cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC811
1 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 掘り方埋土

PPC812
1 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR8/2 灰白色シルトブロック3cm前後を少量、3cm前後の亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR8/2 灰白色シルトブロック3～10cmを多量に含む 掘り方埋土

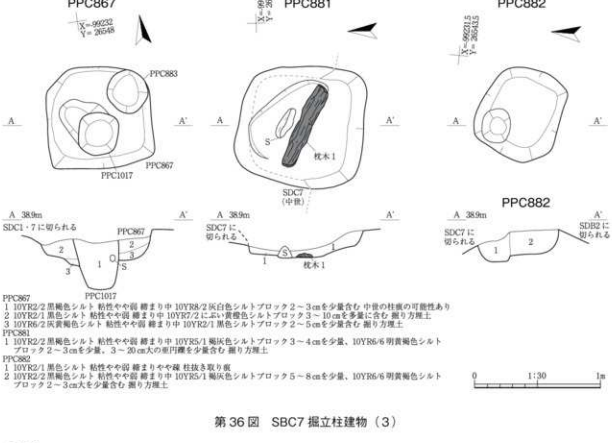
PPC813
1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR8/2 灰白色シルトブロック3cm前後大を少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック2～4cmを少量、2～5cm大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土

PPC822
1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック2cm前後を多量に含む 掘り方埋土
3 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック3～8cmを多量、3～5cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC846
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック5～20cmを多量に含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有 締まりや中
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR6/6～7/6 明黄褐色シルトブロック3～5cmを多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3～5cmを少量含む 掘り方埋土

PPC847
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック2～8cmを多量、2～3cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

第35図　SBC7 掘立柱建物（2）



第36図　SBC7 掘立柱建物（3）

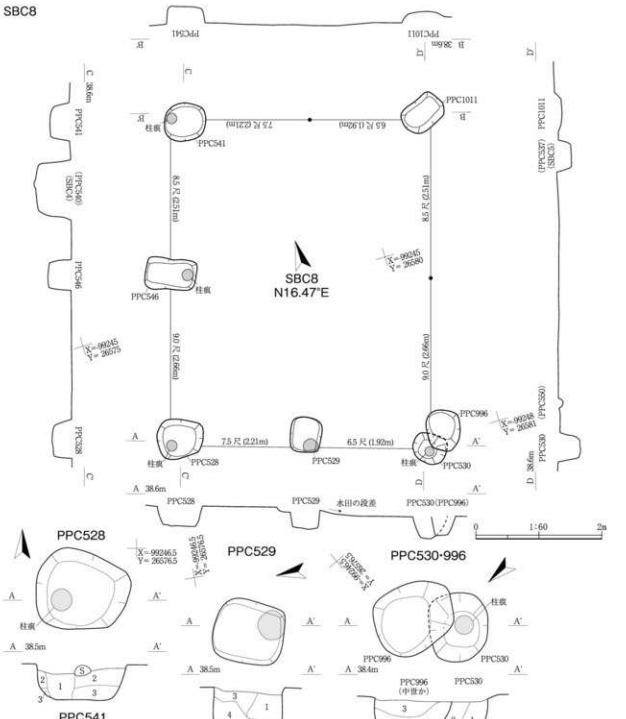
られる。

方形基調の柱穴掘り方、同形の建物を複数確認していること、PPC803に埋納された11須恵器長頸瓶の年代、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第2四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

SBC7 掘立柱建物（第34～36図、写真図版23・24）

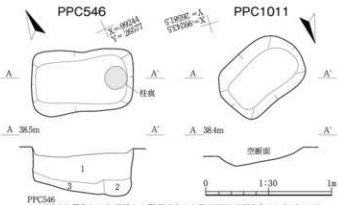
調査区中央西側C1区のX＝-99235、Y＝26545付近に位置する。令和3年度調査。桁行3間、梁行2間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは7.96 m、梁行の幅は5.20 m、面積は41.39㎡である。柱間寸法は、桁行は東面が8.0尺（2.36 m）と9.5尺（2.80 m）、西面が8.0尺（2.36 m）、9.0尺（2.66 m）、10.0尺（2.95 m）で一定しない。梁行は南北ともに8.5尺（2.51 m）と9.0尺（2.66 m）で、前者は端数になるが全体に9.0尺に揃えることを意識している。主軸方向は、南北方向のN9.13°Eである。確認した柱穴は計10個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はないが、PPC846・881底面に礎板・枕木が設置されており、PPC881は根石を入れて柱を垂直に設置したと見られる。PPC846から出土した679～681礎板と、PPC881から出土した682枕木の樹種は、いずれもトネリコ属シオジ節で、建物の端材を利用したと考えられる。また、底面に柱痕跡が2箇所ある柱穴が認められることから、同一柱穴を使った建て替えが行われたと考えられる。PPC794の柱抜き取り痕から、土師器坏の破片が出土している（不掲載）。SBC6掘立柱建物などの柱痕跡からも確認されており、地鎮を目的とする儀式で土器を埋納した鎮め物の痕跡と考えられる。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。棟持ち柱のPPC794とPPC881は桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性

SBC8



PPC528
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや緩 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 2 cm前後を微量含む 柱抜き取り痕
2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック 2 ～ 3 cmを多量、2 ～ 10 cm大の
亜円礫を微量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック 2 ～ 3 cmと亜円礫を微量含む 掘り方埋土
PPC529
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/1 褐灰色シルトブロック 2 ～ 3 cmを微量含む 柱抜き取り痕
3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 1 ～ 3 cmを多量含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 2 ～ 3 cmを微量含む 掘り方埋土
PPC530・996（1・2層：PPC530・3・4層：PPC996）
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック 2 ～ 4 cmを少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック 3 ～ 10 cmを多量、3 ～ 8 cm大の亜円礫を少量
含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック 3 ～ 5 cmを少量含む 掘り方埋土
PPC541
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 3 ～ 10 cm大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土

第 37 図　SBC8 掘立柱建物（1）



第38図　SBC8 掘立柱建物（2）

の高い建物と考えられる。

前述のPPC846から出土した679礎板について年代測定を実施したところ、788calAD-826calAD（38.1％・1σ）の測定値を得た。最外年輪部分の採取であることから、伐採年代に近い値とみられる。

方形基調の柱穴掘り方、同形の建物を複数確認していること、PPC794に埋納された土師器坏の年代（不掲載）、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第2四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。

（北田）

SBC8 掘立柱建物（第37・38図、写真図版19・20）

調査区中央西側C2区のX＝-99245、Y＝26580付近に位置する。令和3年度調査。SBC4・5掘立柱建物と重複しているが、柱穴の切り合いがなく、明確な新旧は不明である。桁行は西面2間、東面1間、梁行は南面2間、北面1間の変則的な規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは東面5.22m、西面5.17m、梁行の幅は4.07m、面積は21.25㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が8.5尺（2.51m）と9.0尺（2.66m）、東面は中央付近に床立ちの柱があると仮定すれば、8.5尺（2.51m）、9.0尺（2.66m）と一定しない。梁行は南北ともに6.5尺（1.92m）と7.5尺（2.21m）である。主軸方向は、南北方向のN16.47°Eである。確認した柱穴は計6個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はないが、柱痕跡の明瞭な柱穴が多い。ただし、PPC546は柱痕跡が想定する建物より内側に入ることから、桁行の西面を中心に建て替えが行われた可能性がある。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。東面と北面は、柱間の距離から中間に入る柱が存在すると見られるが確認できなかった。

方形基調の柱穴掘り方、同形・同規模の建物を複数確認していることから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。

（北田）

SBD1 掘立柱建物（第39図、写真図版25・26）

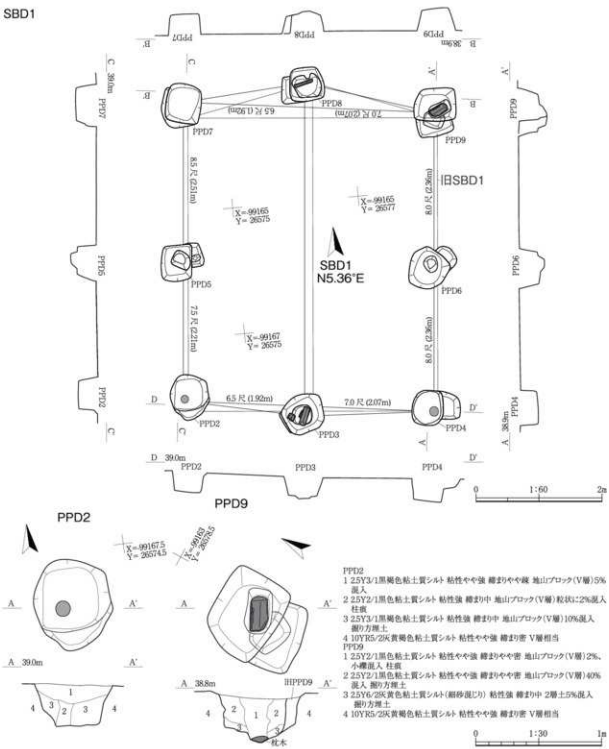
調査区北東側D1区のX＝-99165、Y＝26575付近に位置する。令和2年度調査。桁行2間、梁行2間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さ4.72m、梁行の幅3.99m、面積は18.83㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が7.5尺（2.21m）と8.5尺（2.51m）、東面は8.0尺（2.36m）に整えられている。梁行は南北ともに6.5尺（1.92m）と7.0尺（2.07m）で、桁行と平行する位置に棟が通るように揃えている。主軸方向は、南北方向のN5.36°Eである。確認した柱穴は計8個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はないが、PPD3・8・9底面には枕木が設置されていた。柱痕跡の明瞭な柱穴が多い一方、各柱穴は重複しており、方形掘り方が重なっている様子が認められた。このことから、旧SBD1から西側に10～20cmずらして新SBD1への建て替えが行われたと考えられる。また、棟持柱の位置にあるPPD3・8は、それぞれPPD3が0.5尺（0.15m）、PPD8が1.0尺（0.295m）外側へ張り出す形となることから、棟持柱が張り出す小屋組が想定される。柱の配置から

は柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。

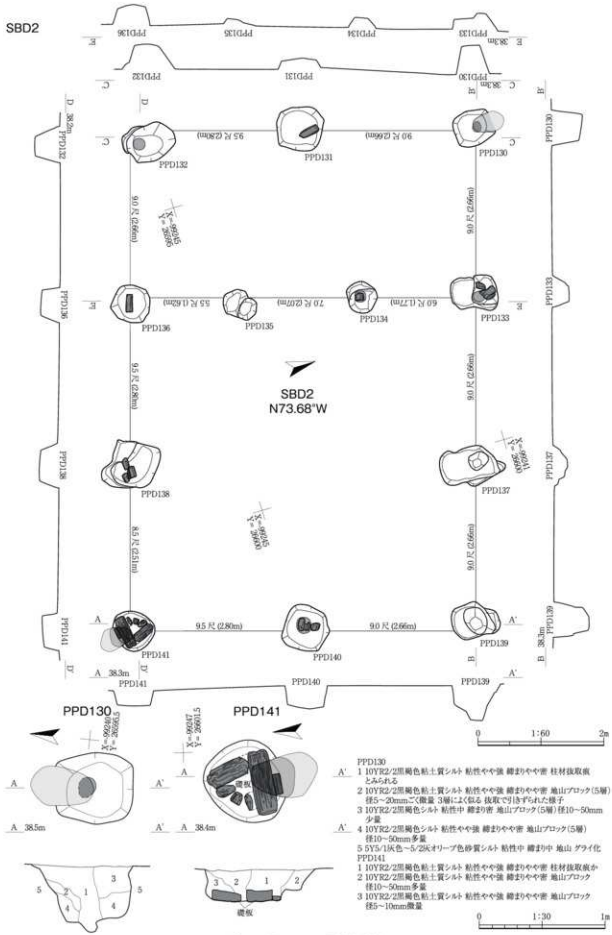
方形基調の柱穴掘り方、同規模の建物を複数確認していることから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBD2 掘立柱建物（第40図、写真図版25・27・28）

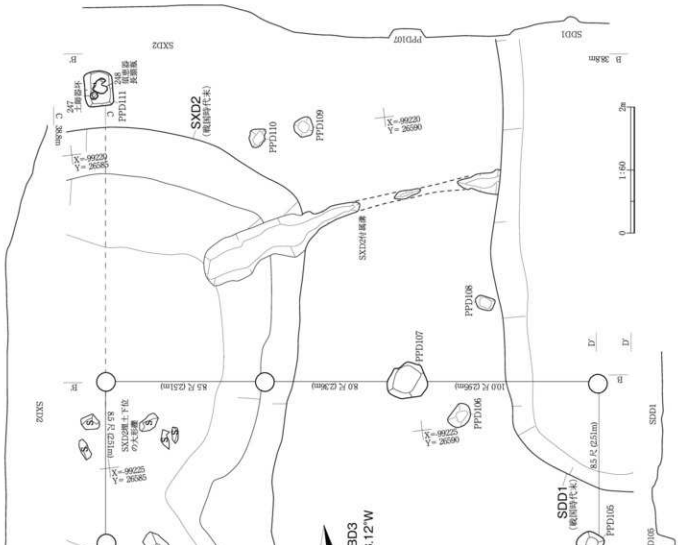
調査区中央東側D5・6区のX＝-99245、Y＝26600付近に位置する。令和2年度調査。桁行3間、



第39図　SBD1 掘立柱建物



第 40 図　SBD2 掘立柱建物



第 41 図　SBD3 掘立柱建物

梁行２間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 7.98 m、梁行の幅は 5.46 m、面積は 43.57 ㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が 8.5 尺（2.51 m）と 9.0 尺（2.80 m）、9.5 尺（2.80 m）、北面が 9.0 尺（2.66 m）に整えられている。梁行は南北ともに 9.0 尺（2.66 m）と 9.5 尺（2.80 m）で、桁行と平行する位置に棟木が通るよう揃えられている。主軸方向は、東西方向の N73.68° W である。確認した柱穴は計 12 個で、概ね方形基調の平面形である。南西隅の PPD132 がやや内側へずれているが、上部の梁部分では合っていたと見られる。柱根が残存する柱穴はないが、PPD131・133・134・136・138・140・141 底面に礎板・枕木が設置されていた。樹種は、PPD131 は 687 枕木（クリ）、PPD133 は 688 枕木（クリ）、689・690 枕木（未同定）、PPD134 は 691 枕木（クリ）、PPD136 は 692 枕木（クリ）、PPD138 は 693 枕木（クリ）、694・695 枕木（未同定）、PPD140 は不掲載、PPD141 は 696 礎板（トネリコ属）、697 礎板（クリ）、698 礎板（未同定・クリか）、699 枕木（トネリコ属）、700～702 枕木（未同定・トネリコ属か）である。特に南東隅の PPD141 は底面全体に礎板・枕木が設置されており、柱の沈み込み対策を入念に施している。また、西側１間分に間仕切りが設けられていて、PPD134 と 135 によって区切られている。この２個は側柱の柱穴よりも掘り込みが浅く、やや細い柱が用いられたと見られる。また、廃絶時の柱抜き取り痕が北西隅の PPD130 と南東隅の PPD141 に明瞭に認められている。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われ、棟持ち柱の PPD131 と PPD140 は桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性の高い建物と考えられる。

PPD133 埋土から、須恵器坏の口縁部～体部上半の破片１点が出土し掲載した。外面には「十万」の墨書が入れられている。出土状況が不明であるが、廃絶後に鎮め物として埋納された可能性がある。また、PPD140 埋土下位から 571 曲物の桶底板か（樹種はエノキ属）が出土している。

前述の PPD136 から出土した 692 枕木について年代測定を実施したところ、785calAD-833calAD（43.4%・１σ）の測定値を得た。最外年輪部分の採取であることから、伐採年代に近い値とみられる。

方形基調の柱穴掘り方、間仕切りのある SBE9 など同形の建物を確認していること、PPD136 に埋納された須恵器坏の年代（９世紀第３四半期か）、年代測定から８世紀第４四半期～９世紀第３四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

SBD3 掘立柱建物（第 41 図、写真図版 29）

調査区中央北東側 D4・5 区の X＝-99225、Y＝26590 付近に位置する。令和２年度調査。遺構北半を戦国時代末の SDD1 堀と SXD2 池状遺構に切られており、北面は PPD107 のみ確認し、これから桁行３間、梁行２間の規模を持つ東西棟の側柱建物を想定した。桁行の長さは 7.82 m、梁行の幅は 5.02 m、面積は 39.26 ㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が 8.5 尺（2.51 m）と 9.5 尺（2.80 m）、北面が 8.0 尺（2.36 m）、8.5 尺（2.51 m）、10.0 尺（2.95 m）と推定した。梁行は PPD104・105 の柱間から、東西ともに 8.5 尺（2.51 m）に整えられているとみた。桁行と平行する位置に棟木が通るよう揃えられている。主軸方向は、東西方向の N83.12° W である。確認した柱穴は計６個で、概ね方形基調の平面形である。南面の PPD101～104 は腐植が著しいが何とか柱根が残存しており、PPD101 は 704 柱材（樹種はクリ）、PPD103 は 705 柱材（未同定）、PPD104 は 707 柱材（未同定）で、PPD102 は不掲載である。また、PPD103 からは建て替え前の枕木と見られる 706 端材が出土している。この他に礎板・枕木は出土しておらず、いずれの柱根も底面に５cmほど沈み込んで見つかった。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われ、南面は PPD102 の柱がやや内側に入るが概ね直線的に並び、規格性の高い建物と考えられる。

また、西面の北延長線上に PPD111 を確認した。柱穴は方形の掘り方を呈しており。掘り込みの深

さも他の柱穴と同じくらいである。これを隅柱とする南北棟の建物も想定できるが、北側からは並ぶ柱穴は確認されておらず、明確な建物を構成することが出来ない。ただし、この柱穴の柱根跡に247土師器坏と248須恵器長頸瓶が埋納されていた。このことから、本遺構を含む建物が廃絶した後に何らかの儀式に際して、地鎮のための鎮め物として埋納されたと考えられる。

前述のPPD101から出土した704柱材について年代測定を実施したところ、789calAD-824calAD（30.2%・1 σ）の測定値を得た（703calAD-740calAD（38.0%・1 σ）は出土遺物の年代観を勘案して採用せず）。最外年輪部分の採取であることから、伐採年代に近い値とみられる。

方形基調の柱穴掘り方、同形・同規模の建物を確認していること、PPD111に埋納された土師器坏、須恵器長頸瓶の年代（9世紀第2四半期か）、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

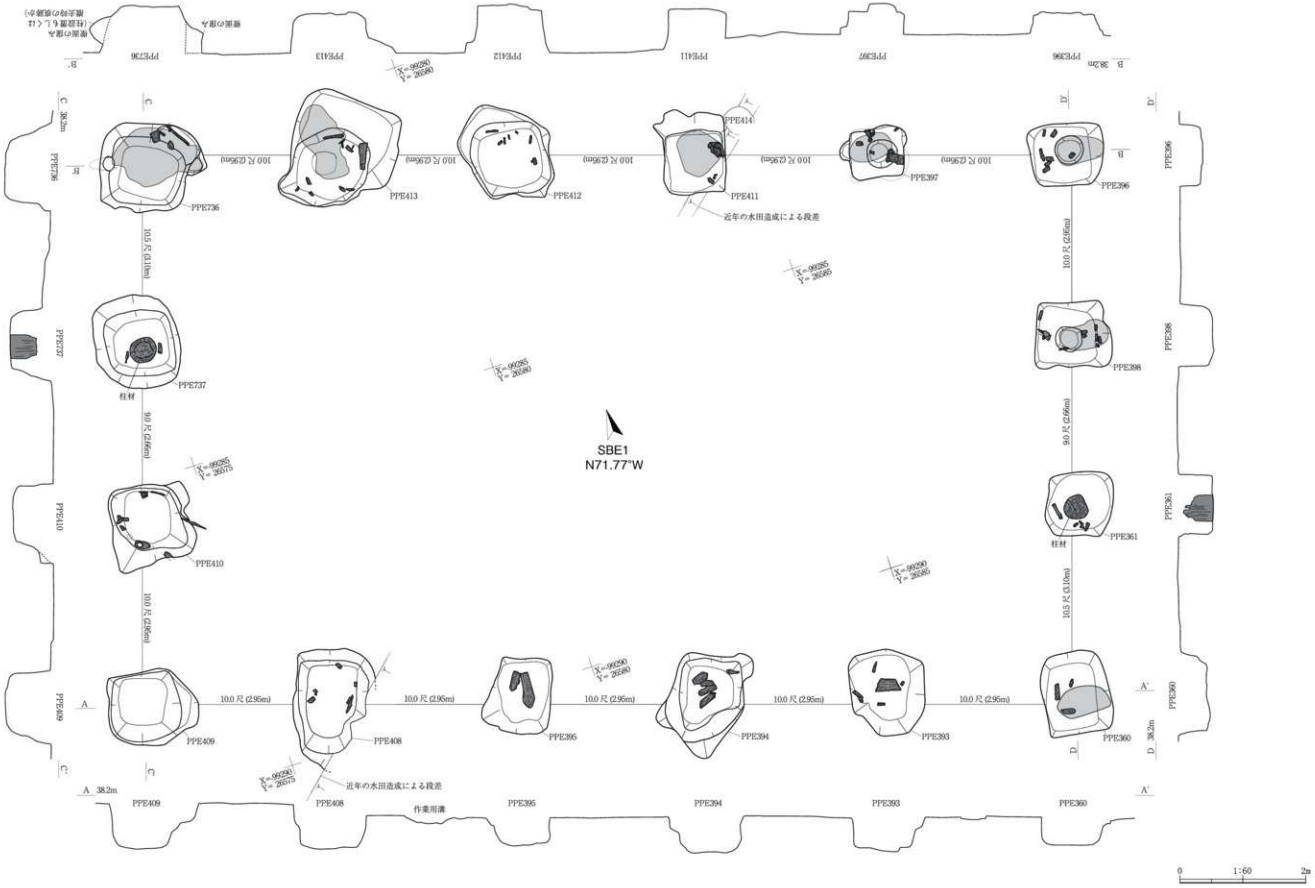
SBE1 掘立柱建物（第42～45図、写真図版30～33）

調査区中央南側E1～3区のX＝-99285、Y＝26580付近に位置する。令和3年度調査。桁行5間、梁行3間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは14.75 m、梁行の幅は8.71 m、面積は127.95㎡である。柱間寸法は、桁行は南北面がいずれも10.0尺（2.95 m）に整えられている。梁行は東西面ともに9.0尺（2.66 m）と10.0尺（2.95 m）、10.5尺（3.10 m）である。梁行が3間であることから、柱は梁までとなり、小屋組は梁から棟束を上げて棟木を通していたと考えられる。主軸方向は、東西方向のN71.77° Wである。確認した柱穴は計16個で、すべて方形基調の平面形である。東面PPE361と西面PPE737に柱根が残存しており、PPE361は708柱材、PPE737は725柱材で、いずれも樹種はクリが用いられていた。どちらも直径40cm前後の柱根で丸太材をそのまま利用しており、原木丸太材を河川や陸を運搬した際に掛けた縄がずれて解けないように固定した筏穴（目途穴）が穿たれている。礎板・枕木は、南面PPE393～395底面に設置されていた。樹種は、PPE393は709礎板、PPE394は710礎板1、PPE394は710礎板1・711礎板2・712礎板3・713礎板4、PPE395は714礎板1・715礎板2があり、いずれもクリを使用している。また、各柱穴埋土からは端材と見られる木材片が出土している。PPE397は716～719（樹種未同定）、PPE411は720・721（未同定）、PPE413は722・723（エノキ属）、PPE736は724（クリ）、PPE737は726（クリ）で、大半は建築時、木材を除去加工した際に出た不要な端材片と考えられる。中には、714礎板のように枘穴が穿たれている例や722のように元々建築部材として利用されていた木材を半割したもの、前述した709～715礎板も建築部材の加工痕を残す木材の一部を転用したと考えられ、建物を取り壊した際に出た廃材も余すところなく利用している。また、PPE393底面の709礎板は正面下半が炭化しており、PPE413埋土出土の723端材も正裏面が大きく炭化したと考えられ、焼失した建物の部材の一部、もしくは廃材を処分するために燃やした可能性も考えられる。北西隅のPPE736柱抜き取り痕埋土からは、「十万」が墨書された25須恵器坏が出土しており、廃絶時に鎮め物として人為的に埋納された痕跡と考えられる。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われ、柱間についても10.0尺（2.95 m）を強く意識していること、大型建物を正確に設計しており、非常に規格性の高い建物と考えられる。

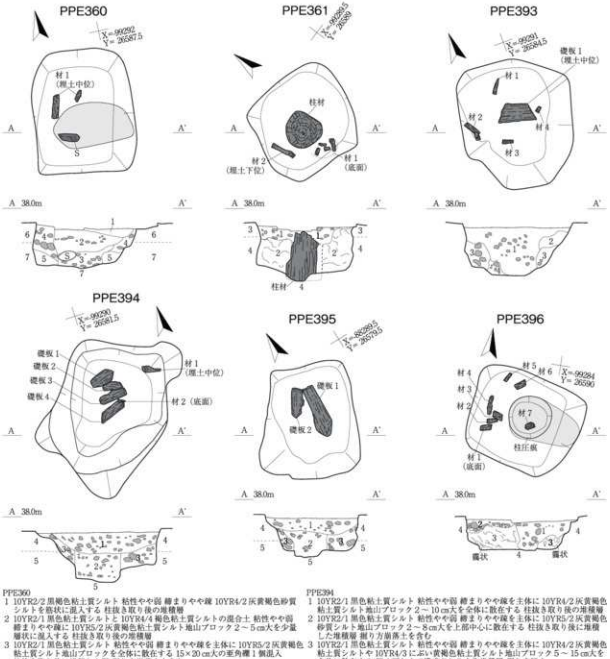
前述のPPE361・737から出土した708・725柱材について年代測定を実施したところ、PPE361出土の708柱材は821calAD-882calAD（59.3%・1 σ）、PPE737出土の725柱材は828calAD-887calAD（57.3%・1 σ）の測定値を得た。最外年輪部分の採取であることから、伐採年代に近い値とみられる。

方形基調の柱穴掘り方、規格性の高い大型建物であること、PPE736に埋納された須恵器坏の年代

SBE1



第 42 図　SBE1 掘立柱建物（1）



PPE360
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトを散状に混入する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルトと10YR4/4褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎に10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック2～5㎝大を少量雑状に混入する 柱抜き取り後の埋積層
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト地山ブロックを全体に散在する 15×20㎝大の亜角礫1 側面入 柱抜き取り後に埋積した層 掘り方崩落土も含む
4 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック5～10㎝大を全体に散在する 埋め戻し土で構成される 人為埋積層 掘り方埋土
5 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 10YR2/1黒色粘土質シルトを雲状に少量混入する 掘り方埋土
6 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に2～5㎝大の亜角礫を埋積する 薄い礫層を埋積する 地山
7 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE361
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～5㎝大を全体に散在する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト主体に10YR2/1黒色粘土質シルトを雲状に全体に混入する 埋め戻し土で構成される人為埋積層 掘り方埋土
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に2～5㎝大の亜角礫を埋積する 薄い礫層を埋積する 地山
4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE393
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性なし 締まりあり 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック径1～3㎝を10%含む 抜き取り痕
2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 粘性なし 締まりあり
3 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりあり 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック径2～10㎝を40%含む
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性なし 締まりあり 10YR3/3暗褐色粘土質シルトブロック径10㎝を40%含む

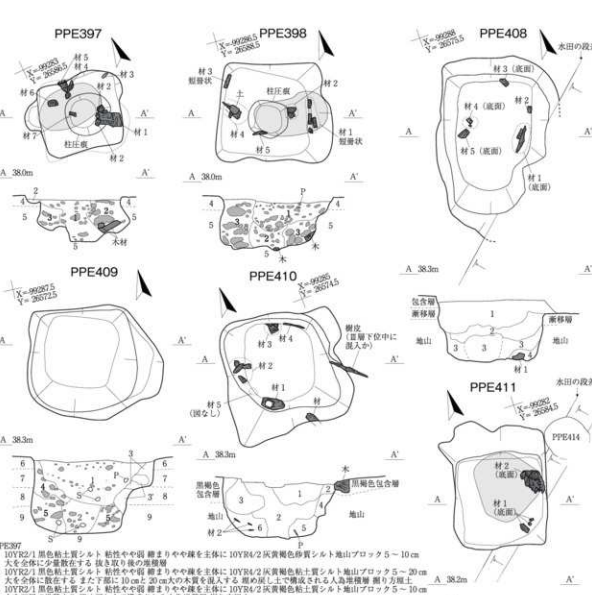
PPE394
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック2～10㎝大を全体に散在する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～8㎝大を上部中心に散在する 柱抜き取り後に埋積した埋積層 掘り方崩落土を含む
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト地山ブロック5～15㎝大を全体に散在する 埋め戻し土で構成される人為埋積層 掘り方埋土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に2～5㎝大の亜角礫を埋積する 薄い礫層を埋積する 地山
5 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE395
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト地山ブロック2～5㎝大を上部中心に散在する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～5㎝大を上部中心に散在する 柱抜き取り後の埋積層 掘り方崩落土も含む
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック5～10㎝大を全体に散在する 埋め戻し土で構成される 人為埋積層 掘り方埋土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に2～5㎝大の亜角礫を埋積する 薄い礫層を埋積する 地山
5 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE396
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック1～5㎝大を全体に散在する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中～やや密を主体に間則に10YR2/1黒色粘土質シルトを混入する 埋め戻し土で構成される人為埋積層 掘り方埋土
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中を主体に10YR2/1黒色粘土質シルトを雲状に混入する 埋め戻し土で構成される人為埋積層 掘り方埋土
4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

0　1:40　1m

第43図　SBE1 掘立柱建物（2）



PPE397
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 5～10 cm 大を全体に少量散在する 抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～20 cm 大を全体に散在する また下部に 10 cm と 20 cm 大の木質を混入する 廃棄孔上で構成される人為堆積層 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10 cm 大を顕著で地層する 踏み固し土で構成される人為堆積層 掘り方埋土
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に 2～5 cm 大の亜角礫を混入する 薄い礫層を混入する 地山
5 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

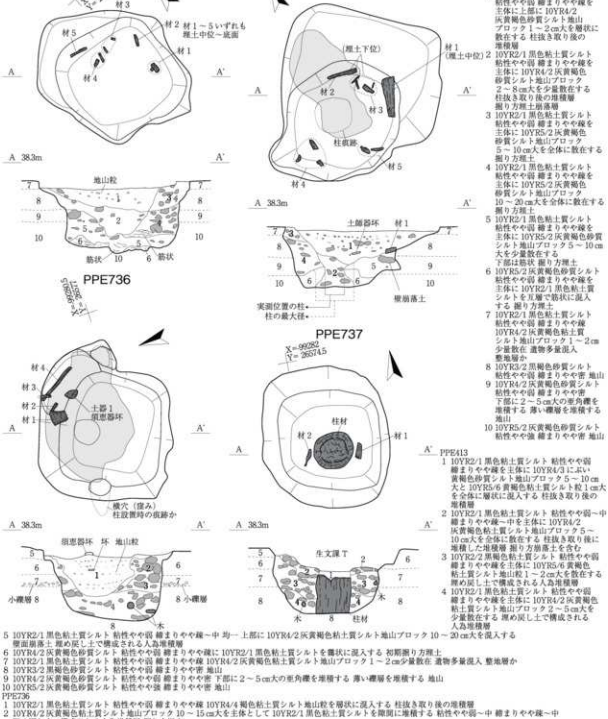
PPE398
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック上部は 2～3 cm、下部は 5～10 cm 大を散在する 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～5 cm を全体に散在する 柱抜き取り後の堆積層 掘り方埋土崩落層
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 10～20 cm 大を全体に散在する
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に 2～5 cm 大の亜角礫を混入する 薄い礫層を混入する 地山
5 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE408
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりあり 25YR7/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 径 05～2 mm を 3％、褐鉄 0.5～1 cm が 7％ 抜き取りの際の堆積土
3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性あり 締まり弱 2.5Y0/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 径 0.5～3 cm 10％、中央は興個3' に比べてやや締まりが弱い 抜き取り後の
4 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 2.5YR7/2 灰黄褐色砂質シルト長さ 10 cm の板状ブロック 埋め戻し土

PPE409
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5 cm 大や 10YR4/4 褐色粘土質シルト地山粒を層状に混入する 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10 cm 大を散在する 廃棄孔上で構成される人為堆積層 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に柱抜き取り時に壁崩落？ 層が崩壊した堆積層
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10 cm 大や 10YR4/4 褐色粘土質シルト地山粒 1 cm を全体に散在する 廃棄孔上で構成される人為堆積層 掘り方埋土
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩～中を主体に 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～15 cm 大を上部中心に散在する 4 層と同じ
6 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 1～2 cm 少量散在 遺物多量混入 整地層か
7 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 下部に 2～5 cm 大の亜角礫を混入する 薄い礫層を混入する 地山
9 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE410
1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりあり 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質シルトブロック 径 1～5 cm 10％、褐鉄小 0.1～2 cm 7％ 抜き取り痕
2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり弱 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質シルトブロック 径 0.5～3 cm 3％ 抜き取り痕
3 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性弱 締まりあり 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質シルト 径 0.5～10 cm 5％ 上部ブロック周辺に褐鉄（酸化している）に小石（5 cm 大）を含む
4 10YR3/4 褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりややあり 全体に褐鉄小
5 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性 0.3 cm 3％
6 10YR7/2 黒色粘土質シルト 粘性あり 締まり弱 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質シルト 径 0.5～2 cm 2％含む
7 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりあり 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質シルトブロック 径 0.5 cm、長さ 15 cm板状 20％ 埋め戻し土（あまり動いていない）

PPE411
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性なし 締まり緩を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロック 径 1～5 cm を 10％含む 抜き取り痕か
2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性なし 締まりなくズブズブ 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 径 1～3 cm を 10％含む
3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性なし 締まりややあり 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 径 1～10 cm を 20～40％含む、褐鉄径 2 cm大 7％
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性なし 締まりややあり 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック 径 1～3 cm大を 10％含む
5 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山



PPE412
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 土を主体に上部に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 1～2cm大を斑状に散在する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 砂質シルト地山ブロック 2～8cm大を少量散在する 柱抜き取り後の埋積層 掘り方埋土崩落層
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 土を主体に 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 5～10cm大を全体に散在する 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 土を主体に 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 10～20cm大を全体に散在する 掘り方埋土
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 土を主体に 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 5～10cm大を少量散在する 下部は筋状 掘り方埋土
6 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 土を主体に 10YR2/1 黒色粘土質シルトを互層で筋状に混入する 掘り方埋土
7 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 1～2cm少量散在 遺物多量混入 整地層か
8 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 地山
9 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 地山 下部に 2～5cm大の亜角礫を堆積する 薄い礫層を堆積する 地山
10 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE736
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/4 褐色粘土質シルト地山粒を斑状に混入する 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 10～15cm大を主体として 10YR2/1 黒色粘土質シルトを離間に堆積する 粘性やや弱～中 締まりやや緩～中 埋め戻し土で構成される人為埋積層 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩を主体として 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10cm大を少量散在する 2層と同じ
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10cm大上部中心に散在する 粘性やや弱 締まりやや緩 2層と同じ
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 1～2cm少量散在 遺物多量混入 整地層か
6 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 下部に 2～5cm大の亜角礫を堆積する 薄い礫層を堆積する 地山
8 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE737
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱～中 締まりやや緩～中を主体に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10cm大を全体に散在する 柱抜き取り後に埋積した埋積層 掘り方崩落土を含む
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト地山粒 1～2cm大を散在する 埋め戻し土で構成される人為埋積層
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 2～5cm大を少量散在する 埋め戻し土で構成される人為埋積層
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩～中 均一 上部に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 10～20cm大を混入する 壁面崩落土 埋め戻し土で構成される人為埋積層
6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR2/1 黒色粘土質シルトを備状に混入する 初期掘り方埋土
7 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 1～2cm少量散在 遺物多量混入 整地層か
8 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 地山
9 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 地山 下部に 2～5cm大の亜角礫を堆積する 薄い礫層を堆積する 地山
10 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや強 締まりやや密 地山

PPE737
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10cm大を散在する 2層と同じ
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10cm大上部中心に散在する 2層と同じ
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト　粘性やや弱 締まりやや緩 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 1～2cm少量散在 遺物多量混入 整地層か
6 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱 締まりやや密 下部に 2～5cm大の亜角礫を堆積する 薄い礫層を堆積する 地山
8 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや強 締まりやや密 地山

0　1:40　1m

第45図　SBE1 掘立柱建物（4）

（9世紀第2四半期か）、年代測定から9世紀第1四半期末～9世紀第4四半期前半の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

SBE2 掘立柱建物（第46～48図、写真図版34～37）

調査区中央南側E2区のX＝-99289、Y＝26600付近に位置する。令和3年度調査。SBE3のPPE381・382と本遺構のPPE372・377が直接切り合っており、本遺構が古い。桁行2間、梁行2間の規模を持つ東西棟の総柱建物で、桁行の長さ3.84 m、梁行の幅3.24 m、面積は12.44㎡である。柱間寸法は、桁行は南北面が6.5尺（1.92 m）、梁行は東西面ともに5.5尺（1.62 m）に整えられており、桁行と平行する位置に棟が通るように揃えている。主軸方向は、東西方向のN70.18° Wである。確認した柱穴は計9個で、円形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴は、PPE375が727柱材、PPE377は728柱材（状態悪く表掲載のみ）の2点で、いずれも樹種はクリである。727柱材は原木丸太を四つ割りにして利用しており、元は別建物の柱として使用していたものを小型建物用に再加工した可能性がある。棟持柱の位置にあるPPE372・374は、中央のPPE373からそれぞれ7.5尺（2.21 m）を取って外側へ張り出す形となることから、棟持柱が張り出す小屋組が想定される。柱の配置からは柱筋・柱間いずれも整った様子が認められ、詳細な設計の元に建築されたものと考えられる。

PPE373の掘り方埋土から、46土師器坏が出土した。回転糸切り無調整で、底部周辺に手持ちヘラケズリが施される。9世紀第2四半期に位置付けられるか。

PPE377から出土した728柱材について年代測定を実施したところ、786calAD-831calAD（49.3%・1 σ）の測定値を得た。2 σでも772calAD-883calAD（80.1%）と高い値を示している。

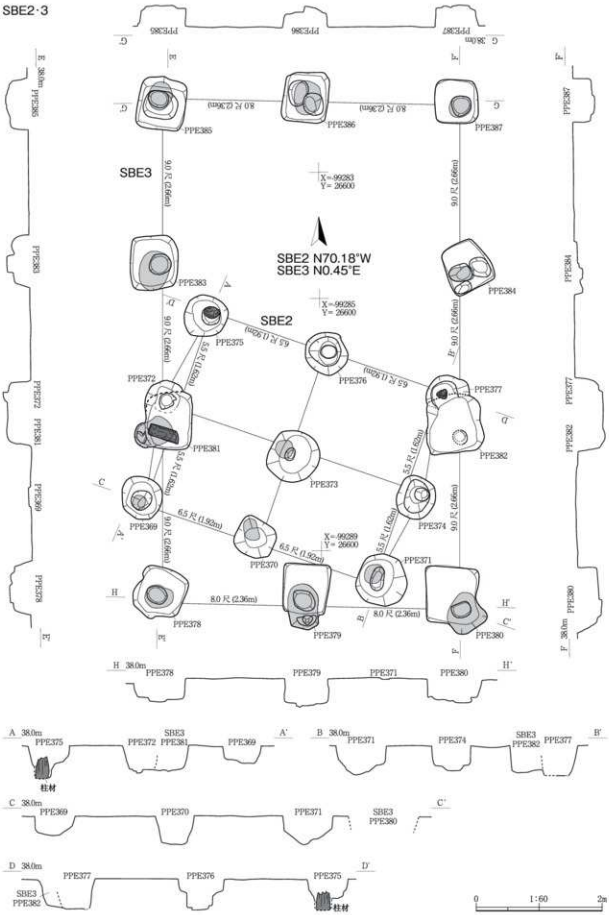
2間×2間の側柱建物であるが、SBD1と同じ平面形を持ち、SBE3との切り合い関係、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第2四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBE3 掘立柱建物（第46・48・49図、写真図版34～37）

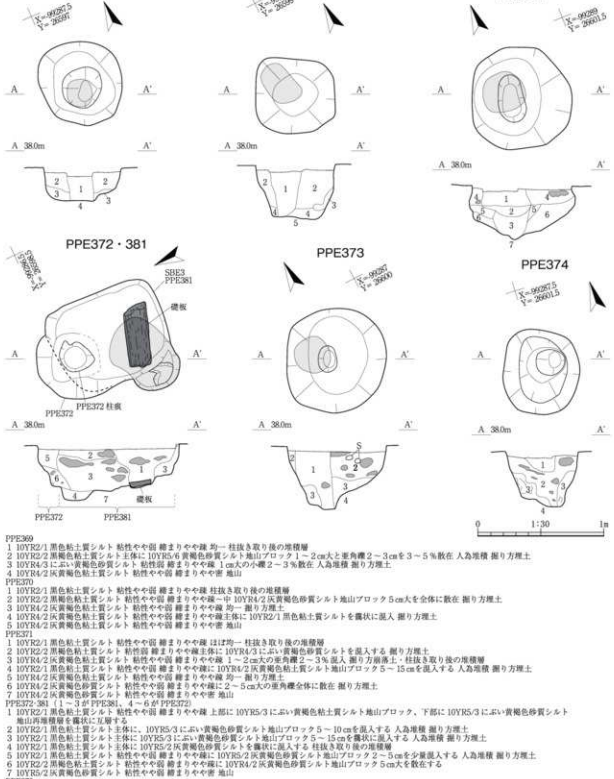
調査区中央南側E2区のX＝-99285、Y＝26600付近に位置する。令和3年度調査。SBE2のPPE372・377と本遺構のPPE381・382が直接切り合っており、本遺構が新しい。桁行3間、梁行2間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは7.98 m、梁行の幅は4.72 m、面積は37.67㎡である。柱間寸法は、桁行は東西面の9.0尺（2.66 m）、梁行は南北面の8.0尺（2.36 m）で整えられている。主軸方向は、南北方向のN0.45° Eである。確認した柱穴は計10個で、すべて方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はないが、PPE381底面に729礎板が設置されている。729礎板は、厚さ8.1㎝に小割した板材で、樹種はクリを利用している。裏面の一部が炭化しており、解体した別建物の廃材を再利用したものと考えられる。確認した柱穴の多くは、柱痕跡や柱抜き取り痕が明瞭なものが多い特徴がある。また、東面のPPE384は、他の柱穴と比べて掘り方が極端に浅く、掘り方の向きがやや傾いている。柱の配置からは、柱筋・柱間いずれも整っており、強い規制が窺われる。棟持ち柱のPPE379とPPE386は桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性の高い建物と考えられる。

PPE383埋土から、47須恵器坏片が出土した。外面に「十万」と見られる墨書が正位に記されている。9世紀第2～3四半期に位置付けられるか。

前述のPPE381から出土した729礎板について年代測定を実施したところ、828calAD-860calAD（24.4%・1 σ）もしくは870calAD-894calAD（22.1%・1 σ）の測定値を得た。



第 46 図　SBE2・3 掘立柱建物（1）



PPE369
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや強 均一 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト主体に 10YR5/6 黄褐色砂質シルト地山ブロック 1～2cm大と亜角礫2～3cmを3～5％散在 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや緩 1cm大の小礫2～3％散在 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE370
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～ゆ 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 5cm大を全体に散在 掘り方埋土
3 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 掘り方埋土
4 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩土体に 10YR2/1 黒色粘土質シルトを攪状に混入 掘り方埋土
5 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

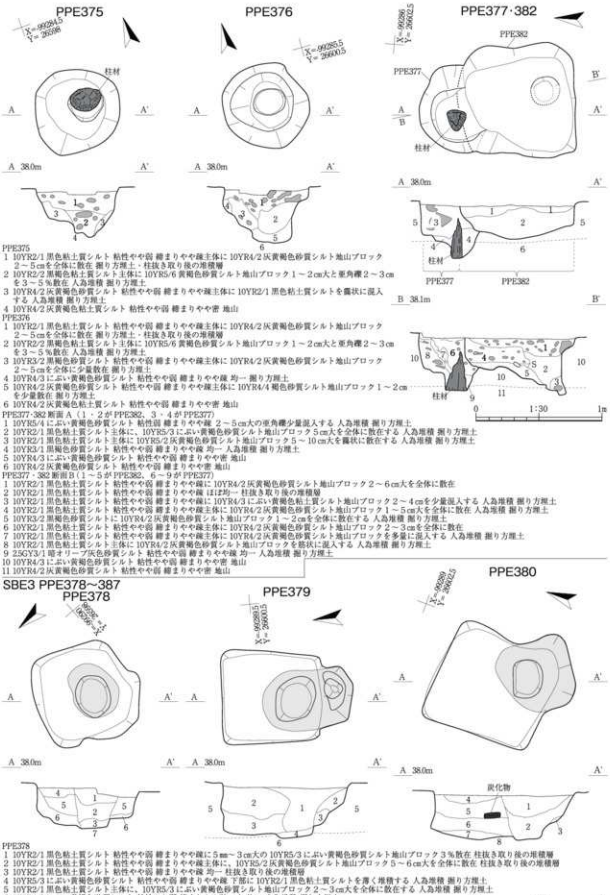
PPE371
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 ほぼ均一 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性弱 締まりやや緩土体に 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトを混入する 掘り方埋土
3 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～2cm大の亜角礫2～3％混入 掘り方崩落土・柱抜き取り後の埋積層
4 10YR4/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック5～15cmを混入する 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 掘り方埋土
6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に2～5cm大の亜角礫全体に散在 掘り方埋土
7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE372・381（1～3がPPE381、4～6がPPE372）
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 上部に10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト地山ブロック、下部に10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト地山亜角礫を攪状に互層する
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に、10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック5～10cmを混入する 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック5～15cmを攪状に混入する 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトを攪状に混入する 柱抜き取り後の埋積層
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～5cmを少量混入する 人為堆積 掘り方埋土
6 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック5cm大を散在する
7 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE373
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～5cm大を全体に散在 均一 柱抜き取り後の埋積層・掘り方崩落土
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～10cm大を全体に散在 柱抜き取り時に崩落した掘り方埋土
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 微化鉄多く認められる 均一 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE374
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～10cm大を全体に散在 柱抜き取り時に崩落した掘り方埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR2/1 黒色粘土質シルトを攪状に混入 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

第 47 図　SBE2・3 掘立柱建物（2）



PPE375
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや強土体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～5cmを全体に散在 掘り方埋土・柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト主体に 10YR5/6黄褐色砂質シルト地山ブロック 1～2cm大と亜角礫2～3cmを3～5%散在 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや強主体に 10YR2/1黒色粘土質シルトを斑状に混入する 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE376
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや強土体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～5cmを全体に散在 掘り方埋土・柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト主体に 10YR5/6黄褐色砂質シルト地山ブロック 1～2cm大と亜角礫2～3cmを3～5%散在 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR3/2黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや強主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～5cmを全体に少量散在 掘り方埋土
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや強 均一 掘り方埋土
5 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや強主体に 10YR4/4褐色砂質シルト地山ブロック 1～2cmを少量散在 掘り方埋土
6 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

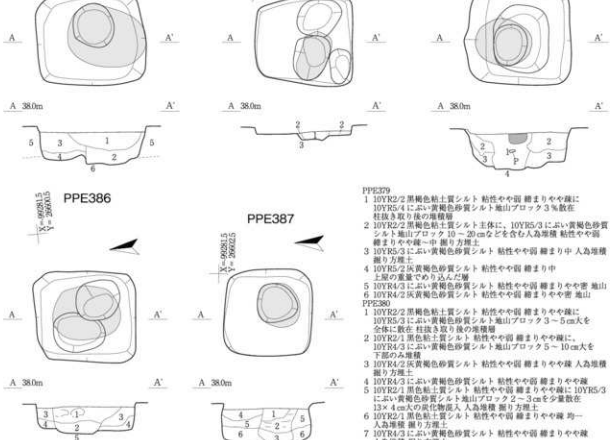
PPE377・382 断面A（1・2がPPE382，3・4がPPE377）
1 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや緩 2～5cm大の亜角礫少量混入する 人為堆積 掘り方埋土
2 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に，10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック 5cm大を全体に散在する 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に 10YR5/3灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 5～10cm大を斑状に散在する 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや強 均一 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE377・382 断面B（1～5がPPE382，6～9がPPE377）
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～6cm大を全体に散在
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや強（ほぼ均一）柱抜き取り後の堆積層
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト地山ブロック 2～4cmを少量混入する 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 1～5cm大を全体に散在 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR3/2黒褐色砂質シルトに 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 1～2cmを全体に散在する 人為堆積 掘り方埋土
6 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～3cmを全体に散在
7 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロックを多量に混入する 人為堆積 掘り方埋土
8 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロックを斑状に混入する 人為堆積 掘り方埋土
9 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 人為堆積 掘り方埋土
10 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
11 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE378
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に5mm～3cm大の 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック 3%散在 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に，10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 5～6cm大を全体に散在 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 柱抜き取り後の堆積層
4 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 下部に 10YR2/1黒色粘土質シルトを薄く堆積する 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に，10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～3cm大を全体に散在する 人為堆積 掘り方埋土
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～中 均一 人為堆積 掘り方埋土
7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

第48図　SBE2・3掘立柱建物（3）

方形基調の柱穴掘り方、同形の建物を複数確認していること、PPE383から出土した須恵器坏の年代、年代測定から９世紀第２四半期～９世紀第３四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

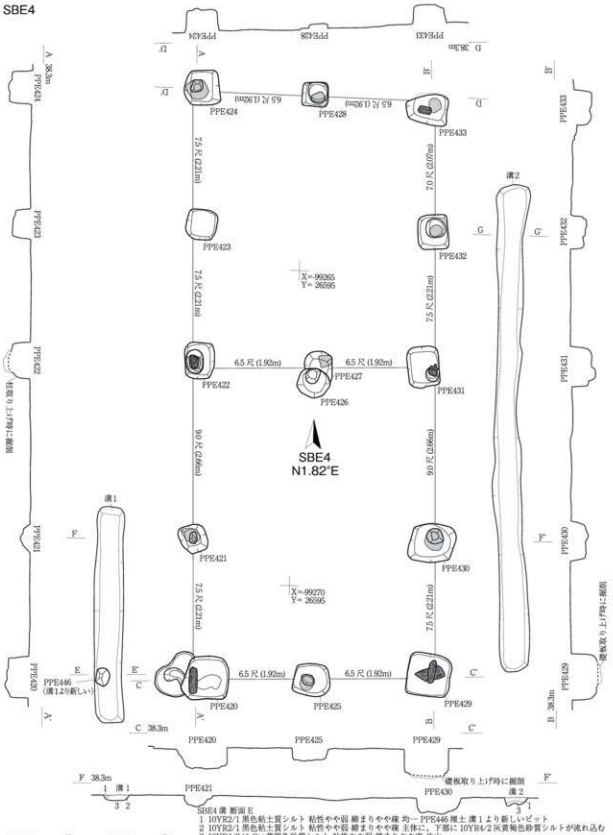


PPE379
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に
10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック３％散在
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト主体に、10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック10～20cmなどを含む入為堆積 粘性やや弱 締まりやや緩一中 掘り方埋土
3 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中
上屋の重量でわり込んだ層
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
PPE380
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に
10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック３～５cm大を
全体に散在 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に。
10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック５～10cm大を
下部のみ堆積
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 人為堆積
掘り方埋土
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
5 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR5/3
にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック２～３cmを少量散在
13×４cm大の炭化物混入 入為堆積 掘り方埋土
6 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一
入為堆積 掘り方埋土
7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
入為堆積 掘り方埋土
8 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE383
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト主体に 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック２～３cmを全体に散在 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に。10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック２～３cmを１％散在
3 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中に。10YR2/1黒色粘土質シルトを薄状に混じる 入為堆積 掘り方埋土
4 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～2mm大の細礫少量混入 入為堆積 掘り方埋土
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
PPE384
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック３cmを混入 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 入為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
PPE385
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 上部に14×８cm大の 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック、下部に散状に
10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山を互層する 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に、10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトを散状に混入する 入為堆積 掘り方埋土
3 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 入為堆積 掘り方埋土
4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
PPE386
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 土層主体に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック５～10cm を上部に含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト主体に、10YR2/1黒色粘土質シルトを混入する 入為堆積 掘り方埋土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 入為堆積 掘り方埋土
5 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
PPE387
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 上部に１～５mm大の細礫多く含む 柱あたり 4層から流入した柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト主体に、10YR2/1黒色粘土質シルトを散状に堆積する 柱あたり・柱抜き取り後の堆積層
3 上部は 10YR2/1黒色粘土質シルトを均一に、下部は 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトを堆積する 粘性上部はやや弱～中で下部は弱 締まりやや緩
4 10YR5/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 上部に１～５mm大の細礫多く含む
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト主体に、10YR2/1黒色粘土質シルトを混入する 入為堆積 掘り方埋土
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 入為堆積 掘り方埋土
7 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

0　1:30　1m

第49図　SBE2・3掘立柱建物（4）

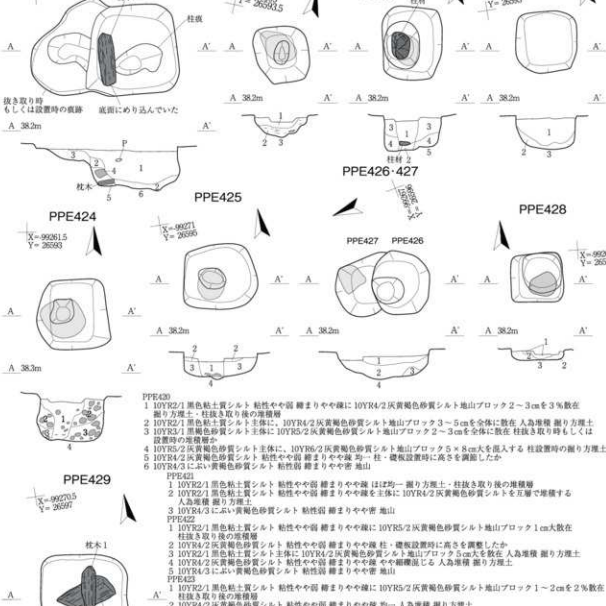


SBE4 溝 断面 E
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 PPE446埋土 溝1より新しいピット
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 主体に、下部に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトが流れ込む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SBE4 溝 断面 F
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 主体に、10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトを互層で堆積する
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SBE4 溝 断面 G
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 主体に、10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 1 ～ 2 cmを下部に堆積 流れ込み
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

第 50 図　SBE4 掘立柱建物（1）



PPE420
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～3cmを3％散在
掘り方埋土・柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に、10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック3～5cmを全体に散在 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR3/1 黒色粘質シルト主体に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～3cmを全体に散在 柱抜き取り時もしくは設置時の堆積層か
4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト主体に、10YR6/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック5×8cmを人為入る 柱設置時の掘り方埋土
5 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 柱・礎板設置時に高さを調節したか
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

PPE421
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 ほぼ均一 掘り方埋土・柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトを互層で堆積する
人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

PPE422
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック1cm大散在
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 柱・礎板設置時に高さを調整したか
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック5cm大を散在 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 やや細礫混じる 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

PPE423
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック1～2cmを2％散在
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

PPE424
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～3cm大を散在
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～8cm大を多量に散在 ほぼ地山ブロック
人為堆積 掘り方埋土 埋め戻し土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック下部中心に散在 人為堆積 掘り方埋土
埋め戻し土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE425
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 下部に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2×8cm大を
堆積 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に2～5cm大の細礫含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に 10YR2/1 黒色粘土質シルトを斑状に混入する 人為堆積
掘り方埋土
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

PPE426・427
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～3cm大の亜角礫全体に散在 人為堆積
掘り方埋土
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に1～3cm大の亜角礫全体に散在
人為堆積 掘り方埋土
3 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 人為堆積 掘り方埋土

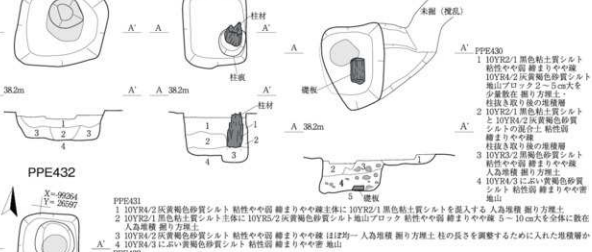
PPE428
1 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト主体に 10YR2/1 黒色粘土質シルトを混入する
粘性やや弱 締まりやや緩
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりや中～やや密 掘り方埋土 or 地山か
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

PPE429
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック1cm大を5％散在
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 ほぼ均一
柱抜き取り後の堆積層
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/2灰黄褐色砂質
シルト地山ブロック2～5cm大を5～7％散在 人為堆積 掘り方埋土
4 3層とほぼ同じだが、地山ブロック5～10cmを 10％含む 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山
7 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

第51図　SBE4 掘立柱建物（2）

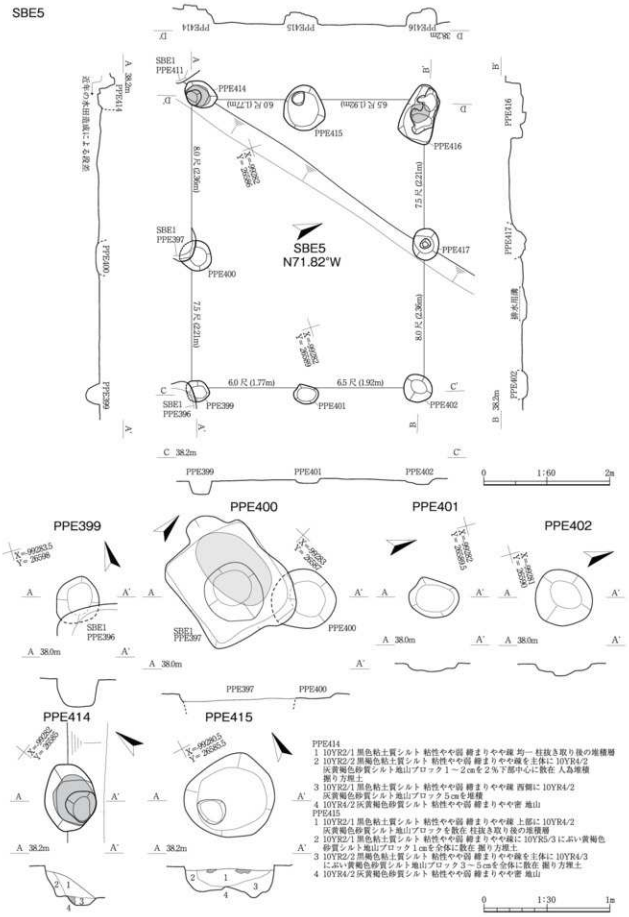
SBE4 掘立柱建物（第50～52図、写真図版38～40）

調査区中央東寄りE1区のX＝-99265、Y＝26595付近に位置する。令和3年度調査。桁行4間、梁行2間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、東西面の桁行に沿う溝2条を付属する。桁行の長さは西面が9.29 m、東面が9.15 mで、西面が0.5尺程長い。梁行の幅は3.84 m、面積は35.67㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が7.5尺（2.21 m）と9.0尺（2.66 m）、東面が7.0尺（2.07 m）と7.5尺（2.21 m）、9.0尺（2.66 m）で、西面のPPE423とPPE424の間が0.5尺長くなる。これ以外の柱間は桁行、梁行とも整っている。主軸方向は、南北方向のN1.82° Eである。確認した柱穴は計14個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はいずれも東西面中央のPPE422・431の計2個で、それぞれ731・734柱材の2点で樹種はクリである（731は状態悪く表のみ掲載）。734は解体した建物の廃材を再利用したもので、直径30～40㎝の丸太材を四つ割りにして使用していると考えられる。また、底面に礎板・枕木を設置している柱穴はPPE420・429・433の計3個で、PPE420は730礎板、PPE429は732・733礎板、PPE433は735礎板が設置されており、樹種はいずれもクリである。柱の配置からは柱筋の通りが良く、柱間はほぼ一定に設定されている。一部、東西面で非対称となるが使われている寸法はほぼ同一である。東西面の桁行に沿う溝2条は、いずれも南面に揃う位置に確認されており、西面の溝1は長さ3.43 m、幅0.47 mの隅丸長方形で深さは8㎝、溝2は長さ7.72 m、幅0.48 mの隅丸長方形で深さは約13㎝、写真図版39下段に示した通り、いずれの溝も底面に2列の工具痕が残る。溝1は西面南端の1間分、溝2は東面南端の3間分の異なる長さで作られているのは、西面の溝1が途切れる柱間9.0尺（2.66 m）部分に出入り口があったためと考えられ、平入りの建物が想定される。この溝は雨落ち溝と考えられることから、建物から溝中央までの長さは西面が4.5尺（1.33 m）、東面が4.0尺（1.18 m）の軒の出が推測される。建物中央のPPE422・431の間に

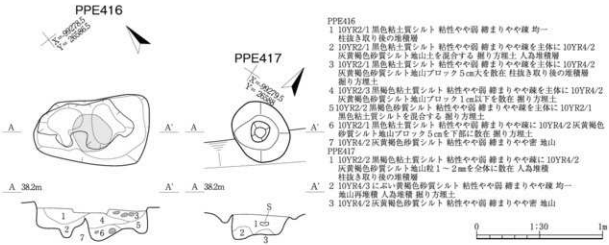


第52図　SBE4 掘立柱建物（3）

SBE5



第 53 図　SBE5 掘立柱建物（1）



第 54 図　SBE5 掘立柱建物（2）

PPE426・427 が認められ、間仕切りと考えられる。両者は切り合っていることから、間仕切りの修繕が行われたと考えられる。柱の配置からは柱筋・柱間いずれも整った様子が認められ、また棟持ち柱の PPE425・428 と間仕切りの PPE426・427 も直線に並んで、東西面の桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性の高い建物と考えられる。

溝 1 埋土から 48 土師器高台皿か坏片と、溝 2 埋土から 49 土師器高台皿片が出土した。49 外面には「十万」と見られる墨書が側位して記されている。9 世紀第 3 四半期に位置付けられるか。

前述の PPE420 柱穴から出土した 730 枕木について年代測定を実施したところ、798calAD-834calAD（30.8%・1 σ）もしくは 845calAD-877calAD（29.7%・1 σ）の測定値を得た。最外年輪部分の採取であることから、より伐採年代に近い値とみられる。

方形基調の柱穴掘り方、雨落ち溝を伴う建物、年代測定から 8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 3 四半期の年代値を得ていることから、概ね平安時代に属する居住を目的とした建物と推定される。（北田）

SBE5 掘立柱建物（第 53・54 図、写真図版 41）

調査区中央南側 E1・2 区の X＝-99282、Y＝26586 付近に位置する。令和 3 年度調査。SBE1 掘立柱建物と重複しており、本遺構が古いと見られる。桁行 2 間、梁行 2 間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 4.57 m、梁行の幅は 3.69 m、面積は 16.86㎡である。柱間寸法は、桁行は南北面とも 7.5 尺（2.21 m）と 8.0 尺（2.36 m）、梁行は東西面とも 6.0 尺（1.77 m）と 6.5 尺（1.92 m）が使用されている。主軸方向は、東西方向の N71.82° W である。確認した柱穴は計 8 個で、概ね円形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はないが、PPE414・415・417 は柱痕跡が明瞭に残っていた。小型の建物であるが、柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。棟持ち柱の PPE401 と PPE415 は桁行と平行する位置にあることから、規格性の高い建物と考えられる。

方形基調の柱穴掘り方、同形・同規模の建物を複数確認していることから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBE6 掘立柱建物（第 55～57 図、写真図版 42～44）

調査区中央南西側 C2～E1 区の X＝-99280、Y＝26555 付近に位置する。令和 3 年度調査。桁行 3 間、梁行 2 間の身舎の西・北面に廂を持つ東西棟の二面廂建物で、桁行の長さは 7.09 m、梁行の幅

は6.49 m、面積は46.01㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が6.5尺（1.92 m）、北面が6.0尺（1.77 m）、6.5尺（1.92 m）、7.0尺（2.07 m）と南面は同一尺で整えられているが、北面にはややばらつきがある。梁行は東西面ともに8.0尺（2.36 m）、8.5尺（2.51 m）だが、桁行に平行せずややずれている。廂の出は西面は4.5尺（1.33 m）で整っているが、北面の東端は5.5尺（1.62 m）、4.0尺（1.18 m）となり、廂の出が傾いて付く形となる。主軸方向は、東西方向のN71.29° Wである。確認した柱穴は計17個で、概ね円形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴は、PPC461・462、PPE739～742・744・745・759・775の計10個で、樹種はPPC461の736柱材（樹種未同定）、PPC462の737柱材（未同定）、PPE739の738柱材（クリ）、PPE740の739柱材（クリ）、PPE741の740柱材（クリ）、PPE742の741柱材（クリ）、PPE744の742柱材（未同定）、PPE745の743柱材（未同定）、PPE759の744柱材（クリ）、PPE775の745柱材（クリ）と樹種同定を実施した柱はすべてクリが用いられていた。大半の柱材は腐植が著しく進んでおり、PPE742出土の741柱材とPPE775出土の745柱材の2点のみ図化できた。いずれも径20㎝台の大きさで、丸太材を使用している。柱の配置からは、柱の配置から、柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。北面の廂が斜めに取り付く変則的な形であるが、身舎については非常に規格性の高い。

PPE741埋土から50土師器小型甕片と、PPC458埋土から51須恵器甕片が出土した。

前述のPPE740から出土した739柱材について年代測定を実施したところ、787calAD-830calAD（44.6%・1 σ）の測定値を得た。

西・北面に廂を持つ二面廂建物、柱穴の多くに柱材が遺存していて建物の柱配置が読み取れること、PPE741・PPC458から出土した土器の年代、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第2四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

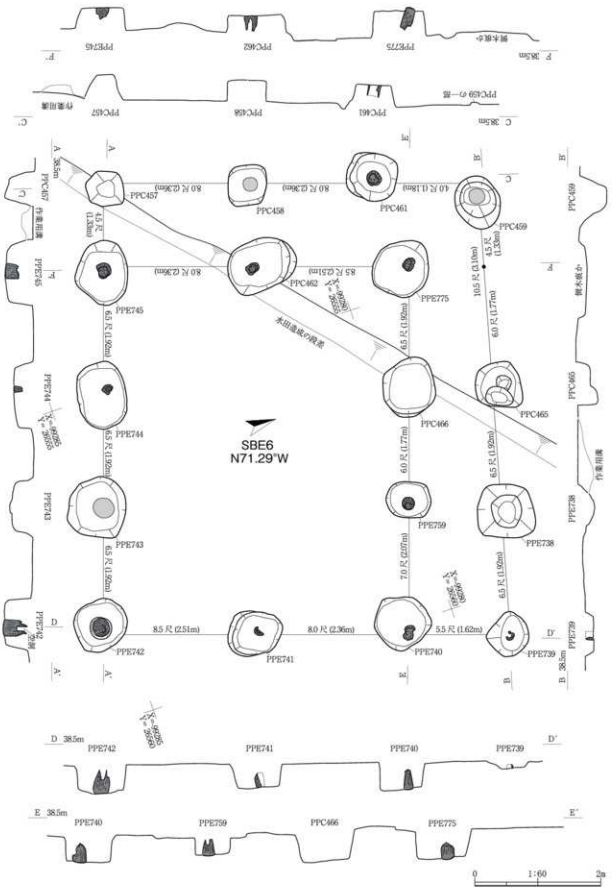
SBE7 掘立柱建物（第58～61図、写真図版45～48）

調査区中央南側E1区のX＝-99273、Y＝26575付近に位置する。令和3年度調査。SBE8・PPE706と本遺構のPPE722が直接切り合っており、本遺構が古い。桁行3間、梁行2間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは5.31 m、梁行の幅は3.69 m、面積は19.59㎡である。柱間寸法は、桁行は南北面ともに5.5尺（1.62 m）・6.0尺（1.77 m）・6.5尺（1.92 m）で整えられており、6.0尺を基準として意識している。梁行きも東西面ともに6.0尺（1.77 m）、6.5尺（1.92 m）で揃えている。主軸方向は、東西方向のN71.23° Wである。確認した柱穴は計10個で、すべて方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はPPE722のみで、樹種は未同定である。確認した柱穴の多くに柱痕跡が残っており、柱の位置がある程度推定できる。柱の配置からは、柱筋・柱間いずれも整っており、強い規制が窺われる。棟持ち柱のPPE718とPPE723は桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性の高い建物と考えられる。

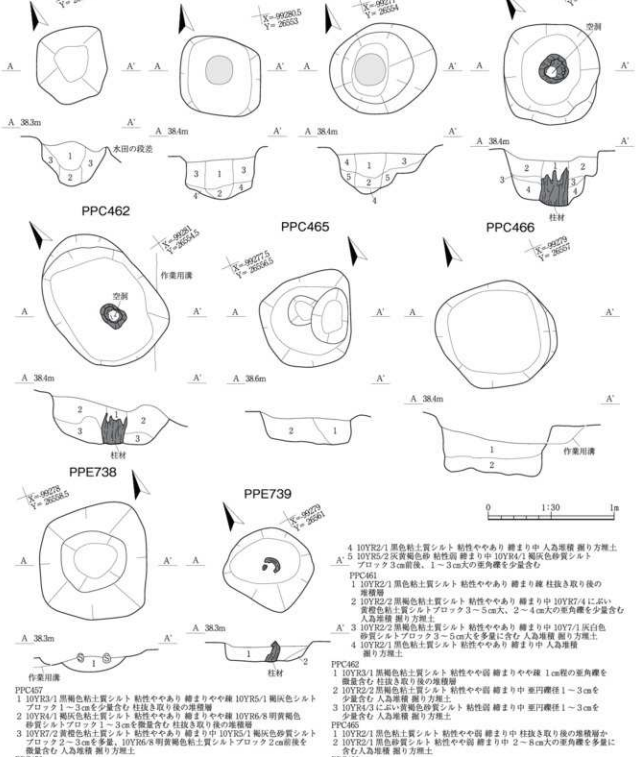
PPE714埋土上位から、52須恵器坏片が出土した。回転ヘラケズリ再調整が施される。9世紀第2四半期に位置付けられるか。前述のPPE722から出土した746柱材について年代測定を実施したところ、786calAD-832calAD（45.5%・1 σ）の測定値を得た。

方形基調の柱穴掘り方、SBE8との切り合い関係、同形の建物を複数確認していること、PPE714から出土した須恵器坏の年代、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第2四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する倉庫的な性格を持つ建物と推定される。（北田）

SBE6



第 55 図　SBE6 掘立柱建物（1）



PPC457
1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりややあ弱 10YR5/1 褐灰色シルトブロック1～3cmを少量含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりややあ弱 10YR6/8 明黄褐色砂質シルトブロック1～3cmを微量含む 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR7/2 黄橙色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや 10YR5/1 褐灰色砂質シルトブロック2～3cmを多量、10YR6/8 明黄褐色粘土質シルトブロック2cm前後を微量含む 人為堆積 掘り方埋土

PPC458
1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりやや強 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性ややあり 締まりやや強 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト地山ブロック10～12cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR5/6 灰黄褐色砂質シルト 粘性ややあり 締まりや 5～15cmの亜角礫を少量含む

PPC459
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりやや強 にぶい黄橙色シルトブロック5cm前後を少量含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 粘性弱 締まりやや強 3cm前後の亜角礫を少量含む 柱抜き取り後の堆積層
3 10Y7/2 灰白色砂質シルト 粘性弱 締まりやや強 10YR2/1 黒色粘土質シルト微量含む 柱痕跡
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まり中 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR5/2 灰黄褐色砂 粘性弱 締まり中 10YR4/1 褐灰色砂質シルトブロック3cm前後、1～3cmの亜角礫を少量含む

PPC461
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まり強 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土質シルトブロック3～5cm大、2～4cmの亜角礫を少量含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 10Y7/1 灰白色砂質シルトブロック3～5cm大を多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 人為堆積 掘り方埋土

PPC462
1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりややあ弱 1cm程の亜角礫を微量含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 亜円礫径1～3cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりや中 亜円礫径1～3cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土

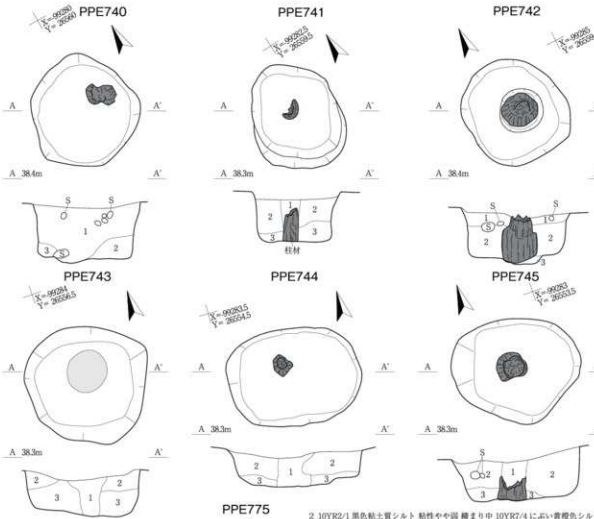
PPC465
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 柱抜き取り後の堆積層か
2 10YR2/1 黒色砂質シルト 粘性ややあり 締まりや中 2～8cm大の亜角礫を多量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPC466
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりや中 3～15cm大の亜角礫を多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
2 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性弱 締まりや中 3～12cm大の亜角礫を多量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE738
1 10YR2/1 黒色砂質シルト 粘性やや弱 締まりや中 5～15cm大の亜角礫を多量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE739
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりや中 2～5cm大の亜角礫を少量含む 人為堆積 掘り方埋土
2 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性弱 締まりや中 3～8cm大の亜角礫を少量含む 人為堆積 掘り方埋土

第56図　SBE6 掘立柱建物（2）



PPE740
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径3～15cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土と柱抜き取り後の堆積層
2 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径3～10cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 人為堆積 掘り方埋土

PPE741
1 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや弱 10YR4/6 褐色粘土質シルトブロック2～5cmを多量に含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性中 締まりや 10YR4/6 褐色粘土質シルトブロック2～5cmを少量、亜円礫径2～10cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR4/4 褐色砂を多量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE742
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径2～10cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト 地山ブロック3cm前後を微量含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 人為堆積 掘り方埋土

PPE743
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 亜円礫径1cm前後を多量に含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まり中 亜円礫径2～3cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径3～15cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE744
A' 1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりやや緩 亜円礫径2～4cmを多量に含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土質シルト地山ブロック3～5cmを少量、亜円礫径3～10cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径2～3cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE745
A' 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まりやや緩 亜円礫径1cm前後を少量含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性ややあり 締まり中 亜円礫径1～10cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 亜円礫径1～3cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE759
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック4cm前後を微量含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR4/4 褐色砂質シルトブロック3～4cmを多量に含む 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック4～10cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック10～15cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 10Y7/2 灰白色シルトブロック3～5cmを少量に含む 人為堆積 掘り方埋土

PPE775
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やあり 締まり弱 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やあり 締まり中 10YR7/6 明黄褐色粘土質シルト地山ブロック1～2cmを少量含む 人為堆積 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やあり 締まり中 亜円礫径2～10cmを多量に含む 人為堆積 掘り方埋土
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やあり 締まり中 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土質シルト地山ブロック5cm前後を少量含む 人為堆積 掘り方埋土
5 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径3cm前後を少量含む 人為堆積 掘り方埋土

第57図 SBE6 掘立柱建物（3）

SBE8 掘立柱建物（第58～61図、写真図版45～49）

調査区中央南側C2～E1区のX＝-99270、Y＝26575付近に位置する。令和3年度調査。SBE7・PPE722と本遺構のPPE706が直接切り合っており、本遺構が新しい。また、SKE9と本遺構のPPE713の新旧関係についても、本遺構が新しい。桁行3間、梁行2間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、風向に沿う長方形の溝1条を付属する。桁行の長さは7.98 m、梁行の幅は5.32 m、面積は42.45㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が9.0尺（2.66 m）で一定、北面が8.5尺（2.51 m）・9.0尺（2.66 m）・9.5尺（2.80 m）とほぼ等分だがややばらつきがある。梁行は東西面ともに9.0尺（2.66 m）で整えられている。主軸方向は、東西方向のN80.17° Wである。確認した柱穴は計10個で、すべて方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴はなく、すべて抜き取られている。礎板・枕木が残存する柱穴は、PPE705・707・708・710の計4個で、PPE704は端材が出土している。樹種は、PPE705は747礎板（樹種未同定）、PPE707は748礎板（クリ）、PPE708は749礎板（未同定）、PPE710の礎板は不掲載である。礎板・枕木が設置されていない柱穴は柱痕跡が比較的明瞭に残っており、これから推定した柱配置は柱筋の通りが良い。一方、桁行の北面はほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。四周に沿う溝1条は、途切れることなく全周している。桁行に沿う南面は長さ11.16 m、幅0.35～0.72 m、深さ約10㎝、北面は長さ11.45 m、幅0.5～0.65 m、深さ約12㎝、東面は長さ8.82 m、幅0.55～0.71 m、深さ約10㎝、西面は長さ8.15 m、幅0.31～0.5 m、深さ約5㎝で、写真図版45に示した通り、いずれの溝も底面に2列の工具痕（鋤鍬か）が残る。この溝は雨落ち溝と考えられ、建物から溝中央付近までの長さは桁行の南面が4.5尺（1.33 m）～5.0尺（1.48 m）、北面が4.5尺（1.33 m）、梁行の東面が4.5尺（1.33 m）、西面が4.5尺（1.33 m）～5.0尺（1.48 m）の軒の出が推測される。ただし、上屋の形状について、そのまま入母屋の建物とするのは拙速で、切妻であっても梁行に雨落ち溝が巡る可能性もあるため今回の調査成果からの推測は難しい。柱の配置からは、桁行北面の柱間がややずれるものの整った様子が認められ、棟持ち柱のPPE708・713も東西面の桁行と平行する位置にあることから、非常に規格性の高い建物と考えられる。

溝1埋土を中心に、53～55・67須恵器、56～66土師器の計15点を掲載した。このうち、PPE704埋土の56土師器坏、PPE708埋土の53須恵器坏、PPE710柱痕跡埋土の57土師器坏、溝1埋土中位土器1の62土師器坏、溝1埋土下位土器2の60土師器坏、溝1埋土中位土器3の59土師器坏、溝1埋土中位土器4の66土師器小型鉢などを出土しており、須恵器は少ない。土師器坏は底部や底部周辺に再調整を施す土器が多く、9世紀第2四半期～第3四半期に位置付けられる。

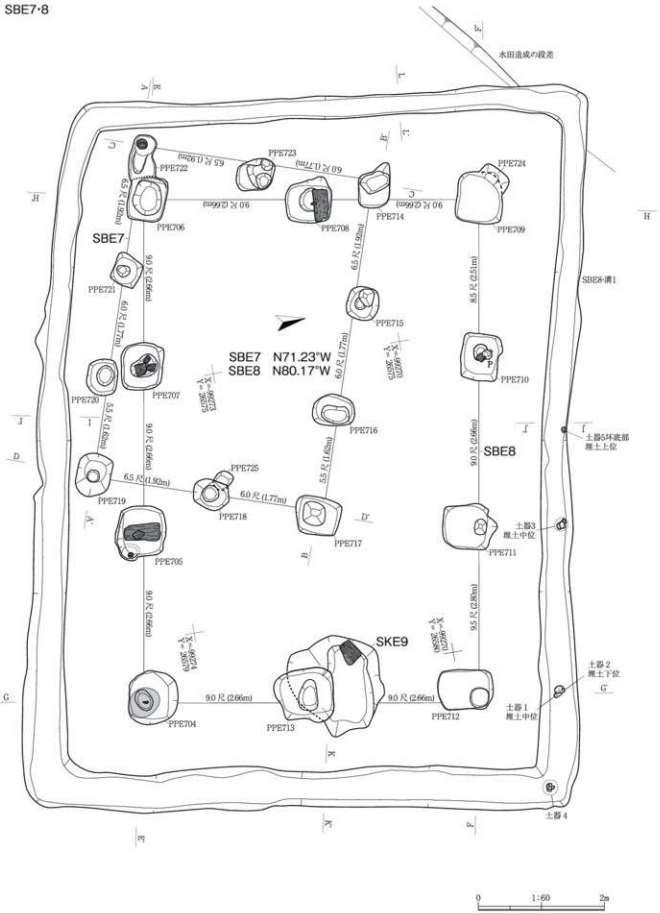
PPE707柱穴から出土した748礎板について年代測定を実施したところ、684calAD-744calAD（68.3%・1σ）の測定値を得た。1σの測定値は想定よりも古く、土器の年代とも齟齬を生じることから支持できない。2σでは、674calAD-779calAD（80.7%）もしくは787calAD-827calAD（14.8%）の測定値を得ており、確率は低いが787calAD-827calADが調和的な測定値と考えられる。

方形基調の柱穴掘り方、SBE7との切り合い関係、雨落ち溝を伴う建物、年代測定から8世紀第4四半期～9世紀第2四半期の年代値を得ていることから、平安時代に属する居住を目的とした建物と推定される。（北田）

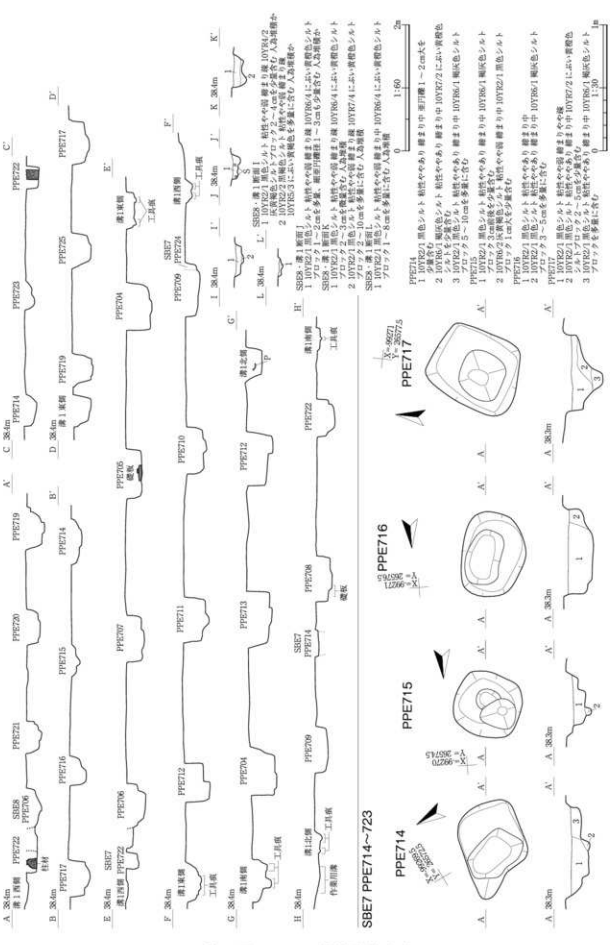
SBE9 掘立柱建物（第62～64図、写真図版50～52）

調査区中央東側C2～E1区のX＝-99260、Y＝26580付近に位置する。令和3年度調査。桁行3間、梁行2間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは南面が7.53 m、北面が7.38 mと南面が0.5尺（0.15 m）長い。梁行の幅は5.46 m、面積は41.11㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が8.5尺

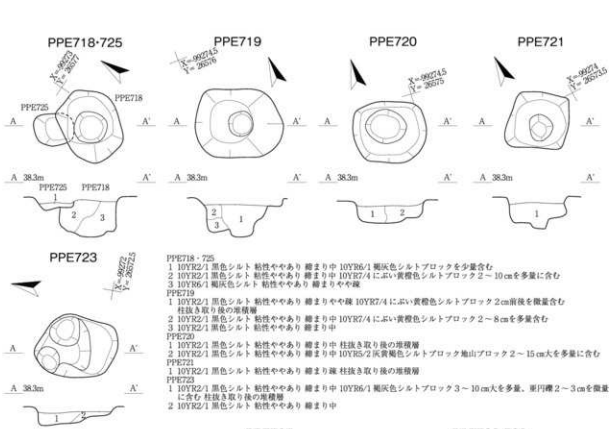
SBE7･8



第 58 図　SBE7・8 掘立柱建物（1）



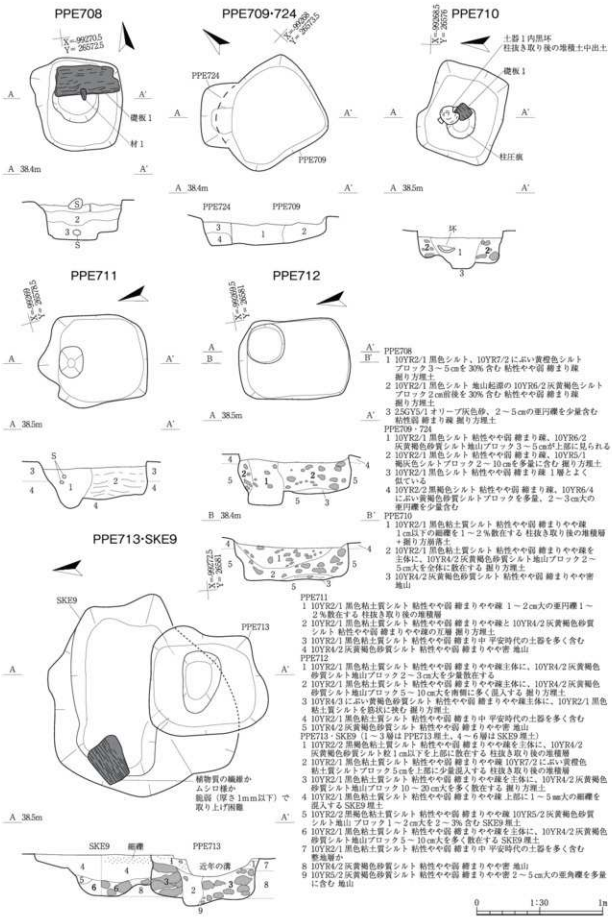
第 59 図　SBE7・8 掘立柱建物（2）



PPE718・725
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR6/1 褐灰色シルトブロックを少量含む
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR2/4 にぶい黄橙色シルトブロック2～10cmを多量に含む
3 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まりやや疎
PPE719
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや疎 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック2cm前後を微量含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック2～8cmを多量含む
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中
PPE720
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック地山ブロック2～15cm大を多量に含む
PPE721
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり疎 柱抜き取り後の堆積層
PPE723
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR6/1 褐灰色シルトブロック3～10cm大を多量、亜円礫2～3cmを微量に含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中

PPE704
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1cm以下の細礫を少量散在する 柱抜き取り後の堆積層
下部に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロックを筋状に散在する 須恵器坏出土 柱抜き取り後の堆積層＋掘り方崩落土
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎と 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎の互層 掘り方埋土
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を主体に、10YR2/1 黒色粘土質シルトを互層で筋状に混入する 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりや 平安時代の土器を多く含む 整地層か
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 10YR4/2 灰黄褐色～3/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
PPE705
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1cm以下の細礫を1～3%含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや強、10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック3～5cmを全体に散在する 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり疎、10YR4/1 褐灰色シルトブロック1～3cmを少量含む 掘り方埋土
PPE706・722（1～3層：PPE706、4～6層：PPE722）
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり疎 1～2cm大の炭粒を極微量含む 柱痕または柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり疎、10YR6/2 灰黄褐色砂質シルトブロック3～5cmを30%含む
3 10YR5/1 褐灰色砂質シルト、10YR3/2 黒褐色シルトブロック1～2cm大を10～30%含む 粘性弱 締まり疎
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり疎
5 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや、10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック30%含む 1～2cm大の亜円礫2～3%含む
6 10YR5/1 褐灰色シルト、10YR2/2 黒褐色1～2cmを多く含む
PPE707
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1cm未満の細礫を2～3%含む 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト、10YR5/1 褐灰色砂質シルトブロック2～5cmを50～60%多量に含む 粘性やや弱 締まり疎 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト、10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトブロック2～3cmを20%少量含む 粘性やや弱 締まり疎 掘り方埋土

第60図　SBE7・8 掘立柱建物（3）



PPE708
1 10YR2/1 黒色シルト、10YR7/2 にぶい黄橙色シルト
ブロック 3～5cmを 30%含む 粘性やや弱 締まり緩
掘り方埋土
2 10YR2/1 黒色シルト 地山起源の 10YR6/2 灰黄褐色シルト
ブロック 2cm前後を 30% 含む 粘性やや弱 締まり緩
掘り方埋土
3 2.5GY5/1 オリーブ灰色砂、2～5cmの亜円礫を少量含む
粘性弱 締まり緩 掘り方埋土

PPE709・724
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり緩、10YR6/2
灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 3～5cm が上部に見られる
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり緩、10YR5/1
褐灰色シルトブロック 2～10 cmを多量に含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり緩 1 層とよく
似ている
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり緩、10YR6/4
にぶい黄褐色砂質シルトブロックを多量、2～3cm大の
亜円礫を少量含む

PPE710
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
1cm以下の細礫を 1～2％散在する 柱抜き取り後の堆積層
＋掘り方崩落土
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を
主体に、10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 2～
5cm大を全体に散在する 掘り方埋土
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密
地山

PPE711
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～2cm大の亜円礫 1～
2％散在する 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩と 10YR4/2 灰黄褐色砂質
シルト 粘性やや弱 締まりやや緩の互層 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりが 平安時代の土器を多く含む
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE712
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR4/2 灰黄褐色
砂質シルト地山ブロック 2～3cmを少量散在する
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR4/2 灰黄褐色
砂質シルト地山ブロック 5～10cm大を南側に多く混入する 掘り方埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR2/1 黒色
粘土質シルトを数状に散在 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりが 平安時代の土器を多く含む
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

PPE713・SKE9（1～3層は PPE713 埋土、4～6層は SKE9 埋土）
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR4/2
灰黄褐色砂質シルト 粒 1cm以下を上部に散在する 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR7/2 にぶい黄橙色
粘土質シルトブロック 5cmを上部に少量混入する 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR4/2 灰黄褐色
砂質シルト地山ブロック 10～30 cm大を多く散在する 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 上部に 1～5 mm大の細礫を
混入する SKE9 埋土
5 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/2 灰黄褐色砂質
シルト地山 ブロック 1～2cmを 2～ 3% 含む SKE9 埋土
6 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR4/2 灰黄褐色
砂質シルト地山ブロック 5～10 cm大を多く散在する SKE9 埋土
7 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりが 平安時代の土器を多く含む
整地層か
8 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
9 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 2～5 cm大の亜角礫を多量
に含む 地山

0　1:30　1m

第 61 図　SBE7・8 掘立柱建物（4）

（2.51 m）で揃えられている一方、北面は中央の柱間が 8.0 尺（2.36 m）とやや短い。梁行は東西面ともに 9.0 尺（2.66 m）と 9.5 尺（2.80 m）だが、南北の柱間で寸尺が入れ替わっている。そのため、棟木が通る位置は桁行から 0.5 尺（0.15 m）分、南へ振れた軸となる。主軸方向は、桁行の向きから東西方向の N71.51° W である。確認した柱穴は計 12 個で、間仕切りの柱穴以外は概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴は、北東隅の PPE703（755 柱材）、南東隅の PPE701（753 柱材）、南面の PPE699（751 柱材）、西面の PPC469（750 柱材）の計 4 個で、樹種はいずれもクリである。確認された 4 点の柱材は、いずれも直径 40cmを超える原木丸太を大割り（四つ割り）した木材を加工して使用しており、鉞などによる底面調整が不明瞭なことから解体した別の建物の廃材を利用した可能性もある。また、南面の PPE700 と PPE702 には礎板・枕木が設置されており、PPE700 の 752 枕木はクリが用いられていた。原木丸太を小割りして加工した板材で、柱材と同様に解体した別建物の廃材を利用した可能性がある。また、西側 1 間分に間仕切りが設けられていて、PPD134 と 135 によって区切られている。間仕切りの柱間は 5.5 尺（1.62 m）と 6.5 尺（1.92 m）が用いられており、北側の柱間のみが 1.0 尺（0.295 m）短い。柱穴の掘り方は側柱の柱穴よりも浅く、柱痕跡からは細めの柱材が使用されたと考えられる。柱の配置からは、桁行南面が 0.5 尺（0.15 m）長いものの柱筋は強い規制が窺われる。棟木は南側に 0.5 尺振れているものの、間仕切りを持つ規格性の高い建物と考えられる。

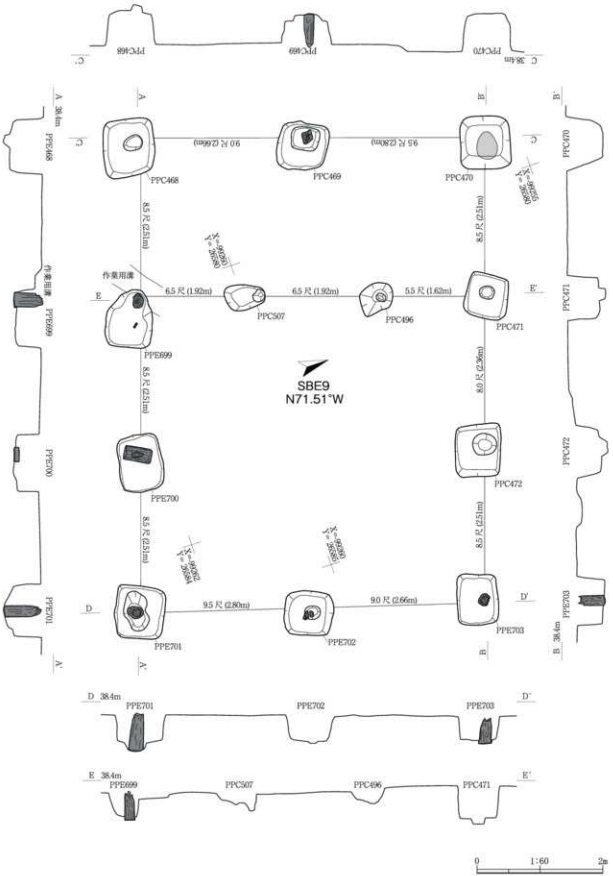
前述の PPC469 から出土した 750 柱材について年代測定を実施したところ、828calAD-859calAD（24.3%・1 σ）及び 871calAD-894calAD（22.6%・1 σ）の測定値を得た。2 σでも、820calAD-900calAD（60.0%）の値を示している。

方形基調の柱穴掘り方、間仕切りのある SBD2 など同形の建物を確認していること、年代測定から 9 世紀第 2 四半期～ 9 世紀第 4 四半期の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

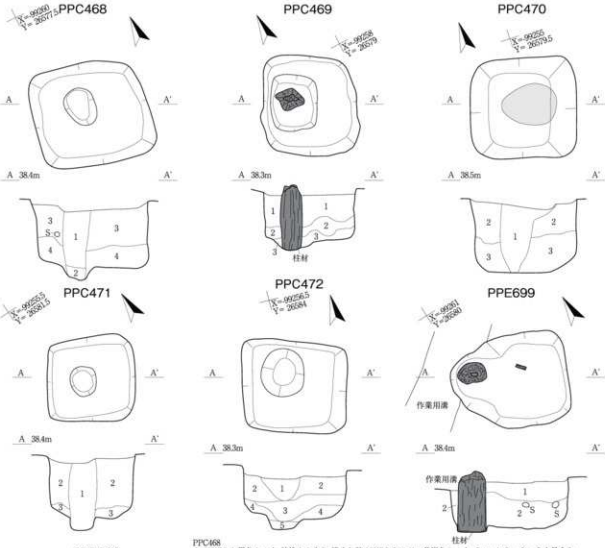
SBE10 掘立柱建物（第 65 ～ 68 図、写真図版 52 ～ 54）

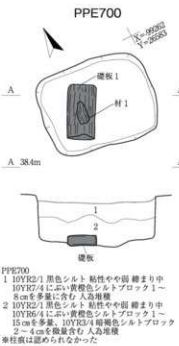
調査区中央東側 C2・D6・E1 区の X = -99250、Y = 26590 付近に位置する。令和 2 ・ 3 年度調査。SBE11・PPD122 と本遺構の PPD123 が直接切り合っており、本遺構が古い。桁行 4 間、梁行 2 間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 9.29 m、梁行の幅は 5.90 m、面積は 54.81㎡である。柱間寸法は、桁行は南北面ともに 7.5 尺（2.21 m）、8.0 尺（2.36 m）、8.5 尺（2.51 m）を用いて整えられている。梁行は東西面ともに 10.0 尺（2.95 m）で揃えており、桁行と平行する位置に棟木が通るよう設計されている。主軸方向は、東西方向の N72.78° W である。確認した柱穴は計 13 個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴が多く、北面の PPC488・499、間仕切りの PPE729 以外の計 10 個で出土している。PPC483（756 柱材）、PPC486（757 柱材）、PPC491（758 柱材）、PPD123（761 柱材）、PPD125（764 柱材）、PPD126（765 柱材）、PPD129（766 柱材）、PPE731（768 柱材）、PPE732（769 柱材）、PPE733（770 柱材）で、樹種はいずれもクリが用いられている。確認された 10 点の柱材は、直径 22 ～ 32cmの原木丸太材をそのまま使用しており、鉞などによる底面調整が明瞭に確認できる。これに加えて、丸太材をなるべく長く用いるために、伐採時に斜めに入れた斧や鉈状の痕跡部分もそのまま残して利用している。また、梁行西面の PPC491、間仕切りの PPE729 には礎板・枕木が設置されており、PPC491 は 758 柱材の下に 759・760 礎板（いずれもクリ）を入れた状態、PPE729 は 767 枕木（クリ）が柱を抜き取られた埋土中位から出土している。礎板は丸太材を小割りして加工した板材で、柱材と同様に解体した別建物の廃材を利用した可能性がある。また、

SBE9



第 62 図　SBE9 掘立柱建物（1）





PPC468
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり弱 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック 3～8cmを少量含む
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり強 5Y6/1 灰白色砂を多量に含む 柱抜き取り後の堆積層
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色～ 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック 3～15cmを多量に含む 掘り方埋土
4 5Y2/1 黒色シルト 粘性・締まり中 5Y6/2 灰オリーブ色シルトブロック 5～15cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC469
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 3～8cmを多量、3～5cm大の炭片礫を少量含む 人為堆積
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4～6/3 にぶい黄橙色シルトブロック 3～12cmを多量に含む 人為堆積
3 10YR2/1 黒色シルト 10YR7/1 灰白色粘土質シルト 5～10cmを多量に含む 粘性・締まり中 人為堆積
※柱は図よりも少し太く、残存値で最大 19cmの太さがある

PPC470
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック 2cm前後を微量含む
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土質シルト 5～20cm主体 粘性強 締まり中 10YR2/1 黒色シルト微量、亜円礫 1～2cmを微量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10GY7/1 明緑灰色粘土質シルトブロック 2～5cmを多量に含む
掘り方埋土
※柱が斜めに抜き取られているため、図では底面付近が眺くなっている

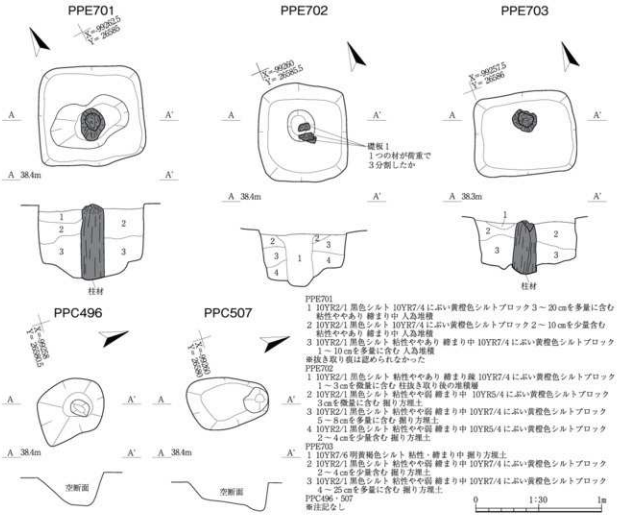
PPC471
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり強 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 1～4cmを少量含む
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 2～5cmを多量、亜円礫径 2～4cmを微量含む 掘り方埋土
3 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質シルトブロック 5～10cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC472
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり弱 柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 3～15cmを多量に含む
掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 1～3cmを微量含む
掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 3～10cmを多量に含む
掘り方埋土
5 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり強 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック 1～3cmを微量含む
※柱が斜めに抜き取られており、図では1層が底面まで達していない

PPE699
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4～6/3 にぶい黄橙色シルトブロック 1～15cmを少量に含む
人為堆積
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 3～5cmや 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトブロック 3～4cmを多量に含む 人為堆積

PPE700
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/4～6/3 にぶい黄橙色シルトブロック 3～8cmを少量含む
柱抜き取り後の堆積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり強 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック 1～8cmを多量に含む 人為堆積
※柱痕は認められなかった

第 63 図　SBE9 掘立柱建物（2）



第64図　SBE9 掘立柱建物（3）

東側1間分に間仕切りが設けられていて、PPE729 によって区切られている。間仕切りの柱間は側柱と同じく 10.0 尺（2.95 m）が用いられており、棟持ち柱である PPC491 と PPD129 の直線上に位置しており、非常に規格性の高い建物と考えられる。

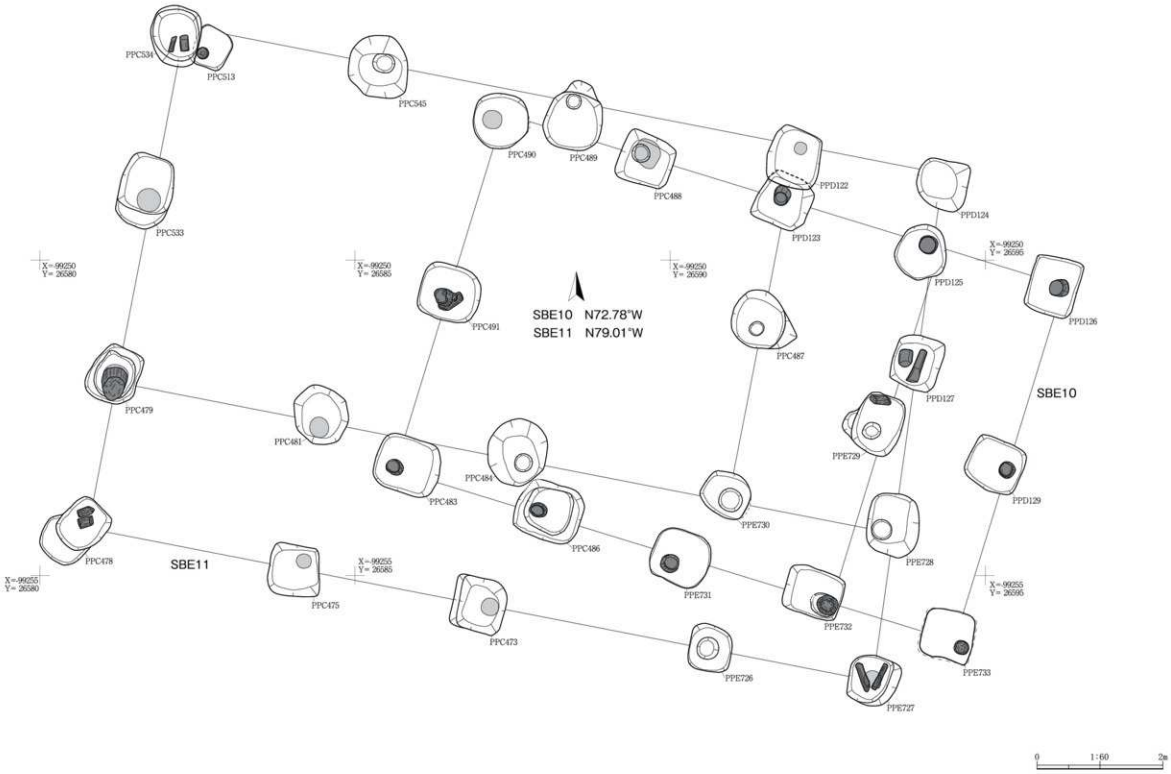
前述の PPC483 から出土した 756 柱材について年代測定を実施したところ、823calAD-883calAD（58.7%・1 σ）の測定値を得た。最外年輪部分の採取であることから、より伐採年代に近い値とみられる。

方形基調の柱穴掘り方、間仕切りのある同形の建物を確認していること、年代測定から 9 世紀第 1 四半期末～ 9 世紀第 4 四半期前半の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする建物と推定される。（北田）

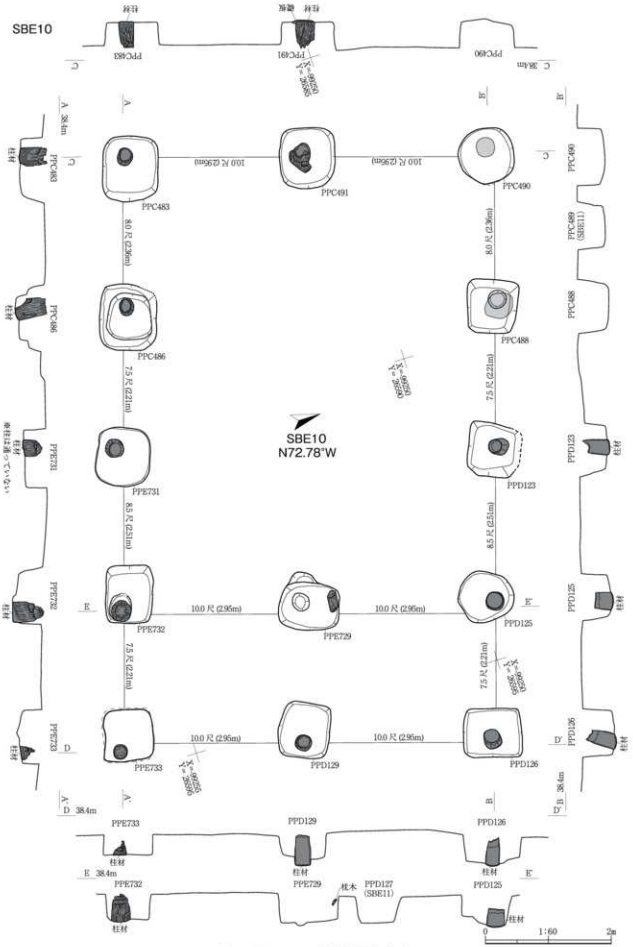
SBE11 掘立柱建物（第 65・69～72 図、写真図版 52・54～56）

調査区中央東側 C2・D6・E1 区の X = -99250、Y = 26585 付近に位置する。令和 2・3 年度調査。SBE10・PPD123 と本遺構の PPD122 が直接切り合っており、本遺構が新しい。桁行 4 間、梁行 2 間の身舎の南面に廂を持つ東西棟の片廂建物で、身舎の桁行の長さは南面で 12.55 m、北面で 12.25m と南面が 1 尺長い。梁行の幅は 5.75 m、廂の出は 8.0 尺（2.36 m）を数える。廂を入れた全体の規模は、桁行は南面で 12.69 m、北面で 12.25 m と廂の付く南面がさらに 0.5 尺長くなる。桁行は東西面と

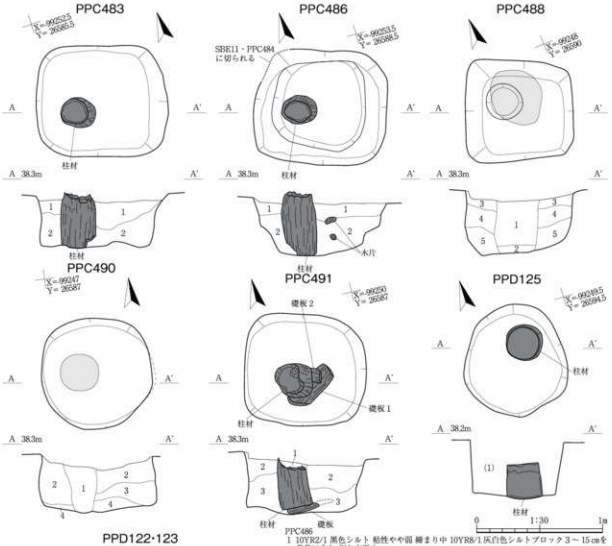
SBE10·11



第65図　SBE10・11 掘立柱建物跡（検出図）



第 66 図　SBE10 掘立柱建物（1）



PPC486
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR8/1 灰白色シルトブロック 3 ～ 15 cmを多量に含む 掘り方埋土
2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 7.5Y7/2 灰白色シルトブロック 5 ～ 15 cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC488
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR5/1 褐灰色シルトブロック 3 ～ 5 cmを微量含む 抜き取り痕
2 10YR3/1 黒褐色シルト、10YR7/1 灰白色シルトブロック 5 cm前後を多量に含む 柱痕
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 2 cm前後の炭片礫を少量含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 掘り方埋土
5 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/6 明黄褐色砂質シルトブロック 3 ～ 10 cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC490
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 3 ～ 15 cmを多量に含む
3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 3 ～ 5 cmを少量、10YR5/1 褐灰色シルトブロック 3 cm前後を微量含む
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 10 ～ 15 cmを多量に含む

PPC491
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり緩
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック 3 ～ 20 cmを少量含む
3 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まりや中 5GY7/1 明オリーブ灰色シルトブロック 2 ～ 15 cmを多量に含む

PPD122・123（1 ～ 4 層：PPD122、5 ～ 7 層：PPD123）
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性や弱 締まりやや密 地山ブロック 1 ～ 3 cmを微量含む 抜き取り痕
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 締まりや中 柱抜き取り痕
3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性や 締まり密 地山ブロック 1 ～ 2 cmを極微量、地山礫 1 ～ 2 cmを微量含む 掘り方埋土
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性や 締まり密 地山ブロック 2 ～ 5 cmを極微量、地山礫 1 ～ 2 cmを極微量含む 掘り方埋土
5 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりや 柱根
6 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性や 締まり密 地山ブロック 1 ～ 2 cmを少量含む 掘り方埋土
7 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 地山砂（8 層）多量含む
8 2.5GY7/1 暗 粘性弱 締まりやや密 地山 グライ化
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり密 地山

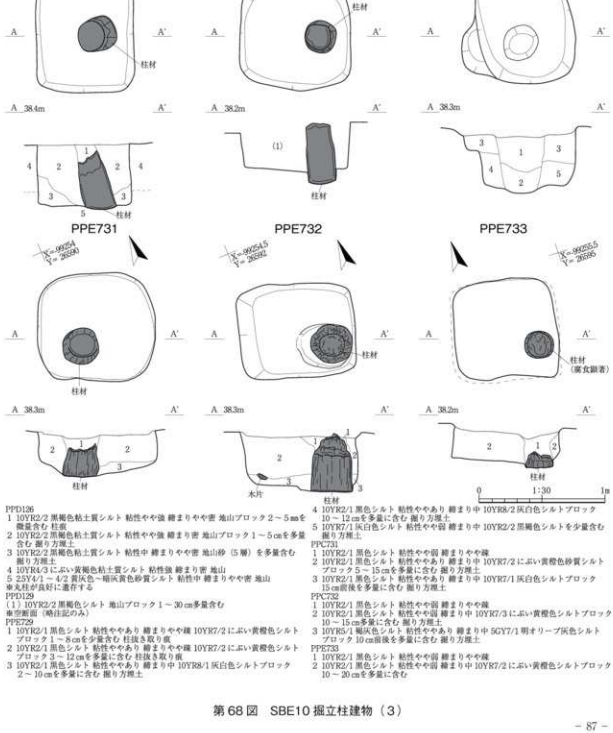
PPC483
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトブロック 5 ～ 10 cmを多量に含む
2 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まり中 5GY7/1 明オリーブ灰色シルトブロック 5 ～ 10 cmを多量に含む

(1) 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック 0.5 ～ 20 cmを多量含む
※空断面（略注記のみ）

※PPD123・122 の重複断面で PPD122 が切っている
PPD125

第 67 図　SBE10 掘立柱建物（2）

もに8.11 mで、面積は102.92㎡である。柱間寸法は、身舎の桁行は、南面が9.0尺（2.36m）と11.0尺（3.25 m）、11.5尺（3.39 m）、北面が8.0尺（2.36m）と10.5尺（3.10 m）、11.0尺（3.25 m）、12.0尺（3.54 m）とややばらつきがある。梁行は、東西面ともに9.5尺（2.80 m）と10.0尺（2.95 m）と揃えており、桁行と平行する位置に棟木が通るように設計されている。身舎に付く南面の廂は、9.0尺（2.66 m）、10.0尺（2.95 m）、12.0尺（3.54 m）とさらに長い。身舎の東側には間仕切りが設けら



PPD126
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山ブロック2～5 mm程微量含む 柱痕
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 地山ブロック1～5 cmを多量含む 掘り方埋土
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山砂（5層）を多量含む 掘り方埋土
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性強 締まり密 地山
5 2.5Y4/1～4/2 黄灰色～暗灰黄色砂質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
※丸柱が抜根に進行する
PPD129
（1）10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック1～30 cm多量含む
※空断面（略注記のみ）
PPE729
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや緩 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック1～8 cmを少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや緩 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3～12 cmを多量に含む 柱抜き取り痕
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/1 灰白色シルトブロック2～10 cmを多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR8/2 灰白色シルトブロック10～12 cmを多量に含む 掘り方埋土
5 10YR7/1 灰白色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR2/2 黒褐色シルトを少量含む 掘り方埋土
PPC731
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルトブロック5～15 cmを多量に含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/1 灰白色シルトブロック15 cm前後を多量に含む 掘り方埋土
PPC732
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック10～15 cm多量に含む 掘り方埋土
3 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まり中 5GY7/1 明オリーブ灰色シルトブロック10 cm前後を多量に含む 掘り方埋土
PPE733
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック10～20 cmを多量に含む

第68図　SBE10 掘立柱建物（3）

れており、身舎と同じく9.5尺（2.80ｍ）と10.0尺（2.95ｍ）で区切られ、棟持ち柱であるPPC533・PPD127と揃うPPC487が造られている。主軸方向は、東西方向のN79.01°Wである。確認した柱穴は計19個で、概ね方形基調の平面形である。柱根が残存する柱穴は西面の入側柱であるPPC479で、抜き取るために南方向へ斜め倒したものの抜き取れずに切断したと考えられる。773柱材の樹種はクリ、直径40㎝前後の柱根で丸太材をそのまま利用しており、原木丸太材を河川や陸を運搬した際に掛けた縄がずれて解けないように固定した筏穴（目途穴）が穿たれている。底面には、釿などによる調整加工痕が確認できる。西面身舎北西隅のPPC513からも775柱材（コナラ節コナラ属）が確認されており、PPC534以前の柱穴であるPPC513上部に修繕目的か設置された柱材と考えられる（遺存状態悪く、表のみ掲載）。南面廂部分の南西隅PPC478、南東隅PPE727、西面身舎北西隅PPC534、東面中央棟持ち柱のPPD127には礎板・枕木が設置されており、PPC478は同一個体かと見られる771・772枕木（いずれもクリ）、PPE727は同一個体と見られる781・782枕木（いずれもクリ）、PPC534は同一個体と見られる776・777枕木（いずれもクリ）、PPD127は同一個体と見られる779・780枕木（779は樹種未同定・780はクリ）が出土している。いずれも、解体した別建物の廃材を利用した可能性が高い。柱の配置からは柱筋は強い規制が窺われるが、柱間に関してはほぼ等分になっていて柱筋を外れなければ可とされたことが推測される。東面が斜めに取り付く変則的な形であるが、身舎と南面の廂については非常に規格性が高い。また、10.0尺（2.95ｍ）を超え、12.0尺（3.54ｍ）まで柱間寸法として用いられている点からも、格式高い建物であると考えられる。

南面廂部分の北西隅PPC478埋土から、69土師器坏片と70土師器甕片が出土した。69は外面正位に墨書「十万」が入れられている。

前述のPPC479から出土した773柱材について年代測定を実施したところ、786calAD-832calAD（45.5％・1σ）の測定値を得た。2σでは、772calAD-885calAD（92.3％）を示している。最外年輪部分の採取であることから、より伐採年代に近い値とみられる。

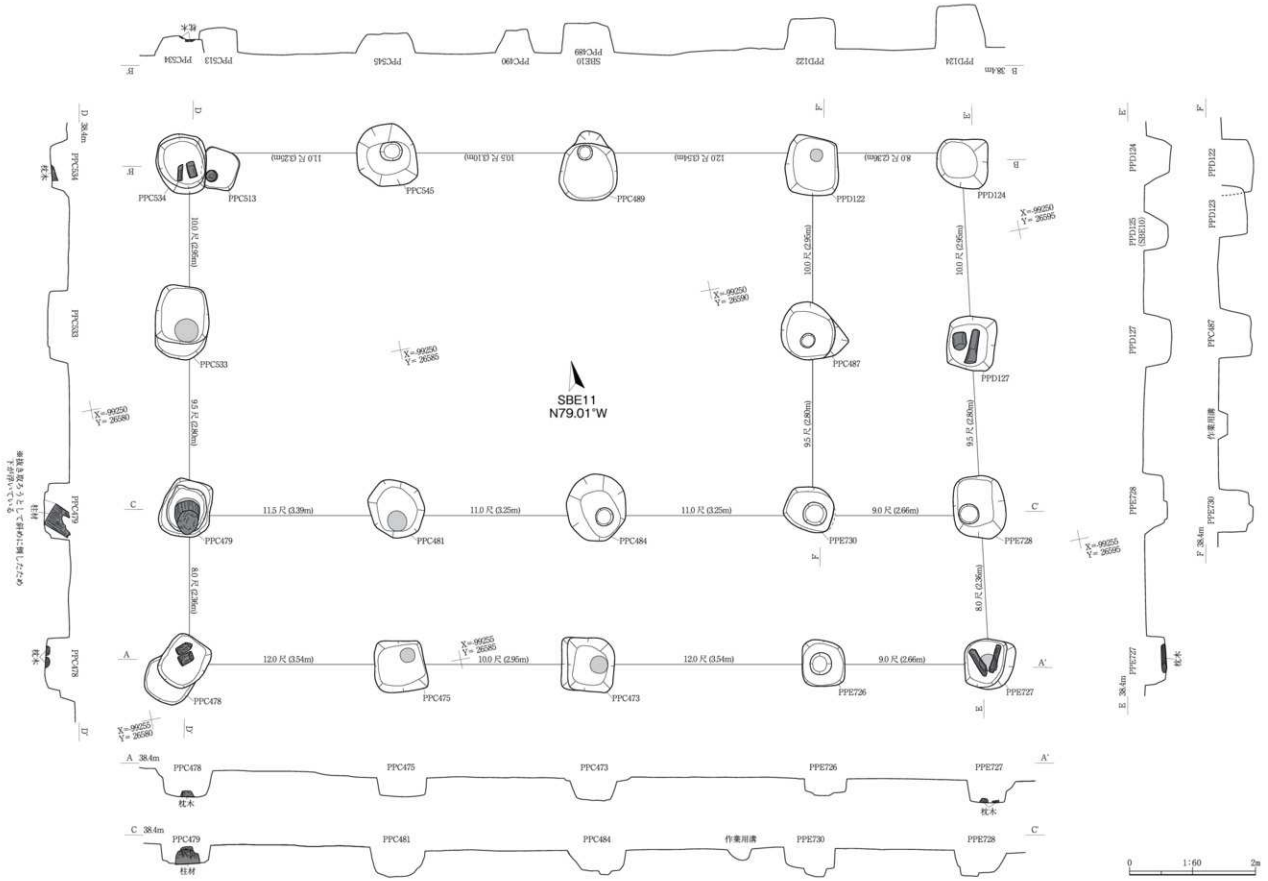
南面に廂を持つ間仕切りのある片廂建物、概ね方形基調の柱穴掘り方、年代測定から8世紀第4四半期後半～9世紀第2四半期前半の年代値を得たことから、平安時代に属する居住を目的とする中心的な建物と推定される。（北田）

（b）竪穴建物

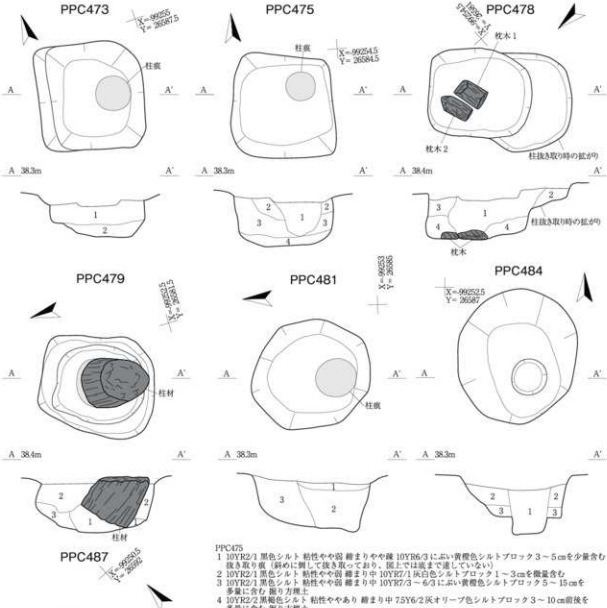
SIA1 竪穴建物（第73図、写真図版57）

調査区西側A1区のX＝-99235、Y＝26460付近に位置する。令和2年度調査。Ⅴ層上面で黒褐色土の不整形プランとして検出した。検出時は長方形プランの一辺に楕円形のプランが重なるような形状に見えたため、重複も考慮し精査した結果、一連の遺構と判断した。主体となる竪穴部の平面形は長方形基調であると推測されるが、東壁には歪な楕円形をした土坑状の張出し部を伴う。張出し部までを含んだ規模は4.25×4.06mで、残存深度は24㎝である。壁・床ともにⅤ層を掘り込んで形成されている。床面は竪穴部の中央及び壁際に浅い窪みが見られるが、窪みを除いた箇所は概ね平坦である。中央に位置する窪みは壁から30～80㎝程内側の範囲に10㎝程の深さで数箇所掘り込まれており、その配置は円形にめぐるように分布する。それぞれの形状は不整形であるものの、配置に規格性が見られることから柱痕跡の可能性などが考えられる。一方、壁際の窪みは本遺構形成時の掘り方と解釈した。壁は南西側の攪乱箇所を除いてほぼ全周する。壁面は外側へと緩やかに開いて立ち上がる。なお、張出し部の役割としては推測の域を出ないが、棚状の施設の可能性などが考えられる。埋土は3層に分層した。本遺構の最下層には地山ブロックを含んだ黄灰色粘土質シルト（3層）が薄く堆積する。

SBE11



第 69 図　SBE11 掘立柱建物跡（1）



PPC487
X=-99253.5
Y=-26984
柱抜き取り時の拡がり
A 38.3m

PPC473
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック3cm前後を少量含む 掘り方埋土
2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3～10cmを多量に含む 掘り方埋土

0　1:30　1m

PPC475
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトブロック3～5cmを少量含む 抜き取り痕（踏めに倒して抜き取っており、底上では残まで達していない）
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/1 灰白色シルトブロック1～3cmを微量含む
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/2～6/3 にぶい黄橙色シルトブロック5～15cmを多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まりや中 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルトブロック3～10cm前後を多量に含む 掘り方埋土

PPC478
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径2～3cmを少量、西側に 10YR4/1 褐灰色シルトブロック3～5cmを少量含む 抜き取り痕
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3～5cmを多量に含む 抜き取り痕
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR4/1 褐灰色シルトブロック3～5cmを少量含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3～10cmを多量、3cm前後の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

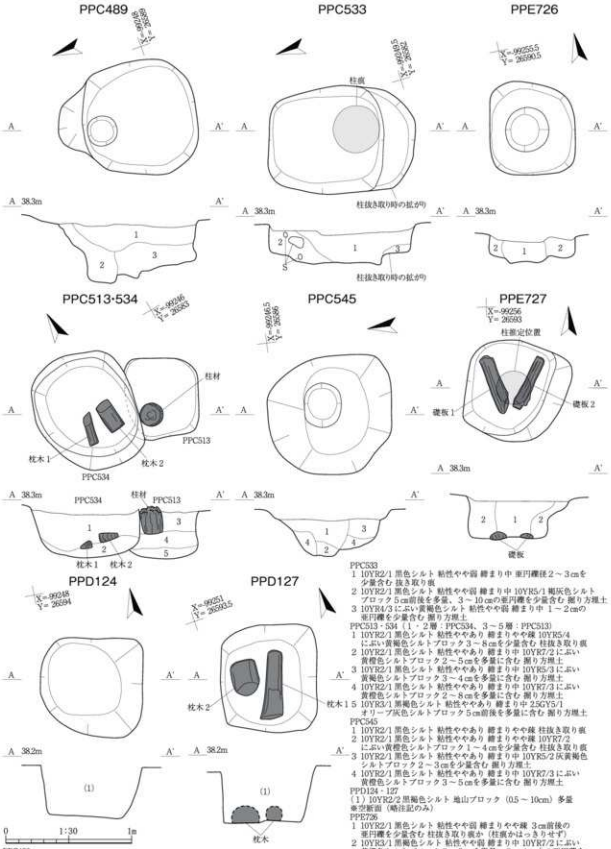
PPC479
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3cm前後を少量含む 柱抜き取り時に柱の脇間に掘り方埋土が流入した痕
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック3～10cmを多量、2～5cm大の亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや 3cm程の亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC481
1 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR7/1 灰白色シルトブロック1～4cmを少量含む 柱抜き取り後の埋積層
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトブロック2～3cmを微量含む 柱抜き取り後の埋積層
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトブロック5～15cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC484
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや緩 10YR8/3 浅黄橙色シルトブロック4～6cmを少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック5～10cmを少量含む 掘り方埋土
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性ややあり 締まりや中 10YR8/2 灰白色シルトブロック2～4cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC487
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～2cm大の亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR5/6 黄褐色砂質シルトを多量に含む 掘り方埋土
3 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりや 2cm前後の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりや中 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトを少量含む 掘り方埋土
5 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりや中 2cm前後の亜円礫を少量含む

第70図　SBE11 掘立柱建物（2）



PPC489
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 10YR8/2 灰白色シルトブロック 5cm前後を多量に含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 2cm前後を微量含む 柱抜き取り痕
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック 3～15cmを多量に含む 掘り方埋土

PPC533
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 亜円礫径 2～3cmを少量含む 抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR5/1 褐灰色シルトブロック 5cm前後を多量、3～10cmの亜円礫を少量含む 掘り方埋土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 1～2cmの亜円礫を少量含む 掘り方埋土

PPC513・534（1・2層：PPC534、3～5層：PPC513）
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや強 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック 3～8cmを少量含む 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 2～5cmを多量に含む 掘り方埋土
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック 3～4cmを多量に含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック 2～8cmを多量に含む 掘り方埋土
5 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まり中 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルトブロック 5cm前後を多量に含む 掘り方埋土

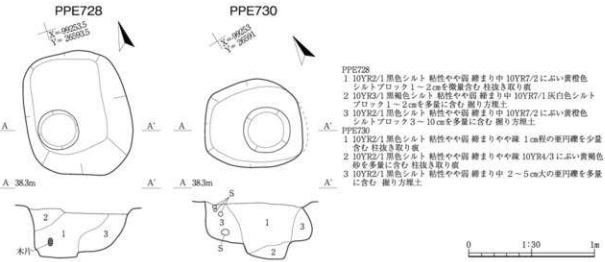
PPC545
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや強 柱抜き取り痕
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まりやや強 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 1～4cmを少量含む 柱抜き取り痕
3 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック 2～3cmを少量含む 掘り方埋土
4 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり 締まり中 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック 3～5cmを多量に含む 掘り方埋土

PPD124・127
（1）10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック（0.5～10cm）多量
※空断面（略注記のみ）

PPE726
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 3cm前後の亜円礫を少量含む 柱抜き取り痕か（柱痕かはっきりせず）
2 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 2～3cmを微量、2～4cm大の亜円礫を多量に含む 掘り方埋土

PPE727
1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや強 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトブロック 3cm前後を微量含む 柱抜き取り痕であろう
2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR7/2～6/3 にぶい黄橙色シルトブロック 2～6cmを多量に含む 掘り方埋土

第71図　SBE11 掘立柱建物（3）



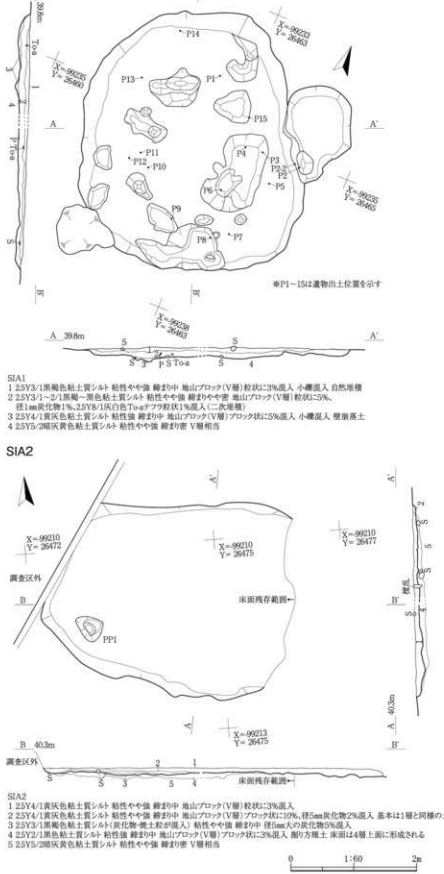
第 72 図　SBE11 掘立柱建物（4）

西壁の周辺や窪みに堆積が観察できる土層であり、掘り方を埋め戻した際の人為堆積土と捉えた。3層の上位には、埋土の主体となる黒褐～黒色粘土質シルト（1・2層）が堆積しており、自然堆積の様相を示す。2層には炭化物が微量に含まれるほか、上面には十和田 a 火山灰とみられる灰白色粒子が含まれる。張出し部にも2層が途切れずに堆積しており、張出し部までを一連の遺構と判断した。重複はないものの、本遺構の北西側に位置する掘立柱建物 SBA3 と近接する。

埋土・床面直上から土師器、須恵器、瓦が出土した。遺物は床面全域に散在するが、特に東側の床面からは土師器の坏、高台坏の出土が多く見られた。その内の 71～84、520 の 15 点を掲載した。出土遺物の年代観から、9 世紀後半～10 世紀初頭が推定される。　（野中）

SIA2 竪穴建物（第 73 図、写真図版 58）

調査区西側 A3 区の X＝-99210、Y＝26475 付近に位置する。令和 2 年度調査。V 層上面で黄灰色土の長方形プランとして検出した。本遺構の東側は流出し、失われている。また、西壁の一部が調査区外に位置する。残存壁から平面形は長方形基調であると推測される。規模は（3.87）×3.14 m で、床面までの残存深度は 14㎝である。壁は V 層を掘り込んで形成されている。床は V 層を掘り込んだ後、人為的に埋め戻してから形成されている。床面は多少の凹凸はあるものの、概ね平坦である。壁は東側を除いてほぼ全周しており、調査区外に位置する西壁も残存するものと考えられる。残存する壁面はやや直立気味に立ち上がる。埋土は、4 層に分層した。本遺構の最下層には地山ブロックを含んだ黒色粘土質シルト（4 層）が堆積しており、掘り方を埋め戻した際の人為堆積土と捉えた。よって、床面は 4 層上面に形成されたものと解釈している。4 層の上位には、炭化物・焼土粒を微量に含んだ黒褐色粘土質シルト（3 層）が薄く堆積する。埋土の主体となるのは遺構上部に堆積する黄灰色粘土質シルト（1・2 層）で、西側からの流入による自然堆積の様相を示す。1・2 層ともに基本は同様の土質であるが、2 層には炭化物が微量に含まれることから細分した。なお、東側の床面及び壁については 1 層の流入時に押し流されたものと推測する。床面の南西隅に PP 1 柱穴状ピット 1 基を検出した。平面形はやや歪な楕円形で、規模は 43×37cm、深さ 26cm である。底面中央は他と比べてさらに一段深く掘り込まれており、柱痕と捉えた。埋土は中央部の柱痕埋土と外側の掘り方埋土の 2 層に分層した。掘り方埋土は本遺構の掘り方埋土である 4 層と同様である。柱痕埋土は 3 層に似るものの、炭化物・焼土粒は含まれず、腐食した木質が僅かに出土した。重複はないものの、本遺構の北東側に



第73図　SIA1・2竪穴建物

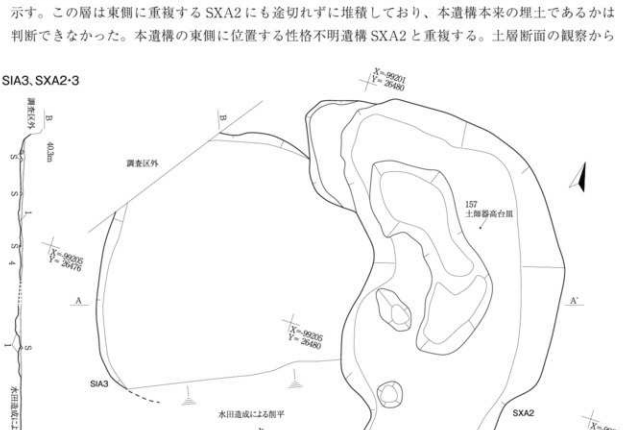
位置する竪穴状遺構SIA3、東側に位置する性格不明遺構SXA3と近接する。

埋土・床面直上から土師器、須恵器が出土した。遺物は床面全域に散在する。その内の85～90の6点を掲載した。出土遺物の年代観から、9世紀中頃～後半が推定される。　（野中）

SIA3 竪穴建物（第74図、写真図版59・60）

調査区西側A3区のX＝-99205、Y＝26480付近に位置する。令和2年度調査。V層上面で黄灰色土の不整形プランとして検出した。検出時はSXA2を含めた一周り大きなプランとして見えていたが、精査した結果、重複する別遺構と判断した。本遺構の南側及び東側は削平やSXA2との重複によって失われている。また、北西壁が調査区外に位置する。規模は(4.37)×(3.84)mで、床面までの残存深度は11cmである。壁・床はV層を掘り込んで形成されており、多少の凹凸はあるものの、概ね平坦である。壁は北～西壁が残存しており、調査区外に位置する北西壁も残存するものと考えられる。残存

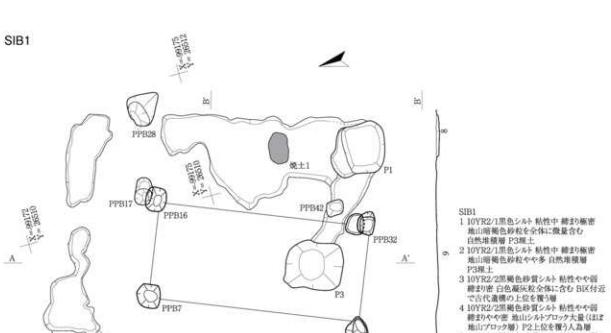
する壁面は外側へと緩やかに開いて立ち上がる。本遺構に関わる埋土は２層に分層した。最下層には、細砂混じりの黒色粘土質シルト（A-A’の５層）が堆積する。西壁付近の窪みに堆積が観察できる土層であり、掘り方を埋め戻した際の人為堆積土の可能性がある。埋土の主体となるのは細砂混じりの黄灰色粘土質シルト（A-A’の２層、B-B’の１層）で、西側からの流入による自然堆積の様相を示す。この層は東側に重複する SXA2 にも途切れずに堆積しており、本遺構本来の埋土であるかは判断できなかった。本遺構の東側に位置する性格不明遺構 SXA2 と重複する。土層断面の観察から

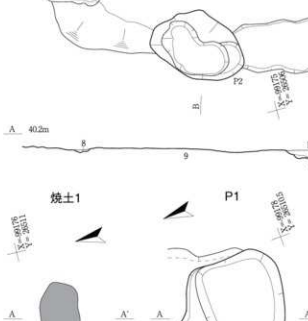


SIA3-SXA2 断面A
1 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 小礫多数混入 地山ブロック粒状に3%混入
2 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性中 締まり中 小礫混入 地山ブロック(V層)粒状に10%混入 SIA3まで覆う B-B’の1層に相当
3 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト 粘性強 締まり中 地山ブロック粒状に3%混入
4 2.5Y2/1黒色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性強 締まりやや緩 小礫混入 地山ブロック(V層)粒状に2%混入 SXA2内の一段下がった箇所に堆積
5 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性強 締まりやや緩 SIA3内の一段下がった箇所に堆積 掘り方の埋土か
6 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 V層相当 礫混入
SIA3-SXA3 断面B
1 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性やや強 締まり中 礫混入 地山ブロック粒状に10%混入 SIA3に直接関わる埋土であるかは不明 A-A’の2層に相当
2 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山ブロック(V層)粒状に2%混入 SXA3の埋土
3 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 地山ブロック(V層)ブロック状に10%混入 底面に顕著な凹凸あり
4 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 V層相当 礫混入

0　1:60　2m

第 74 図　SIA3 竪穴建物、SXA2・３性格不明遺構





焼土1
1 5YR4/4にぶい赤褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 焼土
2 10YR2/1黒色～10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり密 地山ブロック径5～10mm少量 住居かまど跡か堆土
3 10YR3/1黒褐色～2/2黒褐色粘土 粘性やや強 締まり密 地山上位廃棄層（Ⅳ層相当）
P1
1 10YR2/2黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり密 白色凝灰粒全体に含む 竪穴1層と同じ
2 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まり密 断面B-5層（P2埋土下部）に良く似る
3 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まり密 地山ブロック径5～10mm極微量含む
4 断面A-4層と同じ 地山

は新旧関係について判断することができなかった。しかしながら、本遺構とSXA2を一連の遺構と捉えるには平面形・断面形に差異があること、SXA2の埋土下部より本遺構の想定される年代よりも新しい時期の遺物が出土したことから総合的に判断して本遺構がSXA2より古い可能性があると判断した。また、重複関係はないものの、本遺構の南西側に位置する竪穴状遺構SIA2、南側に位置する性格不明遺構SXA3と近接する。

埋土・床面直上から土師器、須恵器が出土した。遺物の出土は僅少である。その内の91須恵器甕片1点を掲載した。出土遺物の年代観から、9世紀中頃～後半が推定される。

（野中）

SIB1 竪穴建物（第75図、写真図版59・60）

調査区北西側B2区のX＝-99175、Y＝26510付近に位置する。令和2年度調査。Ⅳ層

第75図　SIB1 竪穴建物

相当（黄褐色シルト）面において焼土生成箇所を検出し、これをカマド燃焼部と仮定して周辺の精査を進めたところ、概ね方形を呈する掘り込みが確認されたことから、竪穴建物の残欠と判断したものである。床面以下まで削平を受けており、本来の形状は不明である。掘方等の痕跡から、東西長4.5 m・南北長5.0 m前後の方形を呈するものとみられる。以下、この範囲を想定プランとする。削平により竪穴本体の埋土は残存しないが、掘り方及び付属土坑等の埋土を観察できる。壁・床面は残存しない。図示の通り想定プラン内からは柱穴の可能性を持つ７個の小穴を検出した。うち４個（PPB7・16・30・32）については、竪穴本体（想定プラン）と軸線の揃った方形配置が看取される。想定プラン東壁際南寄りの地点で検出した被熱赤変範囲（楕円形48×30cm）が、カマド燃焼部の痕跡とみられる。燃焼面は削平で失われ、その下位に及んだ赤変部が残存したものであろう。袖部・煙道等、構造上の他の痕跡も認められなかった。付属土坑は３基である。土坑は、竪穴南東隅部と想定される位置（カマド南隣）にSIB1-P1、西壁際中央付近に同P2、南壁際中央のやや内側に同P3を検出した。P1はカマド脇に設けられた土坑で、竪穴本体の南東隅に沿うような箱形を呈する。P2は二つが重複したような不整楕円形を呈するが精査の結果分離できず一個のものと判断した。P3は他の２基に比して浅く、上述した柱穴の方形配置内の南半部中央に位置している。またP1とP2の間は浅い溝状掘り込みが連絡している。これらの土坑はいずれも自然堆積によって埋没しており、廃絶時点において開口状態にあったことを示唆している。北西隅にSBB1掘立柱建物プランが重複する。直接的な切り合いがなく先後関係は不明である。

屋内貯蔵穴と見られるP1土坑から、92・93土師器坏と94小型甕が出土した。92・93とも底部周辺に手持ちヘラケズリを施しており、92は外面正位に「閏」ヵが墨書される。

P1から出土した土器の年代観から、９世紀前葉～中葉に比定される。　（村上・北田）

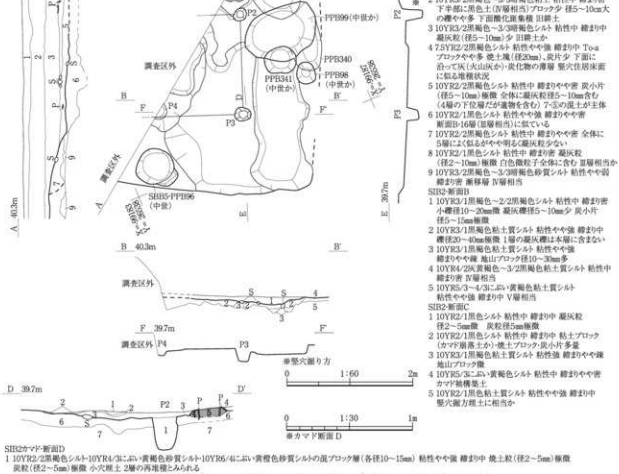
SIB2 竪穴建物（第76図、写真図版60・61）

調査区北西側B3区のX＝-99183、Y＝26538付近に位置する。令和２年度調査。調査区境界において焼土生成箇所を検出したのち、その周囲に広がる土器片及び焼土・炭化物小片を含む暗褐色範囲として認識した。精査の結果、竪穴建物の一部と判断したものである。北東側が調査区外にあり全体形状は不明だが、概ね方形基調の平面形を想定できる。壁面は残存しないが、付属土坑および掘り方等の痕跡から推定される規模は、東西長約4.0 m、南北長3.0 m以上である。図に示した断面A–A'は、本遺構を横断する調査区境界の堆積状況を記録したものである。本遺構の埋土に相当するのは４および５層で、５層上面が床面とみられる。同面すなわち４と５の層界には、灰白色火山灰の薄層が挟在し、土師器等の遺物片や炭化物・焼土塊が面的に散在する。５層は、基本土層Ⅲ層に相当する７・８層土のブロック層であり、本遺構の掘り方埋土と判断した。この土層が包含する少量の遺物片・炭化物等は、同地点の先行遺構（平安時代建物跡等）に由来するものとみられる。６層は５層のさらに下位の掘り込みの埋土だが、本遺構の掘方か、別の先行遺構かについては明らかでない。後世の削平が床面前後まで及んでいるため、壁面は失われ、床面は４・５層が直接接する範囲にのみ残存する状況である。残存部を見る限り床面は概ね平坦に整っているが、顕著な硬化部は認められない。プラン内からは３つの柱穴状ピットP2～4を検出し、このうちP2・３の２個が本住居に伴う柱穴とみられる。P2には、柱材の消失（抜去か）後に流入した焼土ブロック等が観察される。掘り方は不規則ながらも壁際が深くなる傾向にあり、特に南壁直下はさらに一段低く、幅70～100cm程の帯状の掘り込みが明瞭に認められる。掘り方底面には掘削（鋤先）痕が密に分布する。カマドは東壁際南寄りの位置にその一部を検出した。南側袖部のみが調査区内にあり、以北は調査区外に連続するものとみられる。

この袖部は、床面レベルに倒立させた土師器小型甕を芯材に、Ⅳ層（地山）粘土を盛り上げて構築されている。図中の焼土範囲は燃焼部焼土ではなく、袖部の内部に及んだ被熱赤変部のうち削平後に残存した範囲を示している。赤変強度は北側ほど高い。カマドの崩壊に伴う焼土ブロック・炭化物等は、5層直上に散在する様子が観察された。

またカマドの南隣、竪穴本体の南隅部において、土坑P1を検出した。上述の焼土ブロック・炭化物等は、5層上面（床面）から連続して本土坑内部にも流入している（断面D–D'2層）。住居の廃絶時に開口していた状況を示すことから、カマド脇に付属する貯蔵穴等の機能が想定される。内部からは略完形の土師器坏が複数出土した。柱穴PPB96・98・99・100・341を切っている。なお PPB98・99・341を切る長楕円形ピット PPB340は、精査の結果、本住居に伴う壁溝の一部と判断した。

屋内貯蔵穴と見られるP1土坑やカマドから出土した土器のうち、95内外面黒色処理の土師器坏、



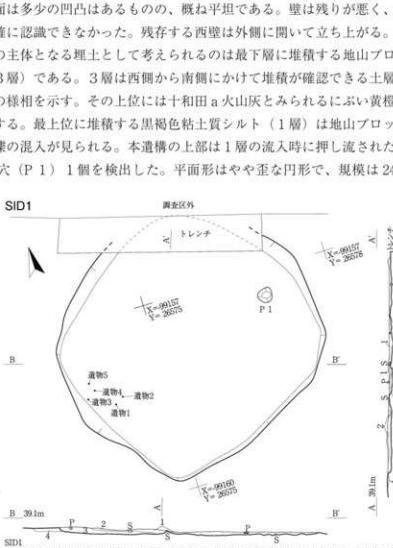
第76図　SIB2竪穴建物

96～100土師器坏、101須恵器長頸瓶、102須恵器甕、103・104土師器小型甕（103は非ロクロ）、105土師器長胴甕を掲載した。また、本遺構に先行して調査した焼土B1は、本遺構カマド上面に伴うと見られるため、出土遺物は本遺構と一体のものとして捉える。焼土B1からは、230須恵系a坏、231土師器坏、232土師器小型甕（非ロクロ）で、103と232は同形状の非ロクロ成形である。須恵器坏は出土しておらず、須恵系a坏が少量ある。土師器坏に手持ちヘラケズリ再調整が残ることから、9世紀後葉～10世紀初頭頃の土器と見られる。遺構床面付近の埋土にTo-aテフラが二次堆積することから、概ね土器の年代観と齟齬はないと考えられる。（村上・北田）

SID1 竪穴建物（第77図、写真図版61・62）

調査区北東側D1区のX＝-99157、Y＝26575付近に位置する。令和2年度調査。Ⅴ層上面で黒褐色土ににぶい黄橙色火山灰が混じった方形プランとして検出した。本遺構の北側は試掘トレンチの掘削時に失われている。また、遺構上部が全体的に流出しているためか、壁の立ち上がりが曖昧であったため、図上では壁と判断して実際に記録した範囲を破線で図化することとした。平面形は方形基調であると推測される。推定規模は（4.11）×（3.74）mで、残存深度は8cmである。壁・床はⅤ層を掘り込んで形成されている。床面は多少の凹凸はあるものの、概ね平坦である。壁は残りが悪く、特に標高の低い東側に至っては明確に認識できなかった。残存する西壁は外側に開いて立ち上がる。埋土は、3層に分層した。本遺構の主体となる埋土として考えられるのは最下層に堆積する地山ブロックを含んだ黒色粘土質シルト（3層）である。3層は西側から南側にかけて堆積が確認できる土層で、西側からの流入による自然堆積の様相を示す。その上位には十和田a火山灰とみられるにぶい黄橙色火山灰の二次堆積層が薄く堆積する。最上位に堆積する黒褐色粘土質シルト（1層）は地山ブロックと炭化物を微量に含むほか、小礫の混入が見られる。本遺構の上部は1層の流入時に押し流されたものと推測する。床面の東側に柱穴（P 1）1個を検出した。平面形はやや歪な円形で、規模は24×23cm、深さ7cmである。埋土は単層で、本遺構の埋土である1層と同様である。重複はないものの、本遺構の南側に位置する掘立柱建物SBD1、南東側に位置する土坑SKD1と近接する。

埋土・床面直上から土師器、須恵器が出土した。遺物は、比較的埋土の残りが良い西側の床面直上からの出土が多く、その大半が坏である。その内の106～119の14点を掲載した。内訳は106～109土師器坏、110・111須恵系a坏、112～117須恵系b坏、118須恵系b高台坏、119土師器長胴甕である。須恵器はなく、少量の土



第77図　SID1 竪穴建物

師器坏と須恵系土器の組成から、10 世紀前葉～中葉に比定される。　（野中・北田）

（c）土坑

SKA1 土坑（第 78 図、写真図版 62）

調査区西側 A6 区の X＝-99267、Y＝26461 付近に位置する。令和 3 年度調査。農道部分に設定したトレンチ内で検出した。東西はトレンチにかかっており全形は不明だが長楕円形を呈する。長さ 0.54 m以上、幅 0.86 m、深さは 25cmで灰黄褐色粘土質シルト地山ブロックを散在する黒色粘土質シルトを水成堆積する。少量の土師器と須恵器を出土しており、平安時代の土坑と考えられる。（北田）

SKB1 土坑（第 78 図、写真図版 62）

調査区北西側 B3 区の X＝-99187、Y＝26531 付近に位置する。令和 2 年度調査。Ⅲ～Ⅳ層相当の暗褐色土面において、灰白火山灰が環状に分布し、内部に土器片等を含む地点として検出した。開口部径は 1.5×1.3 m の略円形を呈する。底面までの残存深度は 34cmである。壁はほぼ直立して立ち上がり、底面は平坦に整っている。底面を直に覆うのはⅢ層土を主体とする黒褐色土で、壁際ではⅣ層土ブロックを含む。その上位に灰白色火山灰の小ブロックを含む 3 層、ほぼ火山灰からなる 2 層、そしてⅡ層相当の暗褐色土 1 層の順に堆積している。全体にレンズ状堆積の様相を呈し、廃絶後、壁崩落土及び周辺からの流入土により埋没したものと考えらえる。4 層上面からは土師器片がまとまって出土した。埋没途上、4 層堆積後に内部に投入されたものと推測される。なお、当該遺構の断面実測原図（土層注記含む）を調査中に紛失してしまった。掲載の断面図は、標高値および補正写真をもとに復元・作図したものであることをお断りしておきたい。

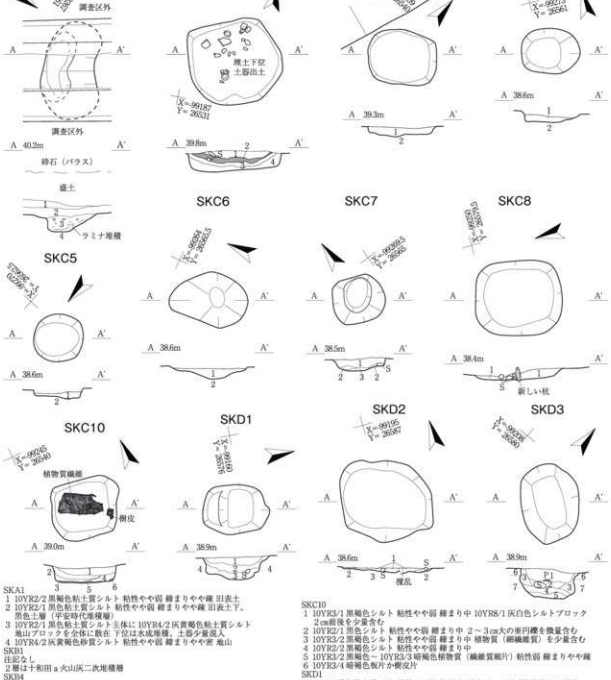
4 層からまとまって出土した土器のうち、120～122 土師器坏、123・124 須恵系 a 坏、125～129 須恵系 b 坏、130 土師器甕、131 土師器長胴甕を掲載した。120～122 土師器坏はいずれも手持ちヘラケズリ再調整が施され、122 外面正位には「吊（弔）」ヵが墨書される。須恵器はなく、少量の土師器と須恵系土器の組成から、10 世紀前葉～中葉に比定される。上位に堆積する To-a テフラとも調和的である。　（村上・北田）

SKB4 土坑（第 78 図、写真図版 62）

調査区中央西側 B6 区の X＝-99209、Y＝26540 付近に位置する。令和 3 年度調査。SDB1 堀と SDB2 堀に挟まれた、中世末の土塁基底部直下から検出した。長さ 1.08 m、幅 0.87 m、深さ 14cmの楕円形で、底面は凹凸があるものの概ね平坦である。堆積土は黒色粘土質シルトだが、底面付近に壁面崩落土と見られるにぶい黄褐色砂質シルトを堆積していることから、開口した状態で使用され、その後自然堆積で埋没したと考えられる。出土遺物はないが、土塁基底部のⅢ層で確認したことから、平安時代に属すると推定した。　（北田）

SKC4 土坑（第 78 図、写真図版 63）

調査区中央 C2 区の X＝-99273、Y＝26561 付近に位置する。令和 3 年度調査。SBE6 や SBC2 掘立柱建物に隣接している。長さ 0.93 m、幅 0.72 m、深さは約 10cmの楕円形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は、黒色粘土質シルト主体で自然堆積したものと見られる。埋土上位から土師器や須恵器を少量出土しており、平安時代に属する土坑と考えられる。　（北田）



SKA1
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 旧表土
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 旧表土下。黒色土層（平安時代遺構）
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 土体に10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 地山ブロックを全体に数在 下位は水成堆積、土器少量混入
4 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SKB1
注記なし
2層は十和田a火山灰二次堆積層

SKB4
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 底面付近に10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト粒1～3cm大を少量散在 壁面崩落による堆積
2 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SKC4
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
1～2cm大の小礫2～3％散在 自然堆積
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 粘性弱 締まりやや密 地山

SKC5
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
2～8cm大の小～中礫2～3％散在 自然堆積
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 粘性弱 締まりやや密 地山

SKC6
1 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
1～2cm大の小礫1～2％散在 水質少量出土
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SKC7
1 10YR2/1黒色シルト 亜円礫を少量含む 粘性やや弱 締まり中
2 7.5YR5/6明褐色砂 粘性弱 締まり中 径2cm前後の亜円礫を少量含む
3 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 自然堆積
東土器群片少量出土 平安時代の土坑であろう

SKC8
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりや 10YR6/2灰黄褐色シルトブロック 3～5cmを少量、3～10cm大の亜円礫を多量に含む 人為堆積

SKC10
1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR8/1灰白色シルトブロック 2cm前後を少量含む
2 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 2～3cm大の亜円礫を微量含む
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 植物質（繊維質）を少量含む
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
5 10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色植物質（繊維質細片）粘性弱 締まりやや緩
6 10YR3/4暗褐色板片か樹皮片

SKD1
1 2.5Y2/1黒色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 地山ブロック(V層)粒状に5%混入
2 2.5Y2/1黒色粘土質シルト 粘性強 締まりやや緩 地山ブロック(V層)5%混入
3 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト 粘性強 締まりやや密 地山ブロック(V層)2%混入
4 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強 締まり密 V層相当

SKD2
1 2.5Y2/1黒色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 10cm大の礫混入
2 2.5Y2/1黒色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 地山ブロック(V層)2%混入
基本的には1層とほぼ同様

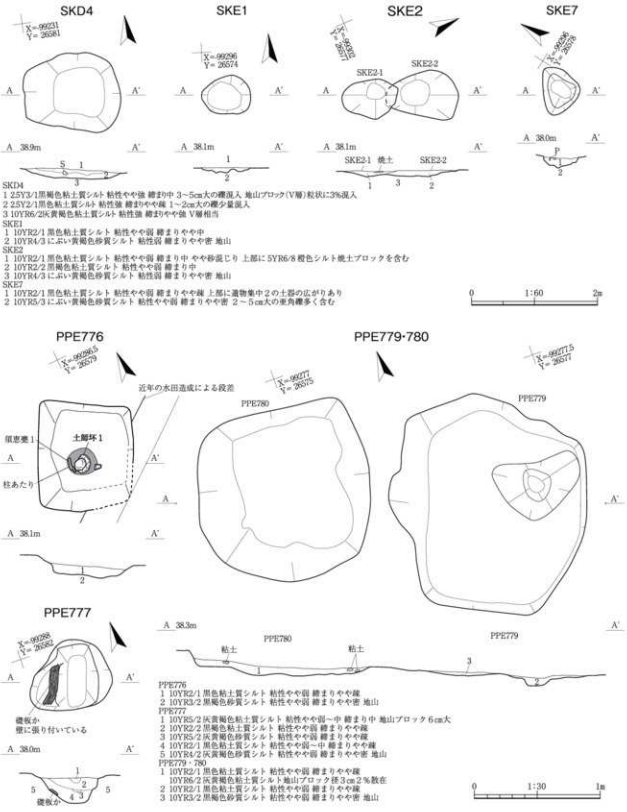
SKD3
1 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 3～5cm大の礫混入
地山ブロック(V層)粒状に5%混入 下面に土器(坏)あり
2 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まりやや緩 混入物のないほぼ均一な土
3 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや緩 地山ブロック(V層)粒状に3%混入
4 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まりやや緩 地山ブロック(V層)粒状に2%混入
5 2.5Y2/1黒色粘土質シルト(凝砕混じり) 粘性強 締まり中 地山ブロック(V層)粒状に2%混入
6 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性やや弱 締まり密 礫多量 V層相当
7 10YR7/2にぶい黄橙色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 V層相当

0　1:60　2m

第78図　平安時代の土坑（1）

SKC5 土坑（第78図、写真図版63）

調査区中央C2区のX＝-99270、Y＝26562.5付近に位置する。令和3年度調査。SKC4やSKC7土坑と隣接している。長さ0.78m、幅0.75m、深さ12cmの円形で、底面西側がやや窪んでいる。堆積土は黒色粘土質シルト主体で自然堆積したものと考えられる。埋土上位から土師器や須恵器を少量出



第79図　平安時代の土坑（2）、柱穴

土しており、平安時代に属する土坑と考えられる。（北田）

SKC6 土坑（第 78 図、写真図版 63）

調査区中央 C2 区の X ＝-99264、Y ＝26565.5 付近に位置する。令和３年度調査。SBC2 と SBE8 掘立柱建物に挟まれた位置にある。長さ 1.25 m、幅 0.87 m、深さ 17cmの不整な楕円形で、断面形は皿形を呈する。堆積土は黒色粘土質シルト主体で少量の木質を含む。埋土から土師器を少量出土しており、平安時代に属する土坑と考えられる。（北田）

SKC7 土坑（第 78 図、写真図版 63）

調査区中央 C2 区の X ＝-99269.5、Y ＝26565 付近に位置する。令和３年度調査。SKC5 土坑と隣接している。長さ 0.83 m、幅 0.73 m、深さ 18cmの楕円形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒色シルト主体で自然堆積したものと考えられる。埋土から土師器・須恵器を少量出土しており、平安時代に属する土坑と考えられる。（北田）

SKC8 土坑（第 78 図、写真図版 64）

調査区中央東側 C2 区の X ＝-99250、Y ＝26579.5 付近に位置する。令和３年度調査。SBC8 及び SBE11 掘立柱建物と隣接している。長さ 1.38 m、幅 1.17 m、深さ 14cmの隅丸方形で、底面はほぼ平坦である。遺構中央には、近年の水田に係わる新しい杭が打ち込まれている。堆積土は黒色シルト主体で、３～10cm大の亜円礫を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物はないが堆積土の様子から、平安時代に属する土坑と考えられる。（北田）

SKC10 土坑（第 78 図、写真図版 64）

調査区中央西側 C1 区の X ＝-99245、Y ＝26540 付近に位置する。令和３年度調査。SBC7 掘立柱建物と隣接している。長さ 1.08 m、幅 0.94 m、深さ 23cmの隅丸方形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色～黒色シルト主体で、下位の３層中には植物質繊維が少量、また底面直上の５層は黒褐色～暗褐色の植物質繊維と６層は暗褐色の板・樹皮片がまとまって出土している。堆積土のうち、１～４層は自然流入土と見られることから、使用時は開口していた土坑と判断した。ただし、本遺構は SBC7 掘立柱建物の桁行西面ラインの延長線上にあり、南西隅柱 PPC822 柱穴から 22.0 尺（6.56 m）の区切りの良い位置にあることから、柱穴もしくは SBC7 掘立柱建物に関連する遺構の可能性がある。SBD3 掘立柱建物でも、梁行西面の延長線上に PPD111 柱穴が認められており、同様の性格が考えられる。埋土から土師器・須恵器がまとまって出土しており、252・253 土師器坏を掲載した。いずれも底面から外面にかけて手持ちヘラナデ・ケズリ再調整が施される。これらが SBC3 掘立柱建物の PPD111 柱穴のように、本遺構を含む建物が廃絶した後に何らかの儀式に際して、地鎮のための鎮め物として埋納されたと考えれば、柱穴としての性格が想定される。

方形基調の掘り方、SBC3 掘立柱建物・PPD111 との類似点、出土した土師器坏の年代観（９世紀第２四半期か）、平安時代に属する柱穴もしくは土坑と考えられる。（北田）

SKD1 土坑（第 78 図、写真図版 64）

調査区北東側 D1 区の X ＝-99160、Y ＝26576 付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黒色土の楕円形プランとして検出した。平面形は楕円形である。規模は 1.04×0.79 m で、残存深度は 36

cmである。壁・床はⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は南側が段状に一段高いが、それ以外の箇所は概ね平坦である。壁は全周する。壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は、３層に分層した。自然堆積の様相を示す。本遺構の最下層には黄灰色粘土質シルト（３層）が堆積する。その上位に堆積する黒色粘土質シルト（１・２層）は同様の土質であるが、含まれる地山ブロックの量で層を細分した。重複はないもの、本遺構の北側に位置するSID1竪穴建物、南側に位置するSBD1掘立柱建物と近接する。堆積土の様相や周辺の遺構の時期から古代（平安時代）が推定される。　（野中）

SKD2 土坑（第78図、写真図版64）

調査区北東側D4区のX＝-99195、Y＝26587付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黒色土の楕円形プランとして検出した。平面形は楕円形である。規模は1.44×1.29ｍで、残存深度は７cmである。壁・床はⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は東側に向かってわずかに傾斜する。壁は全周する。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は、２層に分層した。自然堆積の様相を示す。本遺構の主体となる埋土は黒色粘土質シルト（１・２層）で、基本は同様の土質であるが、２層には地山ブロックが微量に含まれ、１層には10cm大の礫が含まれることから層を細分した。重複はないものの、本遺構の南側に位置する戦国時代末のSDD1堀と近接する。埋土・底面直上から土師器を少量出土しており、出土遺物の年代観から平安時代が推定される。　（野中）

SKD3 土坑（第78図、写真図版65）

調査区北東側D4区のX＝-99208、Y＝26580付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黒褐色土の楕円形プランとして検出した。平面形は楕円形である。規模は1.27×1.02ｍで、残存深度は46cmである。壁・底はⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は概ね平坦である。壁は全周する。壁面は丸みを帯びつつもやや直立気味に立ち上がる。埋土は、５層に分層した。自然堆積の様相を示す。本遺構の主体となる埋土は黒褐色粘土質シルト（１～５層）である。いずれも基本は同様の土質であるが、含まれる混入物などで層を細分した。最下層には細砂混じりの５層が堆積する。その上位に細砂を含まない４層が堆積した後、壁際から壁崩落土と考えられる地山ブロックを含んだ３層が堆積したと考えた。その後、混入物を含まない２層、３～５cm大の礫や地山ブロックを含んだ１層の順で堆積したものと考えられる。重複なし。埋土・底面直上から土師器、須恵器が少量出土した。その内の133土師器坏１点を掲載した。回転ヘラケズリ再調整が施されており、器形から９世紀中葉～後葉とみられ、遺構の年代も同時期に推定される。　（野中・北田）

SKD4 土坑（第79図、写真図版65）

調査区中央北東側D4区のX＝-99231、Y＝26581付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黒褐色土の楕円形プランとして検出した。平面形は楕円形である。規模は152×127cmで、残存深度は15cmである。壁・床はⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は概ね平坦である。壁は全周する。壁面は緩やかに開いて立ち上がる。埋土は、２層に分層した。自然堆積の様相を示す。本遺構の主体となる埋土は下層に堆積する黒色粘土質シルト（２層）で、１～２cm大の礫を含む。その上位に堆積する黒褐色粘土質シルト（１層）は３～５cm大の礫と地山ブロックが微量に含まれる。重複はないものの、本遺構の北東側に位置するSXD2池状遺構、南側に位置するSDD2堀と近接する。埋土から土師器が少量出土していることから、平安時代が推定される。　（野中）

SKE1 土坑（第 79 図、写真図版 65）

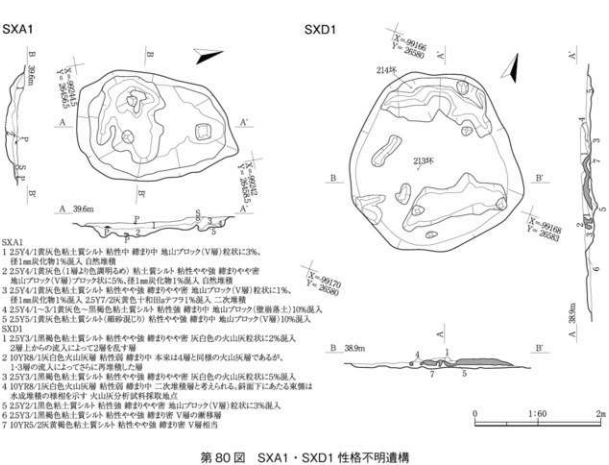
調査区中央南側 E3 区の X＝-99296、Y＝26574 付近に位置する。令和 3 年度調査。SBE1 掘立柱建物とこれに関連すると見られる遺物集中 1・2 に隣接している。長さ 0.77 m、幅 0.62 m、深さ 7 ㎝の不整な楕円形で、底面は凹凸がある。堆積土は、黒色粘土質シルト主体で自然堆積したと考えられる。埋土から土師器と須恵器が少量出土していることから、平安時代の土坑と考えられる。（北田）

SKE2 土坑（第 79 図、写真図版 65）

調査区中央南側 E3 区の X＝-99302、Y＝26577 付近に位置する。令和 3 年度調査。SBE1 掘立柱建物とこれに関連すると見られる遺物集中 1・2、SKE1 土坑に隣接している。本遺構の平面形は土坑が 2 個繋がったような形状をしており、SKE2-1 は長さ 0.87 m、幅 0.64 m、深さ 8 ㎝の不整な楕円形で、断面皿形である。SKE2-2 は長さ 1.16 m、幅 0.74 m、深さ 8 ㎝で、同じく断面皿形となる。堆積土の切り合いからは、SKE2-1 の方が新しいと見られるが時間差はほぼないと考えられる。底面はやや凹凸がある。堆積土は、黒色粘土質シルト主体で自然堆積したと考えられる。出土位置が遺物集中と近接しており、これに関連する平安時代の土坑と推定される。（北田）

SKE7 土坑（第 79 図、写真図版 66）

調査区中央南側 E3 区の X＝-99296、Y＝26578 付近に位置する。令和 3 年度調査。SBE1 掘立柱建物と関連すると見られる、遺物集中 2 を掘り下げた範囲内で確認した土坑である。長さ 0.7 m、幅 0.69 m、深さ 15㎝の不整な楕円形で、底面はやや凹凸がある。堆積土は、黒色粘土質シルト主体で自然堆積したと考えられる。遺物集中 2 の初期に掘削もしくは雨裂によって生じた坑で、遺物集中 2 を形成した SBE1 掘立柱建物と同じ平安時代の土坑と考えられる。（北田）



SXA1
1 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト 粘性中 締まり中 地山ブロック(V層)粒状に3%、
　径1mm炭化物1%混入 自然堆積
2 2.5Y4/1黄灰色(1層より色調明るめ) 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密
　地山ブロック(V層)ブロック状に5%、径1mm炭化物1%混入 自然堆積
3 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山ブロック(V層)粒状に1%、
　径1mm炭化物1%混入 2.5Y7/2灰黄色十和田aテフラ1%混入 二次堆積
4 2.5Y4/1～5/1黄灰色～黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中 地山ブロック(腰巻層さ)10%混入
5 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト(細砂混じり) 粘性やや強 締まり中 地山ブロック(V層)10%混入
SXD1
1 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 灰白色の火山灰粒状に2%混入
　2層上からの流入によって2層を乱す層
2 10YR8/1灰白色火山灰層 粘性弱 締まり中 本来は4層と同様の火山灰層であるが、
　1-3層の流入によってさらに再堆積した層
3 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 灰白色の火山灰粒状に5%混入
4 10YR8/1灰白色火山灰層 粘性弱 締まり中 二次堆積層と考えられる。斜面下にあたる来側は
　水成堆積の様相を示す 火山灰分析試料採取地点
5 2.5Y2/1黒色粘土質シルト 粘性強 締まりやや密 地山ブロック(V層)粒状に3%混入
6 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 V層の漸移層
7 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 V層相当

第 80 図　SXA1・SXD1 性格不明遺構

（d）性格不明遺構

SXA1 性格不明遺構（第80図、写真図版66）

調査区西側A2区のX＝-99242、Y＝26458.5付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黄灰色土の楕円形プランとして検出した。平面形は長方形基調であると推測される。規模は2.50×1.71ｍで、残存深度は22cmである。壁・底ともにⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は南半が北半よりも一段低く形成されており、数箇所に凹凸が見られる。壁は全周する。壁面は外側へと緩やかに開いて立ち上がる箇所と直立気味に立ち上がる箇所があり、やや凹凸が目立つ。埋土は、５層に分層した。本遺構の埋土下部には黄灰色～黒褐色粘土質シルト（４・５層）が堆積する。いずれも北壁の周辺や窪みに堆積が観察できる土層である。最下層に堆積する５層は細砂混じりで、窪みを埋めるように堆積している。その上位に堆積する４層まで地山ブロックが比較的多く含まれており、人為堆積の可能性を考えた。３層もまた、北壁周辺に堆積する黄灰色粘土質シルトで、炭化物が微量に含まれるほか、十和田ａ火山灰とみられる灰黄色粒子が含まれる。埋土の主体となるのは黄灰色粘土質シルト（１・２層）で、自然堆積の様相を示す。２層は１層よりも比較的土色が明るく、炭化物が微量に含まれる。重複はないものの、本遺構の北西側に位置するSBA1掘立柱建物と近接しており、SBA1の桁行の延長上に存在する。また、本遺構の長軸方向とSBA1の梁行がほぼ一致することから、SBA1掘立柱建物によって形成された遺構と考えられる。

埋土・底面直上から土師器、須恵器がまとまって出土した。遺物は、主に１層中に多く含まれる。そのうち、153土師器坏、154土師器鉢（非ロクロ）、155須恵器甕、156土師器甕（非ロクロ）の４点を掲載した。回転ヘラケズリ再調整の土師器坏、非ロクロ成形の土師器鉢・甕が出土しており、９世紀前葉後半～中葉に推定される。（野中・北田）

SXA2 性格不明遺構（第74図、写真図版66）

調査区西側A3・B4区のX＝-99201、Y＝26480付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黄灰色土の不整形プランとして検出した。検出時はSIA3を含めた一周り大きなプランとして見えていたが、精査した結果、重複する別遺構と判断した。平面形は歪な三日月形である。規模は6.62×3.55ｍで、残存深度は中央の最も深い箇所で31cmである。壁・底ともにⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は北西側に張出し状の段差があるほか、中央部で一段周囲より低くなるように形成されている。また、南西側には２箇所柱穴状の窪みが見られる。この内、深い方の窪みは残存深度49cmである。壁は全周するが、西側は浅くなり、立ち上がりが曖昧となる。壁面は外側へと緩やかに開いて立ち上がる。埋土は、４層に分層した。本遺構の最下層には細砂混じりの黒色粘土質シルト（４層）が堆積する。底面中央及び柱穴状の窪みに堆積が観察できる。その上位に黄灰色粘土質シルト（３層）が薄く堆積する。３層は西側にのみ堆積が確認できる。埋土の主体となるのは黄灰色粘土質シルト（A-A′の１・２層）で、西側からの流入による自然堆積の様相を示す。２層は細砂混じりで、小礫を含み、西側に重複するSIA3にも途切れずに堆積している。１層は２層と基本的には土質が同じであるが、小礫をさらに多く含み、本遺構にのみ堆積が確認できる。本遺構の西側に位置するSIA3竪穴建物と重複する。土層断面の観察からは新旧関係について判断することができなかった。しかしながら、本遺構とSIA3を一連の遺構と捉えるには平面形・断面形に差異があること、本遺構の埋土下部よりSIA3の想定される年代よりも新しい時期の遺物が出土したことから総合的に判断して、本遺構がSIA3より新しい可能性があると判断した。また、重複関係はないものの、本遺構の南西側に位置するSXA3性格不明遺構と近接する。

埋土・底面直上から土師器、須恵器がまとまって出土した。そのうち、157 土師器高台皿、158 須恵系 a 高台皿、159 須恵系 a 小型坏、160 土師器鉢の 4 点を掲載した。須恵系 a の年代観から、10 世紀前葉に推定される。（野中）

SXA3 性格不明遺構（第 74 図、写真図版 67）

調査区西側 A3 区の X＝-99207、Y＝26480 付近に位置する。令和 2 年度調査。Ⅴ層上面で黄灰色土の不整形プランとして検出した。検出時は SXA2 と一連のプランとして見えていたが、精査した結果、重複のない別遺構と判断した。平面形は歪な楕円形である。規模は 3.62×1.77 m で、残存深度は 20cm である。壁・底ともにⅤ層を掘り込んで形成されている。底面は南東側が一段低く形成されており、所々に凹凸が顕著に見られる。この凹凸が本遺構の掘り方によるものなのかは判断できなかった。壁は南西側を除いてほぼ全周する。壁面は外側へと緩やかに開いて立ち上がる箇所と直立気味に立ち上がる箇所があり、やや凹凸が目立つ。埋土は、2 層に分層した。本遺構の埋土の主体となるのは黒褐色粘土質シルト（B-B’の 3 層）で、自然堆積の様相を示す。層中には地山ブロックを比較的多く含む。その上位には、黄灰色粘土質シルト（B-B’の 2 層）が堆積する。この層は本遺構の北側に位置する竪穴状遺構 SIA3 に堆積する黄灰色粘土質シルト（B-B’の 1 層）と土質が似るが、地山ブロックの混入量や細砂の混入の有無に差異があることから別の層と判断した。遺構の重複はないものの、本遺構の北側に位置する SIA3 竪穴建物、北東側に位置する SXA2 性格不明遺構と近接する。詳細な時期については根拠が乏しく、不明である。

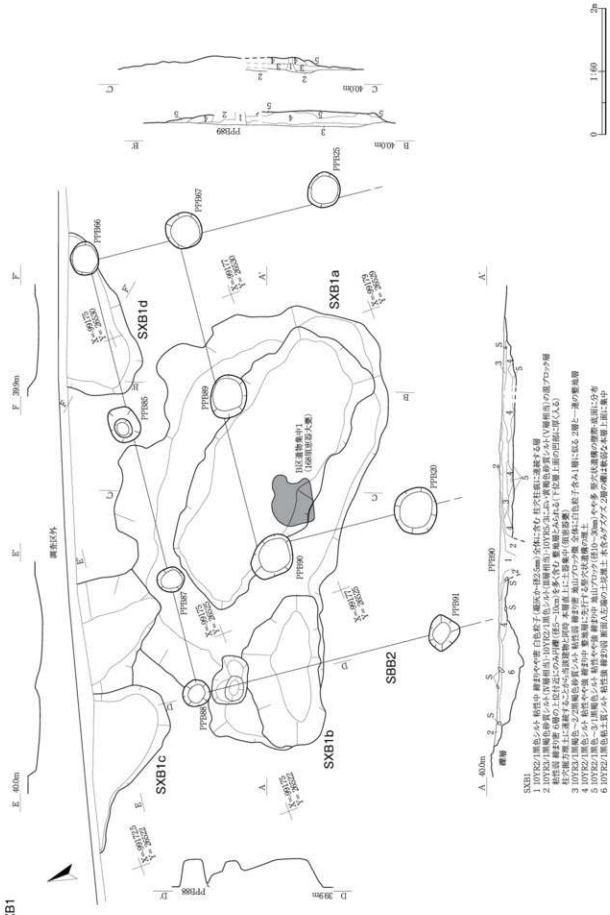
埋土・底面直上から土師器が少量出土し、そのうちの 161 須恵系 a 坏の 1 点を掲載した。土器の年代観は 9 世紀中葉～後半であるが、本遺構の北側に位置する SIA3 竪穴建物から流入した遺物である可能性が高い。また、遺構の形状についても不整形で、規格的な形状をもたないことから周辺の古代の遺構と様相がやや異なるものと考えられる。（野中）

SXB1 性格不明遺構（第 81 図、写真図版 67）

調査区北西側 B3 区の X＝-99175、Y＝26525 付近に位置する。令和 2 年度調査。表土直下Ⅲ層面において、土器細片・炭化物等を包含する黒褐色土のやや大きな広がりとして認識した。プランが不明瞭であったことから、全体を徐々に掘り下げたところ、複数の掘り込みが複合した地点であることが判明し、SXB1a～d の 4 つに分離した。以下、個別に記載する。

・SXB1a

開口部の平面形は 6.3×3.7 m の不整楕円形、底面は 4.2×1.2 m の隅丸方形を呈する。底面までの残存深度は 20cm 前後である。底面外縁から短く立ち上がった壁が全周し、下部は歪んだ箱形を呈する。上部は、南側では幅 40cm 前後の明瞭な段をもち壁が再び直立するが、北側は大きく外傾しだらだらと開口部に連続する。底面は概ね平坦で、径 10cm 前後の円形基調の小凹部が密に分布する。断面 4・5 層が本遺構の埋土で、Ⅲ層相当の黒色土を主体とする。壁際の崩落層 5 層に続き、周囲から 4 層土が流入した自然堆積の様相を呈する。4 層上面の時点で本遺構内は浅い凹地となるが、この上位は整地層（2・3 層）によって埋め均されている。2 層は本遺構を切る柱穴（PPB89・90：SBB2）の掘り方埋土に連続することから、この整地は、本遺構の痕跡が半埋没の凹地として残る段階に、SBB2 掘立柱建物の建造に伴って実施されたものと理解される。また 2 層直上面に接して須恵器大甕破片の集中箇所（B 区遺物集中 1）が確認された。本遺構付近においては整地面上面が削平を免れ、部分的に遺存することを示している。1 層は PPB89・同 90 の柱痕とみられる空隙に流入した土層であり、



第 81 図　SXB1 性格不明遺構

柱穴周辺の２層直上面にも連続して分布する。建物跡の廃絶後に付近を被覆したⅡ層相当土と考えられる。遺構の重複関係は、本遺構がSXB1bを切り、SBB2掘立柱建物構成柱穴（PPB87～90）・B区土器集中１に切られる。また近接するSXB1c・SXB1dは本遺構４層土に酷似する単層により埋没していることから、併存またはごく近い時期のものと考えたい。

・SXB1b

開口部の平面形は2.4×1.3ｍの不整隅丸方形を呈する。北側を除く三方の壁は概ね直線的で、特に南西隅は比較的明瞭な角を成している。北壁は崩落のためか大きく外傾し緩く立ち上がる。本来は箱形に近い形状であったと推測される。底面までの残存深度は45cm前後で、南壁側が深い。なお本遺構のプランは、SBB2掘立柱建物の構成柱穴の一つが想定される位置（PPB89・90の延長上）と重複している。遺構の先後関係では本遺構の方が古いのだが、精査では新期柱穴の存在を把握できなかった。北壁中央部が外側に張り出すなどのプランの歪みは、当該柱穴を本遺構埋土とともに掘り上げてしまった結果である可能性が高い。埋土は、多量に水分を含む黒色粘土である。壁面下部～底面に露出した地山砂層からは豊富な湧水があり、精査中も浸水と崩落を繰り返した。上位は整地層（２層）に覆われている。整地層は本土坑付近では多量の小礫を含んでいる。整地の際、軟弱な地点の地盤を補強する意図をもって礫の敷き均しが行われた可能性がある。遺構の重複関係は、SXB1aに切られている。さらに後続するSBB2掘立柱建物関連柱穴に切られていると考えられる（上述）。近接する遺構群の中では最も古い。

・SXB1c

北部が調査区外に延び全体形状は不明であるが、検出部分から不整楕円形または溝状を呈するものと推測される。検出部分の平面規模は2.8×1.3ｍ、底面までの残存深度は16cm前後である。底面は概ね平坦で、径10cm前後の円形基調の小凹部が散見される。壁は底面外縁からほぼ直立し立ち上がる。埋土はSXB1aの４層に相当する黒色土の単層である。この上位を整地層（２層）が被覆している。SXB1bと同様、整地層は小礫を多く含む。埋土の類似性から、SXB1a・SXB1dと併存またはごく近い時期のものと考えたい。よってSXB1bより新しく、SBB2建物跡より古い時期に位置づけられる。

・SXB1d

北部が調査区外に延び全体形状は不明であるが、検出部分から不整楕円形または溝状を呈するものと推測される。検出部分の平面規模は2.6×1.3ｍ、底面までの残存深度は12cm前後である。底面は概ね平坦で、径10cm前後の円形基調の小凹部が散見される。壁は南西側がほぼ直立するのに対し、東側の立ち上がりは不明瞭である。埋土はSXB1aの４層に相当する黒色土の単層である。この上位を整地層（２層）が被覆している。SXB1bと同様、整地層には小礫を多く含む。また本遺構プランに重複して、整地層より上位に十和田ａ降下火山灰の層状堆積を確認している。遺構の重複関係は、PPB66に切られる。なお埋土の類似性から、SXB1a・SXB1cとは併存したものと考えたい。よってSXB1bより新しく、SBB2掘立柱建物より古い時期に位置づけられる。

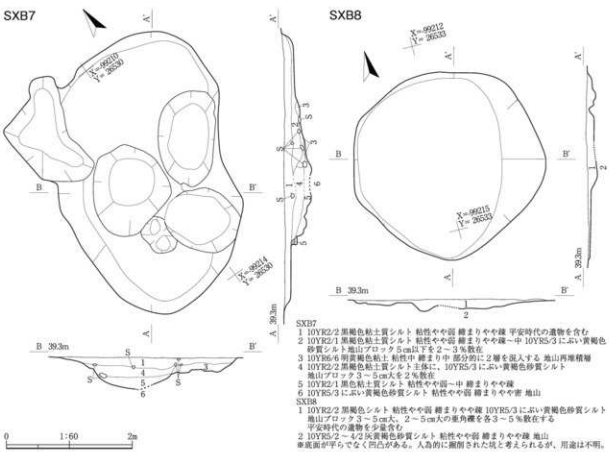
162～167の計７点を掲載した。内訳は162土師器坏、163須恵系ａ坏、164須恵器ｂ坏、165土師器鉢、166須恵系ｂ皿か、167土師器長胴甕で、165はSXB1b出土、164はSXB1d出土である。また、B区遺物集中１とした168須恵器大甕はSXB1最上層に認められ、SBB2掘立柱建物身舎北西隅に位置していることからみて、SBB2建築前に地鎮のため意図的に埋納した鎮め物であると考えられる。土器の年代観から、先行して構築されたSXB1bはヘラケズリ再調整が施されるため９世紀中葉頃、これ以外のSXB1a・c・dは須恵系土器から９世紀中葉～後半と考えられる。　（村上・北田）

SXB7 性格不明遺構（第 82 図、写真図版 69）

調査区中央北西側 B6 区の X＝-99210、Y＝26530 付近に位置する。令和 3 年度調査。SXB8 性格不明遺構に隣接し、関連する可能性がある。南北に長い不整楕円形の掘り込みの中に、4 ～ 5 箇所の深みを持つ平面形状で、底面もこれに応じて凹凸が著しい。長さは南北で 4.47 m、東西の幅 3.41 m、中央の深さ 51cm の不整な楕円形である。堆積土は黒褐色粘土質シルト主体で、1 層中に平安時代の土師器・須恵器を少量混入する。3 層に明黄褐色粘土の地山再堆積層を堆積し、4 層中には地山ブロックを混入する様相で、崩落しながら自然堆積したものと考えられる。2 層以下からは遺物がほとんど出土せず、1 層に集中していることから平安時代の早い段階に掘削され、最終的に 1 層に含まれる遺物の時期までにすべて埋没したと考えられる。底面付近は粘土となることから、土取りを目的とした作業の痕跡かと考えられる。（北田）

SXB8 性格不明遺構（第 82 図、写真図版 70）

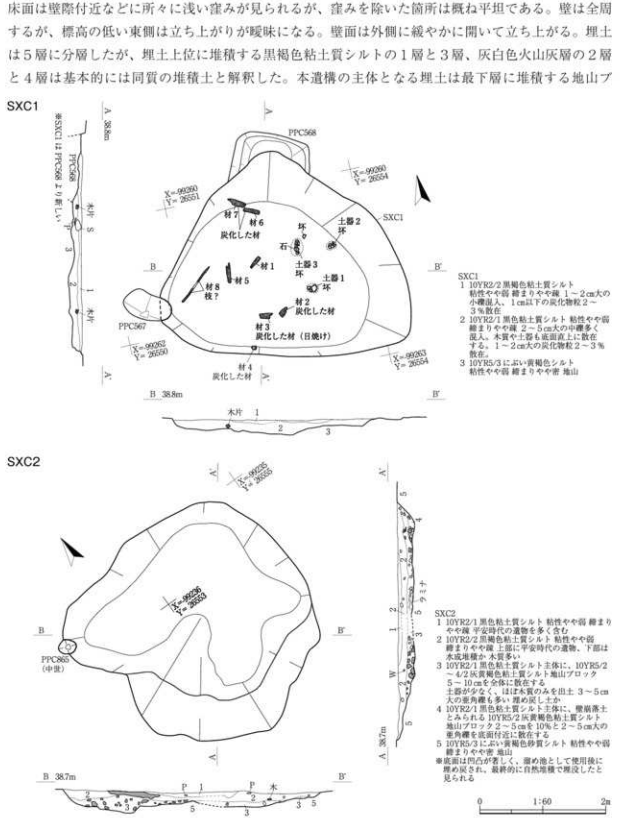
調査区中央北西側 B6 区の X＝-99215、Y＝26533 付近に位置する。令和 3 年度調査。SXB7 性格不明遺構に隣接し、関連する可能性がある。長さ 3.04 m、幅 2.97 m、深さ 18cm のほぼ円形で、底面は凹凸が著しい。堆積土は黒褐色シルト主体で、地山ブロックや亜角礫を混入する。1 層中からは、土師器や須恵器がごく少量出土していることから、SXB7 と同じく平安時代の早い段階に掘削され、1 層に含まれる遺物の時期までに埋没したと考えられる。人為的に掘削した坑と考えられるが、用途は不明である。（北田）



第 82 図　SXB7・8 性格不明遺構

SXD1 性格不明遺構（第 80 図、写真図版 67）

調査区北東側 D1 区の X＝-99166、Y＝26580 付近に位置する。令和２年度調査。Ⅴ層上面で黒褐色土ににぶい黄橙色土が混じった方形プランとして検出した。平面形は方形基調であると推測される。規模は長さ 2.78m、幅 2.66m で、残存深度は 24cm である。壁・床はⅤ層を掘り込んで形成されている。床面は壁際付近などに所々に浅い窪みが見られるが、窪みを除いた箇所は概ね平坦である。壁は全周するが、標高の低い東側は立ち上がりが曖昧になる。壁面は外側に緩やかに開いて立ち上がる。埋土は５層に分層したが、埋土上位に堆積する黒褐色粘土質シルトの１層と３層、灰白色火山灰層の２層と４層は基本的には同質の堆積土と解釈した。本遺構の主体となる埋土は最下層に堆積する地山ブ



第 83 図　SXC1・2 池状遺構

ロックを含んだ黒色粘土質シルト（５層）である。５層は底面のほぼ全域を覆うように堆積し、自然堆積の様相を示す。その上位には十和田ａ火山灰とみられる灰白色火山灰の二次堆積層（４層）が10cm程の厚さで堆積する。堆積状況から本来は底面に沿った形状で層状に堆積していたと考えられるが、その上位から黒褐色粘土質シルト（１・３層）が流入したことで層が乱され、堆積が途切れている箇所があるものと推測した。２層も同様で、１・３層が流入した後に火山灰層が再堆積したものと解釈した。重複はないものの、本遺構の西側に位置する SBD1 掘立柱建物と近接する。なお、本遺構に堆積した灰白色火山灰層（４層）中よりサンプリングを行い、火山灰分析を実施した結果、十和田ａ火山灰の可能性が高いとの成果を得ている（附編第３項参照）。

埋土・床面直上から土師器・須恵系 416.8 g、須恵器 500.5 g が出土した。遺物は比較的埋土の残りが良い西側の床面直上からの出土が多く、その大半が坏である。その内の 213・214 須恵系ｂ坏を掲載した。出土遺物の年代観から、９世紀末葉～10 世紀前葉が推定される。（野中・北田）

（ｅ）池状遺構

SXC1 池状遺構（第 83 図、写真図版 72）

調査区中央西側 C2 区の X＝-99260、Y＝26551 付近に位置する。令和３年度調査。SBC3 掘立柱建物に隣接する。SBC2 掘立柱建物の PPC568 柱穴と直接切り合っており、本遺構が新しい。また、中世末～近世と見られる PPC567 柱穴状ピットに切られ、本遺構が古い。東西に長い不整な楕円形を平面形に持つ掘り込みで、東西の長さ 3.98 m、南北の幅 3.23 m、最も深い中央部で深さ 23cmを測る。底面は凹凸が著しく、西側に深みがある一方、東側は極端に浅くなり平坦に近い。堆積土は計２層に分けられ、上部が小礫混じりの黒褐色粘土質シルト、下部が中礫を多く含む黒色粘土質シルトで構成される。全体に炭化物粒を含んでおり、２層の方が多い。また、底面付近は木質や草本を多く含んだ有機質層となり、平安時代の土器も散在している。底面付近から出土した木質を材１～８で採取したが、すべて加工痕のない自然木で、一部は炭化した状態だった。樹種は未同定である。また、主に底面東側から出土した土器１～３のまとまり中から、175 土師器坏、176 須恵系ｂ坏、177 土師器高台皿、178 土師器盤の計４点を掲載した。須恵器は出土しておらず、須恵系土器を含むこと、盤を含んでいることから９世紀後半～10 世紀前葉の年代が考えられる。本遺構は、SBC3 掘立柱建物の南西側に隣接することから、これに付属する池状遺構で、廃絶時期も近いと見られる。（北田）

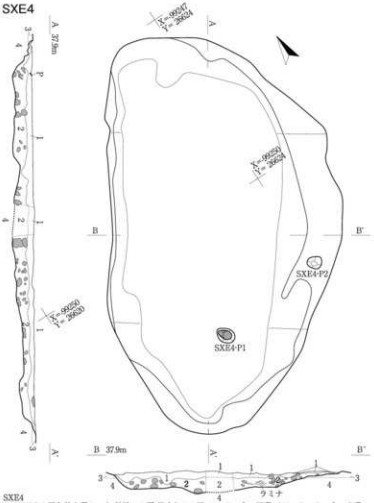
SXC2 池状遺構（第 83 図、写真図版 73）

調査区中央西側 C1 区の X＝-99236、Y＝26553 付近に位置する。令和３年度調査。SBC6 掘立柱建物の西側、SBC7 掘立柱建物の東側に隣接する。中世末と見られる PPC865 柱穴状ピットに切られる。北辺から東辺にかけては隅丸方形の直線的な形だが、南辺から西辺にかけては入り組んだ不整形を呈する。南北の長さが 3.75 m、東西の最も長い箇所の幅が 3.65 m、最も深い西側の深さが 34cmを測る。底面は、北側から東側にかけてはほぼ平坦だが、南側から西側にかけては深みがある一方、中央は半島状に迫り出した形状となっている。堆積土は計３層で構成され、１層黒色粘土質シルトには平安時代の遺物を多く含む。２層黒褐色粘土質シルトの上部にも平安時代の遺物を含むが、下部は木質や草本類が多量に水成堆積しており、遺物は少なくなる。３層も黒色粘土質シルト主体だが、灰黄褐色粘土質シルト地山ブロックを全体に散在しており、遺物の出土はごく僅かである。ブロック以外はほぼ木質・草本類で占められ、亜角礫も多量に混入することから人為的に埋め戻されたと考えられる。

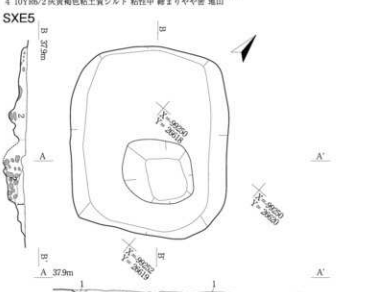
埋土上位の１～２層を中心に、179～186 須恵器坏、187～200 土師器坏、201・202 土師器高台皿、203 須恵器短頸瓶、204～206 土師器鉢、207・208 須恵器鉢、209～211 須恵器甕、212 須恵器大甕、574 農具柄の一部と見られる楕円柱状木製品（ケヤキ）、582 板状木製品の一部（マツ属複維管束亜属）の計 35 点を掲載した。このうち、179～183 須恵器坏、187～195 土師器坏、202 土師器高台皿、206 土師器鉢には墨書の記載があった。土器組成からは、須恵系土器が認められないこと、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ再調整を施す須恵器・土師器坏が多いこと、須恵器の比率がまだ高いことから、９世紀前葉～中葉後半に比定される。出土土器の年代観から、９世紀中葉～後葉までには埋没したと考えられる。（北田）

SXE4 池状遺構（第 84 図、写真図版 74）

調査区東側 E4 区の X＝-99250、Y＝26624 付近に位置する。令和３年度調査。近年の水田造成によって地山が一段掘り下がった E4 区から確認した遺構で、西隣に近接する SXE5 池状遺構とともに検出した。平面形は北東－南西方向に長い楕円形で、長さ 6.28 m、幅 3.64 m、深さ 35cm を測る。底面は凹凸がある形状で、素掘りそのままの印象を受ける。壁は、東面は緩やかだがそれ以外は急斜度に立ち上がる傾向が認められる。堆積土は計２層に分けられ、出土遺物の大半は１層に含まれている。



SXE4
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1～5㎜大の細礫 10%。3～5㎝大の中礫 2%散在 植物質（クルミやアシ・ヨシなどの草本類）多量。遺物の大半は１層に含まれる
2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルトに 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 5～10 ㎝大を全体に散在 全体に水成堆積のラミナも認められ、ぬかるみを入為的に埋め戻した可能性あり
3 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
4 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山



SXE5
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1～2㎝大の亜角礫５%散在 植物質（クルミ・草本類）多く含む
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト地山ブロック 10～20 ㎝大を多量に含む 人為堆積か
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

第 84 図　SXE4・５池状遺構

1層は黒色粘土質シルト主体で、クルミやアシ・ヨシなどの草本類が多量に堆積しているほか、中礫も少量観察される。2層は黒褐色粘土質シルト主体で地山ブロックが散在することから、廃絶後に水成堆積していたが、何らかの理由でぬかるみを人為的に埋め戻した可能性がある。その後に1層が自然堆積したが、平安時代の遺物も同じく廃棄したことが推定できる。底面と東側の岸部分から、柱穴状ピット2個を検出した。このうち、P1には柱材もしくは杭材が確認されている。柱穴状ピット2個は遺構のやや高い位置から確認されていることから、本遺構以前に掘削されたものの可能性が高い。

埋土上位の1層を中心に、220～222土師器坏、223土師器高台皿か坏、224須恵器長頸瓶、225・226土師器鉢、227・228土師器長胴甕、600曲物底板（針葉樹）の計10点を掲載した。土器の組成からは、須恵系土器を含まず、土師器坏はいずれも底部再調整、土師器長胴甕は非ロクロ輪積み成形であることから、9世紀前葉～中葉に比定される。

遺構は掘立柱建物などに伴う溜め池状の性格を持つと見られ、出土土器の年代観から9世紀後葉までには埋没したと考えられる。（北田）

SXE5 池状遺構（第84図、写真図版75）

調査区東側E4区のX＝-99250、Y＝26618付近に位置する。令和3年度調査。SXE4池状遺構と同じくE4区から確認した遺構で、SXE4の東隣に近接して検出した。平面形は北西－南東方向に長い隅丸方形で、長さ3.0 m、幅2.53 m、深さ33cmを測る。底面の大半は深さ10～15cmでほぼ平坦だが、南側が長さ1.1 m、幅1.0 mの隅丸方形に一段深くなる。堆積土は、黒色粘土質シルト主体の計2層で構成されており、1層は植物質（クルミ・草本類）を多く含む。2層は10～20cm大の地山ブロックを多量に含む層で、人為的に埋め戻した可能性がある。堆積過程はSXE4池状遺構と似ていることから、2つの遺構は同時存在していたと考えられる。

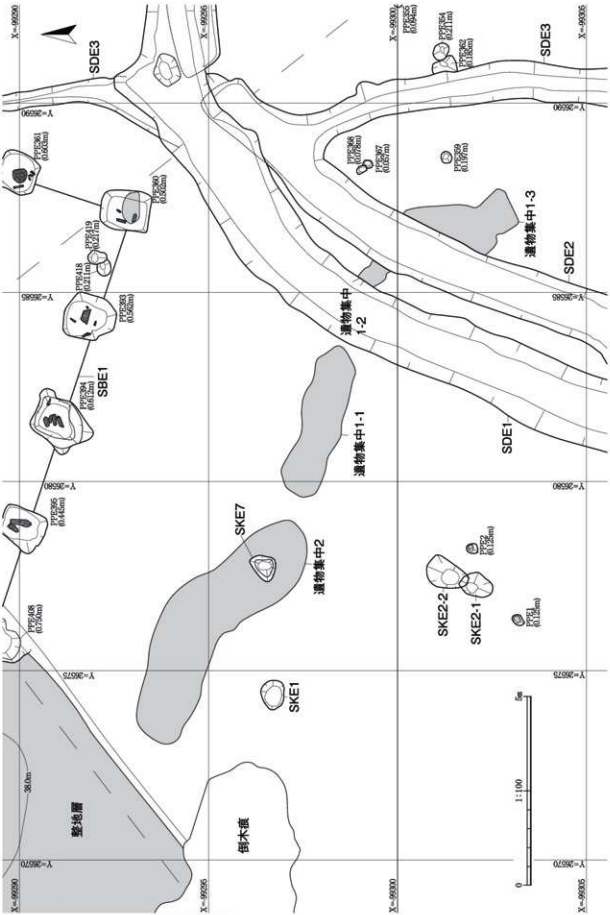
埋土上位の1層から出土した、229土師器長胴甕を掲載した。遺構は掘立柱建物などに伴う溜め池状の性格を持つと見られ、近接するSXE4池状遺構と同時存在と見られることから、同時期の9世紀後葉までには埋没したと推定される。（北田）

（f）遺物集中

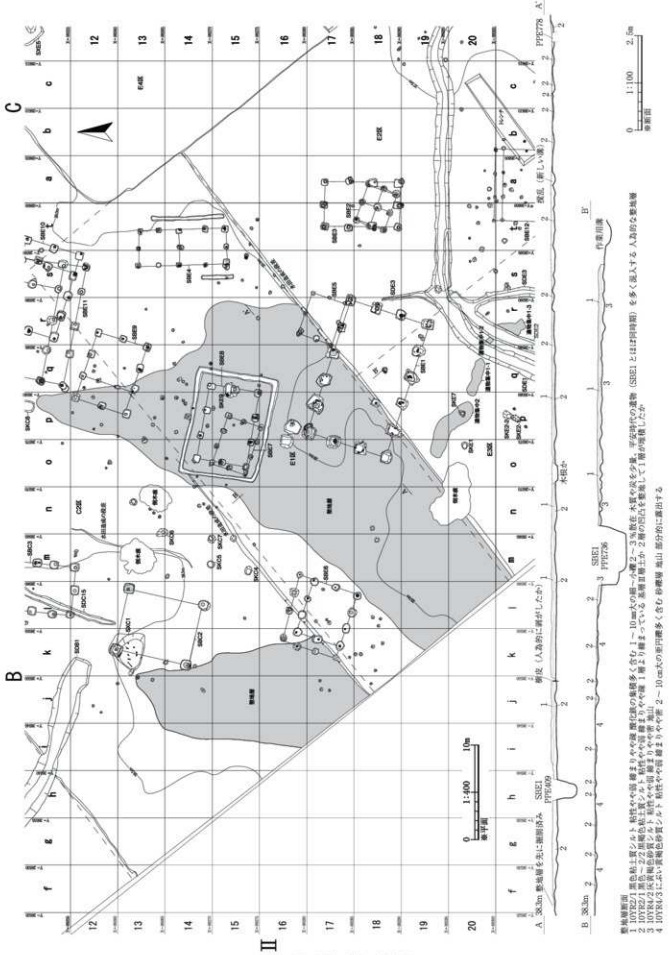
E区遺物集中（第85図、写真図版71）

調査区中央西側C2区のX＝-99293～99303、Y＝26573～26588付近に位置する。令和3年度調査。窪地に一括して廃棄されたと考えられ、黒色粘土質土に含まれる遺物の広がりから東側の遺物集中1-1、1-2、1-3、西側の遺物集中2の帯状に確認している。遺物集中2の底面からはSKE7土坑が検出されており、遺物集中の広がりと同時期か古い可能性がある。遺物集中2は北西から南東方向に長く、長さ6.8m、幅1.5～1.8m、遺物集中1は戦国時代末と考えられる居館跡2のSDE1・2堀に分断されているが一連と考えられ、長さ9.7m、幅0.5～1.7mの範囲に認められる。窪地の深さは10cmに満たない。しかし、本遺構北側のC2～E1区にかけては窪地を整地したと考えられる黒色粘土質土の広がりが確認されており、本遺構周辺は近年の水田造成の際に削平されたとみられることから、この人為的な堆積はもっと広範囲に存在した可能性がある。直近の遺構は5 m北側に確認されたSBE1掘立柱建物であることから、この遺構で使用された土器が廃棄されたと推定される。

遺物集中1-1から出土した268～275須恵器坏、276須恵器高台坏、277土師器高台皿、278須恵器長頸瓶、279土師器鉢、280須恵器甕の計13点、遺物集中1-2から出土した281須恵器坏、遺物集中1-3から出土した282～292須恵器坏、293・294土師器坏、295須恵系b坏、296土師器高台坏、297


SDE3
SDE2
SDE1
SBE1
SKE1
SKE2-1
SKE2-2
SKE7
遺物集中1-1
遺物集中1-2
遺物集中1-3
遺物集中2
倒木痕
整地層
38.0m
1:100
0
5m

第 85 図　E 区遺物集中



第86図　平安時代の整地層

第87図 居館跡1全体図

須恵器甕の計16点、遺物集中2から出土した298～300須恵器坏、301土師器埦、302高台坏、303～305高台皿の計8点の合計38点を掲載した。須恵器が占める割合が高く、須恵系土器は極端に少ない。また、須恵器坏は回転糸切り主体で底径はやや小さく、底部から体部は緩やかに立ち上がる器形が中心となる。土師器は須恵器に比べて数が少なく、埦や高台坏、高台皿などに偏る。甕類の数は少なく、煮炊きに供する土師器甕はほぼ見当たらない。出土土器から、9世紀中葉から後葉の土器群と捉えられる。（北田）

（g）柱穴

PPE776・777柱穴（第79図、写真図版76）

PPE776は調査区中央南側E1区のX＝-99286.5、Y＝26579付近、PPE777は調査区中央南側E3区のX=-99288、Y=26582付近に位置する。令和3年度調査。いずれもSBE1掘立柱建物プラン内部にあり、梁行西面のPPE410柱穴と梁行東面のPPE361柱穴を結んだラインの中間付近にあたる。当初は、SBE1掘立柱建物の入側柱の柱穴かとも検討したが、他の柱穴は見つからず、また桁行の間尺ともことなることから別遺構とした。

PPE776は長さ0.86m、幅0.75m、深さ12cmの隅丸方形で、南東は近年の水田造成による段差で欠いている。底面は概ね平坦で、中央付近に直径20cm強の柱あたりが確認できる。堆積土は黒色粘土質シルトの単層だが、層厚が薄いために柱あたりと掘り方の境界は明瞭でない。柱あたりの範囲内から須恵器と須恵系土器が出土し、250須恵系a坏を掲載した。

PPE777は長さ0.55m、幅0.50m、深さ20cmの隅丸方形で、西側が抜き取り痕か15cm程度膨らんでいる。底面は概ね平坦で、抜き取り痕側の側面には礎板もしくは根固めに用いた木質が貼り付いていた（樹種は未同定）。堆積土は、上位の2層が黒褐色粘土質シルト、下位の4層が黒色粘土質シルトである。埋土上位を中心に土師器が少量出土した（不掲載）。

PPE776は須恵系土器が出土していることから9世紀中葉以降で、PPE777も同時期と捉えたい。（北田）

PPE779・780柱穴（第79図、写真図版76）

調査区中央南側E1区のX＝-99277、Y＝26575付近に位置する。令和3年度調査。いずれもSBE1掘立柱建物の梁行西面に並んだ北側に位置しており、東西に並んだ不整な隅丸方形として検出した。断面は皿形で、PPE779は北東側に不整円形の窪みを持つ。規模は、PPE779が長さ1.69m、幅1.58m、深さ3cmで、窪み部分は深さ7cm、PPE780が長さ・幅ともに1.36m、深さ7cmである。堆積土はいずれも黒色粘土質シルト主体で、PPE780は地山ブロックを少量混入するため、人為堆積の可能性がある。

いずれも土師器・須恵器を少量出土しており、PPE779の251須恵器長頸瓶を掲載した。頸部にリングが巡ることから、9世紀中葉までで後葉までは下らない年代が考えられる。梁行西面に並ぶ配置から見て、SBE1掘立柱建物建築に伴う遺構の可能性がある。（北田）

（h）整地層

整地層（第86図、写真図版77）

調査区中央南側C2～E1区のX＝-99251～-99302、Y＝26542～26590付近に位置する。令和3年度調査。C2区西側とC2区中央からE1区中央及び西側の微地形窪地に広がる黒色粘土質土中に古代

の土器を包含する整地層を確認した。近年の水田造成による削平の影響で標高の高い箇所が失われ、低い箇所を中心に残存したと考えられる。E2・3区は大半が削平されており、一部と考えられるE区遺物集中のみが確認される。残存する面積はおよそ900㎡で、この範囲に重複するSBE1やSBE7・8、SBE9掘立柱建物はこの整地層の上に検出されることから、同時期もしくは新しく構築されていると考えられる。E1区の中央に設定した断面A及び断面Bから、遺物は1層黒色粘土質シルト層に包含されており、細～小礫混じりで木質や炭を混入する人為的な整地層と考えられる。下位層の2層は黒色～黒褐色粘土質シルト層で1層と似通っているが、締まりがあり遺物を包含していないことから、建物を構築する際に微地形を埋める整地を施し、その上に建物を構築したと推定される。（北田）

（3）居館跡1の遺構

居館跡1は調査区中央北側のB5・6、C1・2、D3・4・5区に亘って確認された遺構群で、SDB1堀で構成される堀1、SDB2（SDC8）、SDD1・2堀で構成される堀2、SDB3のみで構成される堀3、SDC7とSDC13で構成される堀4に囲まれた範囲内と、北西側の一部に分布する。確認した主な遺構は、掘立柱建物21棟・門1棟・堀4条・土橋4基・溝15条・土坑6基・池状遺構1基・性格不明遺構5基・居館跡1のあるB・C・D区の柱穴のうち、平安時代の掘立柱建物柱穴179個を除く柱穴1,365個（掘立柱建物分含む）である。掘立柱建物のうち主屋と考えられるのはSBC10・20・21掘立柱建物の3棟で、重複関係にあることから少なくとも3回以上の建て替えが推定される。付属屋18棟についても複数の重複が認められることから、全体については数時期の変遷が想定される。堀4条のうち、堀2・4は内部の掘立柱建物の変遷に併せて、南側への拡張が行われたと考えられる。出土遺物と各遺構の年代測定結果から、少なくとも16世紀代には廃絶したと考えられる。（北田）

（a）掘立柱建物

SBB5 掘立柱建物（第88図、写真図版78）

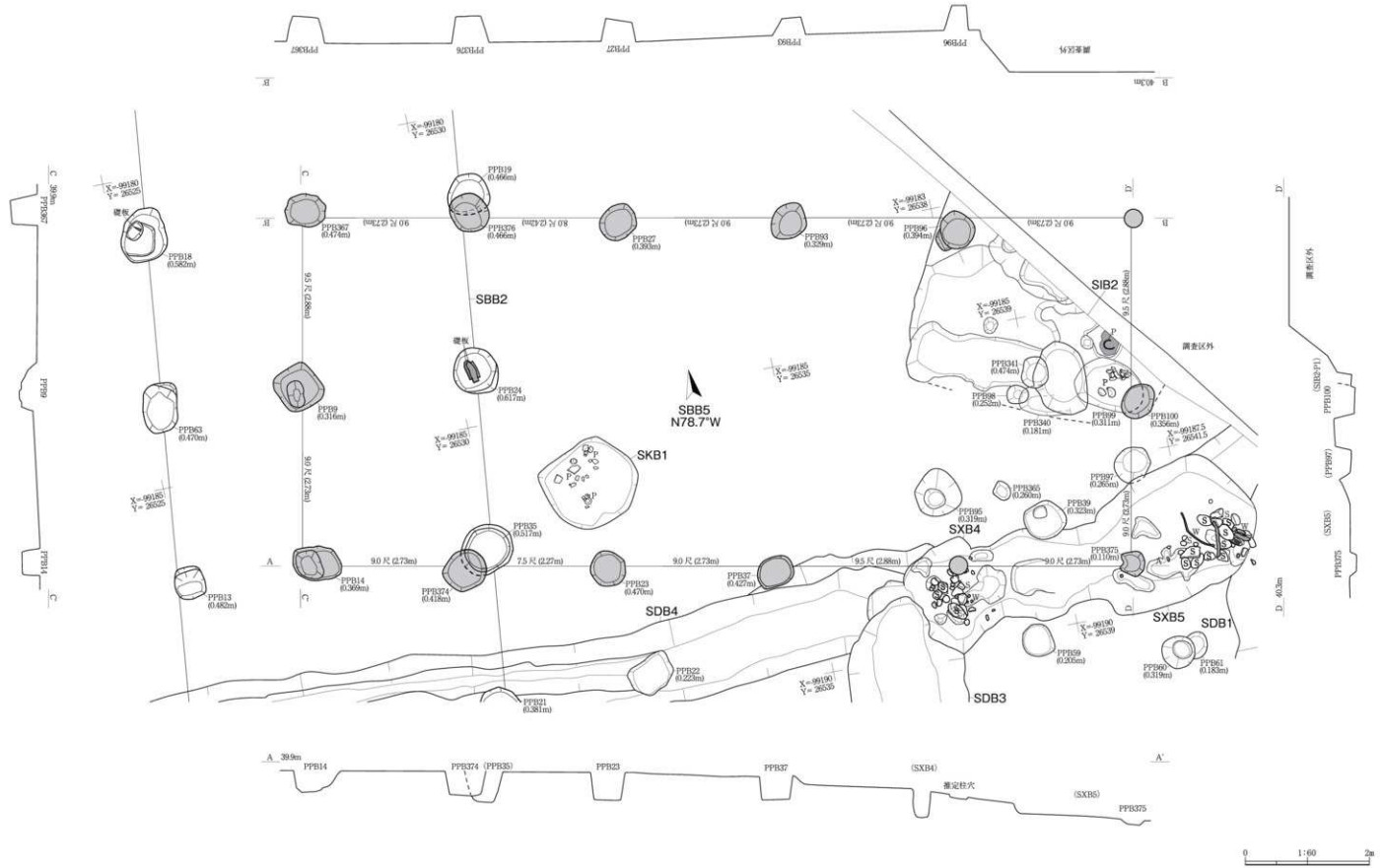
調査区北西側B3区のX＝-99185、Y＝26535付近に位置し、遺構北東側は調査区外へと続く。令和2年度調査。遺構西側で、平安時代に所属するSBB2掘立柱建物のPPB19、PPB35柱穴と重複しており、本遺構が新しい。また、遺構北東側で平安時代のSIB2竪穴建物と重複しており、本遺構が新しい。遺構南西側では、中世以降と考えられるSXB4・SXB5性格不明遺構とSDB4溝と切り合っているが、新旧は不明である。本遺構は桁行5間、梁行2間の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行13.34 m、梁行5.61 m、面積は74.84㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が8.0尺（2.42 m）と9.0尺（2.73 m）、南面が7.5尺（2.27 m）、9.0尺（2.73m）、9.5尺（2.88m）で対向する間尺はほぼ等間隔になる。梁行は9.0尺（2.73 m）と9.5尺（2.88 m）で、9.0尺を意識して揃えていると見られる。主軸方向は、東西方向のN78.7° Wである。確認した柱穴は計12個、推定が2個の計14個で構成されており、西面のPPB9とPPB14が方形基調、その他は円形基調の平面形である。

大半が円形基調の柱穴掘り方で、面積70㎡を超える中型の建物であること、平安時代の遺構との切り合いから、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。（北田）

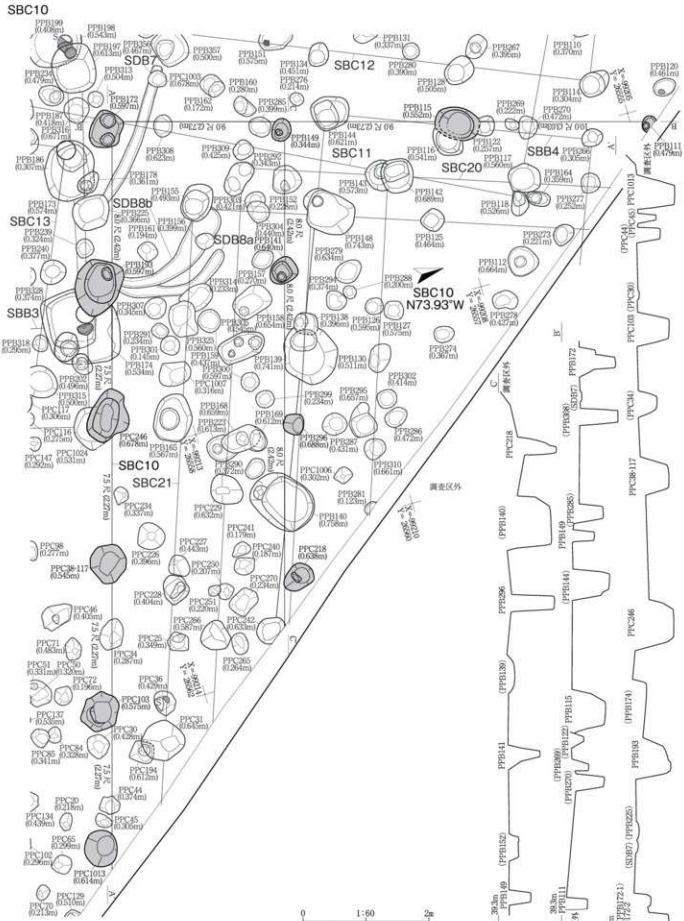
SBC10 掘立柱建物（第89図、写真図版79）

調査区中央北側B6・C1区のX＝-99208、Y＝26557付近に位置する。令和2年度調査。遺構東側は調査区外へと延びている。遺構南側でSBB3掘立柱建物・PPB174と直接切り合っており、本遺構

SBB5

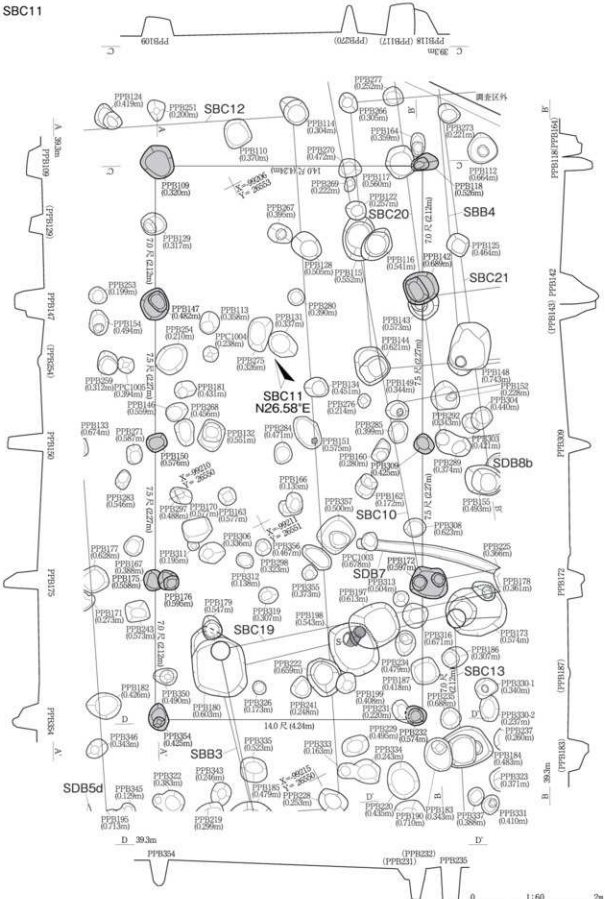


第 88 図　居館跡 1（1）SBB5 掘立柱建物



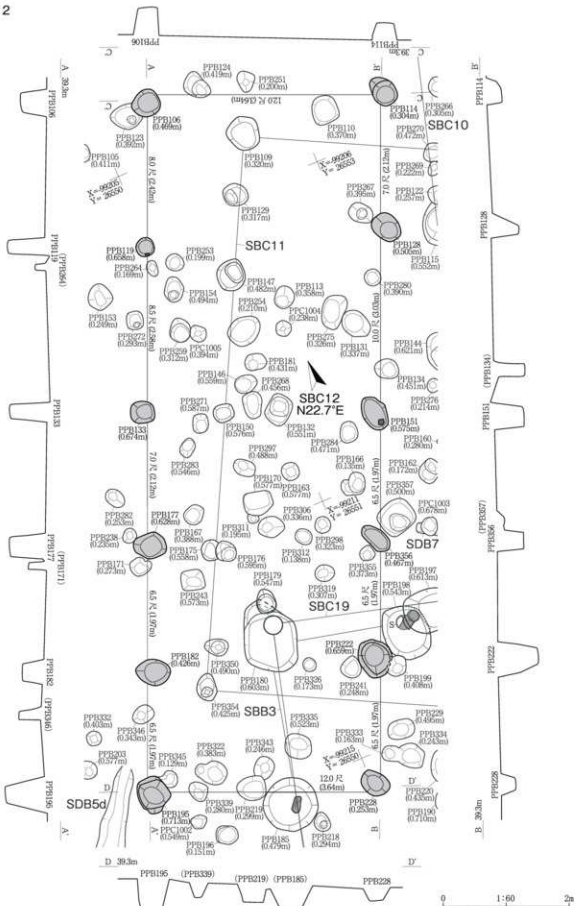
第 89 図　居館跡 1（2）SBC10 掘立柱建物

SBC11



第 90 図　居館跡 1（3）SBC11 掘立柱建物

SBC12



第 91 図　居館跡 1（4）SBC12 掘立柱建物

（PPB193）が新しい。また、SBB4・SBC11・SBC20と重複しているが、直接の切り合いはなく新旧は不明である。本遺構は桁行5間もしくはそれ以上、梁行2間の身舎の南面に廂を持つ東西棟の片廂建物で、北面にも廂が付き両廂建物の可能性もある。身舎の桁行の長さは7.26 m以上、梁行の幅は5.76 m、廂の出は南面で9.0尺（2.73 m）、面積は97.64㎡以上である。柱間寸法は、桁行は南面が8.0尺（2.42m）で揃えており、梁行は9.0尺（2.73m）と10.0尺（3.03m）が用いられている。廂の桁行方向は主に7.5尺（2.27m）、廂の出は9.0尺（2.73m）と身舎に揃えられている。主軸方向は、東西方向のN73.93° Wである。確認した柱穴は計12個で構成されており、円形～楕円形基調の平面形が多い。

円形～楕円形基調の柱穴掘り方で、面積100㎡を超える片廂もしくは両廂の大型建物であること、平安時代の遺構との切り合いから、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。（北田）

SBC11 掘立柱建物（第90図、写真図版79）

調査区中央北側B6区のX＝-99210、Y＝26550付近に位置する。令和2年度調査。遺構西側のSBC12掘立柱建物、遺構南側のSBB3、SBC19掘立柱建物、遺構東側のSBB4、SBC10、SBC20・21掘立柱建物と重複しているが、直接の切り合い関係は東面本遺構・PPB142とSBC21・PPB143以外の直接の切り合い関係はない（本遺構のPPB142が切っており、本遺構が新しい）。本遺構は桁行4間、梁行1間（もしくは2間）の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは8.78 m、梁行の幅は4.24 m、面積は37.22㎡である。柱間寸法は、桁行は東西面が7.0尺（2.12 m）と7.5尺（2.27 m）が用いられており、対向する間尺は等間隔でなる。梁行は14.0尺（4.24 m）だが、7.0尺（2.12m）を繋いでいると見られ、桁行と揃えてある。主軸方向は、南北方向のN26.58° Eである。確認した柱穴は計8個で構成されており、円形～楕円形基調の平面形である。

大半が円形～楕円形基調の柱穴掘り方で、面積は中型の建物であることから、中世以降に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

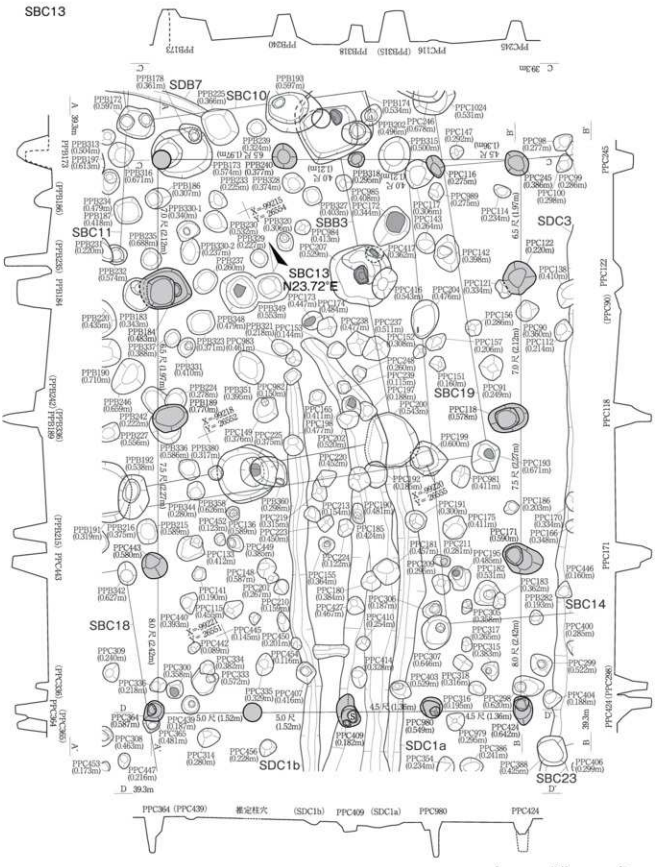
SBC12 掘立柱建物（第91図、写真図版80）

調査区中央北側B6区のX＝-99205、Y＝26550付近に位置する。令和2年度調査。遺構東側のSBC11掘立柱建物、遺構南側のSBB3、SBC19掘立柱建物と重複しているが、直接の切り合い関係はない。本遺構は桁行5間、梁行1間（もしくは2間）の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは11.06m、梁行の幅は3.64m、面積は40.26㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が6.5尺（1.97m）、7.0尺（2.21m）、8.0尺（2.42m）、8.5尺（2.58m）、東面が6.5尺（1.97m）、7.0尺（2.12m）、10.0尺（3.03m）で、桁行南側は6.5尺だが、北側はやや広く取っている。梁行は12.0尺（3.64m）で6.0尺（1.82m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、南北方向のN22.7° Eである。確認した柱穴は計12個で構成されており、西面のPPB133やPPB195は方形基調、その他は円形～楕円形基調である。

SBC14掘立柱建物とほぼ同軸、同規模で、面積は中型の建物であることから、中世以降に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

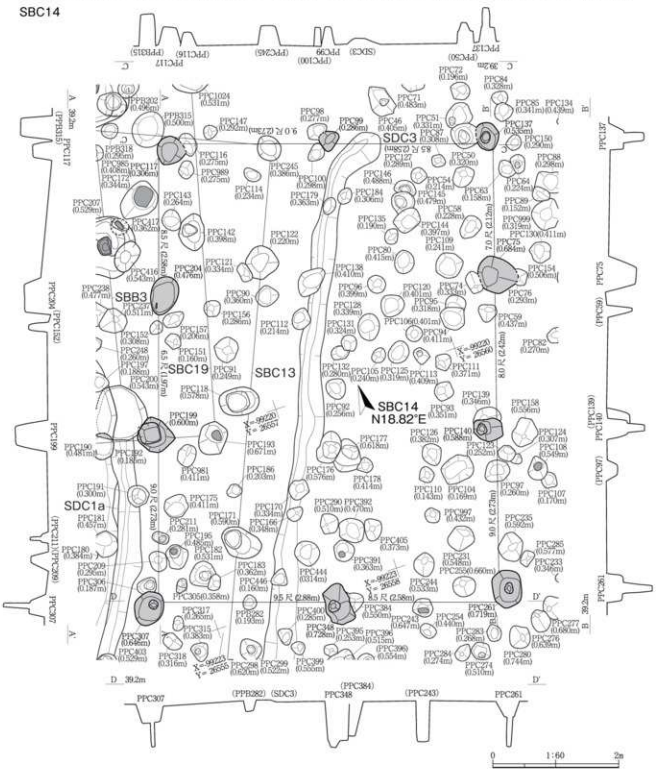
SBC13 掘立柱建物（第92図、写真図版80）

調査区中央北側B6・C1区のX＝-99218、Y＝26552付近に位置する。令和2年度調査。遺構北側のSBB3、SBC19掘立柱建物、遺構南西側のSBC18掘立柱建物、遺構東側のSBC14掘立柱建物、遺構南側でSDC1a溝と重複している。このうち、SBC18掘立柱建物・PPC365と本遺構のPPC364が



第 92 図　居館跡 1（5）SBC13 掘立柱建物

直接切り合っており、本遺構が新しい。また、SBC14 掘立柱建物・PPC116 と本遺構の PPC116 が直接切り合っており、本遺構が新しい。SDC1a 溝と本遺構の PPC409 が直接切り合っているが、新旧は不明である。本遺構は桁行 4 間、梁行 4 間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは 8.78m、梁行の幅は 5.76m、面積は 50.57㎡である。柱間寸法は、桁行は東西面ともに 6.5 尺（1.97m）、7.0 尺（2.12m）、7.5 尺（2.27m）、8.0 尺（2.42m）、梁行は北面が 4.0 尺（1.21m）、4.5 尺（1.36m）、6.5 尺（1.97m）、南面が 4.5 尺（1.36m）、5.0 尺（1.52m）で、桁行に比べて梁行は間尺を狭くしている。主軸



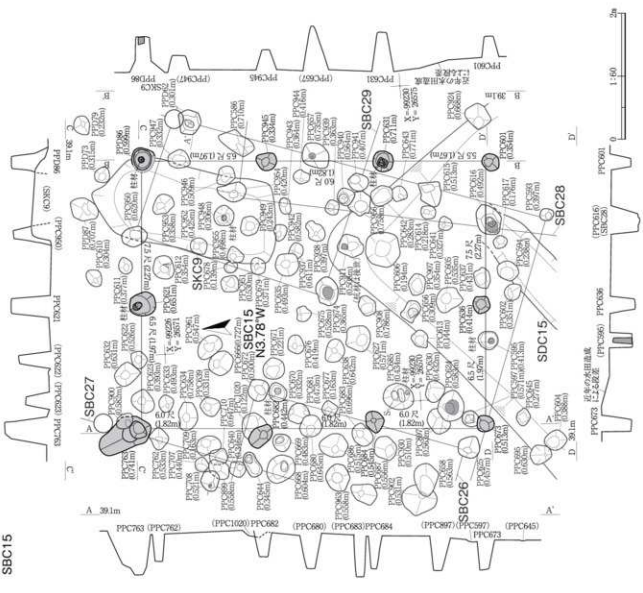
第 93 図　居館跡 1（6）SBC14 掘立柱建物

方向は、南北方向の N23.72° E である。確認した柱穴は計 16 個で構成されており、うち 2 個は推定で円形～楕円形基調である。

SBC11 掘立柱建物とほぼ同軸、同規模で、面積は中型の建物であることから、中世以降に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBC14 掘立柱建物（第 93 図、写真図版 81）

調査区中央北側 C1 区の X = -99220、Y = 26557 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構西側の SBB3、SBC13・19 掘立柱建物、遺構中央で SDC3 溝と重複している。SBB3 掘立柱建物・PPC200 と本遺構の PPC199 が直接切り合っており、本遺構が新しい。本遺構は桁行 3 間、梁行 2 間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは 7.28m、梁行の幅は北面が 5.31m だが南面は 5.46m と歪みが大きい。面積は 39.75㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が 6.5 尺（1.97m）、8.5 尺（2.58m）、9.0 尺（2.73m）、東面が 7.0 尺（2.12m）、8.0 尺（2.42m）、9.0 尺（2.73m）、梁行は北面が 8.5 尺（2.58m）、9.0 尺（2.73m）、南面が 8.5 尺（2.58m）、9.5 尺（2.88m）と南面が北面より 0.5 尺（0.15m）長い。主軸方向は、南北方向の N18.82° E である。確認した柱穴は計 10 個で、PPC140・199・348 は方形基調、そ



の他は円形～楕円形基調を呈する。

SBC13 掘立柱建物とほぼ同軸、同規模で、面積は中型の建物であることから、中世以降に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

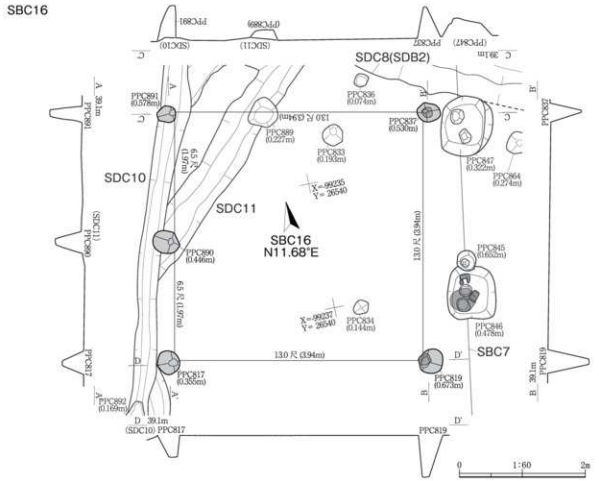
SBC15 掘立柱建物（第 94 図、写真図版 81）

調査区中央東側 C1・C2・D4 区の X＝-99226、Y＝26571 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構西側の SBC26・27 掘立柱建物、遺構東側の SBC28・29 掘立柱建物、SKC9 土坑と重複している。SKC9 土坑と本遺構の PPD86 は直接切り合っており、本遺構が新しい。本遺構は桁行 3 間、梁行 2 間の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは 5.46m、梁行の幅は 4.24m、面積は 23.15㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が 6.0 尺（1.82m）で揃えている。東面は 5.5 尺（1.67m）、6.0 尺（1.82m）、6.5 尺（1.97m）、梁行は南北面ともに 6.5 尺（1.97m）、7.5 尺（2.27m）に揃えている。主軸方向は、南北方向の N3.78° W である。確認した柱穴は計 10 個で、PPC621・631、PPD86 には 785～787 柱材が残存していた。樹種は、786 がトネリコ属、787 がクリである。柱穴は、いずれも円形～楕円形基調の平面形を呈する。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBC16 掘立柱建物（第 95 図、写真図版 82）

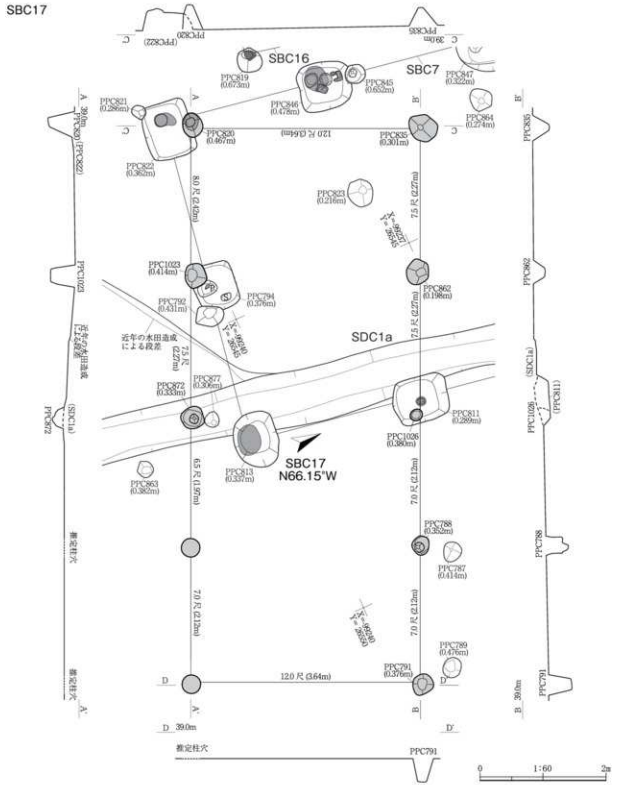
調査区中央西側 C1 区の X＝-99235、Y＝26540 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構西側の



第 95 図　居館跡 1（8）SBC16 掘立柱建物

SDC10・11溝と重複しており、本遺構が古い。桁行２間、梁行１間（もしくは２間）の規模を持つ南北棟の側柱建物と見られ、桁行の長さは3.94m、梁行の幅は3.94mと等しく、面積は15.52㎡である。柱間寸法は、南北面、東面は検出できなかったが桁行、梁行ともに6.5尺（1.97m）で揃えている。主軸方向は、南北方向のN11.68°Eである。確認した柱穴は計５個で、円形～楕円形基調を呈する。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）



第96図　居館跡１（９）SBC17掘立柱建物

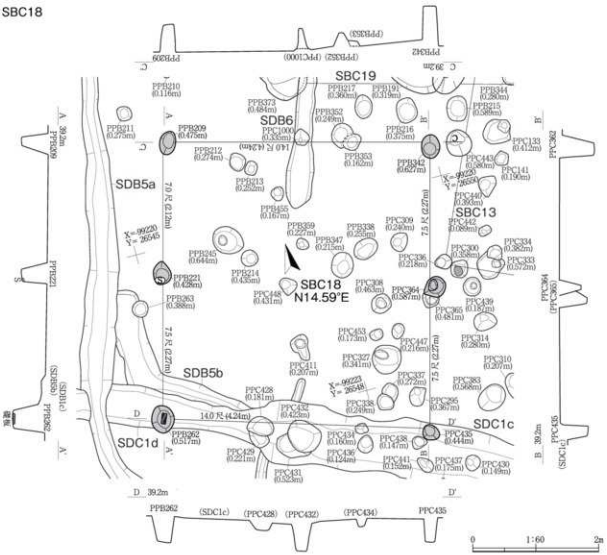
SBC17 掘立柱建物（第 96 図）

調査区中央西側 C1 区の X＝-99240、Y＝26545 付近に位置する。令和３年度調査。遺構北側で SBC7 掘立柱建物・PPC794、PPC811、PPC822 と本遺構 PPC820、PPC1023、PPC1026 の直接切り合っており、本遺構が新しい。また、SDC1a 溝と本遺構の PPC872 が直接切り合っているが、新旧は不明である。本遺構は桁行４間、梁行１間（もしくは２間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 8.78m、梁行の幅は 3.64m、面積は 31.96㎡である。柱間寸法は、桁行は西面が 6.5 尺（1.97m）、7.0 尺（2.12m）、7.5 尺（2.27m）、8.0 尺（2.42m）、東面が 7.0 尺（2.12m）、7.5 尺（2.27m）、梁行は南北面ともに 6.0 尺（1.82m）を繋いでいると考えられる。主軸方向は、東西方向の N66.15° W である。確認した柱穴は計 10 個でうち２個が推定、その他は円形～楕円形基調の平面形を呈する。

SDB2 堀に並行して構築されたと考えられ、面積は中型の建物であることから、中世以降に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

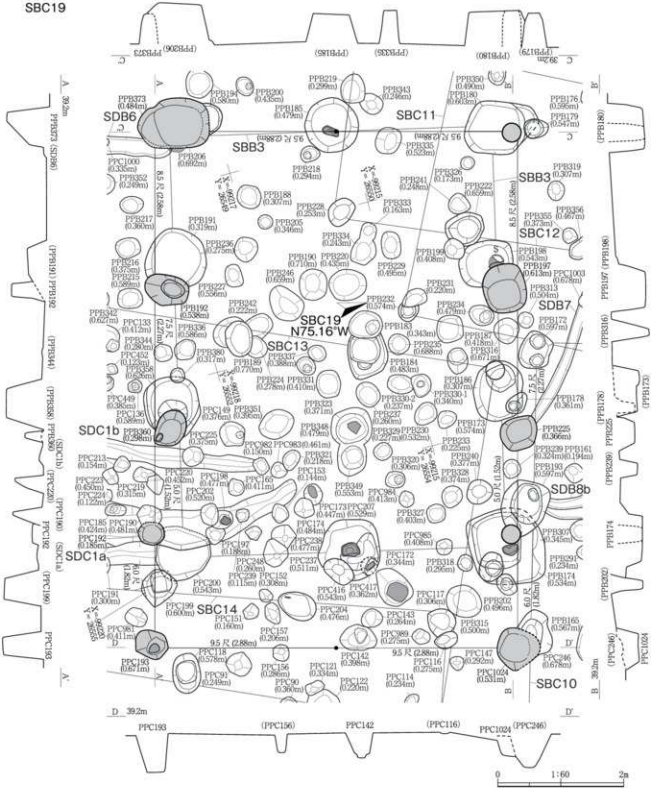
SBC18 掘立柱建物（第 97 図）

調査区中央西側 B6・C1 区の X＝-99223、Y＝26548 付近に位置する。令和２年度調査。遺構南側の SDC1a 溝と重複しているが、本遺構が古い。桁行２間、梁行１間（もしくは２間）の規模を持つ



第 97 図　居館跡 1（10）SBC18 掘立柱建物

南北棟の側柱建物と見られ、桁行の長さは西面で 4.39m、東面で 4.54m、梁行の幅は南北面ともに 4.24m と等しく、面積は 19.25㎡である。柱間寸法は、桁行の西面が 7.0 尺（2.12m）、7.5 尺（2.27m）、東面が 7.5 尺（2.27m）で揃えているが東西面で 0.5 尺（0.15m）の差がある。梁行はともに 7.0 尺（2.12m）で繋いでいると見られる。主軸方向は、南北方向の N14.59° E である。確認した柱穴は計 5 個で、西面の PPB221 底面には根石、PPB262 には 788 柱材（樹種未同定）が残存していた。柱穴の



第 98 図　居館跡 1（11）SBC19 掘立柱建物

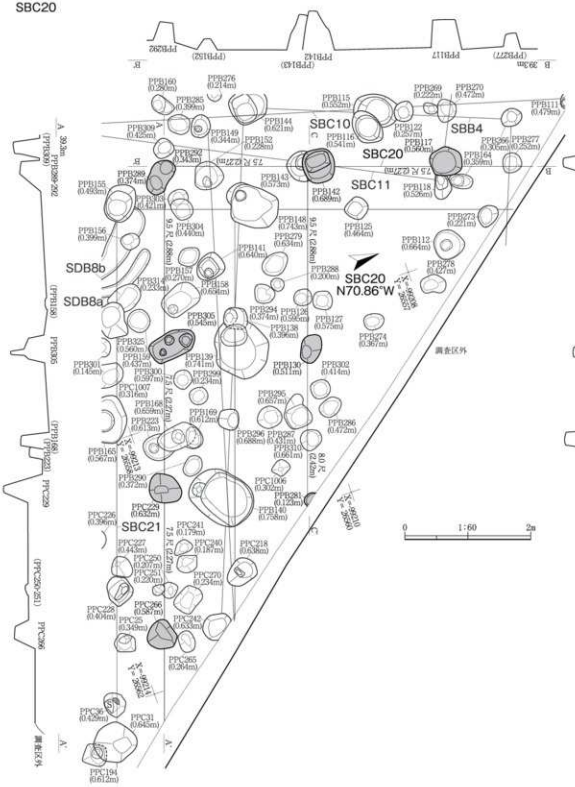
平面形は、概ね円形～楕円形基調を呈する。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBC19 掘立柱建物（第 98 図、写真図版 82）

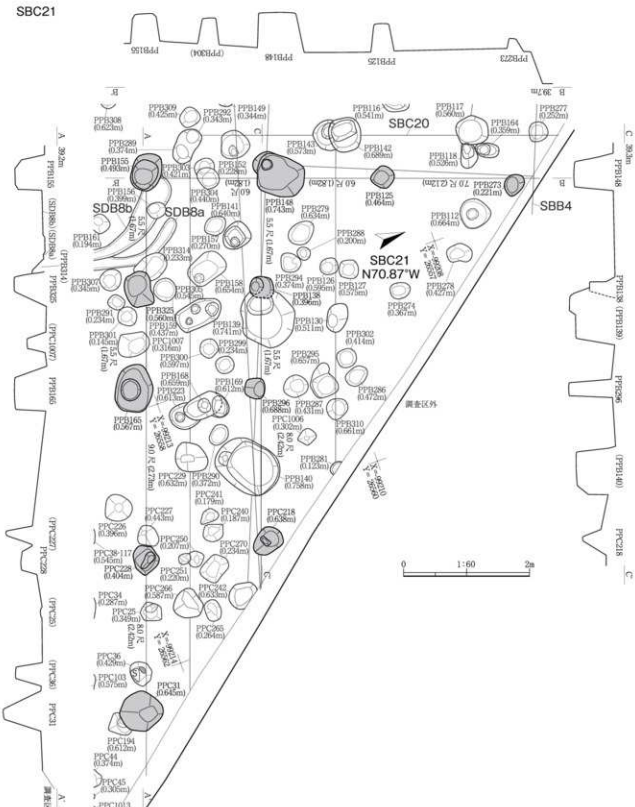
調査区中央西側 B6・C1 区の X＝-99215、Y＝26554 付近に位置する。令和２年度調査。遺構北側

SBC20



第 99 図　居館跡 1（12）SBC20 掘立柱建物

のSBB3、SBC10・11・12掘立柱建物、SDB7溝、遺構南側のSBC13・14掘立柱建物、遺構南西側のSDB6溝、遺構南東側のSDC1a・b溝と重複している。このうち、SBB3掘立柱建物・PPB180、PPB191、PPB198、PPB206、PPB358、PPC200と本遺構のPPB192、PPB197、PPB360、PPB373、PPC192、PPC1024が直接切り合っており、本遺構が新しい。また、SDB7溝と本遺構のPPB225が



第100図　居館跡1（13）SBC21掘立柱建物

直接切り合っており、本遺構が新しい。SDB6 溝と本遺構の PPB373 が直接切り合っているが、新旧は不明である。本遺構は桁行 4 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 8.19m、梁行の幅は 5.76m、面積は 47.17㎡である。柱間寸法は、桁行は東西面ともに 5.0 尺（1.52m）、6.0 尺（1.82m）、7.5 尺（2.27m）、8.5 尺（2.58m）、梁行は南北面ともに 9.5 尺（2.88m）で繋いでいたと考えられる。桁行・梁行とも、対向する面と間尺が揃っている。主軸方向は、東西方向の N75.16° W である。確認した柱穴は計 10 個のうち 2 個は推定で、円形～楕円形基調である。南東隅柱の PPC193 から 789 柱材が出土しており、樹種はコナラ節である。また、これについて年代測定を実施したところ、暦年較正年代 1,540calAD~1,635calAD（2 σ・60.7%）を得た。

年代測定から 16 世紀半ば～17 世紀前半の中型の建物と考えられ、戦国時代後半～江戸時代初頭に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBC20 掘立柱建物（第 99 図、写真図版 83）

調査区中央北側 B6・C1 区の X = -99208、Y = 26557 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構東側は調査区外へと延びている。SBB4、SBC10・11・21 掘立柱建物と重複しており、このうち SBC11 掘立柱建物・PPB143 と本遺構の PPB142、同じく PPB118 と本遺構の PPB117 が直接切り合っており、本遺構が新しい。本遺構は桁行 3 間以上、梁行 2 間かの身舎の南面に廂を持つ東西棟の片廂建物で、北面にも廂が付き両廂建物の可能性もある。身舎の桁行の長さは 5.3 m以上、梁行の幅は 2.27 m以上、廂の出は南面で 7.5 尺（2.27 m）、面積は 33.69㎡以上である。柱間寸法は、桁行は南面が 8.0 尺（2.42m）、9.5 尺（2.88m）が用いられており、梁行は 7.5 尺（2.27m）、廂の桁行方向は主に 7.5 尺（2.27m）、9.5 尺（2.88m）、廂の出は 7.5 尺（2.27m）と身舎に揃えられている。主軸方向は、東西方向の N70.86° W である。確認した柱穴は計 8 個で、南面の PPB305 は方形基調、その他は円形～楕円形基調の平面形である。

調査区外の分も推定すると面積 100㎡を超える片廂もしくは両廂の大型建物であること、平安時代の遺構との切り合いから、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。（北田）

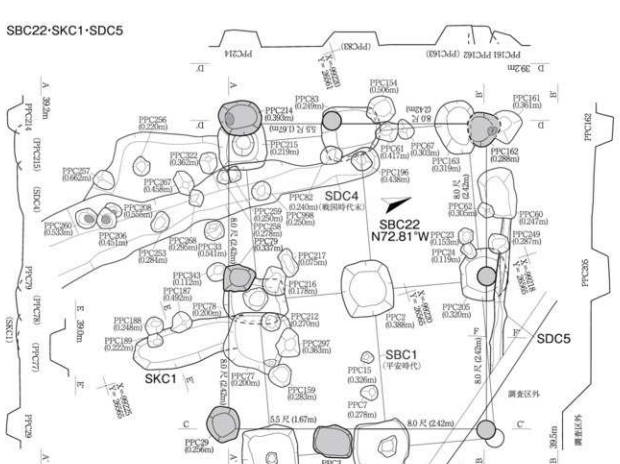
SBC21 掘立柱建物（第 100 図）

調査区中央北側 B6・C1 区の X = -99208、Y = 26557 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構東側は調査区外へと延びている。SBB4、SBC20 掘立柱建物と重複しているが、本遺構と直接の切り合い関係はない。本遺構は桁行 3 間以上、梁行 2 間かの身舎の南面に廂を持つ東西棟の片廂建物で、北面にも廂が付き両廂建物の可能性もある。身舎の桁行の長さは 5.76 m以上、梁行の幅は 3.94 m以上、廂の出は南面で 6.0 尺（1.82 m）、面積は 48.90㎡以上である。柱間寸法は、桁行は南面が 5.5 尺（1.67m）、8.0 尺（2.42m）が用いられており、梁行は 6.0 尺（1.82m）、7.0 尺（2.12m）、廂の桁行方向は主に 5.5 尺（1.67m）、8.0 尺（2.42m）、9.0 尺（2.73m）、廂の出は 6.0 尺（1.82m）と身舎に揃えられている。主軸方向は、東西方向の N70.87° W である。確認した柱穴は計 11 個で、身舎の南西隅柱穴 PPB148 が方形基調、その他は円形～楕円形基調の平面形である。

調査区外の分も推定すると面積 100㎡を超える片廂もしくは両廂の大型建物であること、平安時代の遺構との切り合いから、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。（北田）

SBC22 掘立柱建物（第 101 図）

調査区中央東側 B6・C1 区の X = -99220、Y = 26565 付近に位置する。令和 2 年度調査。SBC1 掘



第 101 図　居館跡 1（14）SBC22 掘立柱建物、SKC1 土坑、SDC5 溝

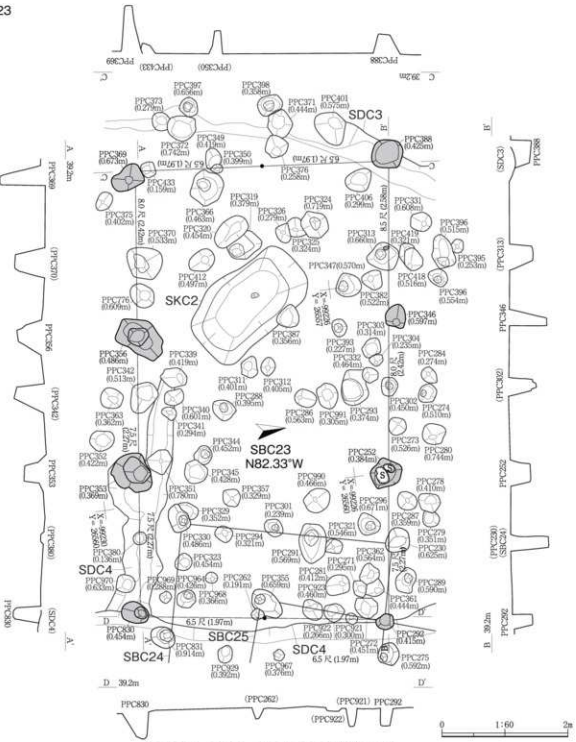
立柱建物・PPC78、PPC83、PPC163、PPC205、PPC215 と本遺構の PPC79、PPC162、PPC214 が直接切り合っており、本遺構が新しい。遺構南側の SKC1 土坑、SDC4 溝、遺構北側の SDC5 溝と重複しているが、新旧は不明である。桁行 2 間、梁行 2 間の規模を持つ東西棟の側柱建物と考えられ、桁行の長さは南北面で 4.84m、梁行の幅は東西面ともに 4.09m と等しく、面積は 19.8㎡である。柱間寸法は、桁行の東西面が 8.0 尺（2.42m）で揃えられており、梁行も 5.5 尺（1.67m）、8.0 尺（2.42m）で整っている。主軸方向は、東西方向の N72.81° W である。確認した柱穴は計 8 個のうち 3 個が推定で、東面の PPC3 が方形基調、その他は円形～楕円形基調の平面形を呈する。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBC23 掘立柱建物（第 102 図）

調査区中央北側 C1 区の X＝-99226、Y＝26557 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構東側の SBC24・25 掘立柱建物、SDC4 溝、遺構西側で SDC3 溝、遺構中央で SKC2 土坑と重複している。SDC4 溝と本遺構の PPC292、PPC353、PPC830 が直接切り合っているが、新旧は不明である。また、SDC3 溝と本遺構の PPC388 が直接切り合っており、本遺構が新しい。本遺構は桁行 3 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは北面で 7.27m、南面で 6.96m と北

SBC23



第 102 図　居館跡 1（15）SBC23 掘立柱建物

面が 1.0 尺（0.303m）長い。梁行は 6.5 尺（1.97m）を繋いでいると考えられ、整っている。面積は 28.64㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が 7.5 尺（2.27m）、8.0 尺（2.42m）、北面が 7.5 尺（2.27m）、8.0 尺（2.42m）、8.5 尺（2.58m）と間隔は揃っていない。桁行に対して、梁行は東西面ともに 6.5 尺（1.97m）で揃っている。主軸方向は、東西方向の N82.33° W である。確認した柱穴は計 8 個で、PPC252 底面には根石 2 個が設置されていた。平面形は、不整形が多い傾向がある。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBC24 掘立柱建物（第 103 図）

調査区中央東側 C1 区の X = -99227、Y = 26564 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構西側の SBC23 掘立柱建物、遺構東側の SBC25・26 掘立柱建物、遺構中央で SDC4 溝と重複している。SDC4 溝と本遺構の PPC275、PPC831 が直接切り合っているが、新旧は不明である。本遺構は桁行 3 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは南北面で 5.46m、梁行は 5.5 尺（1.67m）を繋いでいると考えられ、整っている。面積は 18.24㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が 5.0 尺（1.52m）、6.0 尺（1.82m）、7.0 尺（2.12m）、北面が 6.0 尺（1.82m）で整っている。梁行は 5.5 尺（1.67m）を繋いでいると考えられる。主軸方向は、東西方向の N76.84° W である。確認した柱穴は計 8 個で、円形～楕円形基調の平面形を呈する。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBC25 掘立柱建物（第 103 図）

調査区中央東側 C1 区の X = -99227、Y = 26564 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構西側の SBC23・24 掘立柱建物、SDC4 溝、遺構東側の SBC26 掘立柱建物と重複している。SDC4 溝と本遺構の PPC263 が直接切り合っているが、新旧は不明である。本遺構は桁行 3 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは南北面で 6.36m、梁行は 5.5 尺（1.67m）を繋いでいると考えられ、整っている。面積は 21.24㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が 7.0 尺（2.12m）で整っている。北面は 6.5 尺（1.97m）、7.0 尺（2.12m）、7.5 尺（2.27m）と南面とほぼ等間隔である。梁行は 5.5 尺（1.67m）を繋いでいると考えられる。主軸方向は、東西方向の N72.07° W である。確認した柱穴は計 8 個で、円形～楕円形基調の平面形を呈する。

SBC24 掘立柱建物とほぼ同軸、同規模で重複しており、建て替えと考えられる。小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

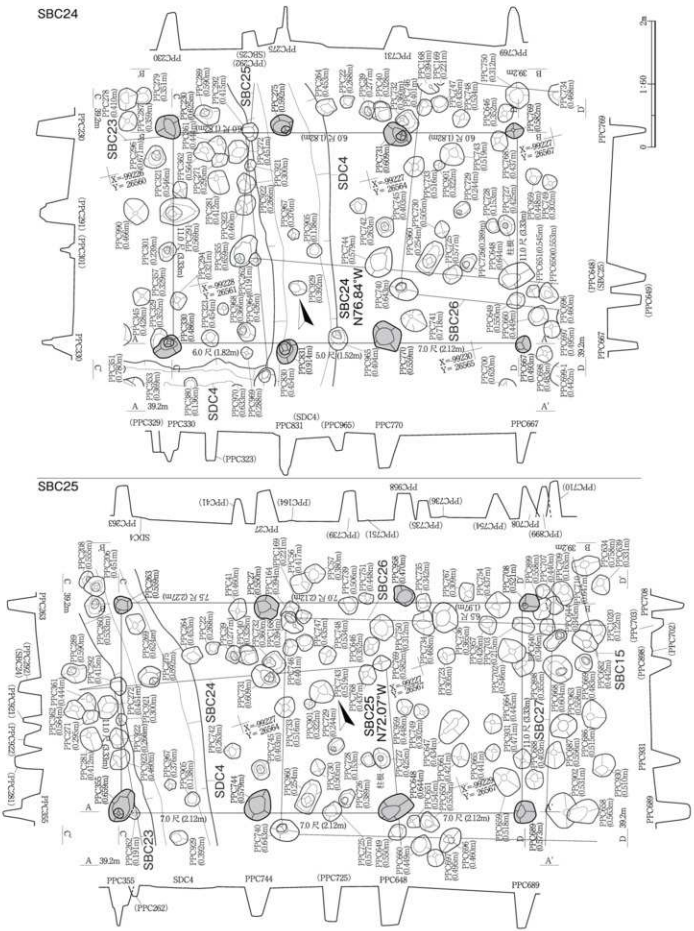
SBC26 掘立柱建物（第 104 図）

調査区中央東側 C1 区の X = -99227、Y = 26567 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構西側の SBC24・25 掘立柱建物、遺構東側の SBC27 掘立柱建物と重複しているが、本遺構と直接の切り合い関係はない。本遺構は桁行 2 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 5.46m、梁行の幅は 3.49m、面積は 19.06㎡である。柱間寸法は、桁行は南面が 9.0 尺（2.73m）で整っている。北面は 8.0 尺（2.42m）、10.0 尺（3.03m）が用いられている。梁行は 6.0 尺（1.82m）、6.5 尺（1.97m）を繋いでいると考えられる。主軸方向は、東西方向の N70.74° W である。確認した柱穴は計 6 個で、円形～楕円形基調の平面形を呈する。

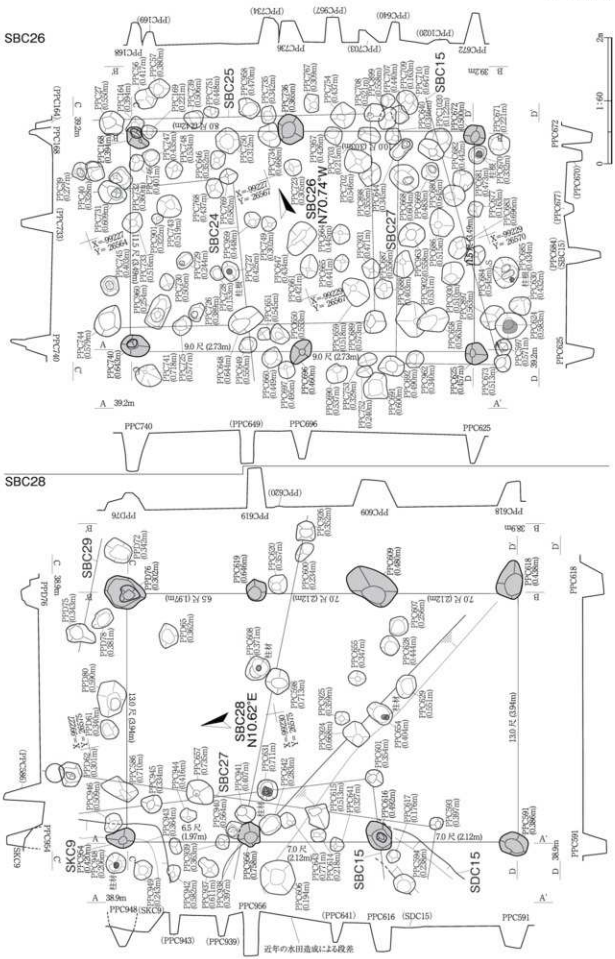
SBC23・24・25 掘立柱建物とほぼ同軸、同規模で重複しており、建て替えと考えられる。小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBC27 掘立柱建物（第 105 図）

調査区中央東側 C1・C2・D4 区の X = -99224、Y = 26571 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構西側の SBC26 掘立柱建物、遺構東側の SBC28・29 掘立柱建物、遺構中央の SBC15 掘立柱建物、SKC9 土坑、遺構南側の SDC15 溝と重複しているが、本遺構と直接の切り合い関係はない。本遺構桁行 4 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは 7.58m、梁行の幅は 5.0m、面積は 37.9㎡である。柱間寸法は、桁行の西面は 4.5 尺（1.36m）、6.0 尺（1.82m）、6.5



第103図　居館跡1（16）SBC24・25掘立柱建物



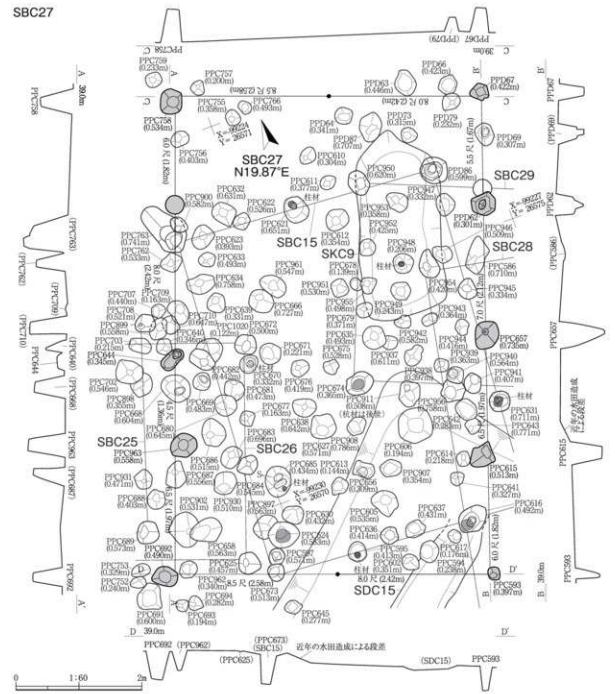
第104図　居館跡1（17）SBC26・28掘立柱建物

尺（1.97m）、8.0 尺（2.42m）、東面は 5.5 尺（1.67m）、6.0 尺（1.82m）、6.5 尺（1.97m）、7.0 尺（2.12m）と一定しない。梁行は 8.0 尺（2.42m）、8.5 尺（2.58m）を繋いでいると考えられる。主軸方向は、南北方向の N19.87° E である。確認した柱穴は計 10 個のうち推定が 1 個で、円形～楕円形基調の平面形を呈する。

居館跡 1 内部にあり、中型の建物であることから、中世以降に属する居住もしくは倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBC28 掘立柱建物（第 104 図）

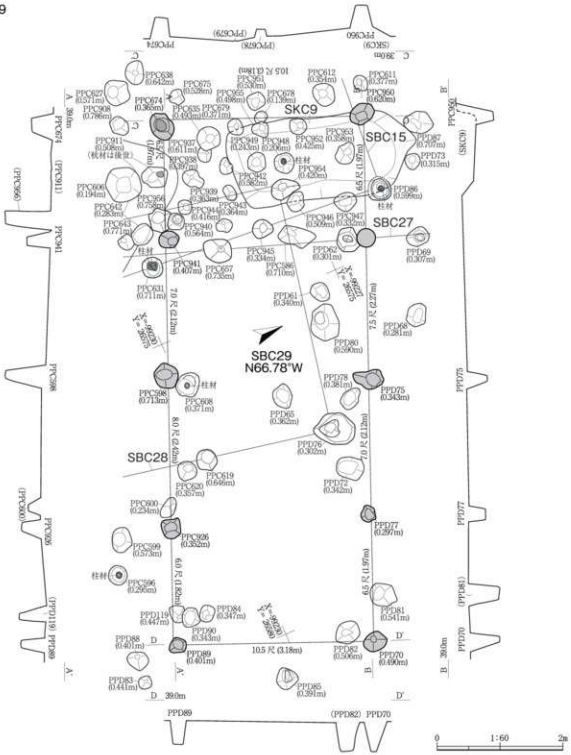
調査区中央東側 C1・C2・D4 区の X＝-99230、Y＝26575 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構



第 105 図　居館跡 1（18）SBC27 掘立柱建物

西側のSBC15・27掘立柱建物、遺構北側のSBC29掘立柱建物、SKC9土坑と重複している。SKC9土坑と本遺構のPPC954が直接切り合っており、本遺構が新しい。本遺構は桁行３間、梁行１間（もしくは２間）の規模を持つ南北棟の側柱建物で、桁行の長さは6.21m、梁行の幅は3.94m、面積は24.47㎡である。柱間寸法は、桁行は南北面ともに6.5尺（1.97m）、7.0尺（2.12m）を対向して整っている。梁行は6.5尺（1.97m）を繋いでいると考えられる。主軸方向は、南北方向のN10.62°Eである。確認した柱穴は計８個で、不整形の平面形を呈するものが多い。

SBC29



第106図　居館跡１（19）SBC29掘立柱建物

SBC23・24・25・26 掘立柱建物とほぼ同規模で重複しており、建て替えと考えられる。小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBC29 掘立柱建物（第 106 図）

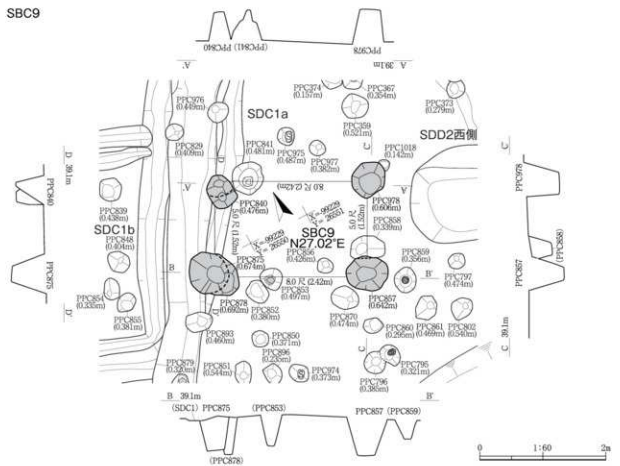
調査区中央東側 C1・C2・D4 区の X＝-99227、Y＝26575 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構南側の SBC28 掘立柱建物、遺構西側の SBC15・27 掘立柱建物、SKC9 土坑と重複している。SKC9 土坑と本遺構の PPC950 が直接切り合っており、本遺構が新しい。本遺構は桁行 4 間、梁行 1 間（もしくは 2 間）の規模を持つ東西棟の側柱建物で、桁行の長さは 8.33m、梁行の幅は 3.18m、面積は 26.49㎡である。柱間寸法は、桁行は南面は 6.0 尺（1.82m）、6.5 尺（1.97m）、7.0 尺（2.12m）、8.0 尺（2.42m）、北面は 6.5 尺（1.97m）、7.0 尺（2.12m）、7.5 尺（2.27m）でほぼ等間隔である。梁行は 5.0 尺（1.52m）、5.5 尺（1.67m）を繋いでいる可能性もある。主軸方向は、東西方向の N66.78° W である。確認した柱穴は計 10 個でそのうち 1 個が推定、円形～楕円形基調の平面形を呈する。

SBC25・26 掘立柱建物とほぼ同軸、同規模で重複しており、建て替えと考えられる。小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

（b）門

SBC9 門（第 107 図、写真図版 84）

調査区中央北側 C1 区の X＝-99229、Y＝26551 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構西側の SDC1a 溝と重複しているが、新旧は不明である。本遺構は桁行 1 間、梁行 1 間の規模を持つ東西棟



第 107 図　居館跡 1（20）SBC9 門

の側柱建物で、桁行の長さは2.42m、梁行の幅は1.52mである。柱間寸法は、桁行は南北面ともに8.0尺（2.42m）、梁行は5.0尺（1.52m）である。主軸方向は、東西方向のN27.02°Eである。確認した柱穴は計4個で、円形基調の平面形を呈する。

遺構西側のSDB2堀とSDD2堀西側が途切れる土橋1部分に構築されており、中世以降に属する四脚門と推定される。（北田）

（c）堀

居館跡1を囲む堀を大きく4つに分け、各々について記載する。

〈堀1〉

堀1は、居館跡1の西側から南側西半を囲むSDB1のみで構成される遺構である。

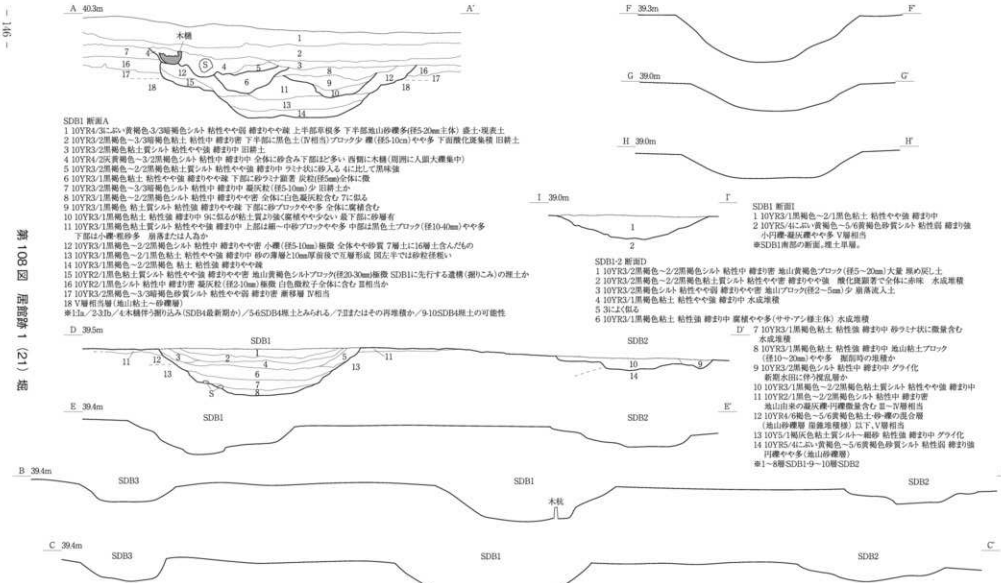
SDB1 堀（第87・108・109図、写真図版86）

調査区中央西側B5・6、C1・2区のX＝-99188～-99257、Y＝26530～26552付近に位置する。令和2年度調査。遺構北端でSXB5性格不明遺構と連結しており、一時期は同時存在していた可能性がある。規模は残存した長さが80mと長大で、遺構北端から50m南側から徐々に南東方向へ曲がり始め、遺構南端から約15m付近には居館を囲むようにL字形に屈曲する。遺構北端から約30m付近にはSDB1間仕切り遺構1が設置され、また遺構北端から約8m付近にはSDB1礫集中1、約10m付近にはSKB2土坑があり、SKB2は埋没途中の一時期に同時存在したと考えられる。幅はB5・6区が良好に残存しており断面D付近で3.2m、多くの箇所で3.0m前後を計る。断面形は逆台形で、深さは北から順に断面A・0.9m、断面B・0.57m、断面C・0.65m、断面D・0.75m、断面F・0.73m、断面G・0.43m、断面H・0.39m、断面I・0.37m、断面J・0.2m、断面K・0.17mと近年の水田造成による削平の影響で、浅くなる傾向がある。また、底面標高についても断面A・38.67m、断面B・38.67m、断面C・38.54m、断面D・38.55m、断面F・38.52m、断面G・38.54m、断面H・38.49m、断面I・38.44m、断面J・38.43m、断面K・38.43mと北から南にかけて標高が下がる。本遺構は、平時は農業用の水路もしくは水溜として利用されたと考えられ、このことは堰の機能を持つ間仕切り遺構1が構築されていることからも理解される。堆積状況は、断面Aは3～15の計12層、断面Dは1～8の計8層、断面Iは単層に細分される。断面Aは1～3層が近年の水田耕作による表土・旧耕作土、4・5層は近世と考えられる木樋を含む水路、6層はそれ以前の水路、8～10層は6層よりも古い水路で、本遺構の堆積土は11～14層である。部分的に、崩落や人為によると見られる層位も観察されるが、概ね水成堆積が認められる。このことから、堀が機能を失った以降は埋没しながらも主に水路として利用されていたことが理解される。断面Dは1層に人為的な埋め戻しが観察されるが、2～8層は水成堆積と見られる。断面Iは削平の影響で薄くなっているが、断面A・D同様の堆積状況である。

遺物は141～143須恵器、556鉄鋌、592・593曲物側板、618車輪状木製品、846杭が出土している。（北田）

〈間仕切り遺構1〉

SDB1内の北端から約30mの地点に、礫と木材で構築した堀底が30cmほど盛り上がって横断する堰状の遺構を確認した。下部構造は、東西方向の列状に打ち込んだ杭1～19（850～868）に横木材1～3（847～849）を渡した簡素な作りである。杭の数から、横木材はもっと設置されていたと見られるが流水の影響で流された可能性がある。その後、礫や木材による補修を繰り返して廃絶したものと考えられる。廃絶時は堀底面から約0.3mほど盛り上がっており、流水をせき止めて水位調節す



第108図 居館跡1（21）遺

る機能を有していたと考えられる。遺構は堀底面に直接構築されていることから、堀を構築した当初から備えられていたと見られ、平時は堀を農業用の水路として活用していたと考えられる。廃絶状況に図示した木材 846 を年代測定したところ、暦年較正年代 1,510calAD － 1,593calAD（2 σ・70.8%）の年代値を得ていることから、16 世紀代に廃絶した遺構と考えられる。（北田）

〈礫集中１〉

SDB1 内の北端から約 8m の地点に、1.5m×0.5m の範囲に大形の礫を集積した箇所を確認した。礫が集中した箇所は堀内部の東壁に沿うように集積されており、前述の間仕切り遺構１が下流に設置されていることから、居館内部から流水をせき止めた堀底へ下りるための足場として構築されたと考えられる。おそらく水を利用するために設置したものであろう。礫の周りには木杭が打ち込まれており、礫が崩落しないような工夫がなされている。本遺構の南側から 592 曲物側板が出土しており、水作業に用いた容器と考えられる。（北田）

〈堀２〉

堀２は、居館跡１を囲む SDB2（SDC8）、SDD1・２堀で構成される遺構である。

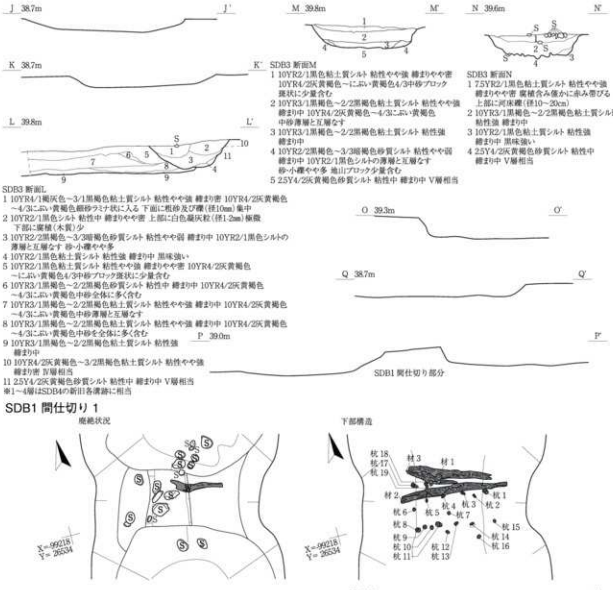
SDB2 堀（第 87・108・109 図、写真図版 87）

調査区中央西側 B5・6 区の X ＝-99194 ～ -99236、Y ＝26538 ～ 26548 付近に位置する。令和２・３年度調査。SDB1 で構成される堀１の約 3m 内側に並行して構築された遺構で、令和３年度に命名した SDC8 も SDB2 の一部である。北端から約 30m の箇所から L 字形に屈曲した後、北端から約 37m の地点で L 字形に屈曲するよう拡張されたと考えられる。北端から約 22m の地点で SKB3 土坑、約 17 ～ 22m の地点で SDC10 溝と重複しており、堆積状況から同時存在していた可能性がある。SDC10 溝は、この SKB3 土坑へ流水を引き入れるための導水路かもしれない。北端から約 36m の地点で SDC7・13 堀、約 16 ～ 32m 地点で SDC9 溝、約 38m 地点で 10・11・14 溝と重複しており、SDC7・13 より本遺構が古く、その他は本遺構が新しい。規模は、拡張前の旧 SDB2 が北端から 30m 地点で L 字形に屈曲して 6m の地点で土橋１となる。拡張後は、北端から 37m 地点で L 字形に屈曲して 10m の地点で削平の影響から途切れる。幅は断面 B・2.10m、断面 C・2.20m、断面 D・2.46m、断面 E・2.23m、断面形は両端側が浅く中央が深い形状で、深さは断面 B・0.23m、断面 C・0.23m、断面 D・0.18m、断面 E・0.23m と SDB1 堀と比べて浅い。底面標高は、断面 B・38.96m、断面 C・38.9m、断面 D・38.94m、断面 E・38.84m、拡張後の屈曲部・38.64m、堀が途切れる地点・38.63m と北から南に下っていることから、SDB1 同様に水路としての機能も考えられる。堆積状況は、断面 D は計２層、断面 T は計２層、断面 U は計３層に細分される。断面 D は９層は撹乱のため 10 層黒褐色土の単一層、断面 T・U は下位が水成堆積する。

遺物は 145 土師器、653 付け木のみで年代を決定できないが、埋土中から出土した炭化物について年代測定したところ、1,506calAD-1,596calAD（２σ・73.4%）の年代値を得た。これから、SDB1 と同様に 16 世紀代に位置付けられる。（北田）

SDD1 堀（第 87・110 図、写真図版 88・89）

調査区中央東側 D3 ～ 5 区の X ＝-99195 ～ -99226、Y ＝26579 ～ 26595 付近に位置する。令和２年度調査。堀２のうち居館跡１の北東から東側北半を囲む堀で、北側は調査区外へ続く。南側は土橋３で区切られており、さらに SDD2 堀東側へと繋がる。重複している遺構はなく、SXD2 池状遺構の付属溝が連結している。規模は長さ 36.8m、幅 1.8 ～ 3.1m、断面形は逆台形で、深さは北端の断面 V・



SDC7・8・9・13 断面 S
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 1cm以下の細礫5%散在 水成堆積か SDC 9 堆土
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 1cm以下の細礫2～3%散在 水成堆積か SDC 9 堆土 SDC7 もしくは SDC 8 の崩壊か
3 10YR2/3黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一
4 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 2～3cm大の小礫3～5%散在 水成堆積か
5 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性中 締まりやや緩 上部に細砂と互層のラミナ堆積 水成堆積 SDC13 堆土
6 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密に2～10cm大の亜角礫を多量に含む 地山

第109図　居館跡1（22）堀、堀付属遺構

0.47m、南側の断面 W・0.23m、底面標高は断面 V・38.32m、断面 W・38.24m で北から南へやや下っている。堆積は断面 V で計 5 層、断面 W で計 2 層に細分され、断面 V・W ともに主として水成堆積した様子が観察される。

遺物は、616 下駄の一部と考えられる木製品、620 鍬先のみで年代を決定できないが、埋土中から出土した生材について年代測定したところ、1.505calAD~1.597calAD（2 σ・74.4%）の年代値を得た。これから、SDB1・2 と同じく 16 世紀代に位置付けられる。（北田）

SDD2 堀（第 87・110 図、写真図版 88 ～ 90）

調査区中央北側 C1・2、D4 区の X = -99229 ～ -99237、Y = 26552 ～ 26591 付近に位置する。令和 2・3 年度調査。堀 2 のうち南側東半から東側南半を囲む堀で、土橋 2 によって西側と東側に区切られる。西側と旧 SDB2 の間には土橋 1、東側と SDD1 との間には土橋 3 が構築されている。東側が SBC4 掘立柱建物と重複しており、本遺構が新しい。東側中央で SKD5 土坑と重複しており、本遺構が古い。西側では SBC6 掘立柱建物と重複しており本遺構が新しく、SDC4 溝や柱穴は新旧不明である。規模は、西側は長さ 29.8m、幅は断面 Z・0.90m、断面 AA・1.47m、底面標高は西端・38.4m、中央・38.39m、東端・38.54m で中央がやや低い。堆積は、断面 Z で計 2 層、断面 AA で計 4 層に細分され、いずれも水成堆積している。東側は長さ 21.3m、幅 1.0 ～ 3.3m、断面形は逆台形で、深さは西側・中央ともに 0.5m、底面標高は西端・37.99m、断面 Y・38.02m、断面 X・38.04m で北西から南東にやや下っている。堆積は断面 X で計 5 層、断面 Y で計 5 層に細分され、断面 X は堀内部からの流入土が多く堆積しており、断面 Y は水成堆積中に崩落土を挟み込む。また、2 層中には木製品を多く含んでいた。

遺物は、587 漆器椀、599 曲物底板、602・603 桶側板、610 ～ 615 連歯下駄、617 折敷、621 農具柄の一部、622 ～ 629 木錘、630 樹皮製籠、636 ～ 641・643 ～ 648 板状木製品、650 ～ 652・654 付け木、792 柱材、871 ～ 889 杭材の木質遺物が多量に出土した。このうち、630・631 樹皮製籠は、SDD2 東側の西端埋土中位にまとめて廃棄されていた。

年代を決定する遺物が出土していないが、堀 2 の他の地点の年代測定結果から、16 世紀代と捉えたい。（北田）

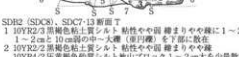
〈堀 3〉

堀 3 は、居館跡 1 の西端に位置する短い堀で、SDB3 のみで構成される遺構である。

SDB3 堀（第 87・108・109 図、写真図版 86・88）

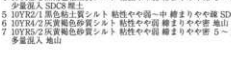
調査区中央西側 B5 区の X = -99189 ～ 99204、Y = 26533 ～ 26537 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構北端で SDB4 溝及び SXB4 性格不明遺構と重複しており、本遺構が古い。本遺構は SDB1 堀の西側 3 ～ 4 m に並行して設置された堀で、SDB4 溝・SXB4 性格不明遺構と重複する箇所でちょうど途切れる長さの短い堀である。規模は長さ 15.2m、幅 1.3 ～ 2.0m、断面形は逆台形で深さは断面 M・0.34m、断面 N・0.38m、底面標高は北端・39.07m、断面 M・39.27m、断面 N・38.94m、南端・39.07m とほぼ平坦である。堆積は断面 L・計 4 層、断面 M・計 4 層、断面 N・計 3 層でいずれも埋土下位は水成堆積であるが、埋土上位は礫やブロック土を含んでおり人為堆積と考えられる。写真図版 88 に示したが、遺構南側では埋土上位に人為的に礫を入れている様子が観察される。

遺物は、埋土から出土した 146 須恵器甕のみで年代を決定できないが、並行する堀 1・2 の年代測定結果から、16 世紀代と捉えたい。（北田）



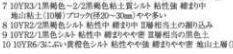
SDB2（SDC8）、SDC7・13 断面 T

1 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に1～2㎝大の細礫、1～2㎝と 10㎝弱の中～大礫（亜円礫）を下部に散在
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 地山ブロック1～2㎝大を少量散在
上部に細礫を互層で堆積しており、水成堆積と見られる SDC7・13 埋土
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩
10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 地山ブロック5～10㎝大を下部に散在
壁面落土で、全体は水成堆積している SDC7・13 埋土
4 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～3㎝大の細礫を少量混入 SDC8 埋土
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 SDC8 埋土 水成堆積
6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR3/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 5～10㎝大の亜角礫を多量混入 地山



SDD1 断面V

1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まり薄 草根多い 現表土
2 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 地山砂極微 新期溝か
3 10YR3/1黒褐色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中 腐植少量含む（アシ類または小枝様）
4 10YR3/1黒褐色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中 全体に砂含む
5 10YR3/1黒褐色～2/2黒褐色粘土質シルト 3層対応、下部は腐植多い
6 10YR3/1黒褐色～2/2黒褐色粘土質シルト IV層と同じ 砂含む層
7 10YR3/1黒褐色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中
地山土（10層）ブロック(径20～30㎜)や多い
8 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中 IV層相当土の割り込み
9 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まりやや密 IV層相当の黒色土
10 10YR6/3にぶい黄橙色シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山土層（IV～V層相当）

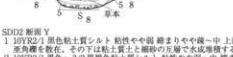


SDD2 断面 Y

1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～中 上部に2～10㎝大の亜角礫を散在、その下は粘土質土と細砂の互層で水成堆積する
2 10YR2/1 黒色～3/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩～中で、粘土質土と細砂の互層で水成堆積する。下に植物質（草本腐アク・コン）を多量に含む。下駄や魔などを出土。
3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト と2～5㎝大の亜角礫を含む細砂の互層 粘性やや弱 締まりやや緩～中 壁面崩落土
4 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト 粘性中 締まりやや緩～中の粘土質土と細砂の互層が水成堆積する 初期埋土
5 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～5㎝大の亜円礫を含む 使用時の水成堆積
6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 地山
7 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～10㎝大の亜角礫を多量に含む 地山
8 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 地山

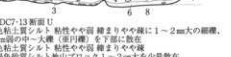
SDD2 断面 Z

1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～8㎝大の亜角礫散在、細中に粘土質土と細砂の互層で水成堆積する。
2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～5㎝大の亜角礫を含む。使用時の水成堆積。
3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～10㎝大の亜角礫を多量に含む 地山



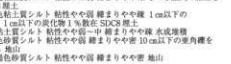
SDD2 断面 AA

1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1㎝以下の細礫3％、2～5㎝大の中礫（亜角礫）2％散在
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 2～5㎝大の亜角礫1％散在 水成堆積
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性中 締まりやや緩 5㎝大の亜角礫 木質と多く含む。低湿地からの堆積か、水成堆積する。植物質を多量に含む。
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 地山
6 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 2～10㎝大の亜角礫を多量に含む 地山
7 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 地山



SDB2（SDC8）、SDC7・13 断面 U

1 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に1～2㎝大の細礫、1～2㎝と 10㎝弱の中～大礫（亜円礫）を下部に散在
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩
10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 地山ブロック1～2㎝大を少量散在
上部に細礫を互層で堆積しており、水成堆積と見られる SDC7・13 埋土
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩
10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 地山ブロック5～10㎝大を下部に散在
壁面落土で、全体は水成堆積している SDC7・13 埋土
4 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～3㎝大の細礫を少量混入 SDC8 埋土
5 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1㎝以下の細礫3～5％、1㎝以下の炭化物1％散在 SDC8 埋土
6 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 水成堆積
7 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 10㎝以下の亜角礫を多量に混入する 地山
8 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 地山



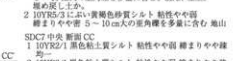
SDD1 断面W

1 10YR2/1黒色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中 上部に腐植やや多い
2 10YR2/1黒色シルト10YR2/2黒褐色黒褐色粘土質シルト地山砂(3層)の混合ブロック層
3 2.5Y5/3黄褐色砂礫層(V層相当)

SDD2 断面X

1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中 締まり中 礫(径20～50㎜)少量含む SKD5埋土
2 10YR2/1黒色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 砂全体に散量、腐植微量、礫(径5～10㎜)極微量含む
3 10YR2/1黒色～2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中 地山砂微少
4 10YR2/1黒色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中 腐植少(目立つ)
5 10YR2/1黒色～2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密
地山ブロック(径20～30㎜)大量に含む 人為埋土
6 10YR3/1黒褐色粘土 粘性強 締まり中 下部に地山砂やや多い 側面直後の土層か
7 2.5Y5/3黄褐色礫砂～粗砂 礫含む(径5～30㎜) 地山砂礫層

SDD2東側遺物出土状況



SDC7東側2 断面BB

1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 5～10㎝大の亜角礫を多量に含む。SDC7 埋土。
地の状しか。
2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 5～10㎝大の亜角礫を多量に含む 地山

SDC7中央 断面CC

1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩を主体に、10YR2/3 黒褐色粘土質シルトブロック 1～2㎝大を個部付近に散在
3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

SDC7・13西側 断面DD

1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1㎝以下の細礫3％、2～5㎝大の亜角礫2％散在 水成堆積
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 主体に細砂との互層 粘性やや弱 締まりやや緩 5～8㎝大の亜角礫を混入する上部からの流入 鞣側付近に鞣化鉄の集積が顕著 SDC7 埋積層

3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 下部に 10YR5/3 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック 2～5㎝大を少量散在 前溝か SDC13 埋積層
4 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 5～10㎝大の亜角礫を多く含む礫層 地山

※SDC13が古く、埋積後に同じ位置に拡張してSDC7を構築した

0　1:60　2m

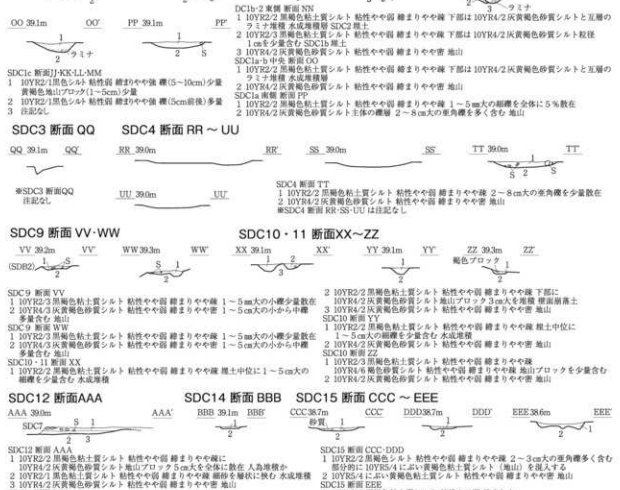
第110図　居館跡1（23）堀、溝

（堀４）

堀４は、居館跡１・旧堀２の南側に並行する堀で、SDC7 と SDC13 で構成される遺構である。

SDC7 堀（第 87・109・110 図、写真図版 87 ～ 89）

調査区中央西側 C1・2 区の X ＝ -99229 ～ -99238、Y ＝ 26537 ～ 26564 付近に位置する。令和３年度調査。遺構西側で SDB2、SDC13 堀と重複し、本遺構が新しい。また、SDB1a 溝と重複しており、本遺構が古い。本遺構は堀２の旧 SDB2 と SDD2 西側の南側 2.1 ～ 3.0m に並行する堀で、直線的に構築された遺構である。SDC7 東側と東側２の間は途切れているとみられ、土橋４が構築されたと考えられる。東側２の東端は削平の影響で失われているが堀２の SDD2 東側に並行していた可能性がある。SDC13 堀は SDC1a 溝付近まで構築されたと考えられ、以後に本遺構が延長して構築されたと見られる。規模は、SDC7 西側・東側の長さ 20.0m、幅は断面 DD・1.1m、中央の断面 CC・0.65m、東・0.8m、



第 111 図　居館跡１（24）溝

断面形は逆台形で深さは断面 DD・0.18m、中央の断面 CC・0.18m、底面標高は断面 DD・38.78m、断面 CC・38.62m と西から東に下っている。堆積は断面 CC で計 2 層、断面 DD で計 2 層で水成堆積を主体とする。

遺物は、536 台石、608 篦状木製品、869 杭材のみで年代を決定できないが、並行する堀 1 ・ 2 の年代測定結果から、16 世紀代と捉えたい。（北田）

SDC13 堀（第 87・109・110 図、写真図版 87・88）

調査区中央西側 C1 区の X = -99229 ～ -99233、Y = 26536 ～ 26547 付近に位置する。令和 3 年度調査。遺構北側で SDC7、遺構東端で SDC12 溝と重複しており、本遺構が古い。また、遺構西側で SDB2 と重複しており、本遺構が新しい。本遺構は堀 2 の南側に並行する SDC7 堀より前に構築された遺構である。SDC12 溝と接する箇所で途切れていたとみられ、土橋が構築されていたと考えられる。規模は長さ 20.5m、幅は断面 DD・約 0.8m、中央の断面 S・1.05m、東端・約 1.0m、断面形は逆台形で深さは断面 DD・0.28m、中央の断面 S・0.22m、底面標高は断面 DD・38.68m、断面 S・38.66m、東端・38.71m とほぼ平坦である。堆積は断面 DD・S で単層、断面 S で水成堆積を主体とする。

年代を決定する遺物が出土していないが、堀 1 ・ 2 の年代測定結果から 16 世紀代と捉えたい。

（北田）

（d）溝

SDB4 溝（第 112 図、写真図版 91）

調査区北西側 B1・2・3 区の X = -99188 ～ -99224、Y = 26482 ～ 26536 付近に位置する。令和 2 年度調査。東西方向に走る溝と直交して南北方向へ走る溝を一括した。遺構東側で SXB4・5 性格不明遺構と重複しており、一時期に同時存在したと考えられる。東西方向に走る溝は 3 条が重なり合って確認されているが、断面 A から南側が最も古く、北側が最も新しいと考えられる。規模は SXB4 性格不明遺構に接する部分までの長さは 54.5m、幅は断面 A で SDB4（古）・約 1.6m、SDB4（中）・約 2.4m、SDB4（新）・約 1.4m、断面 B で SDB4（古）・約 0.6m、SDB4（新）・約 0.9m、深さは断面 A で SDB4（古）・0.38m、SDB4（中）・0.23m、SDB4（新）・0.3m、断面 B で SDB4（古）・0.1m、SDB4（新）・0.18m、底面標高は断面 A で SDB4（古）・39.92m、SDB4（中）・40.02m、SDB4・（新）・40.03m、断面 B で SDB4（古）・39.58m、SDB4（新）・39.53m、全体に底面標高は西から東へ、また北から南へ下っている。堆積状況は、粘質の強い黒褐色土主体に砂礫を挟み込む水成堆積である。

遺物は、埋土から 147 須恵系 a 坏、148 須恵器甕、462ab 陶器広口壺（12 世紀後半）、522ab 丸瓦、564 寛永通寶（古寛永・寛永 13 年（1636）初鋳）、568 旭日竜 5 銭銀貨（明治 3 年（1870）鋳造）が出土している。多くの時期の遺物が出土しており、明治時代までに埋没したと考えられる。（北田）

SDB5 溝（第 87・111 図、写真図版 91）

調査区中央西側 B6・C1 区の X = -99213 ～ -99223、Y = 26542 ～ 26546 付近に位置する。令和 2 年度調査。SDB2 堀、SDC9 溝の東側に南北に並行して走る SDB5a 溝と付属する SDB5b ～ d 溝の 4 条を一括した。SDB1a 溝と SDC1d 溝、SDC1c 溝と SDB5b・c 溝は連結しており、同時存在したと考えられる。SBC18 掘立柱建物と重複するが、新旧は不明である。

〈SDB5a〉 南北に走る溝で、規模は長さ 10.0m、幅は断面 EE・0.34m、断面 FF・0.46m、深さは断面 EE・0.05m、断面 FF・0.07m、底面標高は断面 EE・38.99m、38.94m である。堆積状況は不明である。

〈SDB5b〉 SDC1c 溝に連結する L 字形に屈曲する遺構で、規模は長さ 1.7m のところで北へ 1.5m 屈

曲する。幅は断面 GG・0.47m、深さは断面 GG・0.07m、底面標高は断面 GG・38.97m である。堆積状況は不明である。

〈SDB5c〉SDC1c 溝に連結して東西方向に走る溝で、規模は長さ 2.70m、幅は断面 HH・0.47m、深さは断面 HH・0.06m、底面標高は断面 HH・38.93m である。堆積状況は不明である。

〈SDB5d〉SDC5a 溝北側から隣接して南北に走る SDC9 溝に連結する遺構で、規模は長さ 0.64m、幅は断面 II・0.43m、深さは断面 II・0.05m、底面標高は断面 II・39.03m である。堆積状況は不明である。

（北田）

SDB6 溝（第 18・87 図、写真図版 91）

調査区中央西側 B6 区の X = -99217 ～ -99219、Y = 26547 ～ 26548 付近に位置する。令和 2 年度調査。SBB3 掘立柱建物・PPB206 と重複する短い溝で、長さは 2.27m、幅は 0.43m、深さは 0.03m、底面標高は 38.98m である。堆積状況は不明。戦国時代末に所属すると考えられる。（北田）

SDB7 溝（第 87・111 図、写真図版 91）

調査区中央北側 B6 区の X = -99211 ～ -99213、Y = 26552 ～ 26554 付近に位置する。令和 2 年度調査。PPB225 と重複するが、新旧不明である。北西 - 南東に走る溝で、長さは 2.3m、幅は断面 FFF・0.16m、深さは断面 FFF・0.05m、底面標高は断面 FFF・38.95m である。堆積状況は不明。戦国時代末に所属するとみられる。（北田）

SDB8 溝（第 87・111 図、写真図版 91）

調査区中央北側 B6 区の X = -99211 ～ -99213、Y = 26554 ～ 26555 付近に位置する。令和 2 年度調査。SDB8a と SDB8b の 2 条からなる遺構を一括した。SBC21 掘立柱建物・PPB155、SBC10 掘立柱建物・PPB193 と重複するが、新旧不明である。戦国時代末に所属するとみられる。

〈SDB8a〉北へ 1.1m 延び北西へ 0.8m 屈曲する溝で、規模は長さ 1.9m、幅は断面 GGG・0.15m、深さは断面 GGG・0.03m、底面標高は断面 GGG・38.97m である。堆積状況は不明。

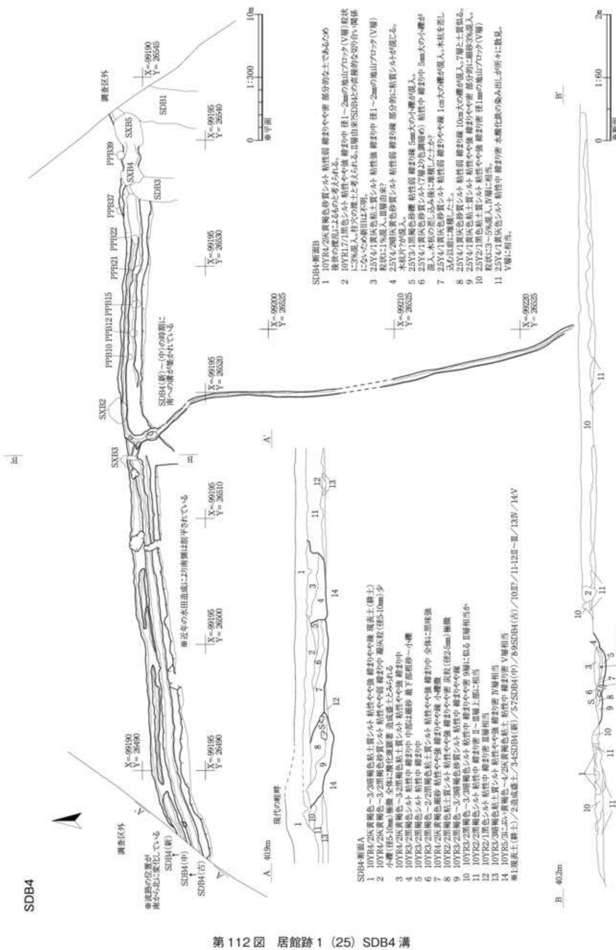
〈SDB8b〉北へ 0.8m 延び北西へ 1.3m 屈曲する溝で、規模は長さ 2.1m、幅は断面 GGG・0.23m、深さは断面 GGG・0.1m、底面標高は断面 GGG・38.95m である。堆積状況は不明。（北田）

SDC1 溝（第 87・111 図、写真図版 90）

調査区中央北側 C1 区の X = -99217 ～ -99246、Y = 26542 ～ 26554 付近に位置する。令和 2 年度調査。居館跡 1 内部を南北に走る溝で、SDC1a ～ f の 6 条で構成される遺構を一括した。遺構北側の SBB3、遺構南側の SBC7 掘立柱建物と直接切り合っており、本遺構が新しい。また、遺構北側の SBC13・19 掘立柱建物、遺構西側の SBC18、遺構南側の SBC17 掘立柱建物と直接切り合っているが、新旧は不明である。L 字形やコ字形に屈曲する溝が大半で、建物を区画する溝や雨落ち溝の可能性もある。重複が著しく、また埋土が薄いため遺構の判別が困難である。SDC1a から 490 瀬戸美濃（大窯期）の折縁皿（16 世紀後半）、559 天聖元寶（北宋・初鋳 1,023 年）が出土し、居館内の建物に関連すると推測されることから 16 世紀代に位置付けられる。

〈SDC1a〉南北に走る規模は長さ 30.3m、幅は北端 0.3m、中央付近 0.74m、南端 0.58m、底面標高は断面 JJ・38.77m、断面 OO・38.72m、断面 PP・38.78m とやや南に下っている。水成堆積。

〈SDC1b〉SDC1b と 13.2m 並行に南西へ走った後、北西に 2.9m 屈曲して旧 SDB2 と連結する遺構である。新旧不明。規模は長さ 16.1m、幅は北端 0.27m、中央付近 0.44m、南端 0.38m、深さは断面



第112図　居館跡1（25）SDB4溝

NN・0.11m、底面標高は中央南・38.84m、断面 NN・38.78m、南端・38.86m とほぼ平坦である。水成堆積。

〈SDC1c〉SDC1a と 8.5m 並行して南西へ走った後、北西に 5.2m 屈曲して SDB5c と連結する遺構である。新旧不明。規模は長さ 13.7m、幅は北端 0.27m、断面 JJ・0.86m、中央付近 1.04m、断面 KK・0.92m、深さは断面 JJ・0.14m、断面 KK・0.09m、底面標高は断面 JJ・38.77m、断面 KK・38.82m である。水成堆積か。

〈SDC1d〉SDC1a と 9.0m 並行して南西へ走った後、北西に 7.1m 屈曲して SDB5a と連結する遺構である。新旧不明。規模は長さ 16.1m、幅は断面 JJ・0.4m 前後、断面 LL・0.28m、深さは断面 JJ・0.05m、断面 LL・0.05m、底面標高は断面 JJ・38.82m、断面 LL・38.88m である。水成堆積か。

〈SDC1e〉SDC1b と直交し、北西に 5.7m 走って SDC1d と連結する。新旧不明。規模は長さ 5.7m、幅は断面 MM・0.3m 前後、深さは断面 MM・0.09m、底面標高は 38.86m である。水成堆積。

〈SDC1f〉SDC1e と並行して北西に走る溝で、北西へ 3.8m 走って屈曲し、北東へ 2.8m 延びる遺構である。SDC1c・d・e よりも古いか。規模は長さ 6.6m、幅は断面 MM・0.2m 前後、深さは断面 MM・0.05m、底面標高は断面 MM・38.88m である。水成堆積。（北田）

SDC2 溝（第 87・111 図、写真図版 87・91・92）

調査区中央西側 C1 区の X＝-99227 ～ -99230、Y＝26542 ～ 26548 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 1 内部を北西－南東方向に走る溝で、SDC1a もしくは b に連結する遺構と考えられる。SDC1b と並行して北西に 4.9m 走り、1.1m 屈曲し旧 SDB2 堀と重複する。新旧不明。規模は長さ 6.0m、幅は断面 NN で 0.47m、深さは 0.13m、底面標高は 38.77m である。水成堆積。居館内の建物に関連すると推測されることから、16 世紀代に位置付けられる。（北田）

SDC3 溝（第 87・111 図、写真図版 90）

調査区中央北側 C1 区の X＝-99216 ～ -99229、Y＝26553 ～ 26560 付近に位置する。令和 2 年度調査。SDC1a 溝の南東 2.4m に並行して走る溝で、規模は長さ 14.2m、幅は断面 QQ で 0.36m、深さは 0.11m、底面標高は 38.77m である。堆積状況は不明。居館内の建物もしくは SDC1a との関係で、道路側溝とも見られることから、16 世紀代に位置付けられる。（北田）

SDC4 溝（第 87・111 図、写真図版 92）

調査区中央北側 C1 区の X＝-99219 ～ -99232、Y＝26558 ～ 26563 付近に位置する。令和 2 年度調査。遺構北側で SBC1、遺構南側で SBC6 と重複しており、本遺構が新しい。また、遺構北側で SBC22、遺構南側で SBC23・24・25 と重複するが新旧不明である。遺構南端は SDD2 堀西側と接しており、溝はこれより南へ続かないことから、同時存在した可能性がある。南北に走る溝を SDC4a、東西に走る溝を SDC4b とする。断面 TT から水成堆積と考えられ、礫を少量散在する。埋土から 478 古瀬戸瓶子（14 世紀後葉～15 世紀第 1 四半期）、529 砥石、588・589 漆器椀、598 曲物底板が出土しており、居館内にあることから 16 世紀代に位置付けられる。

〈SDC4a〉南北に走る溝で、規模は長さ 12.8m、幅は断面 RR・約 0.7m、断面 TT・0.98m、深さは断面 RR・0.07m、断面 TT・0.08m、底面標高は断面 RR・38.84m、中央・38.78m、南端・38.73m と北から南へ下っている。

〈SDC4b〉東西に走る溝で、規模は長さ 3.7m、幅は断面 UU・0.92m、深さは断面 UU・0.04m、底面

標高は断面 UU・38.86m で連結する SDC4a 方向へ下っている。　（北田）

SDC9 溝（第 87・111 図、写真図版 87）

調査区中央西側 B6・C1 区の X＝-99209 ～ -99233、Y＝26540 ～ 26545 付近に位置する。令和 3 年度調査。SDB2 と並行して南北に 20.9m 走り、南東へ 5.7m 屈曲する遺構である。SDB2、旧 SDB2、SDC7・13 堀と重複しており、同時存在もしくは本遺構が古い。規模は長さ 26.6m、幅は断面 VV・0.46m、断面 WW・0.57m、深さは断面 VV・0.04m、断面 WW・0.03 ～ 0.08m、底面標高は断面 VV・38.97m、断面 WW・39.02m である。いずれも水成堆積と考えられる。SDB2 堀との関係から、戦国時代末に所属すると考えられる。　（北田）

SDC10 溝（第 87・111 図、写真図版 92）

調査区中央西側 B6・C1 区の X＝-99211 ～ -99248、Y＝26536 ～ 26542 付近に位置する。令和 3 年度調査。本遺構は 2 箇所から検出されており、北側を SDC10a、南側を SDC10b とする。SDC10a は SDB2 と並行しており、一時期に同時存在していた可能性がある。また、遺構南側で SKB3 土坑と切り合っているが、新旧不明である。SDC10b と SDB2（SDC8）は切り合っており、本遺構が古い。SDC11・14 は本遺構より古いが、ほぼ同時期と考えられる。SKC11 とは遺構南側で切り合っており、本遺構が新しい。

〈SDC10a〉 規模は長さ 4.5m、幅は断面 ZZ・0.24m、深さは断面 ZZ・0.04m、底面標高は北端・39.04m、南端・39.02m、断面 ZZ・39.0m で北から南へやや下っている。水成堆積だが、地山崩落土を含んでいる。

〈SDC10b〉 SDB1 堀の屈曲と並行して、3.1 ～ 4.2m 内側を走る溝で、規模は長さ 20.7m、幅は断面 XX・0.36m、断面 YY・0.3m、深さは断面 XX・0.1m、断面 YY・0.08m、底面標高は北端・38.87m、中央・38.79m、南端・38.73m と北から南に下っている。堆積はいずれも水成堆積で、細礫を含んでいる。

SDB1 堀と本遺構がほぼ並行して走ることを考慮すると、間に土塁状の高まりがあった可能性があり、本遺構は土塁の裾を巡る溝と推定される。遺物は出土していないが、SDB1 堀と一時期に同時存在していたと考えられることから、16 世紀代に所属すると考えられる。　（北田）

SDC11 溝（第 87・111 図、写真図版 92）

調査区中央西側 C1 区の X＝-99232 ～ -99248、Y＝26536 ～ 26542 付近に位置する。令和 3 年度調査。SDC11 とほぼ同一位置にある溝で、SDC10 に先行すると考えられる。規模は長さ 19.6m、幅は断面 XX・0.26m、深さは断面 XX・0.08m、底面標高は北端・38.90m、中央・38.93m、南端・38.73m と北から南へ下っている。水成堆積で、下部に地山ブロックを含んでいる。SDC10 と同様に遺物は出土していないが、SDB1 堀と一時期に同時存在していたと考えられることから 16 世紀代に所属すると考えられる。　（北田）

SDC12 溝（第 87・111 図、写真図版 93）

調査区中央北側 C1 区の X＝-99231 ～ -99234、Y＝26546 ～ 26547 付近に位置する。令和 3 年度調査。SDC1a 溝とほぼ同一位置にある溝で、流路が一部変化した箇所と考えられる。SDC7・13 堀と重複しており、本遺構が新しい。規模は長さ 2.6m、幅 0.59m、深さ 0.09m、底面標高は北端・38.68m、南端・38.69m と平坦に近い。下部は水成堆積だが、上部は地山ブロックが入り人為的に埋め戻され

た可能性がある。SDC1a 溝と同じく 16 世紀代に所属し、雨裂とも考えられる。

SDC14 溝（第 87・111 図、写真図版 93）

調査区中央西側 C1 区の X = -99232 ～ -99233、Y = 26538 ～ 26540 付近に位置する。令和 3 年度調査。SDC10・11 溝とほぼ同一位置にある溝で流路が一部変化した箇所と考えられ、ほぼ同時存在したと考えられる。規模は長さ 2.0m、幅は断面 BBB・0.32m、深さは断面 BBB・0.03m、底面標高は北端・38.88m、南端・38.92m と平坦に近い。SDC10・11 と同様に遺物は出土していないが、SDB1 堀と一時期に同時存在していたと考えられることから 16 世紀代に所属すると考えられる。（北田）

SDC15 溝（第 87・111 図、写真図版 93）

調査区中央東側 C2 区の X = -99231 ～ -99259、Y = 26555 ～ 26573 付近に位置する。令和 3 年度調査。中央付近が削平の影響で焼失して北側・SDC15a と南側・SDC15b に分かれて確認した遺構である。南側が SBC3 掘立柱建物と重複しており、本遺構が新しい。遺物は出土していないが、平安時代の SBC3 より新しい中世以降に所属すると考えられる。

〈SDC15a〉 規模は長さ 5.0m、幅は断面 EEE・0.77m、深さは断面 EEE・0.09m、底面標高は北端・38.47m、断面 EEE・38.41m、南端・38.26m で北から南へ下っている。黒褐色土の水成堆積層が認められる。

〈SDC15b〉 規模は長さ 15.9m、幅は断面 CCC・0.65m、断面 DDD・0.43m、深さは断面 CCC・0.04m、断面 DDD・0.05m、底面標高は北端・38.49m、中央・38.52m、南端・38.54m とほぼ平坦である。黒褐色土の水成堆積層で、砂質土を挟む。（北田）

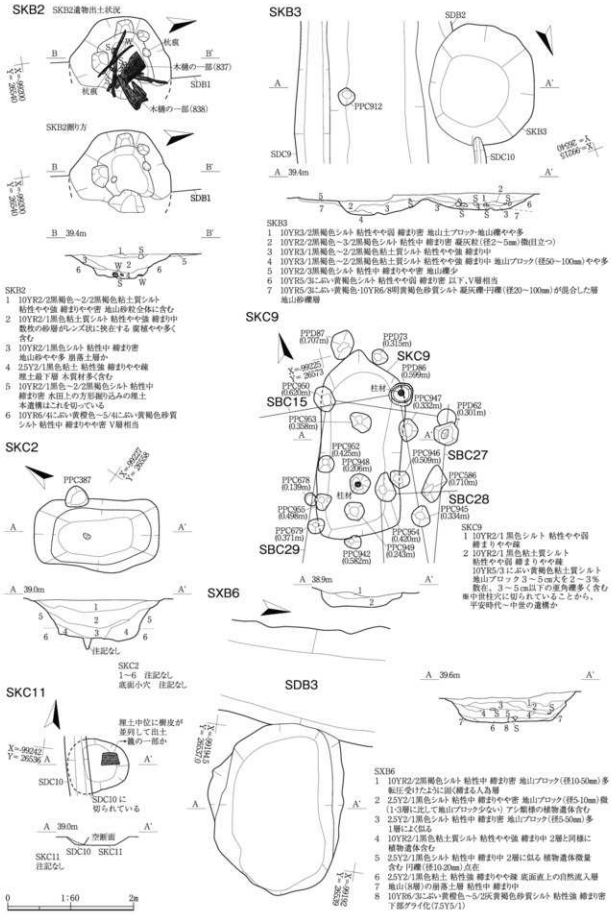
（e）土坑

SKB2 土坑（第 113 図、写真図版 85）

調査区北西側 B5 区の X = -99200、Y = 26540 付近に位置する。令和 2 年度調査。SDB1 堀と SDB3 堀の間にある土坑で、SDB1 が埋没する過程の一時期に同時存在したと考えられる。規模・形状は長さ 1.6m、幅（1.3）m 以上、深さ 0.38m の不整円形で、断面形は皿形である。遺構東側は SDB1 を先行して調査したことから失われているが、切り合い関係は本遺構が新しい。堆積土は 1 ～ 4 層の計 4 層で構成されており、最下層の 4 層中に木質を多く含む。上位層は、水成堆積による埋没と考えられる。底面直上から 565 寛永通寶（古寛永・1,636 年初鋳）、埋土下位から 525 丸瓦（平安時代）、837・838 木樋の一部（半割したクリの丸太材を刳り貫いている）、839 ～ 844 杭材（樹種未同定）が出土していることから、17 世紀前半頃に木樋の部材を廃棄したと考えられる。（北田）

SKB3 土坑（第 113 図、写真図版 85）

調査区中央西側 B6 区の X = -99215、Y = 26540 付近に位置する。令和 2 年度調査。SDB1 堀と SDB2 堀の間にある土坑で、SDB2 が埋没する過程の一時期に同時存在したと考えられる。遺構北側に重複する SDC10 溝は、この SKB3 土坑へ流水を引き入れるための導水溝かもしれない。規模・形状は長さ 1.9m、幅（1.67）m 以上、深さ 0.28m の円形で、断面形は皿形である。遺構東側は SDB2 を先行して調査したことから失われているが、切り合い関係は本遺構が新しい。堆積土は 1 ～ 4 層の計 4 層で構成されており、SDB2 と同様の堆積状況が認められる。遺物は出土していないが、SDB2 堀と同時存在した時期が推定できることから、16 世紀代と考えられる。（北田）



第113図　居館跡1（26）土坑、SXB6性格不明遺構

SKC1 土坑（第 101 図、写真図版 85）

調査区中央東側 C1 区の X = -99225、Y = 26565 付近に位置する。令和２年度調査。SBC1・SBC22 掘立柱建物と重複しており、このうち SBC1・PPC77、PPC78 と直接切り合って本遺構が新しいが、柱穴を先行して調査したことから遺構北側は失われている。規模・形状は長さ（1.85）m 以上、幅 0.64m 以上、深さ 0.26m の長楕円形で、断面形は鍋底形である。堆積土は記録がなく不明だが、自然堆積と考えられる。遺物が出土しておらず時期不明だが、遺構の切り合いや居館跡１内部に位置することから中世以降と考えられる。（北田）

SKC2 土坑（第 102・113 図、写真図版 85）

調査区中央東側 C1 区の X = -99227、Y = 26558 付近に位置する。令和２年度調査。SBC23 掘立柱建物と重複しているが、直接の切り合い関係はなく新旧不明である。規模・形状は長さ 1.98m、幅 1.16m、深さ 0.64m の隅丸長方形で、断面形は鍋底形、底面に小穴が１箇所認められる。堆積土は１～４層の計４層だが、調査後に図面を紛失しており土層注記は不明である。遺物が出土しておらず時期不明だが、居館跡１内部に位置することから中世以降と考えられる。（北田）

SKC9 土坑（第 113 図、写真図版 85）

調査区中央東側 C1・D4 区の X = -99225、Y = 26573 付近に位置する。令和３年度調査。SBC15・27・28・29 掘立柱建物と重複しており、このうち SBC15・PPD86、SBC28・PPC954、SBC29・PPC950 と直接切り合っており本遺構が古い。また、SBC27 とは直接の切り合い関係はなく新旧不明である。規模・形状は長さ 2.95m、幅 1.34m、深さ 0.22m の隅丸長方形で、断面形は鍋底形である。堆積土は１・２層の計２層で、２層は人為堆積の可能性がある。埋土から少量の土師器を出土しているが、居館跡１内部に位置することから中世以降と捉えておきたい。（北田）

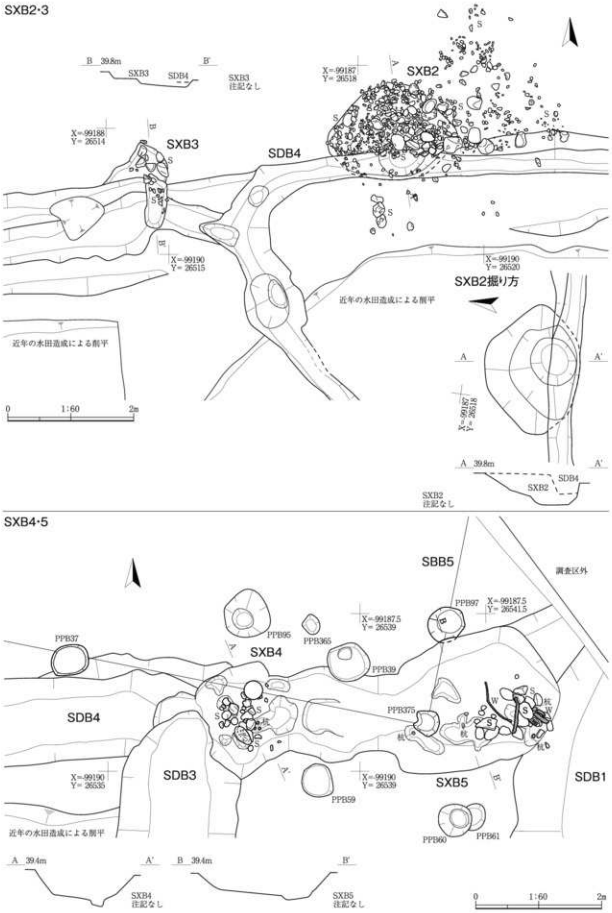
SKC11 土坑（第 113 図、写真図版 85）

調査区中央南側 C1 区の X = -99242、Y = 26536 付近に位置する。令和３年度調査。SDC10 溝と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は長さは推定値で（0.98）m、幅 0.87m、深さ 0.13m の不整円形で、断面形は皿形である。堆積土は記録していないが、黒褐色土主体の自然堆積層である。埋土中位に樹皮が並列して出土しており、SDD2 堀東側から出土した 630 樹皮製籠、SBC9・PPC857 から出土した 631 樹皮製籠の一部とも近似しており、居館跡１内部に位置することから中世以降と捉えておきたい。（北田）

（ｆ）性格不明遺構

SXB2 性格不明遺構（第 114 図、写真図版 93）

調査区北西側 B2・3 区の X = -99186 ～ -99189、Y = 26517 ～ 26521 付近に位置する。令和２年度調査。SDB4 溝と重複しており、本遺構が古い。堆積土に多量の亜円礫を含む土坑で、規模・形状は長さ 1.65m、幅 1.63m の不整方形で、深さは 0.47m、断面形は鉢形である。堆積状況は不明だが、多量の亜円礫は人為的に埋められた可能性が高い。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明だが、江戸時代初期までに埋没した SDB4 溝より古い。性格は SXB3 と同様と見られ、中世以降と捉えておきたい。（北田）



第 114 図　居館跡 1（27）SXB2・3、4・5 性格不明遺構

SXB3 性格不明遺構（第 114 図、写真図版 94）

調査区北西側 B2 区の X＝-99188～-99189、Y＝26513～26515 付近に位置する。令和２年度調査。SDB4 溝と重複しており、本遺構が古い。堆積土に多量の亜円礫を含む土坑で、規模・形状は長さ 1.38m、幅 1.03m の不整方形で、深さは 0.15m、断面形は皿形である。堆積状況は不明だが、多量の亜円礫は人為的に埋められた可能性が高い。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明だが、江戸時代初期までに埋没した SDB4 溝より古い。性格は SXB2 と同様と見られ、中世以降と捉えておきたい。

（北田）

SXB4 性格不明遺構（第 114 図、写真図版 94）

調査区北西側 B5 区の X＝-99188～-99190、Y＝26536～26537 付近に位置する。令和２年度調査。SXB5 性格不明遺構と同じく、SDB4 溝内の一時期に構築された遺構である。遺構南西側で SDB3 堀と接しており、同時存在した可能性がある。規模は長さ 1.8m、幅 1.5m、深さは 0.39m、最も深い箇所は 0.52m である。SDB4 溝の底面に木杭を打ち込み、上流である西側に 10～35㎝大の亜円礫を集積して水位調節のための堰を構築している。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明だが、SDB4 溝内に構築されていることから、SDB1 や SDB3 堀が構築された 16 世紀代から明治時代までに埋没したと考えられる。

（北田）

SXB5 性格不明遺構（第 114 図、写真図版 94）

調査区北西側 B5 区の X＝-99187～-99190、Y＝26539～26542 付近に位置する。令和２年度調査。SXB4 性格不明遺構と同じく、SDB4 溝内の一時期に構築された遺構である。遺構東側で SDB1 堀と接しており、同時存在した可能性がある。規模は長さ 2.6m、幅 2.1m、深さは 0.70m、最も深い箇所は 0.76m である。SDB4 溝の底面に木杭を打ち込み、上流である西側に 10～35㎝大の亜円礫を集積して水位調節のための堰を構築している。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明だが、SDB4 溝内に構築されていることから、SDB1 堀が構築された 16 世紀代から明治時代までに埋没したと考えられる。

（北田）

SXB6 性格不明遺構（第 113 図、写真図版 94）

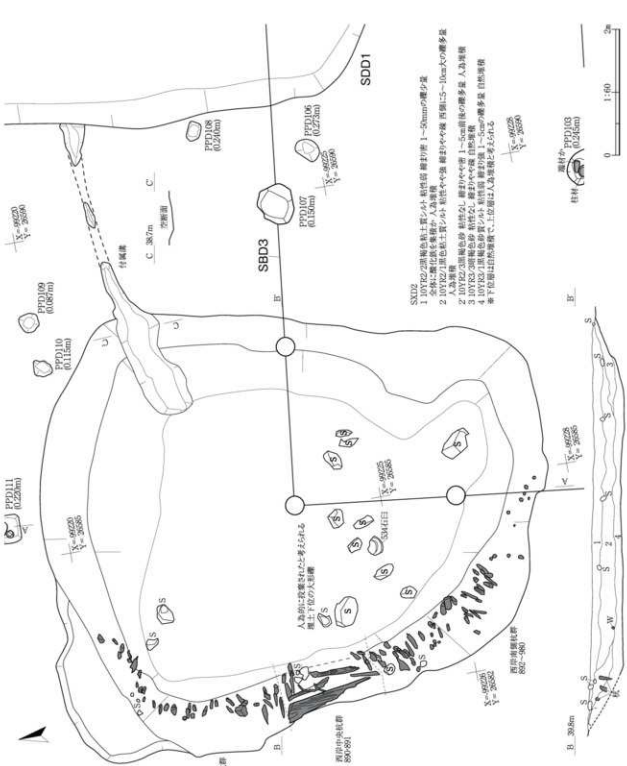
調査区中央西側 B5 区の X＝-99192～-99194、Y＝26536～26539 付近に位置する。令和２年度調査。削平を受けたⅤ層上面において、概ね楕円形を呈する暗褐色土範囲として検出した。西端が SDB3 堀に接するが先後関係は不明である。規模・形状は、長さ 2.74m、幅 2.17m の楕円～隅丸方形を呈する。残存最深度は 0.54m で、底面は平坦に整っている。壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。埋土は、最下部の自然流入層（６層）より上位は、一時に埋め戻された人為層である。埋め戻し土にはアシの類とみられる植物遺体が比較的多く含まれている。埋土中から 169 須恵系 b 高台坏、609 杓子か（ウリ科ユウガオ属果皮）が出土している。隣接する遺構の堆積状況に似ることから、戦国時代末に所属すると考えられる。

（村上・北田）

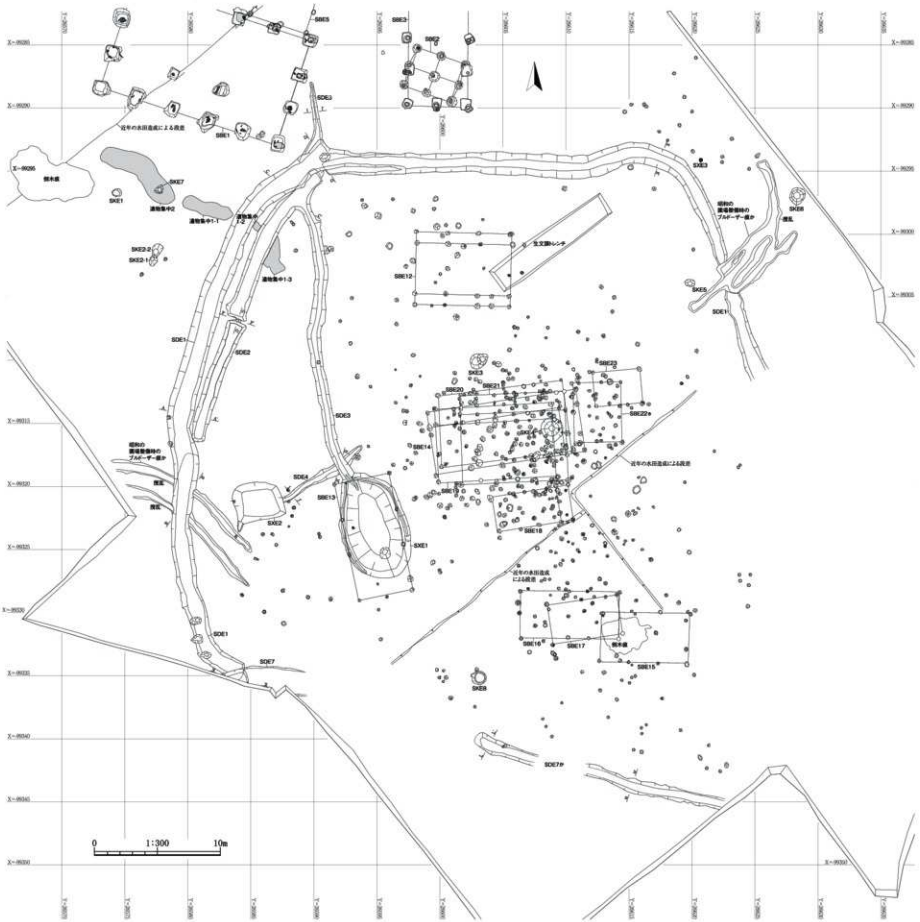
（g）池状遺構

SXD2 池状遺構（第 115 図、写真図版 95）

調査区中央東側 D4 区の X=-99219～-99227、Y=26581～26591 付近に位置する。令和２年度調査。方形基調の黒褐色土範囲として認識した。検出時点では、埋土中に目立った混入物は確認されなかっ



第115図　居館跡1（28）SXD2池状遺構



第116図 居館跡2全体図

た。SBD3 掘立柱建物と重複しており、本遺構が新しい。また、付属溝がSDD1 堀と接しており、SDD1 堀から水を引き入れていたと考えられ、同時存在した可能性がある。規模・形状は平面形は不整方形で、北側が南側よりもやや広いため台形に近い形状である。長軸方向は N5° E で、ほぼ南北方向である。北西側の開口部付近は、棚状の浅い掘り込みが張り出す。底面の平面形は開口部よりも歪である。規模は開口部が長さ 8.0m、幅 7.05m、底面が長さ 5.05m、幅 4.4m で、底面までの残存深度は 0.5m 前後である。壁は底面から緩やかに立ち上がり開口部へと至るが、東側の壁の方が西側に比べ全体的に緩やかな傾斜であり、特に南東側は壁というよりスロープに近い雰囲気である。おそらく、水の浸食によって標高の低い東側へ流出した影響と考えられる。底面は概ね平坦だが、調査中は常に湧水が認められた。北東隅には壁を切るような形で細い溝が付属する。溝は東北東の方向へ直線的に延びて SDD1 と接続する。非常に浅いために一部の箇所では途切れているが、本来は連続していた溝の上部が削平された痕跡の可能性がある。溝とは反対側にある西壁の一帯には、892～1086 木杭 195 本などが打ち込まれており、護岸を目的とした乱杭と考えられる。西岸の中央には 890・891 横木材が敷設されており、水汲みの際の足場と考えられる。このほか、底面には柱穴等は確認されなかった。埋土のうち下位層は水成堆積だが、最終的に上位層は人為的に埋め戻されたと考えられる。最下層の 4 層砂質土と上位層である 1・2 層粘土質土の間には、部分的に水成堆積した砂層（2′・3 層）を挟む。砂層は主に南東壁付近に堆積しており、浸食された壁面が崩落して土砂が流入したとみられる。1・2 層はいずれも礫を多く含むが、2 層は 1 層よりも大きめの礫が多量に混入しており、一部密集しているような箇所もあることから、人為的に投棄された礫であろう。2 層には 30～50cm 大の大形礫も複数含まれており、それらは主に南側に分布している。これら大形礫に混じって、534 石臼（上臼）が出土した。また、底面からは 560 皇宋通寶（北宋銭・1,038 年初鋳）、最下層から 561・562 洪武通寶（明銭・1,368 年初鋳）、埋土から祥符通寶（北宋銭・1,008 年初鋳）が確認されている。この他に 215 土師器高台坏、216・217・218 須恵器甕、470 中国産青白磁梅瓶（13～14 世紀か）、473 中国産染付皿（16 世紀代）、553 銅もしくは真鍮製椀、594 曲物側板、619 荷札とも考えられる板状木製品が確認されている。埋土から出土した 594 曲物側板について年代測定を実施したところ、1,516calAD–1,591calAD（2 σ・66.5%）の年代値を得た。これから、16 世紀代に埋没した遺構と考えられる。（川又・北田）

（4）居館跡 2 の遺構

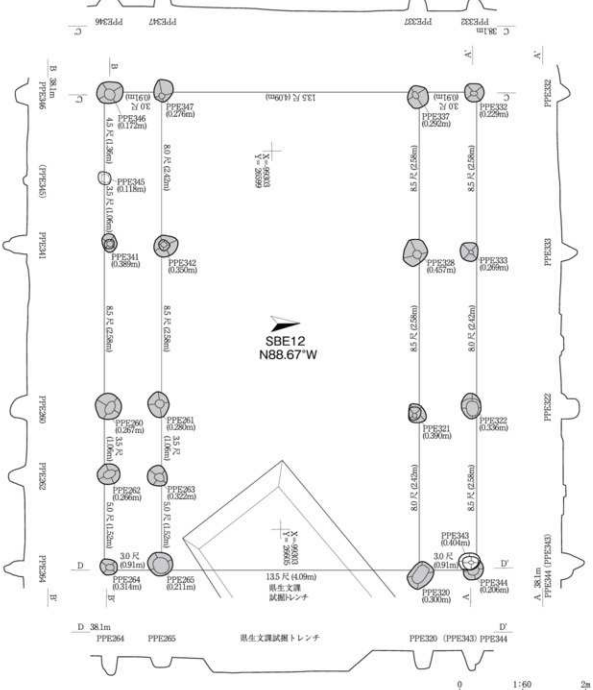
居館跡 2 は調査区南側の E2・3・5・6 区に亘って確認された遺構群で、SDE1 堀に囲まれた範囲内に分布する。主な遺構は、掘立柱建物 12 棟・堀 2 条・溝 3 条・土坑 5 基・池状遺構 2 基・平安時代の掘立柱建物柱穴 105 個を除く柱穴 721 個（掘立柱建物分含む）である。掘立柱建物のうち主屋と考えられるのは SBE12、SBE14・19・20・21 掘立柱建物の 5 棟で、この中で SBE14・19・20・21 は重複関係にあることから少なくとも 4 回以上の建て替えが推定される。付属屋 7 棟や池状遺構 2 基などは、いずれかの時期の主屋に付属していると考えられる。堀 2 条は調査から SDE2 から SDE1 への変遷が捉えられており、間仕切りを多く有する堀から間仕切りのない防御性を高めた堀へ作り替えられている。出土遺物は少なく、詳細な時期を推定するのは困難だが、少なくとも 16 世紀後半頃には廃絶されたと考えられる。（北田）

（a）掘立柱建物

SBE12 掘立柱建物（第 117 図、写真図版 96）

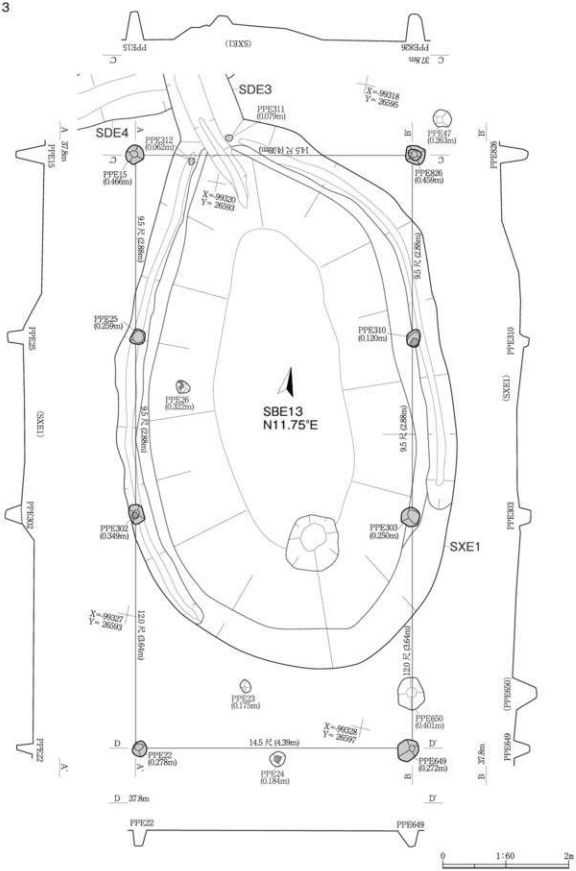
調査区南側 E2 区の X＝-99303、Y＝26599 付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の北側に位置する建物で、重複する遺構はない。本遺構は桁行３間、梁行１間の身舎の南北２面に廂を持つ東西棟の両廂建物で、桁行の長さは 7.58m、梁行の幅は 4.09m、廂の出は 0.91m、廂を含む面積は 44.80㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が 8.0 尺（2.42m）、8.5 尺（2.58m）、南面も同様だが間に柱を入れて 3.5 尺（1.06m）、5.0 尺（1.52m）としている箇所がある。梁行は 13.5 尺（4.09m）で 6.0 尺（1.82m）と 6.5 尺（1.97m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、東西方向の N88.67° W である。

SBE12

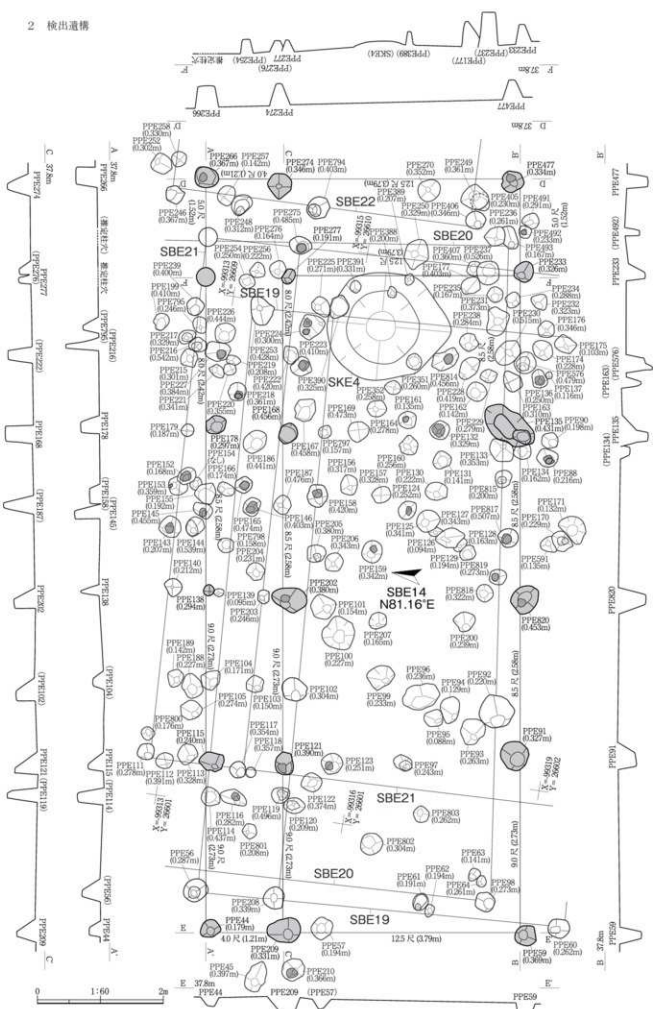


第 117 図　居館跡２（１）SBE12 掘立柱建物

SBE13



第118図　居館跡2（2）SBE13掘立柱建物



第119図　居館跡2（3）SBE14掘立柱建物

確認した柱穴は計18個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

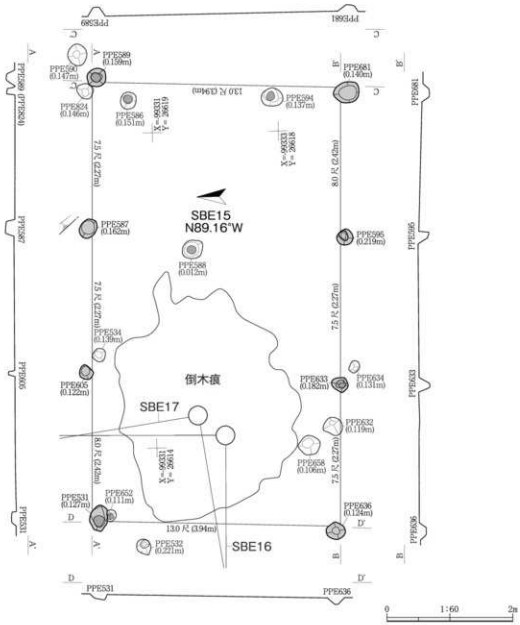
両廂建物と格式高いことから、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。　（北田）

SBE13 掘立柱建物（第118図）

調査区南側E3・6区のX＝-99320、Y＝26593付近に位置する。令和3年度調査。居館跡2内部の西側に位置する南北棟の建物で、SXE1池状遺構と重複しており、本遺構が新しい。規模は桁行3間、梁行1間の側柱建物で、桁行の長さは9.40m、梁行の幅は4.39m、面積は41.27㎡である。柱間寸法は桁行は南北面とも9.5尺（2.88m）、12.0尺（3.64m）で、南側は柱間がやや長い。梁行は14.5尺（4.39m）で7.0尺（2.12m）と7.5尺（2.27m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、南北方向のN11.75°Eである。確認した柱穴は計8個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

桁行の長い建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBE15

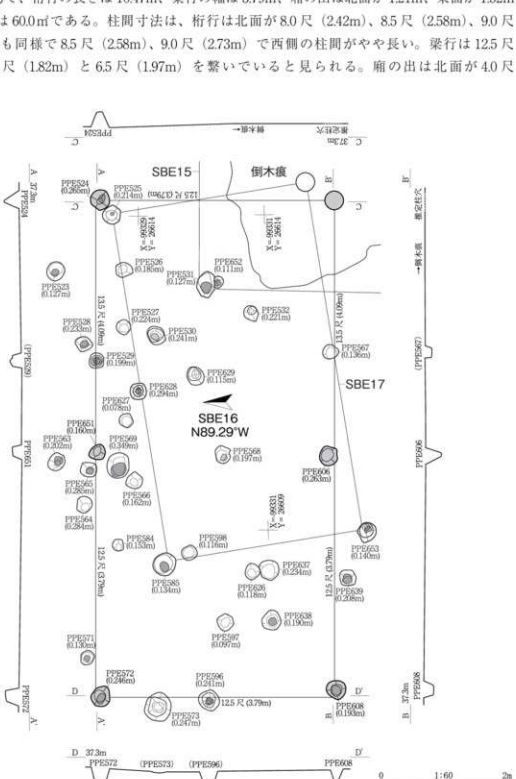


第120図　居館跡2（4）SBE15掘立柱建物

SBE14 掘立柱建物（第 119 図）

調査区南側 E2・3 区の X ＝-99315、Y ＝26610 付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の中央に位置する建物で、SBE19・20・21・22 掘立柱建物と重複しており、SBE19・20・21 は建て替えと考えられるが直接の切り合い関係はなく、新旧不明である。また、SKE4 土坑とも切り合っているが、こちらも新旧は不明である。本遺構は桁行４間、梁行１間の身舎の北面と東面に廂を持つ東西棟の二面廂建物で、桁行の長さは 10.47m、梁行の幅は 3.79m、廂の出は北面が 1.21m、東面が 1.52m、廂を含む面積は 60.0㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が 8.0 尺（2.42m）、8.5 尺（2.58m）、9.0 尺（2.73m）、南面も同様で 8.5 尺（2.58m）、9.0 尺（2.73m）で西側の柱間がやや長い。梁行は 12.5 尺（3.79m）で 6.0 尺（1.82m）と 6.5 尺（1.97m）を繋いでいると見られる。廂の出は北面が 4.0 尺

SBE16



第 121 図　居館跡２（５）SBE16 掘立柱建物

（1.21m）、東面が 5.0 尺（1.52m）で、廂の北面は桁行と同様に 8.0 尺（2.42m）、8.5 尺（2.58m）、9.0 尺（2.73m）、東面も 12.5 尺（3.79m）と梁行と同じ長さである。主軸方向は、東西方向の N81.16° E である。確認した柱穴は計 18 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

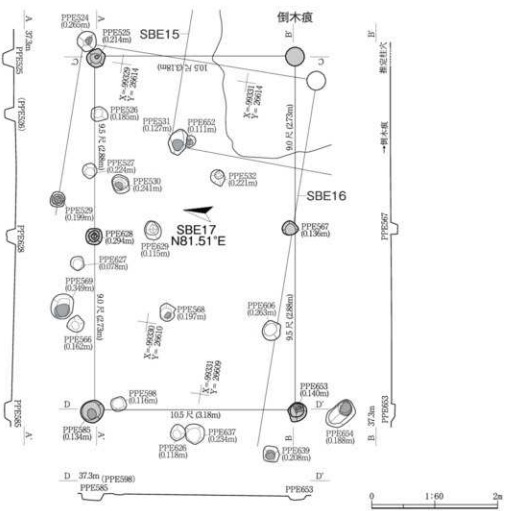
二面廂建物と格式高いことから、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。（北田）

SBE15 掘立柱建物（第 120 図）

調査区南側 E5・6 区の X ＝ -99331、Y ＝ 26619 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の南側に位置する東西棟の建物で、SBE16・17 掘立柱建物と重複している。直接の切り合い関係はなく新旧不明であるが、本遺構を含めいずれも建て替えと考えられる。規模は桁行 3 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行の長さは 6.96m、梁行の幅は 3.94m、面積は 27.42㎡である。柱間寸法は桁行は南北面とも 7.5 尺（2.27m）、8.0 尺（2.42m）で、柱間は北側と南側で異なっており桁行の中でほぼ等分したと考えられる。梁行は 13.0 尺（3.94m）で 6.5 尺（1.97m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、東西方向の N89.16° W である。確認した柱穴は計 8 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBE17



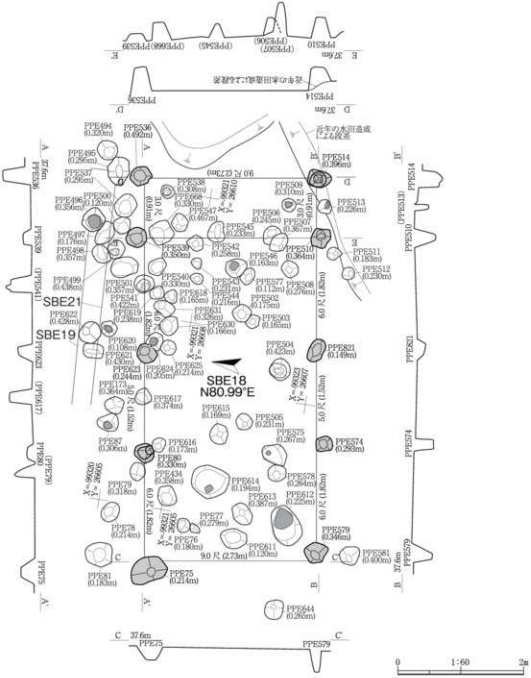
第 122 図　居館跡 2（6）SBE17 掘立柱建物

SBE16 掘立柱建物（第 121 図）

調査区南側 E6 区の X＝-99331、Y＝26609 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の南側に位置する東西棟の建物で、SBE15・17 掘立柱建物と重複している。直接の切り合い関係はなく新旧不明であるが、本遺構を含めいずれも建て替えと考えられる。規模は桁行 2 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行の長さは 7.88m、梁行の幅は 3.79m、面積は 29.87㎡である。柱間寸法は桁行は南北面とも 12.5 尺（3.79m）、13.5 尺（4.09m）と柱間が広く、梁行は 12.5 尺（3.79m）で 6.0 尺（1.82m）と 6.5 尺（1.97m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、東西方向の N89.29° W である。確認した柱穴は計 6 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBE18



第 123 図　居館跡 2（7）SBE18 掘立柱建物

SBE17 掘立柱建物（第 122 図）

調査区南側 E6 区の X = -99329、Y = 26614 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の南側に位置する東西棟の建物で、SBE15・16 掘立柱建物と重複している。直接の切り合い関係はなく新旧不明であるが、本遺構を含めいずれも建て替えと考えられる。規模は桁行 2 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行の長さは 5.61m、梁行の幅は 3.18m、面積は 17.84㎡である。柱間寸法は桁行は南北面とも 9.0 尺（2.73m）、9.5 尺（2.88m）と柱間が広く、梁行は 10.5 尺（3.18m）で 5.0 尺（1.52m）と 5.5 尺（1.67m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、東西方向の N81.51° E である。確認した柱穴は計 6 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBE18 掘立柱建物（第 123 図）

調査区南側 E3・5・6 区の X = -99321、Y = 26608 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の南側に位置する東西棟の建物で、重複する遺構はない。規模は桁行 4 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行は 6.07m、梁行は 2.73m、面積は 16.57㎡である。東側から 3.0 尺（0.91m）の箇所に間仕切りが作られている。柱間寸法は、桁行は間仕切りを除く南北面とも 5.0 尺（1.52m）、6.0 尺（1.82m）で揃えられている。梁行は 9.0 尺（2.73m）で 4.5 尺（1.36m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、東西方向の N80.99° E である。確認した柱穴は計 10 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

間仕切りのある小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。　（北田）

SBE19 掘立柱建物（第 124 図）

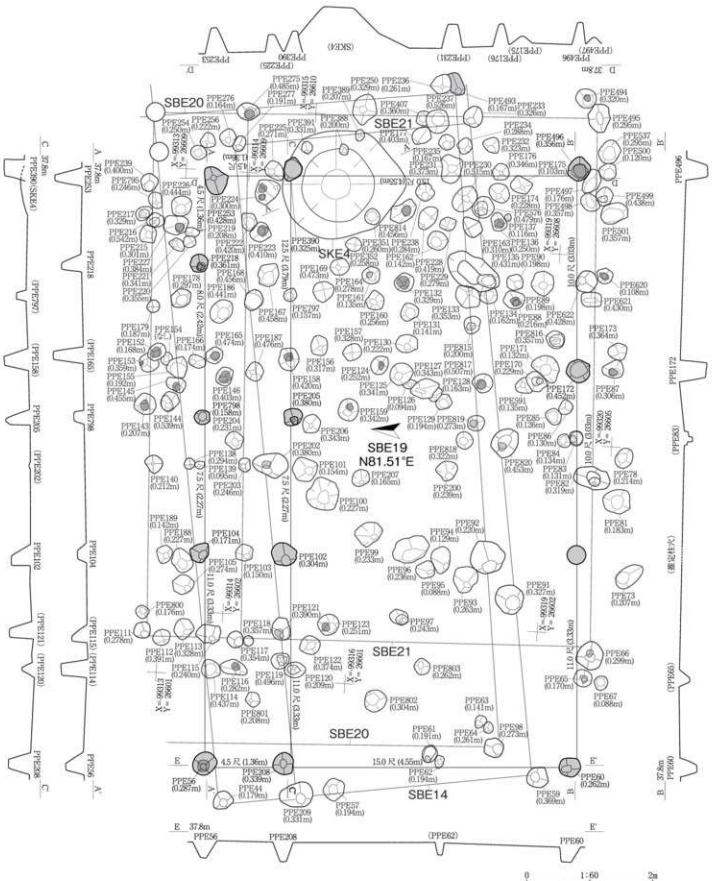
調査区南側 E2・3 区の X = -99316、Y = 26601 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の中央に位置する建物で、SBE14・20・21 掘立柱建物と重複しており、SBE14・20・21 は建て替えと考えられるが直接の切り合い関係はなく、新旧不明である。また、SKE4 土坑と切り合っており、本遺構が古い。本遺構は桁行 3 間、梁行 1 間の身舎の北面に廂を持つ東西棟の片廂建物で、桁行の長さは 9.38m、梁行の幅は 4.55m、廂の出は 1.36m、廂を含む面積は 55.44㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が 7.5 尺（2.27m）、11.0 尺（3.33m）、12.5 尺（3.74m）、南面は 10.0 尺（3.03m）、11.0 尺（3.33m）でいずれもばらつきがある。梁行は 15.0 尺（4.55m）で 7.5 尺（2.27m）を繋いでいると見られる。廂の出は東西面いずれも 4.5 尺（1.36m）である。主軸方向は、東西方向の N81.51° E である。確認した柱穴は計 12 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

片廂建物と格式高く連続した建て替えが想定され、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。　（北田）

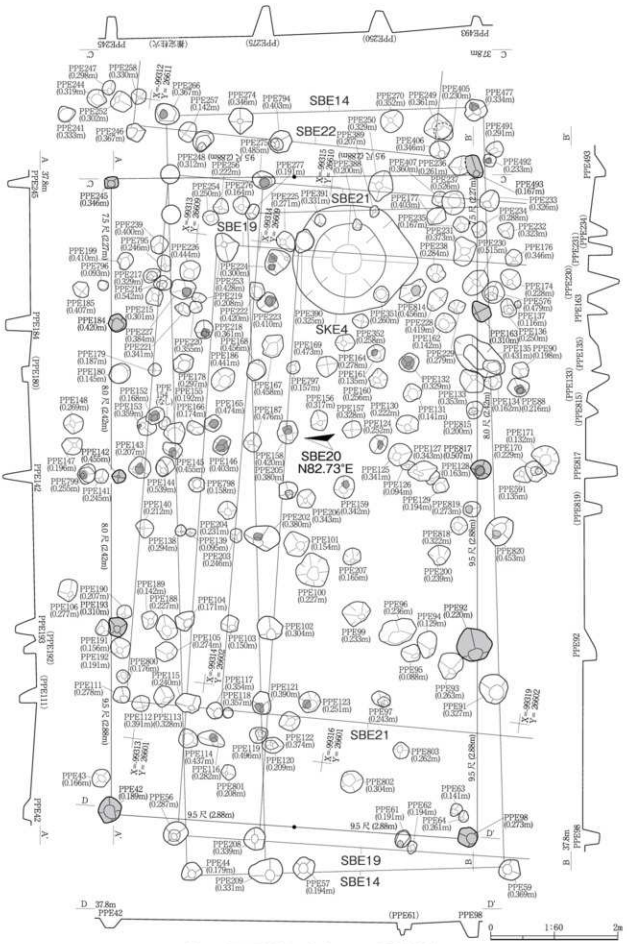
SBE20 掘立柱建物（第 125 図）

調査区南側 E2・3 区の X = -99314、Y = 26602 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の中央に位置する東西棟の建物で、SBE14・19・21 掘立柱建物と重複している。直接の切り合い関係はなく新旧不明であるが、本遺構を含めいずれも建て替えと考えられる。規模は桁行 4 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行は北面が 9.99m、南面が 10.45m と南面がやや長い。梁行は 5.76m、面積は 58.87㎡である。柱間寸法は桁行は南北面ともに 7.5 尺（2.27m）、8.0 尺（2.42m）、9.5 尺（2.88m）を用い

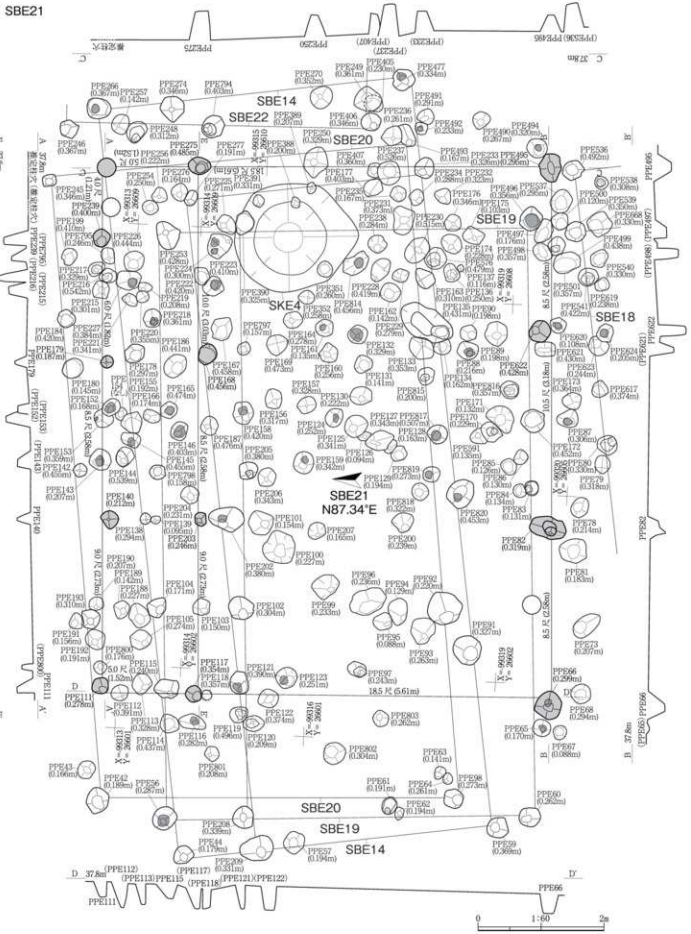
SBE19



第124図　居館跡2（8）SBE19掘立柱建物



第125図 居館跡2（9）SBE20掘立柱建物



第126図　居館跡2（10）SBE21 掘立柱建物

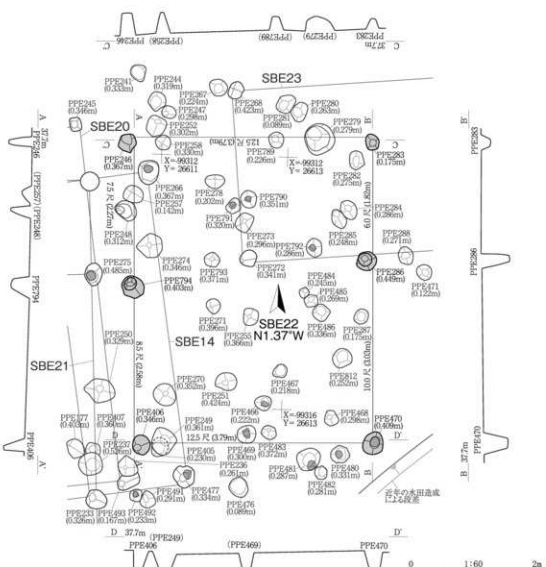
ているが、南面の方が1.5尺（0.46m）長い。梁行は東面が19.0尺（5.76m）、西面は斜位の5.68mとなり、東面を下回る。梁は、9.5尺（2.88m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、東西方向のN82.73°Eである。確認した柱穴は計10個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

連続した建て替えが想定され、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。　（北田）

SBE21 掘立柱建物（第126図）

調査区南側E2・3・5区のX＝-99314、Y＝26609付近に位置する。令和3年度調査。居館跡2内部の中央に位置する建物である。SBE14・19・20掘立柱建物と重複しており、SBE14・20・21は建て替えと考えられるが直接の切り合い関係はなく、新旧不明である。また、SKE4土坑が範囲内にあるが、直接の切り合い関係はなく、新旧不明である。本遺構は桁行3間、梁行1間の身舎の北面に廂を持つ東西棟の片廂建物で、桁行の長さは8.34m、梁行の幅は5.61m、廂の出は1.52m、廂を含む面積は59.46㎡である。柱間寸法は、桁行は北面が8.5尺（2.58m）、9.0尺（2.73m）、10.0尺（3.03m）、南面は8.5尺（2.58m）、10.5尺（3.18m）でいずれもばらつきがある。梁行は18.5尺（5.61m）で9.0尺（2.73m）、9.5尺（2.88m）を繋いでいると見られる。廂の出は東西面いずれも5.0尺（1.52m）で

SBE22



第127図　居館跡2（11）SBE22掘立柱建物

ある。主軸方向は、東西方向の N87.34° E である。確認した柱穴は計 13 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。身舎の北東隅 PPE275 から、790 柱材（樹種未同定）が出土している。時期を推定できる遺物は出土していない。

片廂建物と格式高く連続した建て替えが想定され、中世以降に属する居住を目的とする主屋と推定される。（北田）

SBE22 掘立柱建物（第 127 図）

調査区南側 E2・5 区の X = -99312、Y = 26613 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の中央東側に位置する南北棟の建物で、SBE14・23 掘立柱建物と重複している。SBE23 は建て替えと考えられるが、直接の切り合い関係はなく新旧不明である。規模は桁行 2 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行の長さは 4.85m、梁行の幅は 3.79m、面積は 18.38㎡である。柱間寸法は桁行は東面が 6.0 尺（1.82m）、10.0 尺（3.03m）、西面が 7.5 尺（2.27m）、8.5 尺（2.58m）とばらつきがある。梁行は 12.5 尺（3.79m）で 6.0 尺（1.82m）と 6.5 尺（1.97m）を繋いでいると見られる。主軸方向は、南北方向の N1.37° W である。確認した柱穴は計 6 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。南東隅の PPE470 柱穴から、791 柱材（樹種未同定）が出土している。時期を推定できる遺物は出土していない。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

SBE23 掘立柱建物（第 128 図）

調査区南側 E2 区の X = -99311、Y = 26615 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部の中央東側に位置する東西棟の建物で、SBE22 掘立柱建物と重複しており建て替えと考えられるが、直接の切り合い関係はなく新旧不明である。規模は桁行 1 間、梁行 1 間の側柱建物で、桁行の長さは 3.79m、梁行の幅は 2.73m、面積は 10.35㎡である。柱間寸法は桁行は東西面ともに 12.5 尺（3.79m）、梁行は 9.0 尺（2.73m）である。主軸方向は、東西方向の N84.92° E である。確認した柱穴は計 4 個で構成されており、いずれも円形～楕円形基調である。

小型の建物であることから、中世以降に属する倉庫を目的とする付属屋と推定される。（北田）

（b）堀

SDE1 堀（第 116・129 図、写真図版 100・101）

調査区南側 E2・3・5 区の X = -99292 ～ -99334、Y = 26578 ～ 26626 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 を囲む堀で、削平箇所を除き 3 分の 2 を検出した。遺構南西側で SDE7 溝と重複しており、本遺構が古い。並行する SDE2 堀は本遺構に先行する堀で、SDE2 を改変して SDE1 を構築したと考えられる。SDE3 溝は SDE2 堀と連結していたと考えられ、本遺構より古い。規模は残存した長さが 92m と長大で、西辺 47.0m、北辺 27.0m、東辺 18.0m が残存しており、南辺と東辺南側は近年の水田造成によって削平されている。西辺のうち、SDE2 堀と並行する 27.0m 分が新たに掘削して拡張した箇所で、それ以外は先行する SDE2 堀の時期にすでに構築されていたと考えられる。幅は断面 A・2.13m、断面 C・2.07m、断面 D・2.25m、断面 E・1.55m と多くの箇所で 2.0m 前後を計る。断面形は逆台形で、深さは断面 A・0.38m、断面 B・0.27m、断面 C・0.34m、断面 D・0.33m、断面 E・0.24m、底面標高は北西端・37.20m、断面 A 付近・37.27m、断面 C 付近・37.47m、断面 D 付近・37.47m、北辺中央・37.60m、断面 E 付近・37.35m、東辺端・37.17m と北辺中央が高く西辺と東辺に

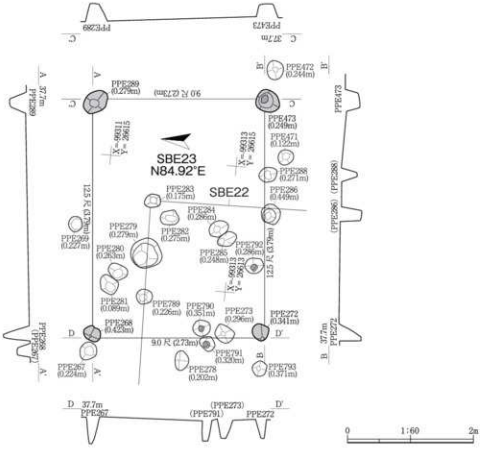
向かうにつれて標高が下がる。SDE1 堀に間仕切り遺構も確認されていることから、平時は農業用の水路もしくは水溜として利用されたと考えられる。堆積状況は、断面 A は 1 ～ 5 の計 5 層、断面 B は 1 ～ 5 の計 5 層、断面 C は 1 ・ 3 ・ 5 ・ 6 の計 4 層、断面 D は 4 ～ 6 の 3 層、断面 E は 1 ～ 4 の計 4 層に細分される。断面 A は大半が水成堆積で、粘土質土と砂質土を互層する。断面 B もほぼ同一層位、断面 C からは埋まりかけた SDE2 と同時に水成堆積する様子が見受けられる。断面 D も SDE2 からやや時間をおいて埋まる様子が認められる。断面 E は水成堆積から最終的に人為堆積に至る過程が分かる。部分的に、崩落や人為によると見られる層位も観察されるが、概ね水成堆積が認められる。このことから、堀が機能を失った以降は埋没しながらも主に水路として利用されていたことが理解される。

遺物は 149 須恵器甕、535 台石、585 木簡（塔婆）の一部かが出土している。時期を推定できる遺物は出土していないが、居館跡 1 と連続する時期もしくは同時期の遺構と見られることから、16 世紀代と考えられる。（北田）

SDE2 堀（第 116 ・ 129 図、写真図版 100 ・ 101）

調査区南側 E2 ・ 3 ・ 5 区の X = -99292 ～ -99334、Y = 26578 ～ 26626 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 を囲む堀で、SDE1 堀以前にほぼ同一位置に構築されていたと考えられ、西辺北側から北辺西側にかけて検出された。本遺構を改変して、西隣に SDE1 堀を新たに構築したと考えられる。SDE3 溝は一時期に本遺構と連結していたと考えられ、同時期に存在した可能性がある。規模は SDE1 とほぼ同じく残存した長さが 91m と長大で、西辺 45.0m、北辺 28.0m、東辺 18.0m が残存しており、南辺と東辺南側は近年の水田造成によって削平されている。西辺のうち、SDE1 堀と並行する

SBE23



第 128 図　居館跡 2 （12）SBE23 掘立柱建物

27.0m 分が改変前の SDE2 が残存した箇所で、両端と中央の間仕切りによって北側と南側２つの溝に分かれている。北側の溝は長さ 13.7m、幅は北端・1.38m、中央・1.38m、南端・1.53m を計る。断面形は逆台形で、深さは断面 C・0.18m、断面 G・0.34m、底面標高は北端・37.65m、中央・37.55m、南端・37.57m で北から南へやや下っている。一方、南側の溝は長さ 10.0m、幅は北端・1.58m、中央・1.23m、南端・1.02m、深さは北端の断面 G・0.52m、南側の断面 A・0.37m、底面標高は北端・37.42m、中央 37.37m、南端・37.35m で北から南へやや下っている。溝に間仕切りを構築することで、平時は農業用の水路もしくは水溜として利用されたと考えられる。堆積状況は、断面 A は６～８の計３層、断面 C は１～４の計４層に細分される。断面 A は底面直上に崩落土を堆積するが、上位層はいずれも水成堆積層で水の停滞を示す酸化鉄の集積も認められた。また、断面 C も水成堆積が観察されており、SDE1 よりも早く埋没したと考えられる。堀が機能を失った以降は、埋没しながらも主に水路として利用されていたことが理解される。

遺物は 150・151 須恵器甕が出土しているが、遺物集中 1-2・1-3 からの流れ込みと考えられる。時期を推定できる遺物は出土していないが、居館跡１と連続する時期もしくは同時期の遺構と見られることから、16 世紀代と考えられる。（北田）

〈間仕切り遺構１〉

SDE2 内の北側と南側の溝の間に土橋状に残した箇所があり、堀を間仕切りした遺構と考えた。中央はダムと同じく、溢れた水が北から南へと流れ出る仕組みで、流水の影響で上部が一部抉れていた。底面標高は、断面 G から北側の溝底面が 37.56m、南側の溝底面が 37.38m で南側が 0.18m 低く構築されている。このことから、流水をせき止めて水位調節する機能を有していたと考えられる。遺構は堀構築当初からすでに備えられていたと見られ、SDE1 堀によって失われているが北側の溝北端と南側の溝南端にも間仕切り遺構が存在した痕跡が認められる。このことから、平時は堀を農業用の水路として活用していたと考えられる。（北田）

（c）溝

SDE3 溝（第 116・129 図、写真図版 101）

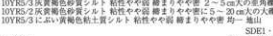
調査区南側 E2・3 区の X＝-99287 ～ -99319、Y＝26588 ～ 26593 付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の西側 SXE1 池状遺構へ水を引き入れる溝で、北側で SDE2 堀、南側で SXE1 池状遺構と連結している。SDE4 溝と重複しており、本遺構が新しい。規模は長さ 22.1m、幅は北端・0.72m、中央・1.05m、南端・1.06m、断面形は皿～U 字形で、深さは断面 H・0.2m、底面標高は北端・37.62m、中央・37.49m、南端・37.38m と北から南へ下っている。また、SDE1・2 北側には水を引き入れる溝が確認されている。規模は長さ 5.78m、幅は北端・0.27m、断面 I・0.40m、南端・0.90m、深さは断面 I・0.05m、底面標高は北端・37.83m、断面 I・37.77m、南端・37.73m と北から南へやや下っている。堆積状況は、断面 H・I から水成堆積と考えられる。

遺物は埋土から出土した 152 須恵器甕、532 砥石かのみで年代を推定できないが、SDE2 と同様に 16 世紀代と捉えられる。（北田）

SDE4 溝（第 116・129 図、写真図版 101）

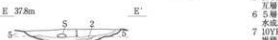
調査区南側 E3 区の X＝-99316 ～ -99321、Y＝26587 ～ 26593 付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の西側 SXE2 池状遺構へ水を引き入れる溝で、遺構西側で連結している。東側で SDE3 溝と重複しており、本遺構が古い可能性がある。規模は長さ 7.64m、幅は東端・0.40m、中央・0.75m、

SDE1・2・3 交点南側 断面C
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～5㎜大の細～小礫全体に散在
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～2㎜大の細礫全体に散在
3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 均一
4 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～10㎜大の小～細礫全体に散在
5 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 締まり本体に、10YR2/2黒色粘土質シルトを互層で水成堆積する SDE2 埋土
6 5層とは逆に、10YR2/2黒色砂質シルト主体に、10YR2/1黒色粘土質シルトを互層で水成堆積する
7 10YR5/3灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 2～5㎜大の亜角礫を下部に多く堆積する 地山
8 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密に5～30㎝大の礫（亜角礫）多く含む 地山
9 10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 均一 地山



SDE1・2・3 交点北側 断面D
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～5㎜大の細～小礫全体に散在
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 均一
3 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩に、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトを散状に含む 横断面第2 SDE2 埋土
4 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 ほぼ均一 SDE1 埋土
5 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に、10YR2/2黒色粘土質シルトを互層で水成堆積する SDE1 埋土
6 5層とは逆に、10YR2/2黒色粘土質シルト主体に、10YR2/1黒色粘土質シルトを互層で水成堆積する SDE1 埋土
7 10YR5/3灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 2～5㎝大の亜角礫を下部に多く堆積する 地山

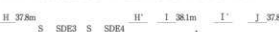
SDE1 断面E
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 5～20㎜大の細～小礫全体に散在
2 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 均一
3 10YR5/2灰黄褐色細砂 粘性なし 締まりやや緩 流入した砂層
4 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に、10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロック2～5㎝大を少量散在
5 10YR5/3灰黄褐色砂質シルト 粘性なし～弱 締まりやや密 2～5㎝大の亜角礫を下部に多く堆積する 地山
6 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 均一 地山



SDE3 断面H
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 径1～5㎜大の砂～細礫 5％散在 下部に10㎝大の亜円礫あり
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルトと 10YR2/3黒褐色細砂の互層 粘性やや弱～中 締まりやや緩 水成堆積
3 10YR2/3黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 SDE4 埋土
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山
※SDE3 は SDE4 より新しい可能性あり

SDE3 断面I
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～5㎜大の細～小礫全体に散在
2 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 均一 地山

SDE4 断面J
1 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや中 径5㎜大の細礫5％散在
2 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山



SDE7 断面K
1 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 水田耕作土 表土 近年の圃場整備による造成土
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～中 水田盛土1 近年の圃場整備による造成土
3 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～中 水田盛土2 近年の圃場整備による造成土
4 10YR3/3黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～5㎜大の細礫3％散在 水成堆積
5 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 1～5㎜大の細礫、3㎝以下の小礫を3％散在 堆積に 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック2～5㎝大を散在 東側からの崩落流入土（水成堆積）
6 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや緩 均一 水成堆積
7 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩主体に、10YR4/2灰黄褐色砂質シルト地山ブロック10～20㎝を全体に散在 東側からの崩落流入土
8 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 水成堆積
9 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～中 均一 水成堆積
10 10YR2/2黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一 基盤
11 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 均一 地山

SDE1・2 断面A
1 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや緩 地山再堆積土
2 10YR3/2黒褐色粘土質シルトに 10YR3/3暗褐色砂質シルトを互層で水成堆積
3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性や 締まりやや緩 上層は砂質の互層
4 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性や 締まりやや緩 砂質シルトを筋状に流入する
5 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性や 締まりやや緩 10YR5/2灰黄褐色粘土 地山ブロック2～3㎝大混入（撹乱土）
6 10YR2/2黒褐色粘土質シルトに 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック・粒 2～20㎜を7％混入する
7 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性や 締まりやや緩～中 微化鉄集積を部分的に含む
8 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に、10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック 5～10㎝を15～20％含む（撹乱土）
9 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山
10 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山
※SDE1 は SDE2 より新しい可能性あり

SDE1 断面B
1 10YR2/3黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりや中 微化鉄多量含む 重機撹乱（近年の圃場整備時のブルドーザー掘か）
2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりや中 微化鉄を ラミナ状に含む 重機撹乱（近年の圃場整備時のブルドーザー掘か）
3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 5～20㎜大の 細～小礫 1～2％散在 1・2層と同一か
4 10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 均一やや緩 均一 SDE1 埋土
5 4層と同じ 10YR2/1黒色粘土質シルト主体に、10YR5/2灰黄褐色 砂質シルト地山ブロック5～10㎝を少量混入 崩落土 SDE1 埋土
6 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山
7 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中～やや密 地山

SDE7 か 断面L・M
注記なし

第129図　居館跡2（13）堀、溝

西端・0.40m、断面形は皿形で、深さは断面J・0.10m、底面標高は東端・37.57m、中央・37.49m、西端・37.45m と東から西へやや下っている。堆積状況は、断面Jから水成堆積と考えられる。

遺物は出土しておらず年代を推定できないが、SXE2 と同様に 16 世紀代と捉えられる。　（北田）

※ SDE5・6 は欠番

SDE7 溝（第 116・129 図、写真図版 101）

調査区南側 E3・6 区の X = -99334 ～ -99345、Y = 26582 ～ 26622 付近に位置する。令和 3 年度調査。北西から南東方向へ走る溝で、削平の影響で中央付近が途切れている。西端で SDE1 堀と重複しており、本遺構が新しい。中央から西側と東側に分けると、西側の規模は長さ 6.79m、幅は東端・2.08m、断面形は皿～逆台形で、深さは断面K・0.34m、底面標高は西端・37.23m、東端・37.24m と平坦である。西端は落ち込んでおり、36.96m と下がる。東側の規模は長さ 19.88m、幅は断面LL・1.16m、断面M・1.20m、深さは断面L・0.10m、断面M・0.03m、底面標高は西端・36.86m、中央・36.94m、東端・36.86m と西から東へ下っている。堆積状況は、断面Kから水成堆積と考えられる。

遺物は埋土から 605 桶側板が出土しているが、年代を推定できない。SDE1 との新旧関係から中世以降と捉えられる。　（北田）

（d）土坑

SKE3 土坑（第 130 図、写真図版 96）

調査区南側 E2 区の X = -99310、Y = 26604 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部中央に位置する土坑で遺構北東側を PPE363 柱穴に切られており、本遺構が古い。平面形は円形で、規模は長さ 1.48m、幅 1.18m、深さ 0.40m、断面形は鍋底形である。堆積土は 4 層に分けられ、黒色から黒褐色土主体で構成される。遺物は出土していないが、居館跡 2 内部に位置することから中世に所属すると推定される。　（北田）

SKE4 土坑（第 130 図、写真図版 96）

調査区南側 E2 区の X = -99315、Y = 26610 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部中央に位置する土坑で複数の柱穴と重複しており、本遺構が新しい可能性がある。平面形は円形で、規模は長さ 1.98m、幅 1.73m、深さ 0.63m、断面形は逆台形である。堆積土は 4 層に細分され、黒色から黒褐色土主体で構成される。遺物は出土していないが、居館跡 2 内部に位置することから中世に所属すると推定される。　（北田）

SKE5 土坑（第 130 図、写真図版 97）

調査区南側 E2 区の X = -99304、Y = 26582 ～ 26621 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 内部東端に位置する土坑で、重複する遺構はない。平面形は楕円形で、規模は長さ 0.81m、幅 0.54m、深さ 0.39m、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に細分され、黒色土主体で構成される。遺物は出土していないが、居館跡 2 内部に位置することから中世に所属すると推定される。　（北田）

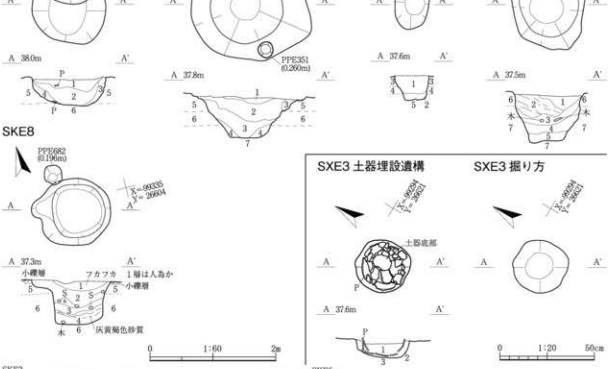
SKE6 土坑（第 130 図、写真図版 97）

調査区南側 E2 区の X = -99296、Y = 26629 付近に位置する。令和 3 年度調査。居館跡 2 の外側、SDE1 堀から東に 6.0m に位置する土坑で、重複する遺構はない。平面形は円形で、規模は長さ 1.37m、

幅 1.17m、深さ 0.75m、断面形は逆台形である。堆積土は５層に細分され、上位の１・２層は人為堆積と考えられる。埋土下位から基部が炭化した 845 杭材が出土している。居館跡２に関連する遺構と考えられることから、中世に所属すると考えられる。（北田）

SKE8 土坑（第 130 図、写真図版 97）

調査区南側 E6 区の X＝-99335、Y＝26604 付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の南側に位置する土坑で、遺構北側で PPE682 柱穴と重複しており本遺構が古い可能性がある。平面形は不整円形で、規模は長さ 1.26m、幅 1.07m、深さ 0.68m、断面形は鍋底形である。堆積土は４層に細



SKE3
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に５cm大の亜角礫 1～２%散在
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 ５cm大の亜角礫を束縛に 1％散在
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 東側からの流入土
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり疎 2～５cm大の亜角礫多量散在 層面鏡漆土
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 2～５cm大の亜角礫多量 地山
6 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 均一 地山

SKE4
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1～５mm大の細礫 2～３%散在
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 下部に５～ 15cm大の亜円礫少量散在
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 均一
4 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まり疎 初期流入土
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 2～５cm大の小～中礫多く含む 地山
6 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 均一 地山
7 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 均一 地山

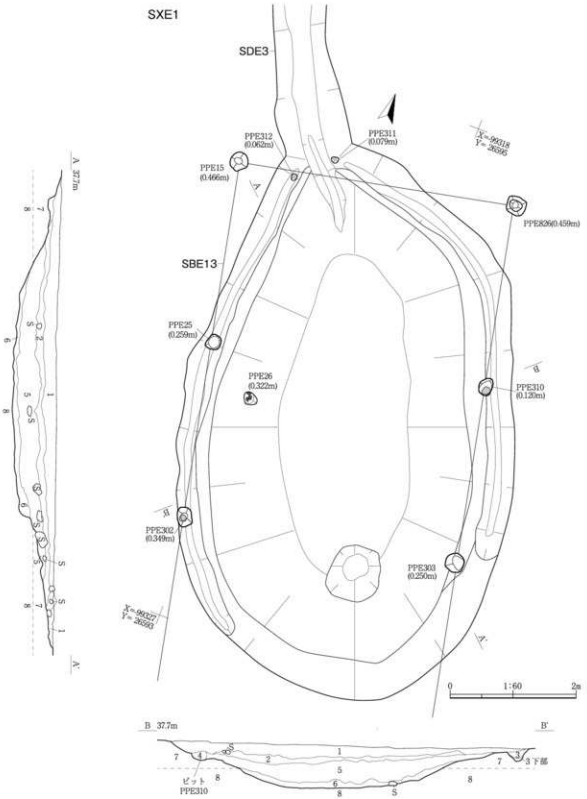
SKE5
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 均一
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
4 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性中～やや強 締まり中～やや密 地山
5 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性中～やや強 締まり中～やや密 地山

SKE6
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト地山ブロック２～５cm 主土部に少量散在 人為堆積
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト主体に、10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト地山ブロックを互層で堆積 粘性やや弱 締まりやや疎 人為堆積
3 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 木片を下部に含む 均一
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 やや砂質
5 10YR2/2 灰黄褐色粘土質シルト地山ブロック２～５cm大を少量散在
5 10YR2/1 黒色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 均一 初期流入土
6 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
7 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりや～やや密 地山

SKE8
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり疎 植物質多量混入 人為か
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎 下部に５cm大の亜円礫少量混入
3 10YR1/7.1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや疎を主体に、上部に 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトを筋状に混入 下部に木質多く含む
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 上部に２～５cm大の亜円礫を含む砂質埋戻 地山
6 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 地山

SXE3
1 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト地山ブロック径１cm大を２～３%散在 人為堆積の可能性あり
2 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10 ～５cm大の細礫少量混入 人為堆積
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山

第 130 図　居館跡２（14）土坑、土器埋設遺構



SXE1
1 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩～中 径5mm～5cm大の細～中礫 10 ～ 15% 散在 埋め戻し土か
2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 径2～5cm大の小～中礫を全体に散在
3 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 下部に径1～5mm大の細礫含む
4 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや緩 径2cm大の小礫5％散在
5 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性中 締まりやや緩 均一
6 10YR2/1 黒色粘土質シルト主体に 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 地山ブロック 10 ～ 20cm大を全体に散在　崩落土
7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 締まりやや密 地山
8 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

第 131 図　居館跡2（15）SXE1 池状遺構

分され、下位は自然堆積で植物質が多く、上位は人為堆積と考えられる。検出面には、ぬかるみを埋め立てるために樹皮を敷いた痕跡が確認された。埋土から一部が炭化した642板状木製品が出土している。居館跡２内部に位置することから中世に所属すると推定される。（北田）

（ｅ）池状遺構

SXE1 池状遺構（第131図、写真図版98）

調査区南側E2区のX＝-99327、Y＝26593付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の西側で確認した池状遺構で、遺構北側に水を引き入れるSDE3溝が連結しており、同時期の遺構と考えられる。また、SBE13掘立柱建物と重複しており、本遺構が古い可能性がある。南北に長い楕円形の平面形を呈しており、長さ8.8m、幅5.4m、深さ0.68mである。断面形は皿形で、底面から緩やかに立ち上がる形状である。南側を除く岸上部には、幅0.3～0.52m、深さ0.08～0.15mの溝が馬蹄形に巡っており、護岸が施された痕跡と考えられる。南側にも溝が掘られた可能性があるが、水田造成による削平と使用時に溢れ出た水の影響で失われている。底面の南端は、長さ0.95m、幅0.9m、深さ0.23mの略円形に窪んでいる。この窪み周辺の底面直上から埋土下位にかけて、10～30㎝大の亜円礫を少量確認しており、南側岸の護岸に用いていた可能性がある。窪みは流水の影響で、転がった礫が作ったのかもしれない。遺構北側のSDE3と連結している箇所は、流れ込む水の影響で抉れやや深くなっている。この両側にはPPE311・312が確認されており、流水に含まれる不要な塵を堰き止める役割を果たした可能性がある。堆積土は１～６層の計６層で構成されており、２～６層は水成堆積、１は人為的な埋め戻しと考えられる。遺構が廃絶された後、５層が堆積した際に大量の黒色粘土質土が流入し、南側岸を護岸していた礫も多く流入したと推定される。遺構西側底面からやや上がった箇所にPPE26柱穴があり、823～825杭材がまとまって出土した。このうち、824杭材について年代測定を実施したところ、暦年較正年代で1301calAD-1370calAD（２σ・74.0%）の年代値を得た。遺物は、底面直上から219須恵器大甕、埋土中位から476古瀬戸平碗（15世紀第２四半期）、埋土から584木簡（笹塔婆）（16世紀後半か）、底面から590漆器椀が出土している。出土した遺物の年代観と年代測定値から、14世紀代に構築され使用が始まり、16世紀後半頃には埋没した遺構と考えられる。（北田）

SXE2 池状遺構（第132図、写真図版99）

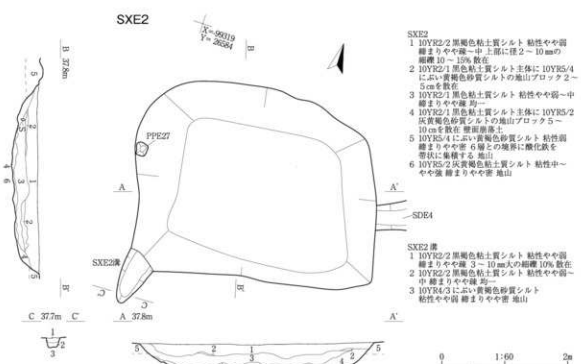
調査区南側E3区のX＝-99319、Y＝26584付近に位置する。令和３年度調査。居館跡２内部の西側で確認した池状遺構で、遺構東側に水を引き入れていたと見られるSDE4溝が連結しており、同時期の遺構と考えられる。この他の遺構との重複は認められない。東西にやや長い隅丸方形を呈しており、長さ3.78m、幅3.05m、深さ0.42mを計る。断面形は皿形、底面はほぼ平坦である。遺構南西隅には長さ0.8m、幅0.48m、深さ0.15mの溝が付属しており、溢れ出る水を排水した溝と考えられるが、削平の影響で失われている。堆積土は１～４層の計４層に細分される。４層は使用時の壁面崩落土を含む堆積層、１～３層は埋没時に堆積した水成堆積層と考えられる。遺物は出土していないが、居館跡２内部にあり、SXE1に先行する池状遺構と推定される。（北田）

（5）その他の遺構

（a）土器埋設遺構

SXE3 土器埋設遺構（第130図、写真図版99）

調査区南東側E2区のX＝-99294、Y＝26621付近に位置する。令和3年度調査。SDE1堀の東側から検出した縄文土器を埋設した遺構である。規模・形状は長さ0.3m、幅0.27mの円形で、断面形は鍋底形、深さは0.08cmである。土坑内には509縄文土器が正位に設置されており、検出時は胴部下半から底部が確認された。堆積土は1・2層の計2層で構成されており、土器の外側は2層黒色粘土質土、内側は地山ブロック混じりの黒色粘土質土であることから、埋設後に人為的に埋め戻された可能性がある。509縄文土器は地文のみの深鉢であることから明確でないが、縄文時代晩期末葉頃かと推定される。（北田）



第132図　居館跡2（16）SXE2池状遺構